

322
395



始



322

395

大書工夕力校閱

裁經教科書

山内子代著

8 78
1.5 4



縫教科書

大妻ユタカ校閱
山内千代著

東京共榮舎發行

大正
13.7 4
内交

322-395

自序

本書は著者が十數年來東京大妻技藝學校に教鞭を執り、常に同
校長大妻ユタカ先生の指導を仰ぎつゝ、實地教授せる事項を記
述したるものにして世に公にせんとの意にはあらざりしも、多
數生徒の上梓を促がすこと切なると、一つは度量衡法の改正に
伴ひ、「メートル法」實施を眼前にひかへ、洽ねく生徒をして是が使
用を誤らざらしめんとのため、淺學をも顧みず、出版することゝ
せり。若し本書にして各種の女學校並に裁縫科教員たらんこ
ごを望む人々の教科書又は参考書に充てらるゝを得ば、著者の
光榮何ぞ之れに若かん。

大正十三年六月

著者 識す

メートル法につきて

メートル法尺度

- 一 ミリメートル(耗) 一メートル(米)の千分の一
- 一 センチメートル(糧) 一メートル(米)の百分の一
- 一 デシメートル(粉) 一メートル(米)の十分の一
- 一 メートル (米) 鯨尺の二尺六寸四分(約そ)
- 一 キロメートル(秆) 千メートル(米)

鯨尺と米尺

(上数は五入せし略數)

- 一分 四耗 (三耗七八)
- 一寸 三糧八耗 (三糧七耗八八)
- 一尺 三十八糧 (三十七糧八耗七九)
- 一丈 三米七十九糧 (三米七十糧七耗八八)

曲尺と米尺

一分	三耗三
一寸	三厘〇耗三
一尺	三〇厘三耗
一丈	三米三厘〇耗三

本書の米法尺度の用ひ方

- 一、本書(圖及び説明)中に於て鯨尺のみ括弧()を附す、但し米或は鯨尺の何れか一方を記せる所は括弧を省略す。
- 二、本書に於ては鯨尺と米尺を對稱記數入の字を場合に應じて適當に四捨五入す。但し精密を要する時は耗以下の數字も示せり。
- 三、本書中に於ては單位を厘として(●)ポイント記を附せり。
- 四、本書中に於ては(粉)の補助單位を省略して、何米何拾幾厘となせり。

裁縫教科書目次

前編

第一章	基礎的技術	一
第二章	本裁女單衣	一五
	本裁男單衣	一七
第三章	一ツ身襦袢	二二
	三ツ身襦袢	二七
	四ツ身襦袢	三〇

本裁襦袢……………三一
長襦袢……………三六

第四章……………四二

一ッ身單衣……………四二
三ッ身單衣……………四六
四ッ身單衣……………五〇

第五章……………五五

薄地厚地物説明……………五五

第六章……………五八

四ッ身袷……………五八
本裁男袷……………六二
本裁女袷……………六六
裾廻裁方……………六九

一ッ身綿入……………七一

本裁女綿入……………七八

本裁男綿入……………八一

第七章……………八三

女物帶……………八三

丸帶……………八五

男物帶……………八六

第八章……………八七

女袴……………八七

第九章……………一〇四

一ッ身袖無羽織……………一〇四

本裁女袷羽織……………一一〇

本裁男袷羽織……………一二〇

四ツ身袷羽織……………一三四

三ツ身袷羽織……………一二八

四ツ身綿入羽織……………一二八

本裁女綿入羽織……………一二九

本裁男綿入羽織……………一三二

紋所……………一三四

後編

第十章……………一

本裁男單衣羽織……………一

本裁女單衣羽織……………六

第十一章……………八

女單衣合羽……………八

第十二章……………三一

單衣長コート……………一七

袷半コート……………二七

本裁被布……………三二

四ツ身被布……………三九

三ツ身被布……………三九

一ツ身袖無被布……………三九

第十三章……………四七

男女重ね物下着詰め方……………四七

第十四章……………四八

本比翼……………四八

附比翼……………五八

目次……………五

第十五章

- 大人物袴.....六一
- 小裁及中裁袴.....八六
- 大人行燈袴.....九四

第十六章

- 夜具.....九八
- 蚊帳.....一〇五
- 袖單.....一〇八

第十七章

- 寝冷知らず.....一一一

第十八章

- 股引.....一一八

ズボン下.....一二三

普通シャツ及ワイシャツ.....一二八

第十九章

ネクタイ.....一四二

第二十章

小供西洋前掛.....一四四

割烹前掛.....一六〇

第二十一章

ボンネット.....一六三

第二十二章

運動服(八九歳—十二三歳).....一六九

通學服上着.....一七三



裁縫教科書 前編

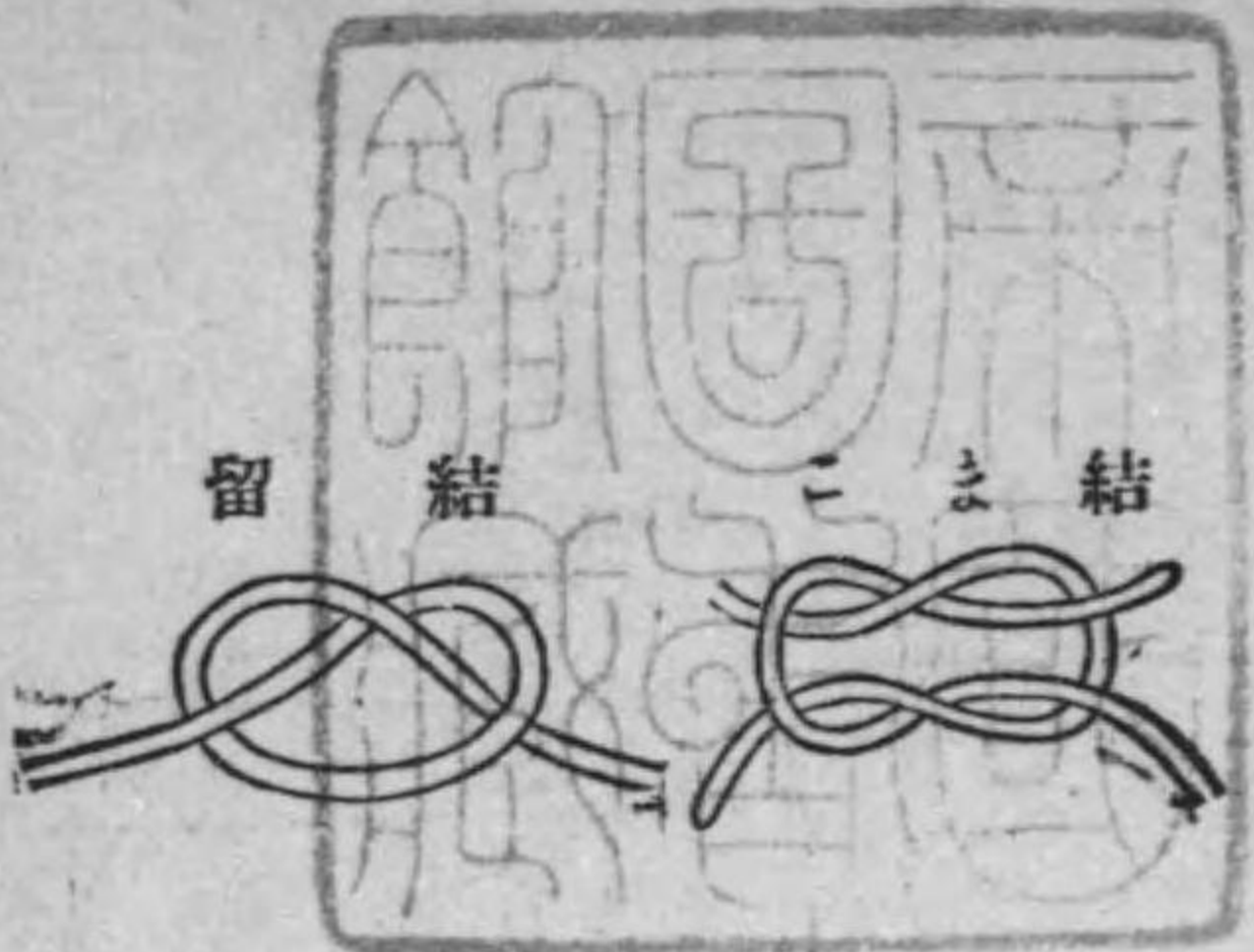
山内千代著

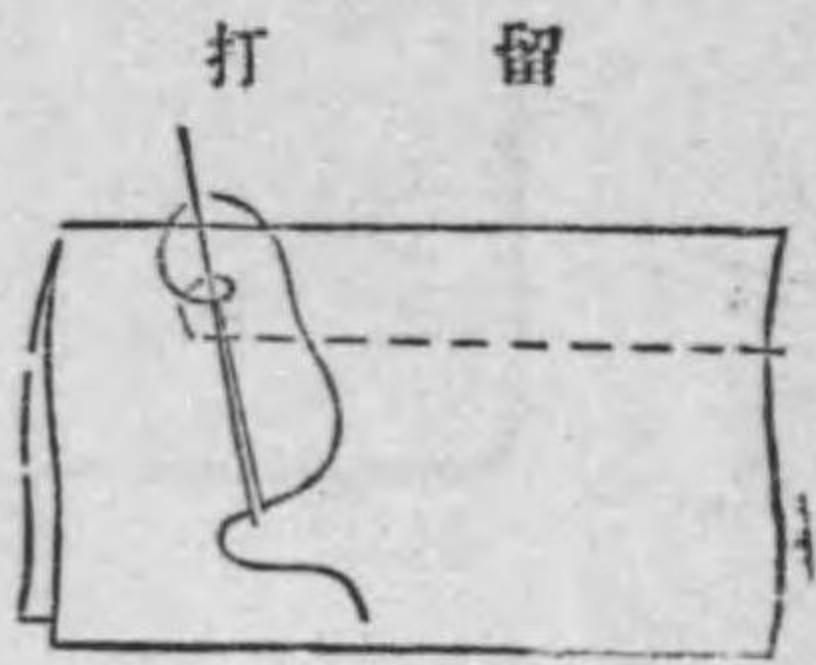
第一章

絲の結方

一、こま結 絲の兩端を持つて圖の様に結び合す仕方であり、各種の着物の部分部分の八つ留、四つ留等に於て布の抄ひ方が済んでから、この結び方を用ひて留め絲をさるのであります。

二、留結 絲の端を食指の先に巻いて拇指の腹で絲を燃る様にして結ぶのであります。物の縫ひ初めに絲を針に通した場合に用ひる結方であり、まして結んで玉になりますから玉結とも申します。

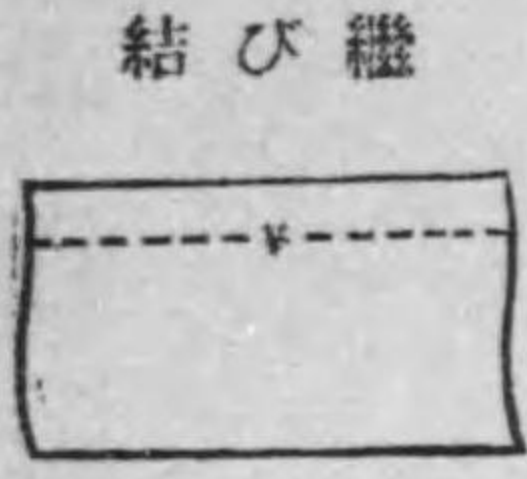




一、打留 物の縫ひ終りに針先に縫糸を巻いて糸を左の拇指で押さへて引締める仕方であり袖下、胴接伏せ縫などの留め方に用ひます。



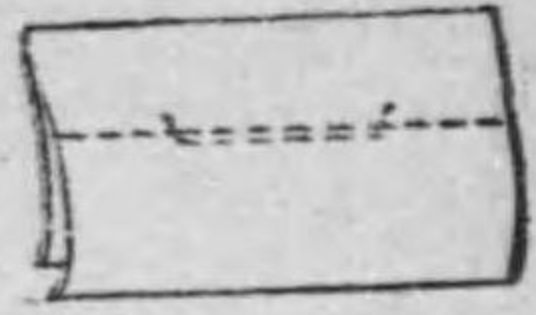
二、返し留 縫ひ終りを二種（五分）除り縫ひ戻して置く仕方でありまして主に背脇衽袖口下、袖附等は初め終り共この留め方を用ひます。



一、結び留 機結につぐ仕方にて主に耳衿及び襟の場合等に途中にて糸を縫ぎ足すのに用ひます。

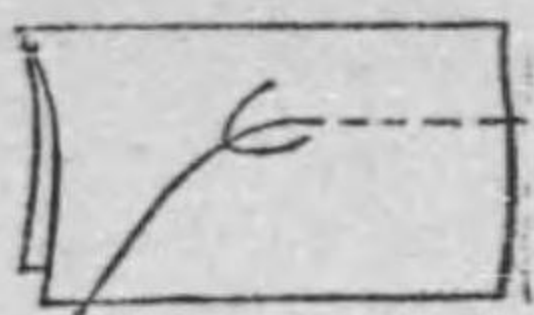
糸の縫ぎ方

重ね縫



二、重ね縫 糸の盡きましたときその端を一針縫代の方へ寄りて糸を留め結びとなし、凡そ八厘（二寸）戻つたところから前の縫ひ目に縫ひ重ねる仕方であります。背縫、脇縫、衽附、衿附等はその丈よりも凡そ八厘（二寸）程を長くして縫ふのでありますが糸の切れました場合などにこの縫ぎ方を用ひます。

捻り縫

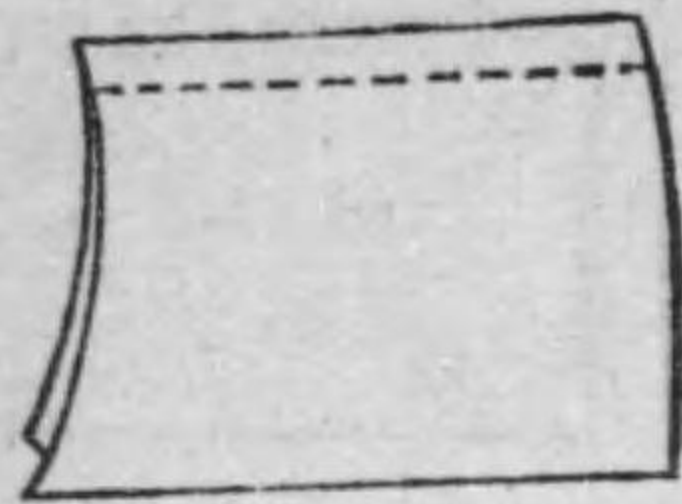


三、捻り縫 縫ぐべき糸の端を二つに割り其の割りました糸の一方に元の糸を四厘（一寸）程捻り合せて更に之を他の一方のにて捻り合せます主に縫合せ及衿け方の時に用ひます。

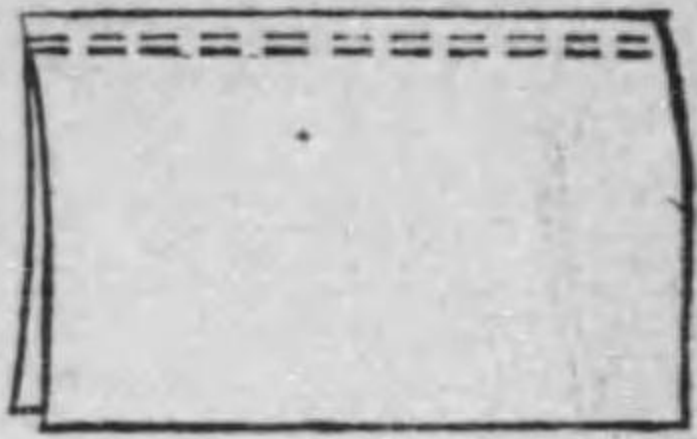
縫ひ合せ方

一、合せ縫 背脇等を縫ふ如く布を重ねて普通に縫ひ合はす仕方をいひます。

合せ縫

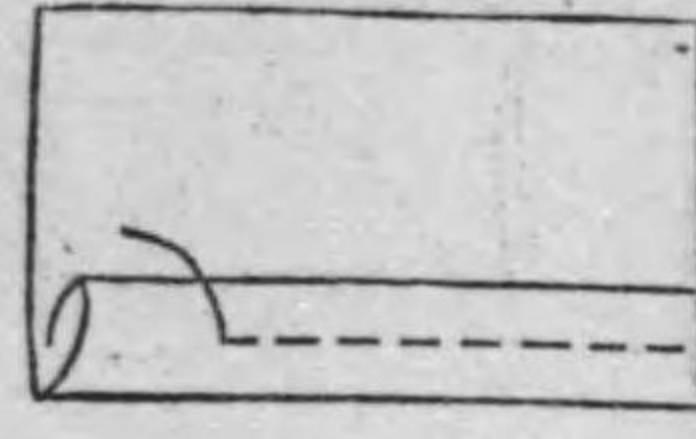


二重縫



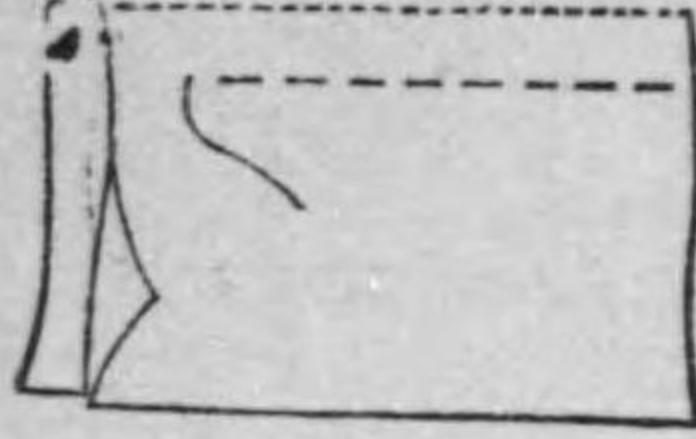
二、二重縫ひ 合せ縫ひをいたしました後縫目の開かないやうに更に本縫に倣つて縫代の端を縫ひ合せて置く仕方でありまして本裁單衣の脊はこの仕方を用品ひます。

三つ折り縫



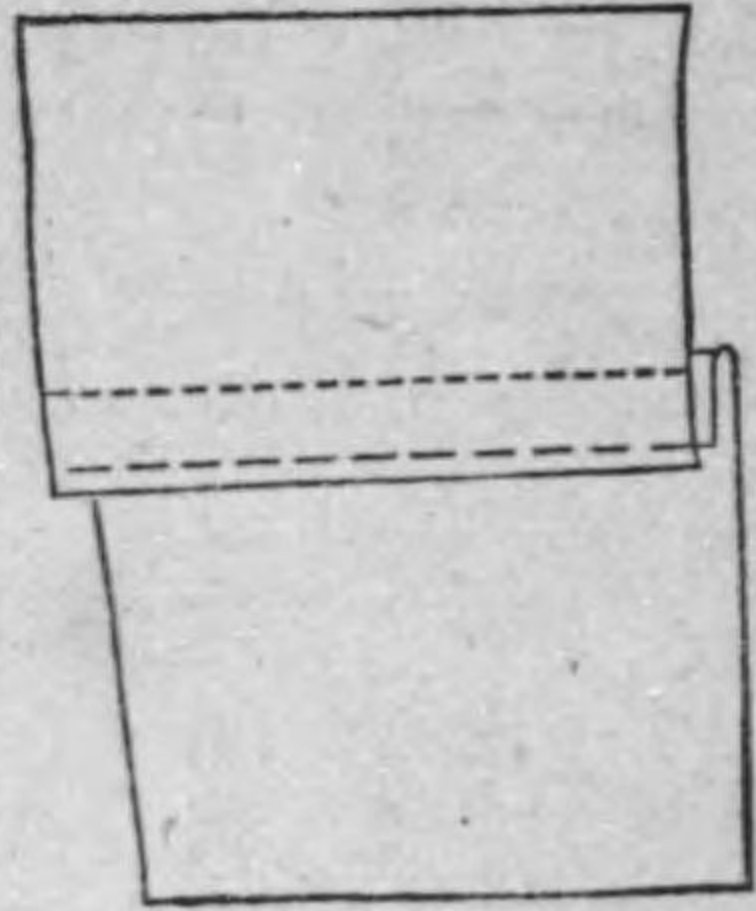
三、三折り縫 布の端を二度折りにして折り代の端を普通に縫ふのでありまして風呂敷布の類の端等に用品ひます。

袋縫



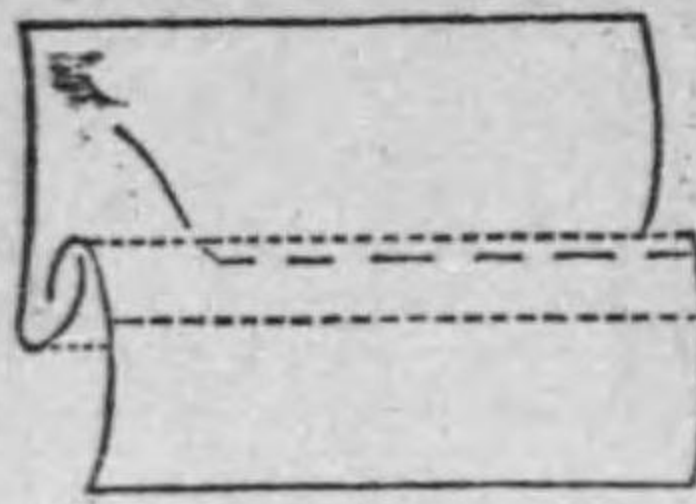
四、袋縫 始めは布を外表に合せて淺縫をいたしまして折をつけ引きかへして本縫をいたすのでありまして單衣物の袖下、四ツ身三ツ身或は薄き絹布本裁の脊縫等は此袋縫を用品ひます。

伏せ縫い



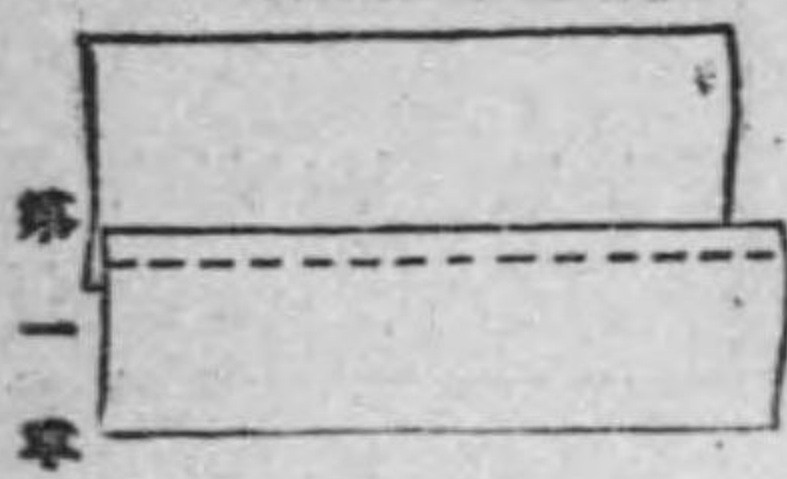
五、伏せ縫 伏せ縫は多く布の耳に布の裁目を二耗(五厘)控へて縫ひ合せて伏せておくのであります

折り伏せ縫



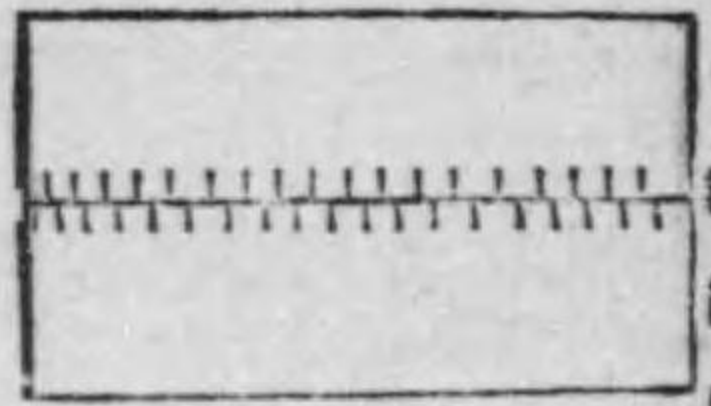
六、折り伏せ縫 布の縫込みが二枚共裁目であります時は一方の布を五耗(一分五厘)控へて縫ひ合せて布を控へた方を一方の縫込みで包んで前の伏せ縫の如く裏に大針を出して折り端を伏せつけるので御座います。

重ね縫



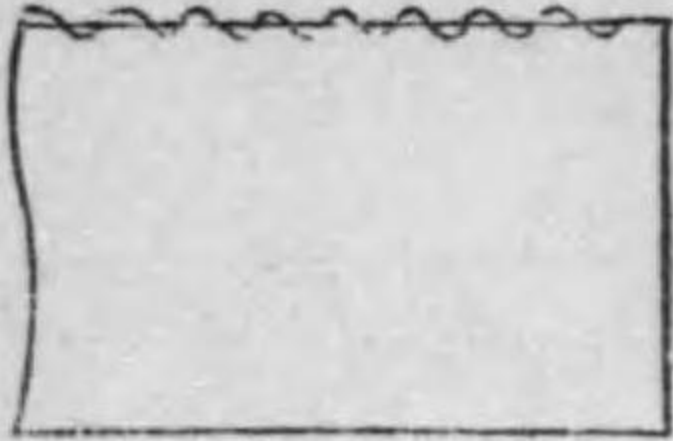
七、重ね縫 布を裁目のまゝに一種・五耗(凡四分)重ねて中を一通りまたは裁ち目の端を二通り縫ひ合はす仕方でありまして紐の芯地の巾丈を足す場合は此の縫合せ方にいたします男物裏地巾の不足する時の持出し布の接ぎ方に用品ひます。

突き合せ縫



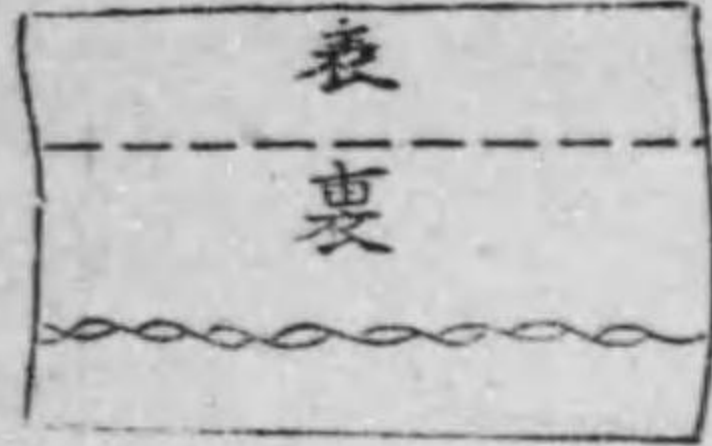
八、突き合せ縫 布を裁ち目のまゝで双方から突き着けて四耗(一分)の深さに針を交互に布の端に引き掛けて縫ひ合せて行くのでありまして帯芯衿芯等の足りない場合にこの仕方で接ぎ足すのであります。

まごひ縫



九、まごひ縫 布の裁ち目の解れを防ぐために裁ち目を針先で巻きながら針を進めて行く仕方でありまして三ツ身単衣の衿、前身の裁目等は縫代が浅くて袋縫は出来ませんからこのまごひ縫を用ひますその他羽織の裏に用ひます甲斐絹などの裁目は解れ易いので仕立てる前にまごひ縫をいたします。

半返し



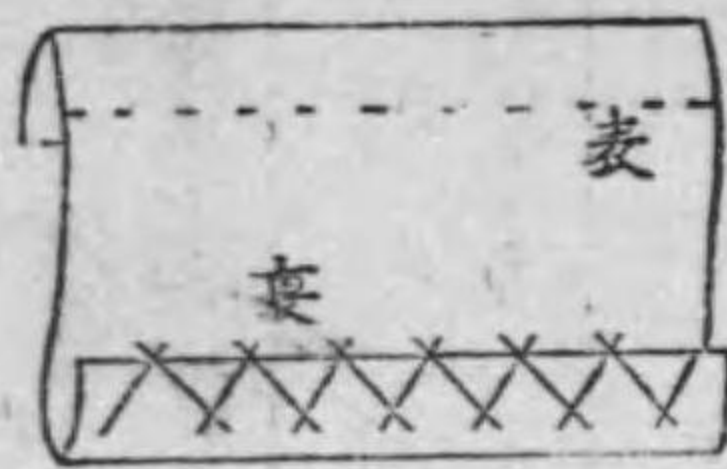
十、半返し縫 半返し縫は布を合せて一針抄ひ其の三分の一後に返しては又抄ひ繰り返して縫ひ行くのであります主に縫ひ合せ目を密接に致しますために用ひます。

本返し



十一、本返し 縫布を一針抄ひ二分の一後に返しては之を繰返しては縫ひます主にミシンの代りに用ひます。

千鳥縫



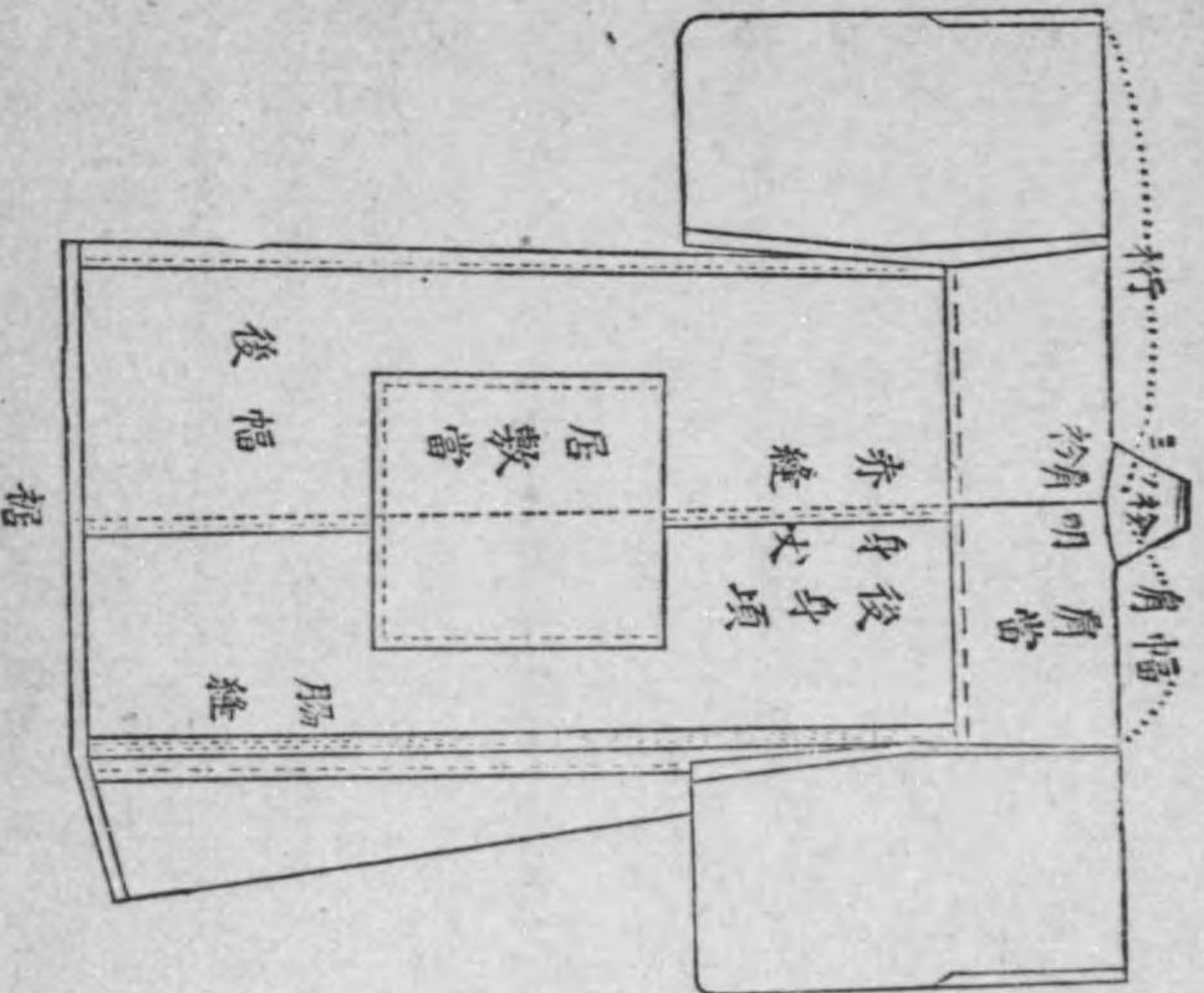
十二、千鳥縫 布の端を折り其の左の方より糸を抄ひ始め布地糸二本程抄ひ次に六耗(一分五厘)位斜に裏折代の方に圖の如く三角形に裏折代を抄ひます針目は表に出しません主に毛織物地厚物の單衣仕立伏縫或は縮をなすべき所に用ひます。

襪の種類

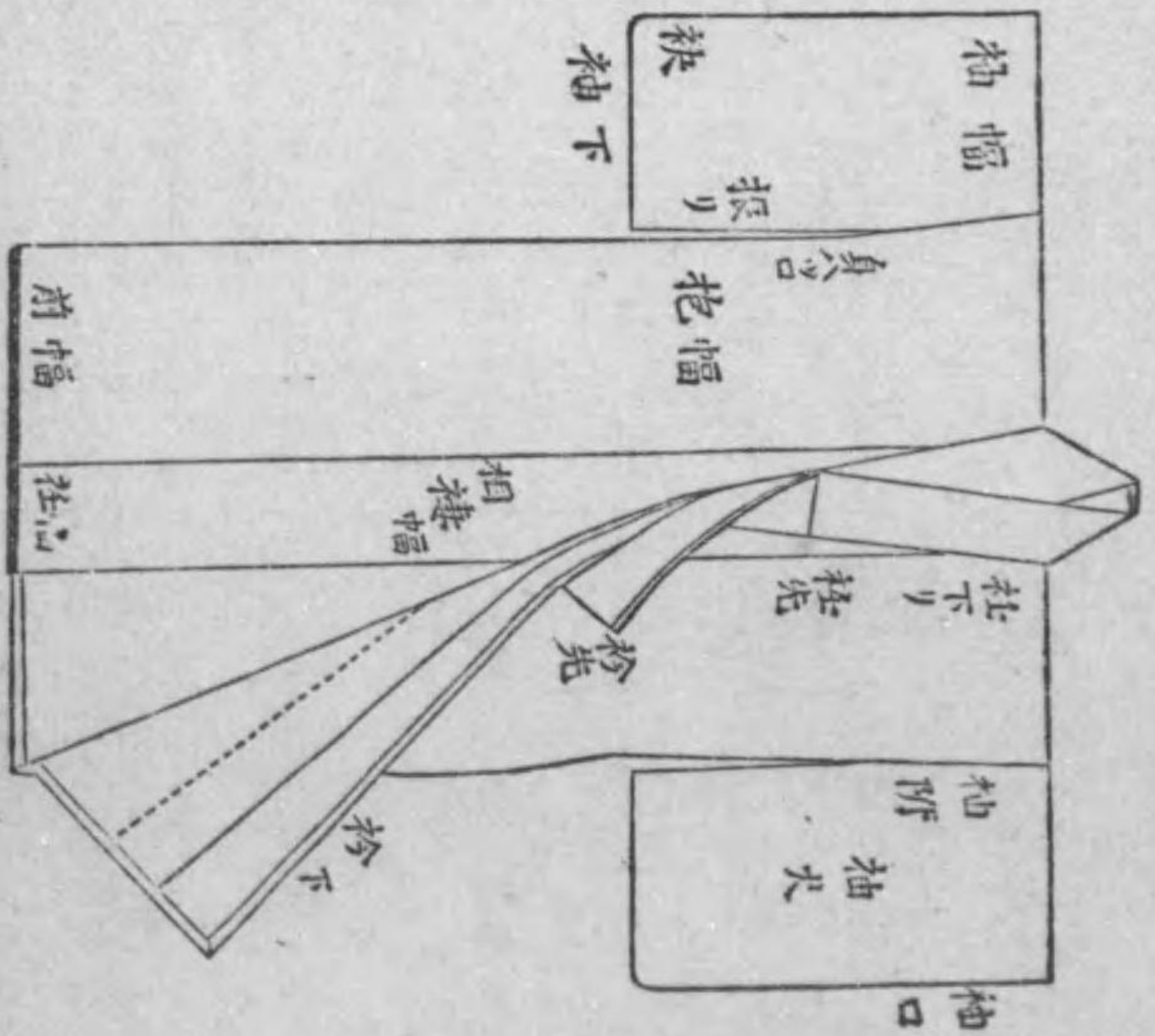
- 平襪 一目落し
- 全二目落し
- 全三目落し
- 縫襪
- 隠襪
- 表

- 一、平襪一目落し 針目凡三種（七分）に大針一つ、裏に小針を一つ出します。
 - 二、同二目落し 表に大針と小針を一つづつ出して裏に小針を二針出します。
 - 三、同三目落し 表に小針二つ大針一つを出して裏に小針を三針出します。
 - 四、縫襪 普通のグシ縫方に縫ひます。
 - 五、隠襪 裏より見て一目落しの様に針目三種（凡七分）に表に成るべく目立たなく布地色と同色の糸を用ひます。凡て縫目に折被をかけませんこと。
- 長着の裾合のみ四耗（一分）の被にて他は一耗半（三厘）位の針目を整へるだけの被せをかけてよろしう御座います。

第二章



第二章



第二章

普通物一反の丈は凡そ一〇米六四糎乃至一米四〇糎（二丈八尺乃至三丈）位を普通と致します別に
 衿裏肩當布を用ひます居敷當は共布を用ひる場合と肩當と同じ布を用ひる場合とあります男物は共布
 にて取る方が多く女物は袖丈身丈を長く致しますので別切地を用ひる方が多いので御座います。
 普通肩當普巾九五糎（二尺五寸）衿裏半巾一米八二糎乃至一米八五糎（四尺八九寸）居敷當五七糎（一
 尺五寸）位用ひます。

本裁女物普通仕上寸法

袖丈	六一糎（二尺六寸）	袖口	二三糎（六寸）	袖附	二三糎（六寸五分） 二五糎（六寸五分）
袖巾	三二糎（八寸五分）	身丈	一四八糎（三尺九寸）衿肩明	一〇糎（二寸五分）	
身八ッ口	一二糎（三寸五分）	後巾	二八糎（七寸五分）前巾	二三糎（六寸）	
衿下り	二三糎（六寸）	衿巾	一五糎（四寸）	襟下	七六糎（二尺内外）
相袂巾	一四糎（三寸六分）	衿巾	一二糎（三寸）	裾	五一糎（二尺六寸五分） 六一糎（二尺六寸五分）

裁方積り方

先づ反物を解き丈を計り織班染斑汚點等を検べまして火熨斗又はアイロンを掛けて地伸をしますこれ
 は布にくるいの出来ないため御座います、次に裁ち切るべき寸法の通りに袖丈の四枚を順々に折り
 たゞみまじたら身丈を袖の上に四枚折り重ねます、其の上に身丈より裁切り衿下り（男物一五糎女物
 一九糎）（男物四寸女物五寸）だけ短い物を二枚折り重ねます、其の二枚が衿衿地であります。
 鈎衿裁は身丈より裁ち切り衿下りだけ短い物を一枚に鈎下文を加へたるものを衿衿地と致します。

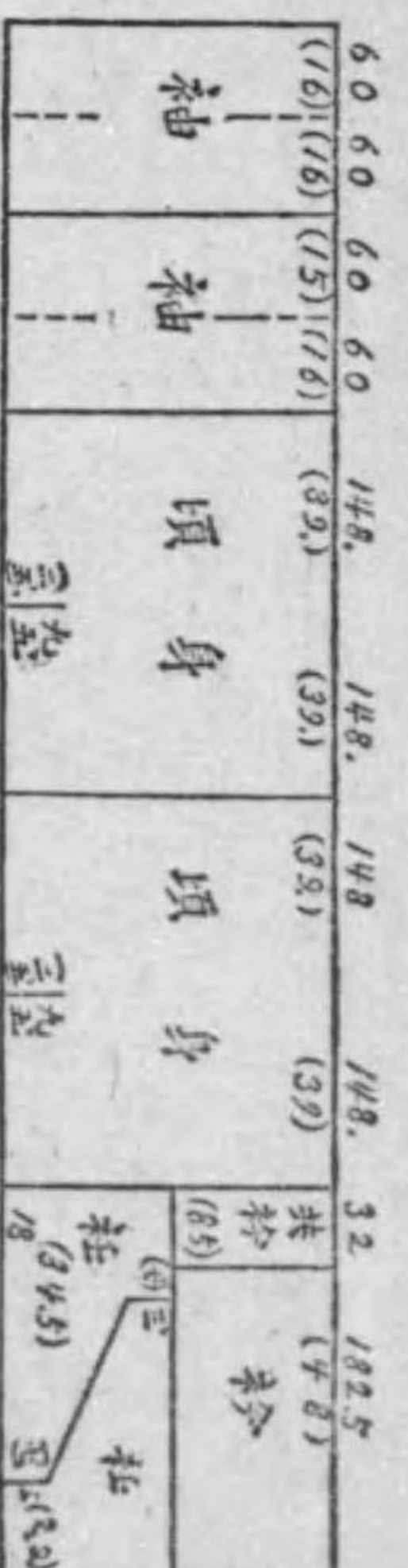
本裁女物単衣裁方

袖	60 60	衿身	148.9 148.9	衿	12.9 12.9
袖	60 60	衿身	148.9 148.9	衿	12.9 12.9
		共衿	25.5 25.5	衿	182.5 182.5

公式

袖丈×4+身丈×6-衿下×2=總尺

總尺-(袖丈×4+衿下×2)+6=身丈
 (衿裏、衿下、衿上、衿中、衿下、衿上、衿中、衿下)×4=身丈



公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{衿下} = \text{總尺}$$

$$[\text{總尺} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿下})] \div 5 = \text{身丈}$$

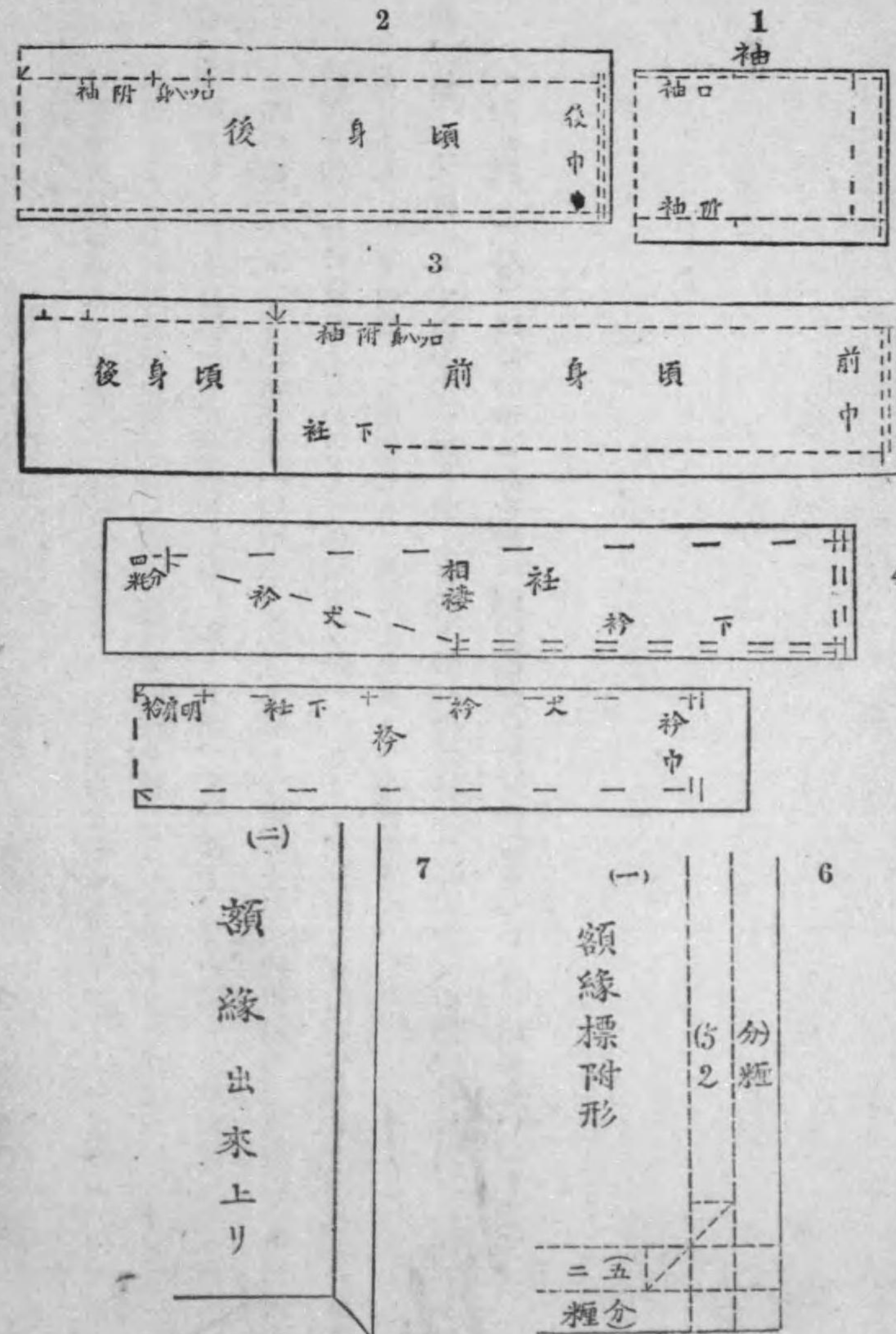
標 附 け 方

- 一、袖 兩袖共中表に別々に重ねましたら山を左に袖口を向ふに置きます、丈、口、附、袖口下を九耗(二分五厘)に標します丸味標を付け袖下の淺縫ひを四耗(一分)位に標しまして巾標をいたします。
- 二、身頃 肩を左に背縫を手前に前布を下に重ねて置き丈、背縫ひ、袖附、身八ッ口、後巾裾紘二厘(五分)肩巾附袖の斜山標をいたします次に後布を大きく巻きつゝ左の方に取りのけまして前の標

は脇の方は附身八ッ口等凡べて後の標をうつして前巾を定め其所で裾より一二厘(三寸)ほどは真直に上部紘肩明裁切の所より引張り衿附斜の標を致しまして衿下りの標をつけます。

- 三、衿中表に二枚重ね裾を右に堅裾を手前に置き裾紘、丈、裾下、等を標し堅裾紘代フ・五厘(四分)衿巾の標一六厘(四寸)相裾巾一四厘(三寸六分)標して附の上部縫代は出来上り巾の $\frac{1}{4}$ に附の方縫代を加へた寸法位と定めまして相裾まで斜に標します、衿附は衿附縫代標より四耗(二分)手前を出して裾下の標とに物指をあて衿附丈を計りつゝ標します。

- 四、衿 二つ折にして山を左に附を向ふに置き附縫代九耗(二分五厘)、山標、衿肩廻りへ衿下りを加へ尙八耗(二分)ほどのゆるみを加へ劍先標及び衿先の標をつけ次に巾標をいたします。



縫方

一、袖 表を出して袖下淺縫を兩端二糎(五分)程を残して淺く縫ひましたら裏に返しまして八つの方より縫ひ始め袖口明きの所にて小さく返し針を凡そ二糎(五分)程縫返して置きます。丸味の所は普通の針目より小針に縫ひまして、丸味の兩際の所に返し針を仕て置きます。丸味のちぢめ方は縫目より二糎(五厘)程づゝ上を二度縫ひまして程好くちぢめ縫代を小さく襷を作りまして襷の部分を一針抜きに止めて置きます。

二、袖口縮 口下の縞目を通して折をつけ三つ折りにいたしまして二・二糎(三分)の針目に、内袖は口明より一針多く、外袖は明の所まで縮けて置きます。

三、身頃 背縫衿肩を右に肩當切を向ふに重ねて肩當の附きます部分は四つ縫に他は二枚を縫ひます耳一ばいに二度縫を致します。

裾より五七糎(一尺五寸)の所に敷當布の中央を合せて、居敷當の方に小針を出して二・一糎(三分)ほどの針目に、一針つゝ伏縫の仕方に縫附けます。廻りは下方だけ残して、三方縮附けます上部は本縮、兩側は耳縮、下方は居敷當切のみ一つ折に隠蟻の様にいたします。下方の兩端を四

糧（一寸）ほど衿付け付けて置きます。

肩當は兩端共耳衿に致します。袖を付けてから袖附の縫目の上に衿付け附けるもよろしう御座います。絹布仕立は必ず袖附縫目の上に衿付け附けるので御座います。

脇を縫ひましたら衿を附けます。片方は裾より片方は上部より衿を手前に仕て縫ひます。衿は衿の方に脇縫は前身の方に折り返します。

堅妻を衿裾縫を致しまして衿附縫代の端を耳衿に致します。脇縫代の後布を身八つ口の所から割り開きます。袖附、身八つ口等の縫込は引きつれない様注意して程好く斜に折り、折り山より二耗（五厘）ほど下に針目をやゝ荒く隠嫉の様に致して置きます。

四、衿附 山標を背縫に合せ、待針を打ち、劍先に衿の標を合せ待針を打ち、次ぎに衿先より二〇糧（五寸）程の間は衿の方釣り氣味に待針を打ち、劍先までは衿衿平にいたします。後裏衿を表衿にならつて身頃を挟んで待針を打ちましたら下前から縫初めます。劍先の上下四糧（一寸）ほどの間は極く細かい針目で真直に抜針にいたします。始め終り共返し針にて止めておきます。

衿肩廻りに三つ衿の切れを綴ち附けまして、衿巾を折り裏衿は五耗半（一分五厘）狭く折りを附け、衿先を留めて縫ひ縫ひ込みは裏衿の方に綴ち附け、表に引返し兩衿先を襷形に作り、表裏衿

合せて縁を掛けて衿けます。次に共衿く丈の中央を背縫目に當て待針を打ち、共衿先を本衿と縞目を合せて一糧（三分）位の被に表衿のみ針を掛けて縫ひ付けまして、丈を衿けます。衿縁は燃り合せの二本糸にて春、兩肩の三ヶ所につけ、糸の丈は衿巾の一倍程に切り其の端を大きく結びおきます。

五、袖附 肩山にて五耗半（一分五厘）縫込に附け、始め終り共二耗（五厘）の縫込に、身頃を折りまして袖山肩山を合せて待針を打ち、袖の方から見て縫ひます。山の兩方四糧（一寸）位づゝごく細かく或は半返し縫ひに、他は普通の縫方にて、始め終り共返し留にいたします。振り八つを袖附の四糧（一寸）上まで耳衿にいたします。脇縫込も前後共袖附の凡そ四糧（一寸）上まで耳衿をいたすのであります。

本裁男物單衣裁方積り方

男物單衣裁方積り方は略女物に同じであります。

普通仕上寸法

袖丈 五三糧（一尺四寸） 袖口 二八糧（七寸五分） 袖附 四四糧（一尺一寸五分）

- | | | | | | |
|-----|-----------|----|-------------|-------|-------------|
| 袖巾 | 三四糎(九寸) | 身丈 | 一三六糎(三尺六寸) | 内外衿戸明 | 二〇糎(二寸五分) |
| 後巾 | 三〇糎(八寸) | 前巾 | 二五糎(六寸五分) | 衿下り | 一九糎(五寸) |
| 肩巾 | 三二糎(八寸五分) | 衿下 | 六六糎(一尺七寸五分) | 衿巾 | 一五糎(四寸) |
| 相袷巾 | 一三糎(三寸五分) | 衿巾 | 六糎(一寸五分) | 衿 | 六六糎(一尺七寸五分) |

袖	5.5"	袖	5.5"	頭	(3.9)	身	14.8.	頭	(3.9)	身	14.8.	衿	7.5"	衿	18.2.5"
	5.5"		5.5"		(3.9)		14.8.		(3.9)		14.8.	衿	7.5"	衿	18.2.5"

標附方

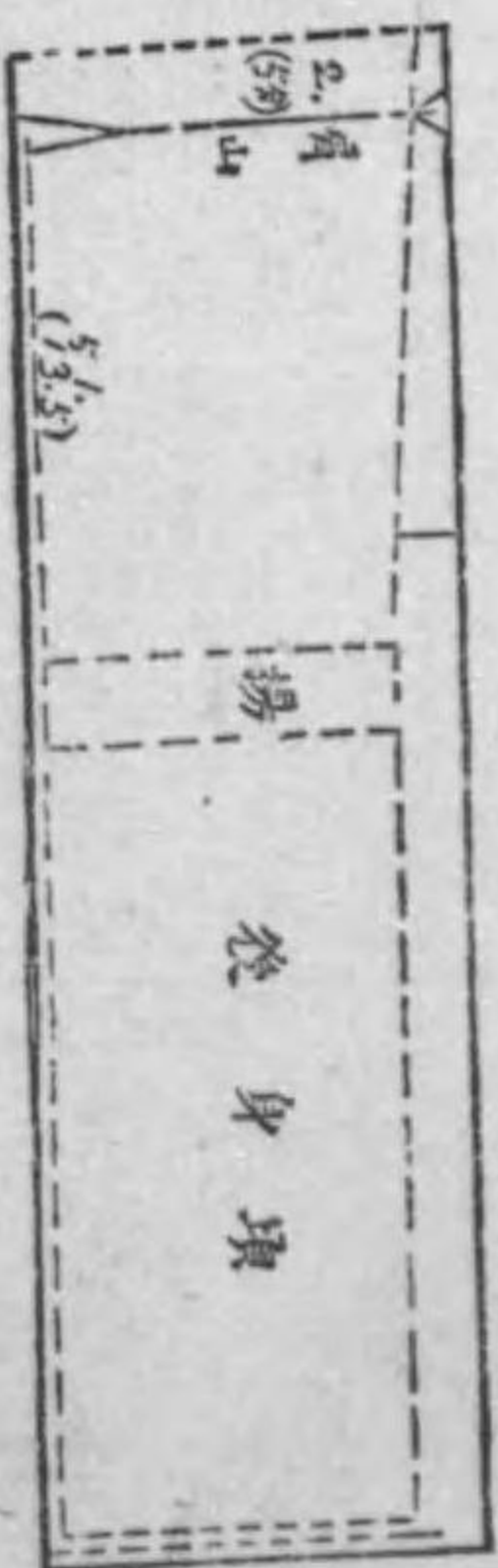
- 一、袖 女物の如く兩袖を重ねて置き丈、口、幅、附等凡て女物と同様であります。
- 二、身頃 女物の如く重ねて置きまして丈、山、背縫、袖附、後巾、裾衿の標を致しましたら肩山にて二糎、(五分)前身頃を後の方に繰り越して、圖の如く揚の標を肩山より五一糎(一尺三寸五分)の所にいたします。其れから下方に揚げるべき寸法を標して後布を左の方に取りのけます。前身

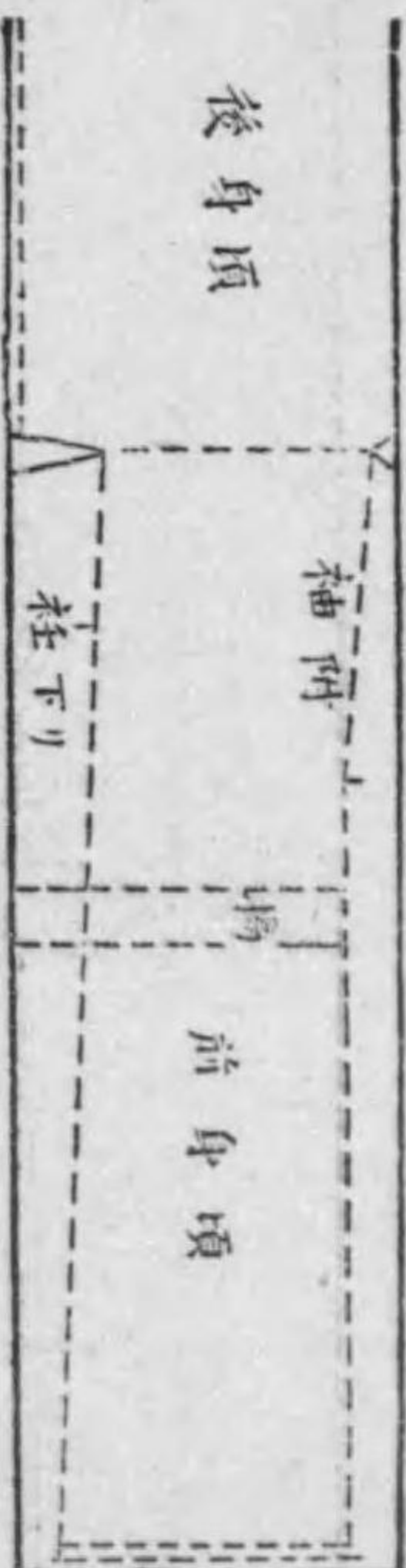
- 頃後は後の標通りにうつしまして揚標も後の標の跡をうつしますと、肩にて繰越した二糎(五分)が丁度四糎(一寸)後揚より下に成るのであります。次に前巾を矢張り裾より一二糎(三寸)上迄真直に標して揚の部分だけ疊み重ねて置きまして衿肩明の所より裾前巾の標まで、糸を引張り衿附の斜を標します。
- 三、衿 凡て女物と同様にて、唯袷下寸法が異なるのみであります。
- 四、衿 女物と同様であります。

第一圖



第二圖





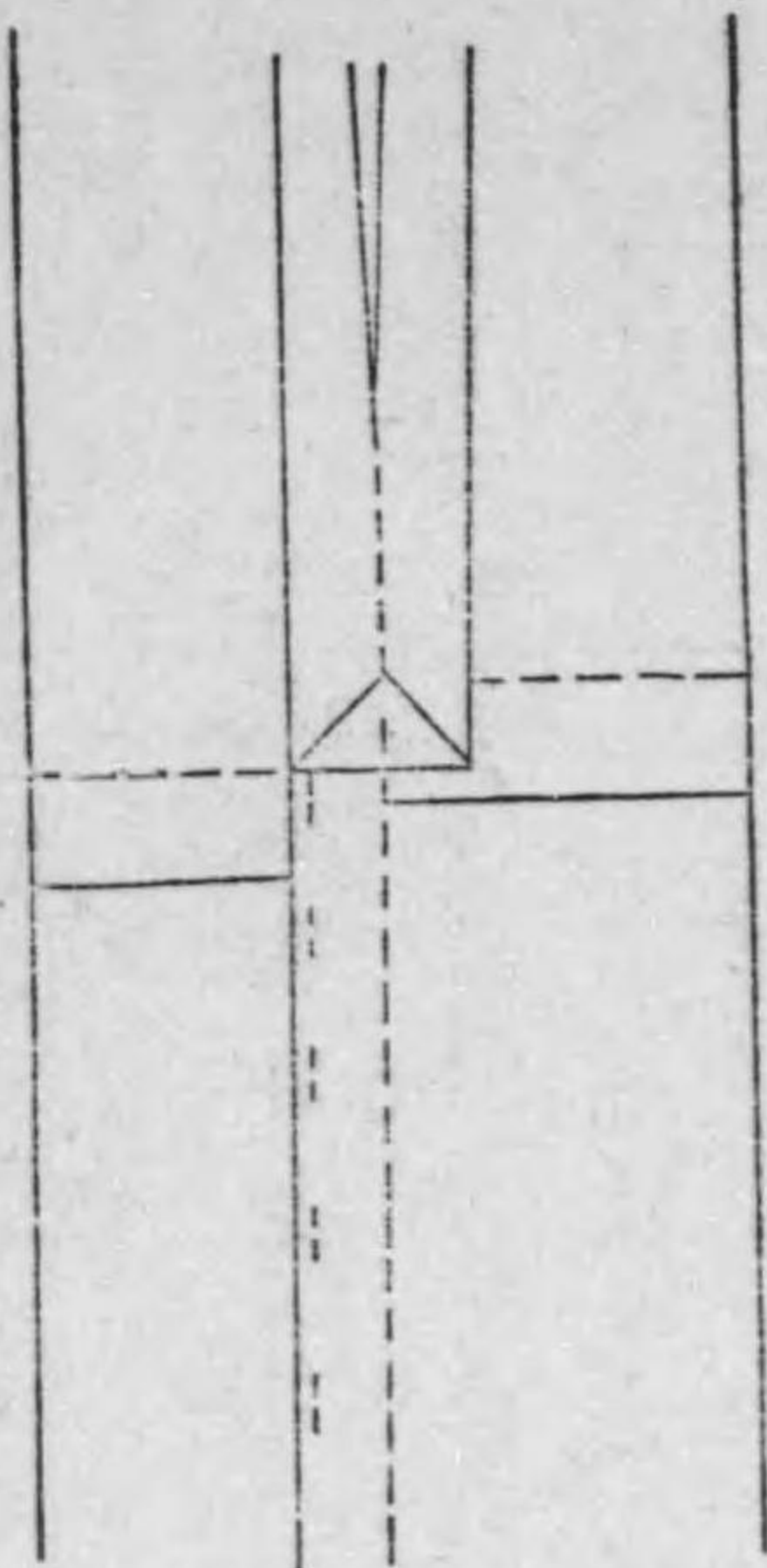
縫方順序

- 一、袖 女物と同様にて人形の所より縫ひ始め 袖口の方にて止めます。折は人形の方を先に折り、袖下縫目に一針り綴り附けて置きます。
- 二、身頃 背縫、肩當、居敷當等は女物と同様であります。背縫を致しましたら、揚を後巾の標から標まで縫ひ、被せを掛けずに裾へ向けて折を附けます。次に前の揚は布巾一ぱい縫ひまた裾の方に向け折を附けます。そして後前共隠躰を掛けて置きます。脇縫、衿、袖附等女物と同様であります。

- 三、衿新衿先縫方 女物同様にて衿の新込代を衿巾の二倍の所にて三角形に折り衿の内側に綴ち附け衿先より六耗(一分五厘)位入りたる所より新け初めます。其の時は表に針を一度出し直ぐ斜に針を裏の方に返して抜き出し、針目が表に残らぬ様に止めます。新け終りの止めも初めものと同じで御座います。

共衿は女物と同様であります。

- 四、袖附 山を合はせて先づ留を致します。其の留め方は内袖の人形の際より針を出し前身後身を同時に通し、外の人形際を堅に抄ひ、後身前身を戻り、内袖の始めの針目にかへして糸を結び、其の両端を捻つて置きます。脇縫代の後布は揚の所まで割りまし女物同様に耳新をいたして置きます。



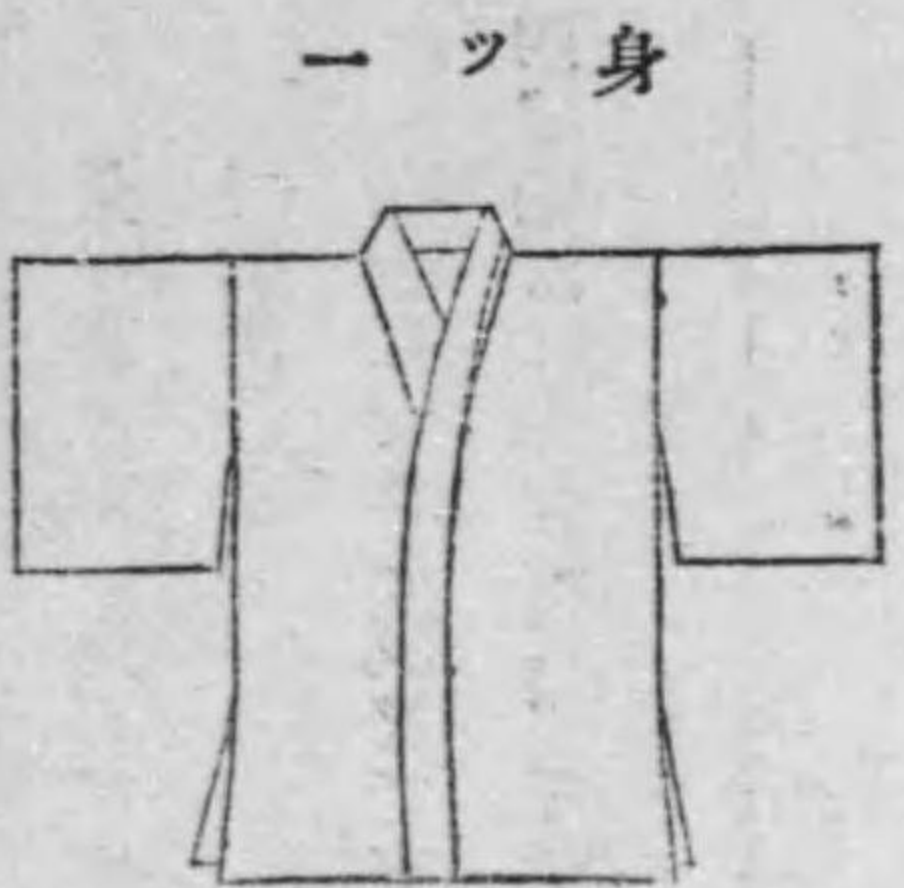
第三章

一つ身襦袢裁方

(一つ身襦袢出来上り圖)一つ身の襦袢は身頃を並巾一と布にて取り袖は半幅に衿は別布を用ひます。
或は袖巾より衿を裁ち取ることもございます。二三才位迄の小兒用と致
します。

一つ身襦袢仕上寸法

袖 丈 一九糎(五寸)以上二七糎(七寸)
袖 附 一三糎(三寸五分)
袖 口 濶袖
身 巾 一ばい
袖 幅 一九糎(五寸) 半巾一ばい

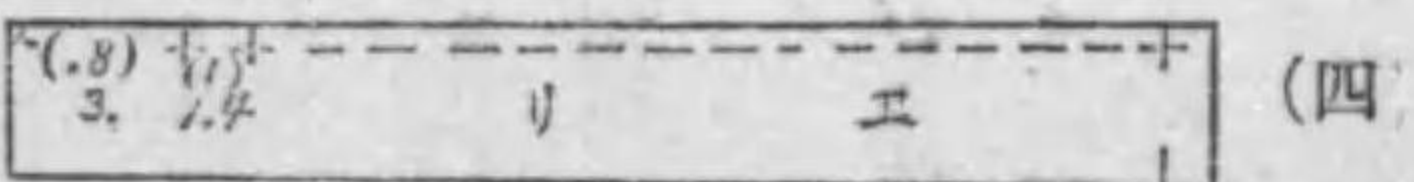
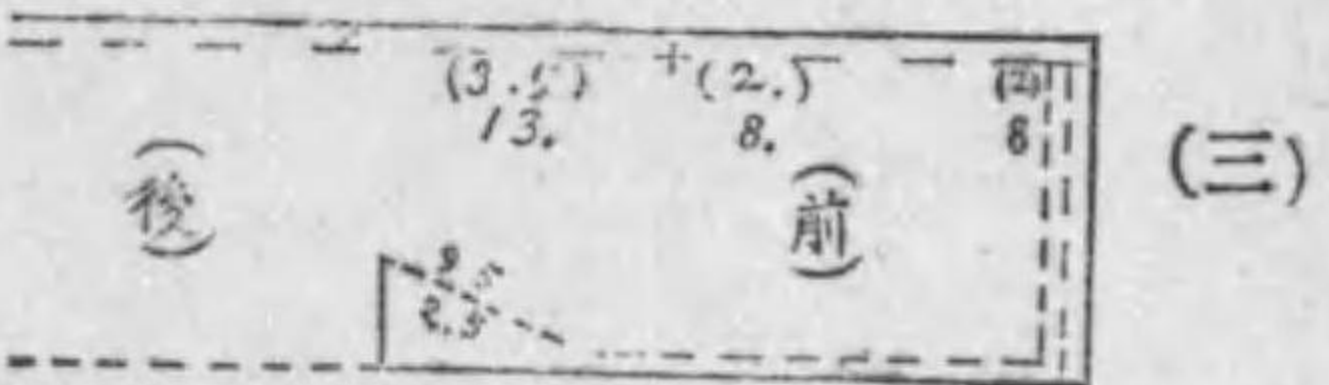
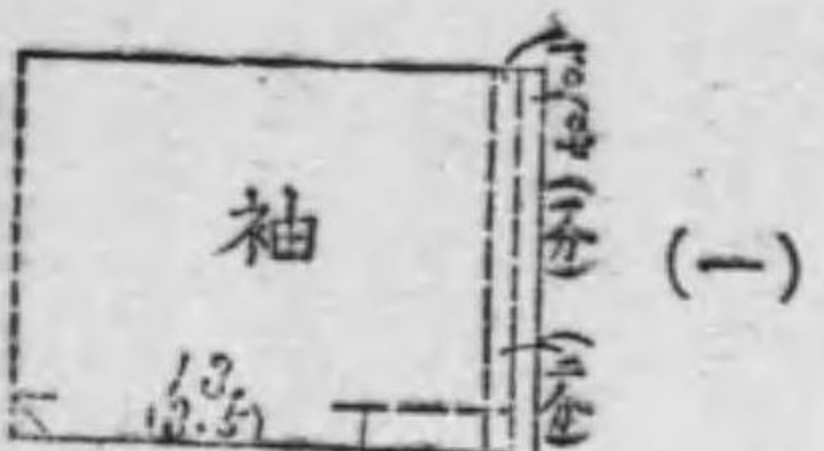


身 丈 三八糎(一尺)
馬 乘 八糎(二寸)
身八つ口一〇糎(二寸五分)

衿肩明 三糎五耗(九分)
衿 巾 三糎位(八、九分)
衿裁切巾一〇糎(二寸五分)

一つ身襦袢標附け方

- 一、袖二つ折にして二枚別々に重ねわなを左に、裁ち目の方を袖口にして向ふに置き、丈、附、巾の標を一ばいに、袖口は九糎五耗(二分五厘)の紵代に標します。
- 二、身頃 半巾に折り、わなの方にて衿肩を三糎四耗(九分)明けまして好く揃へて後身頃を上にして、肩を左に脇を向ふにして置き、裾紵代二糎(五分)馬乗、袖附、身八つ口、後巾は一ばいに標しまして、後布を取り除けます。
- 三、前身頃 前は後の標し通りを標して前巾を一ばいに定め、上は衿肩明の所より物指を渡して斜めに衿附の標を致します。この時衿肩明より八糎(二寸)程下にて一糎(三分)程のふくらみを付けて自然に衿附を斜めに丸味を作ります。
- 四、衿、山を左に置き、縫代九耗(二分五厘)、巾を七糎(二寸八分)程に標します。



一つ身襦袢縫方順序

一、袖 袖下を袋縫に淺縫は兩端共二厘(五分)ほど残して縫ひ、引返して次ぎは兩端一ばいに縫ひまして袖口を二つ折附けに致します。

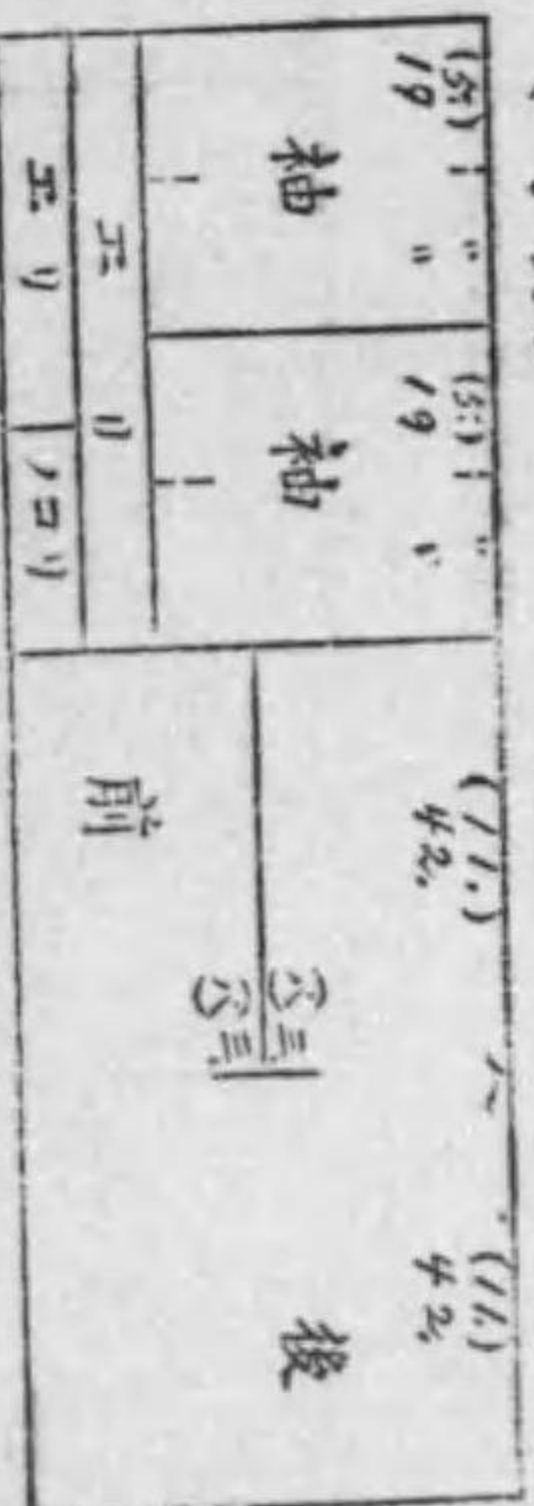
二、身頃 脇縫をいたして馬乗を耳新に裾を三つ折附にして衿をつけます。衿先は縫ひ終りより四厘(一分)ほど中をぬひ、引返してぬい代は裏の方に入れて縮けます。

三、袖附 身頃袖共巾一ばいに山を合せて待針を打ち、附始め終りは返し針にして留めます。

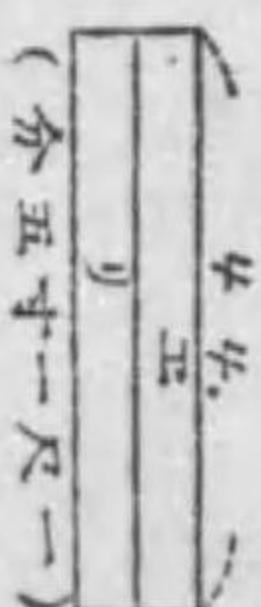
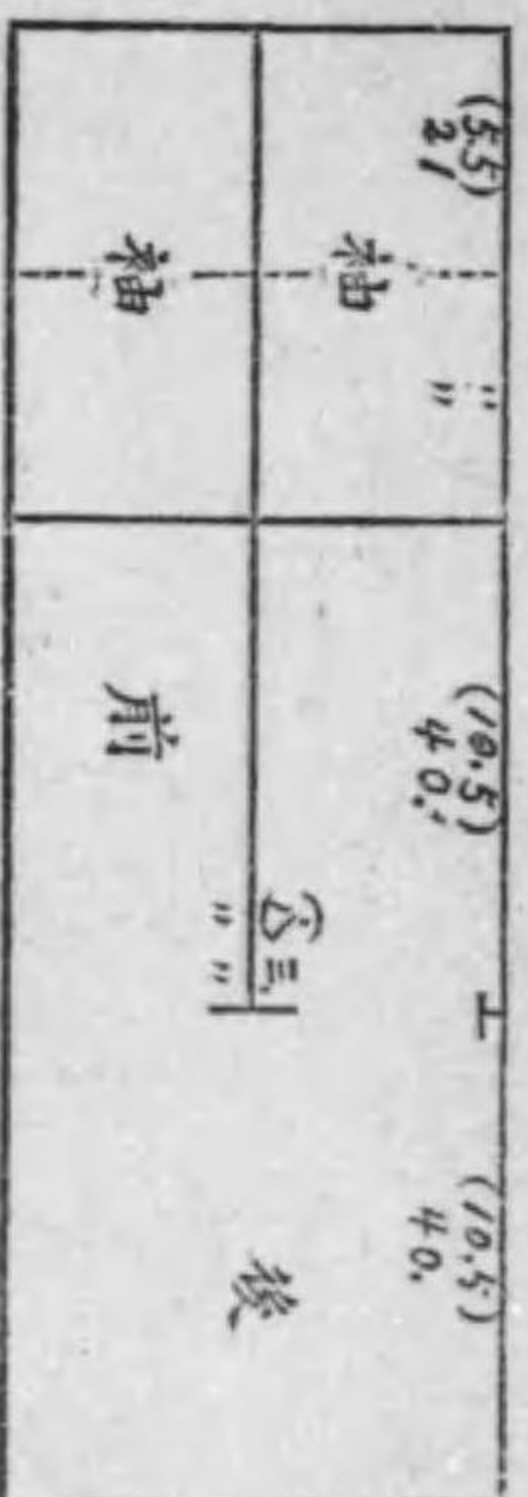
小兒用襦袢は身頃脇縫及び袖附等すべて縫目は表に出して仕立ることもあります。これは肌に縫目がさはらないのでよろしいのであります。

一つ身襦袢裁方

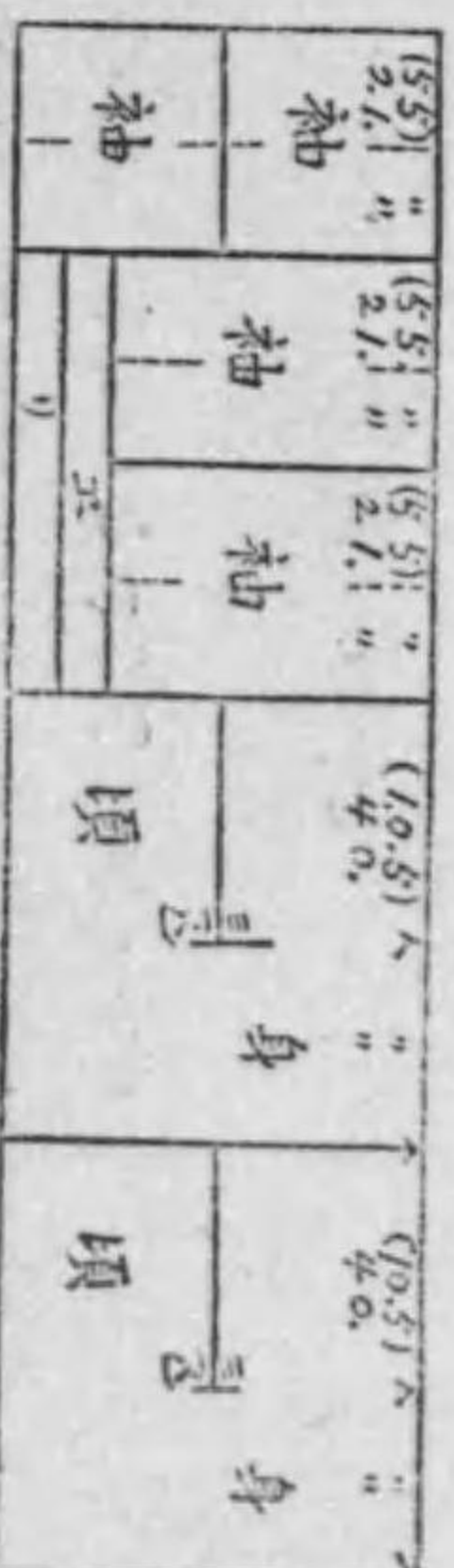
三十六厘巾にて一つ身襦袢裁方
(9寸五分)



積公
方式
袖丈×4+身丈×2=總用布
袖丈×1+袖丈×4=身丈
總用布-身丈×2=袖丈



積公 袖丈×2+身丈×2=總丈
方式



積公 袖丈×6+身丈×4=總用布
方式 總用布一袖丈×4=身丈
總用布一身丈×2=袖丈

三つ身襦袢

三つ身は身頭を二布にて裁ちますので前布は半巾に後布は二布にて後巾より残り布が出すのでございませぬ。衿は袖巾より裁落します。筒袖裁ちの場合には袖丈の四倍より取りましただけでは衿丈が足りませぬので身頭の残り切を衿の足布として圖の如く袖より續きに裁ちます。三才より五才位まで用ひます。

三つ身襦袢仕上寸法方

- 袖丈 着物より八耗(二分)短く
- 袖巾 着物に同じ
- 袖附 一七耗(四寸五分)内外
- 衿肩 明五耗七耗(一寸五分)位し裁切寸法
- 衿巾 四耗(一寸一分)
- 身丈 四五耗(一尺二寸)位
- 身巾 一ぱい
- 馬乘 八耗(二寸)

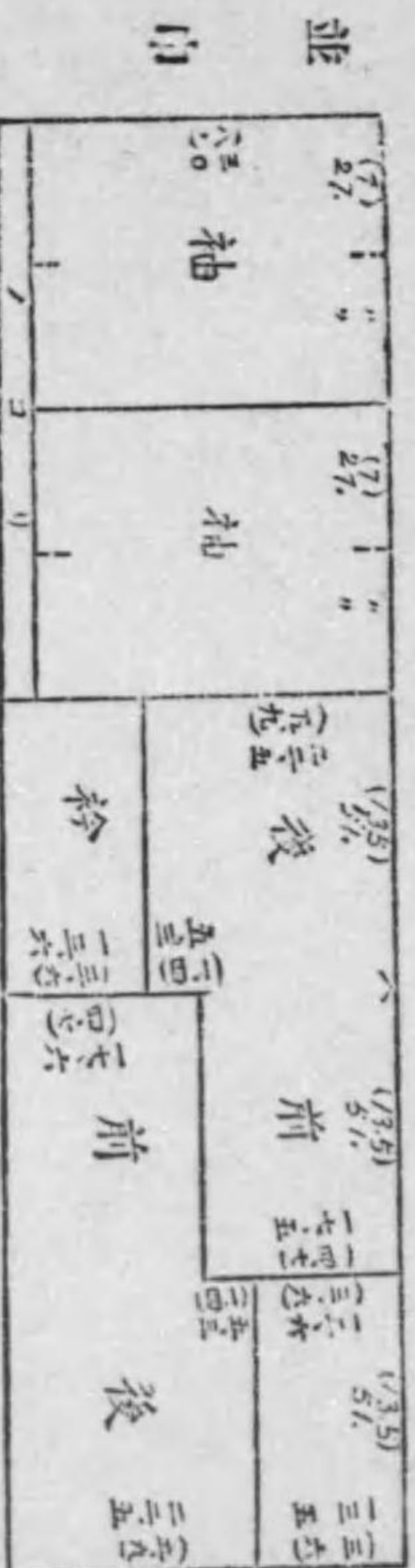
標附方

- 一、袖一ツ身と同様
- 二、身頃一つ身と同様但し背縫の標し、袋にて衿附標し一つ身の如く胸の弛みを丸味に斜めを附けます。

縫方順序

- 一、袖下袋縫ひ淺縫を振り八つの方に袖巾標より縫代の一倍縫殘して引返し次に端から端まで縫ひます。
- 二、身頃方縫順序凡べて一つ身と同様であります。

三つ身襦袢裁ち方



積り方
袖丈×4+身丈×3=總用布

三つ身襦袢標附け方

- 一、袖、身頃、一つ身と同様にいたします。但し衿附の丸味、胸の弛みは、衿肩に前縫代が淺いので附きません。

三つ身襦袢縫ひ方

- 一、袖、一つ身と同様であります。

二、身頃 春縫は袋縫にするため先づ淺縫を三つ山、裾共一種餘り(三分位)残して極く淺く縫ひま
して折を縫目の山にて附け、返して背縫を約一種(二分五厘)ほどの縫代に縫ひます。
脇縫馬乗の耳術、裾術、衿の附け方等は一つ身と同様であります。

四つ身襦袢

四つ身は身頃を四布にて裁ちます。用布は袖丈の四倍と身丈の四倍とを要します。六七才より十二
三才位迄用います。

四つ身襦袢仕立上げ寸法裁方

- 袖丈 五八糎(凡そ一尺五六寸)
- 袖巾 三〇糎(八寸)
- 袖附 一九糎(五寸)
- 身丈 五八糎位(凡そ一尺五六寸)
- 後巾 一ぱい

前巾 一ぱい 衿巾四糎八分(一寸二分)

馬乗同 (同)

身八つ口 九糎五分(一寸二分)

襦袢にて四つ身襦袢裁方(九寸五分)

(B) 30	"	(8) 30	"	(16) 60	"	(16) 60	"
袖	袖	袖	身	身	身	身	身
			襟	襟	襟	襟	襟

積り方公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 = \text{總用布}$$

本裁襦袢

一、本裁は身頃を五つ布にて取り、用布の内より袖丈の四倍を取り、残布より身丈の四倍を裁ち、尙
残り布を巾二つに裁切り真中にてはぎ合せて衿地にいたします。

仕上寸法

袖丈	着物より男物	二糧(五分)短く	身丈男物	七六糧(二尺)位
袖丈	着物より男物	女物 一・二糧(三分)短く	女物	六八糧(一尺八寸)位
袖附	男物	四耗(一分)狭く	後巾	着物と同じ
袖附	女物	二糧(五分)つめ	前巾着物より	二糧(五分)廣く
馬乘	男物	八耗(二分)つめ		
馬乘	女物	六糧(一寸五分)		
衿巾	男物	一・二糧(三寸)	身八つ口(但女物)	一四糧(三寸五分)
衿巾	女物	着物と同じ		

本裁襦袢裁方積り方

着物より四耗(一分)短

第三章

(13.5) 51	(13.5) 51	(19) 71	(19) 71	(22) 86
袖	袖	身頃	身頃	衿
				衿

公式

袖丈×4+身丈×4+衿丈=總用布

(身丈+衿肩廻+衿先縫代)+2=衿總丈

(7) 21	(7) 21	(18) 68	(18) 68	(21) 80
袖	袖	身頃	身頃	衿
				衿

公式
同上

(18) 68	(18) 68	(21) 80
衿	衿	全

公式

身丈×4+衿丈=總用布

三三

(13.5) 51	(20) 75	(二尺)
袖	身頃	
袖	衿	

公式

袖×2+身×2=總用布

標 附 け 方

袖 身頃共小裁物と同様で御座います。

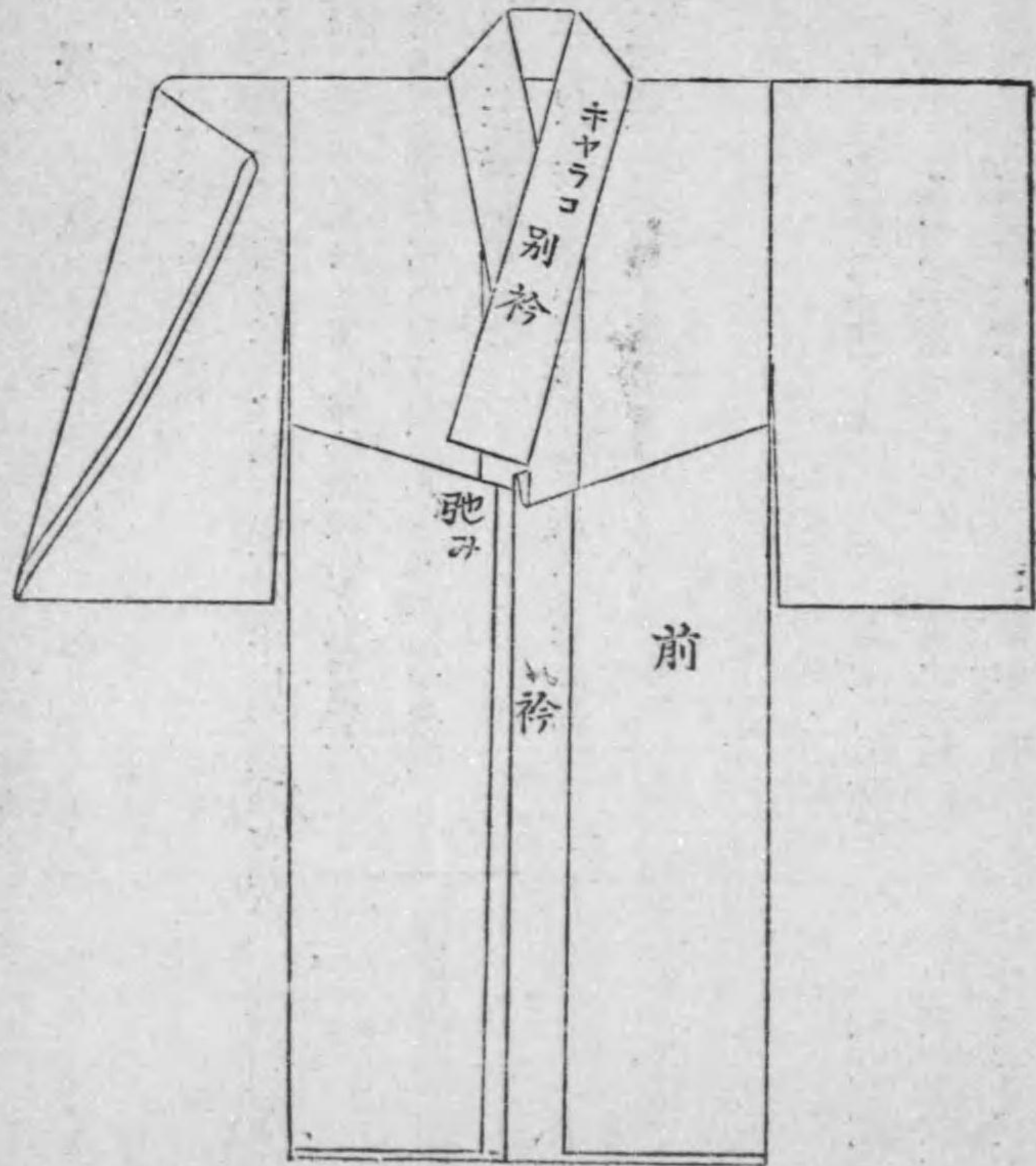
縫 方 順 序

一、袖 四つ身と同じで御座います。但し裏附の場合は袖口の方を先に裏表平に縫ひ合せて、折は裏袖の方に折り極く荒き針目に隠簾を掛け、袖下にて縫目を合せて待針を打ち、裏表共両方に開きまして後ち表袖巾が幾分か裏に折り返る様に袖口先を作ります。そして裏表四枚重ね、片袖は裏より片袖は表より見て袖口の方より四つ縫ひに巾の2/3ほど縫ひましたら振八つ口の方は裏表二枚づゝ別々に縫ひまして其れより一旦表に引き返して袖口を整へ巾標をして振八つを縫ふのでございます。

二、身頃 背縫は單物同様に二重縫を致しまして脇、裾、馬乗、衿附等凡べて小裁物と同じであります。

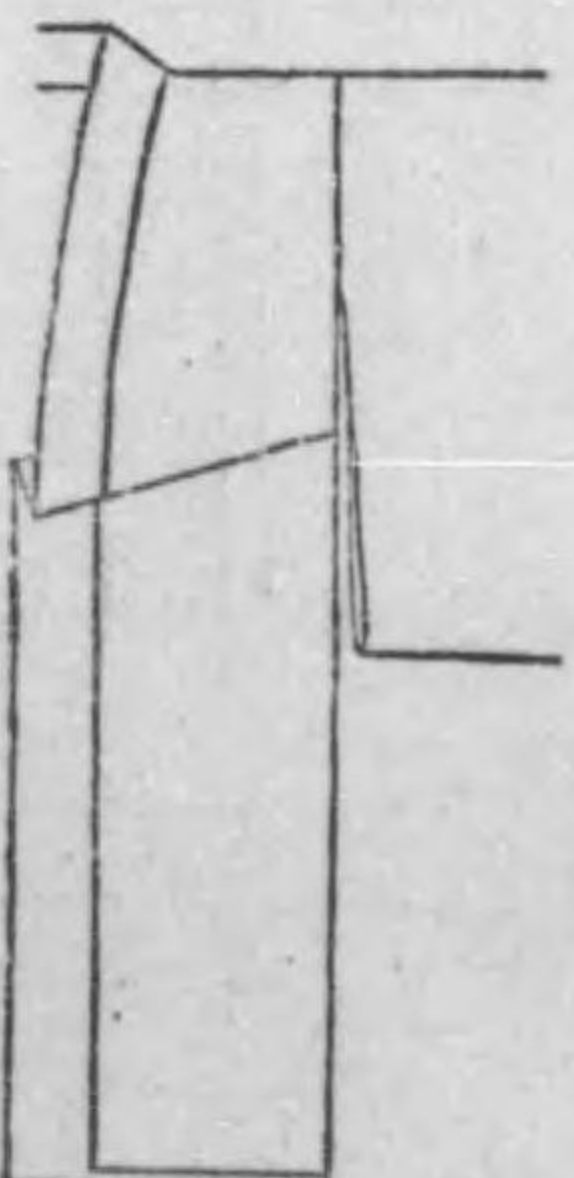
三、袖附 裏附のものは表袖を單衣物の如く附け、裏袖は表袖縫目の上に拵附けます。男物袖附人形は女物振八つ口の如く作りまして、身頃は身八つ口が明きませんので、袖附留の所にて脇縫目の上に前後同時に留めまして、袖の八つのみ明けて置くので御座います。

長 襦 袢 出 來 上 り 圖



長襦袢

一、裁方 左の三通の方法があります。
 イ、普通一反にて袖丈の六倍を取り、袖口の方に半巾の共裏を用ひ、身頃引返しの共裾裏の裁方
 ロ、袖丈の四倍に身丈の五倍を加へ尙衿先縫代、衿肩廻し、
 前の弛み、衿はぎ代等を加へたる總布凡そ九米四十七糎
 (二丈五尺)内外にて普通の裁方
 ハ、身頃表裾廻しの五倍と袖の四倍とにて胴抜き等の裁方
 何れも前身頃は四糎(一寸)長く衿肩を明けます。



二、仕上寸法

袖口廣袖	袖丈 着物より	袖附 同	袖巾 同	身丈 着物より	後巾 同	前巾 同
	一糎二耗(三分)つめ	八耗(二分)つめ	四耗(一分)つめ	四耗(一分)つめ	二糎(五分)廣く	二糎(五分)廣く

衿巾は 同

衿巾は 同

四耗(一分)つめ

八糎(二寸)

六糎 (一寸五分)

肩廻り

63	"	"	136.六	140.	140.九	136.	149.
(16.5)	"	"	(3.6)	(3.7)	(3.7)	(3.6)	(3.9.5)
袖	袖	後	前	前	後	衿	衿

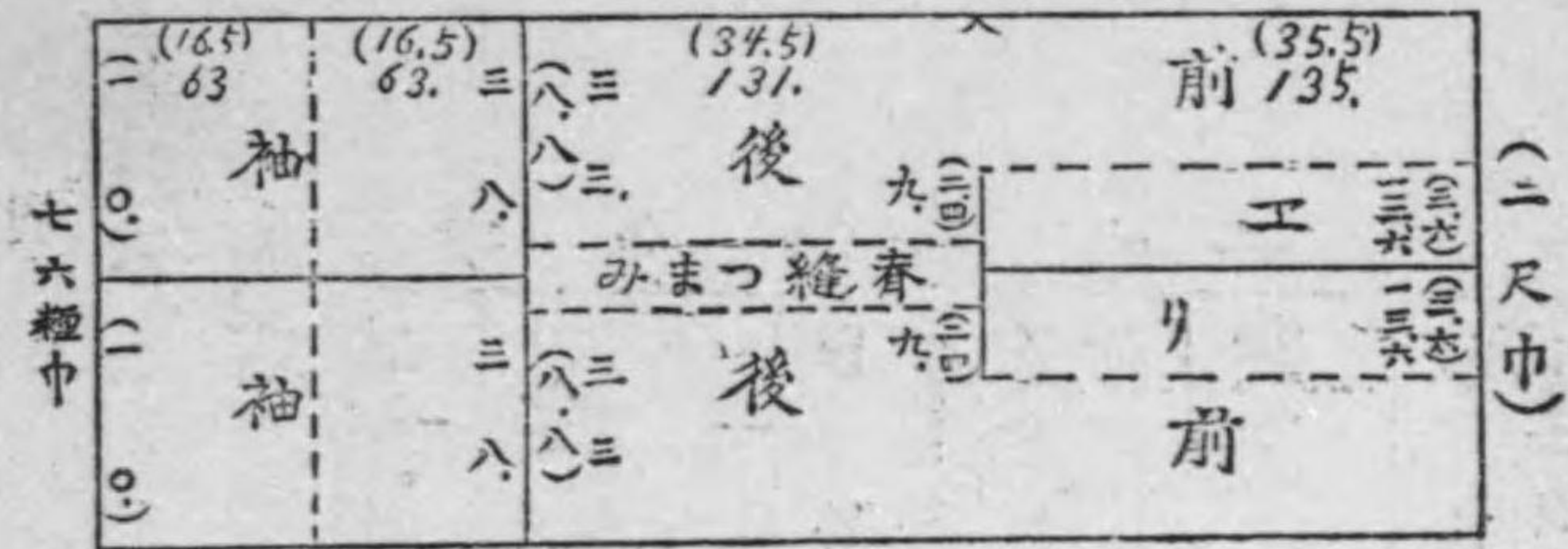
公式

{總用布-(袖丈×4+衿肩廻+衿先縫代+前身弛み)}÷5=後身丈

70.1	70.1	70.1	63.	63.	63.	63.	63.	63.	63.
60.5	60.5	60.5	53.	53.	53.	53.	53.	53.	53.
衿	衿	衿	袖	袖	袖	袖	袖	袖	袖

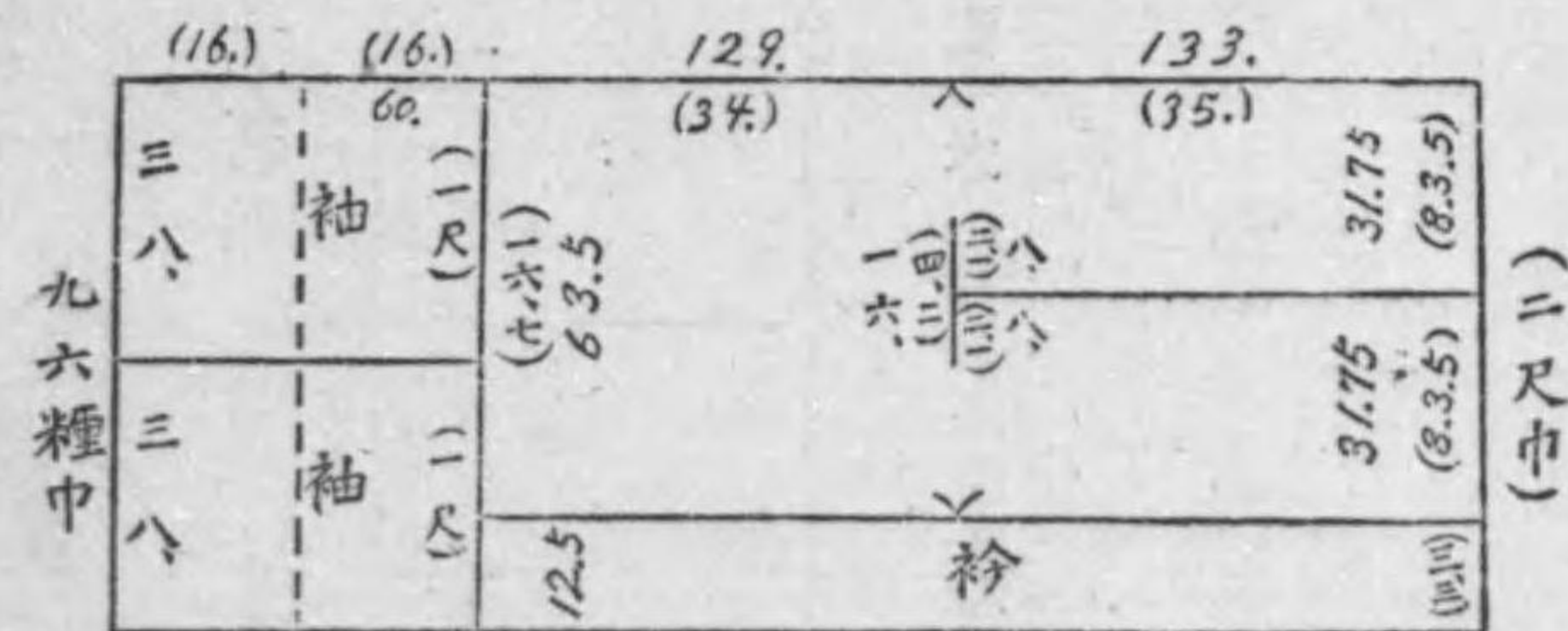
公式

(總用布-袖丈×6+後丈×5-衿下リ+前後の差)÷4=共裾丈

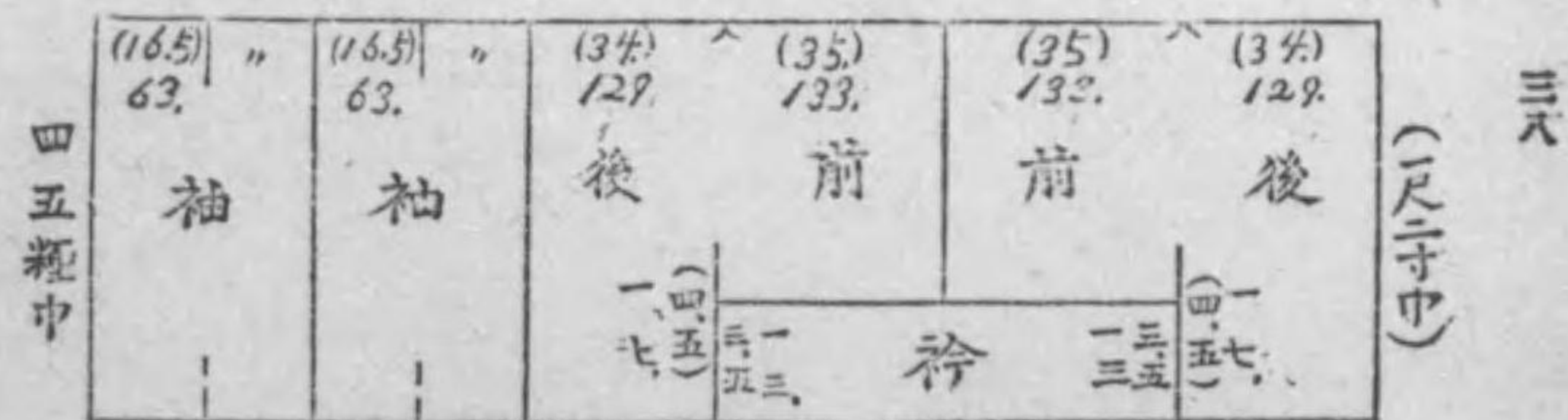


公式

$$(\text{袖丈} + \text{身丈}) \times 2 + \text{前身弛み} = \text{總用布}$$



公式同上



公式

$$(\text{袖丈} + \text{身丈}) \times 4 + \text{前身弛み} = \text{總用布}$$

標 附 け 方

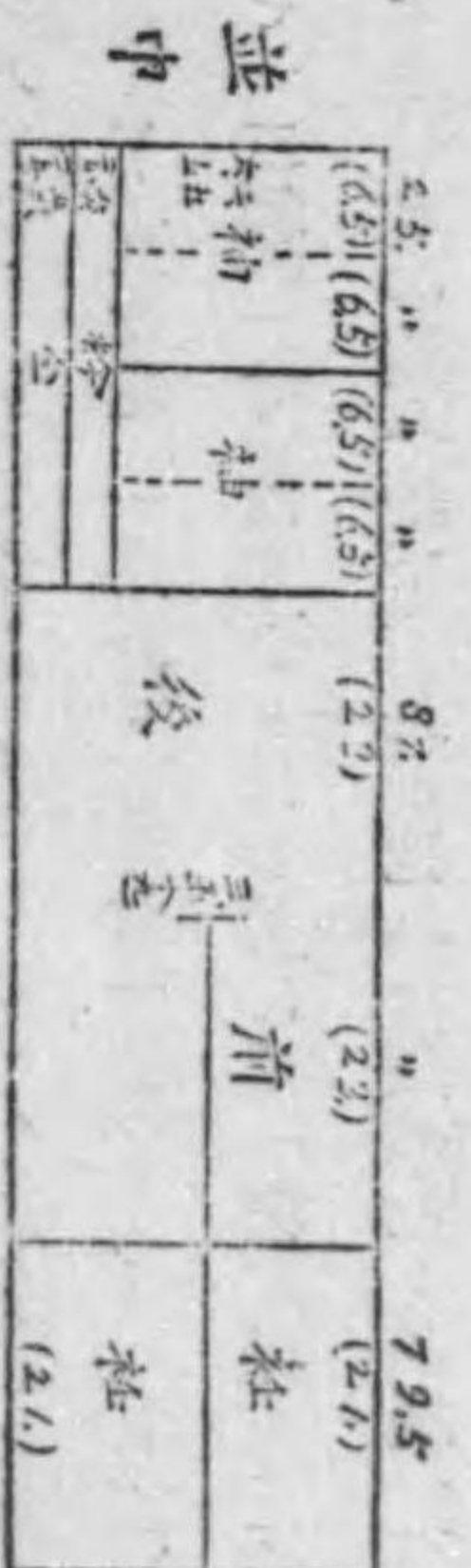
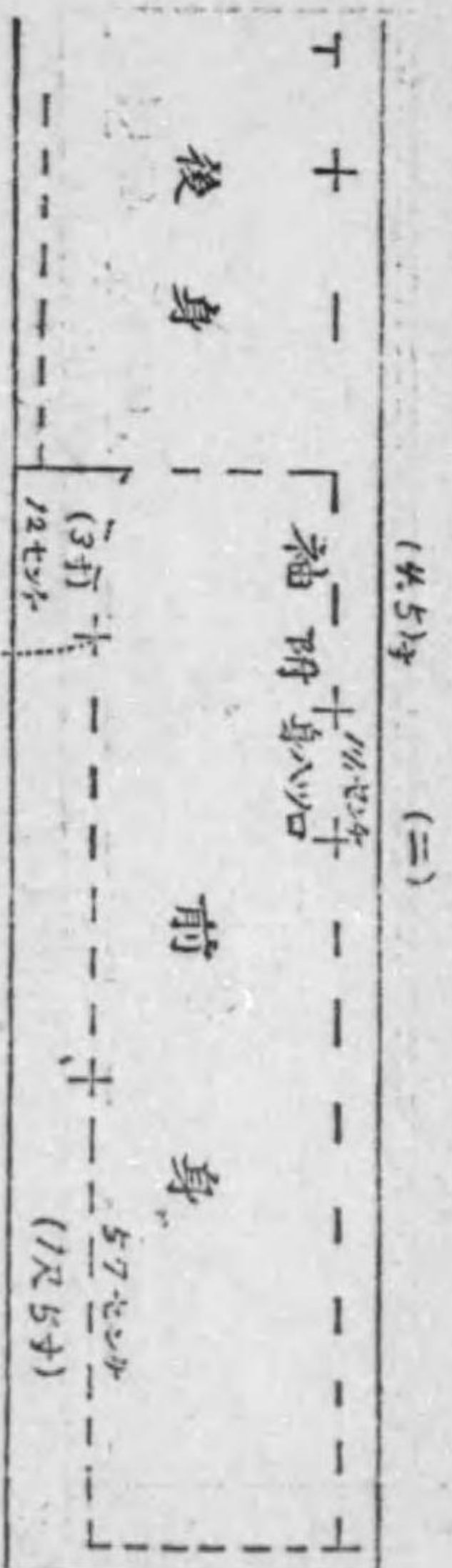
- 一、袖 普通の着物と同様であります。唯袖口を廣袖とします。
- 二 身頃 置き方は着物と同様で、前身頃の長い部分は裾に出して、後の標をつけます。後巾は普通三〇糎(八寸)に、肩迄真直標をつけ、身八つ口を一三糎(三寸五分)に標、後を左に取り除けます。前巾は裾より五七糎(一尺五寸)迄真直に標をつけ、此れより上は衿肩明切込の所まで糸を斜に引張り、凡そ一二糎(三寸)ほど下りたる所にて一糎二耗(三分)のふくらみを附せて、衿附標をいたします。前下りは胸の弛み分で、其の弛みは圖の如く四糎(一寸)つけましたが、夫れを身八つ口に入れます。つまり前身八つ口は後布より四糎(一寸)多く明き、前後脇丈は同じになります。



第三章

三九

Handwritten calculations and numbers: 36, 110, 116, 16, 64, 18, 72, 37, 100.



縫方順序

- 一、袖 單衣半端襟の袷袖と同じであります。
- 二、身頃 表裏共背脇縫をし、裾を合せ裾フキを作り、中綴をして脇縫の身八つ口の留をします。其

留め方は前身頃の裏より針を出し、裏後表後を同時に抄ひ其の儘表前身を豎にすくひ元の前身裏にもごして糸を結びます。それから前後の身八つ口を縫ひます。

- 三、袖附 袖附の留は表袖の裏側より針を出して表身頃を横に抄ひ、裏袖の振八つ縫際にて折山

よりわずか織糸の二三本ほどの所に裏側より針を出して抄ひ、裏身を豎に抄つて、裏袖、表身頃、表袖の順序に元の所へ戻して糸を結びます。表袖を單衣袖附同様に縫ひます。そして裏袖を縫ふ場合は身頃を折らず袖身頃共開いたまゝ縫ひまして折りを表袖附と反對に身頃の方に折り返します。

- 四、袷附 標通り表裏合せて袷附標より少し縫込みの方を下前の裾より上前裾まで、極く荒い針目に織糸にて縫ひ廻はし、次に袷を三つ縫に縫ひ付け、袷先を留め八耗(二分)程中にて袷先を縫ひます。後ち裏側袷附の方に縫代を折つて衽けます。

前弛みの分(前下り)は身八つ口を脇縫留の所にて摘み、表の方にて三四針抜き針にトメテ置きます。袷附の方は其のまゝ胸の弛みになります。

一つ身單衣

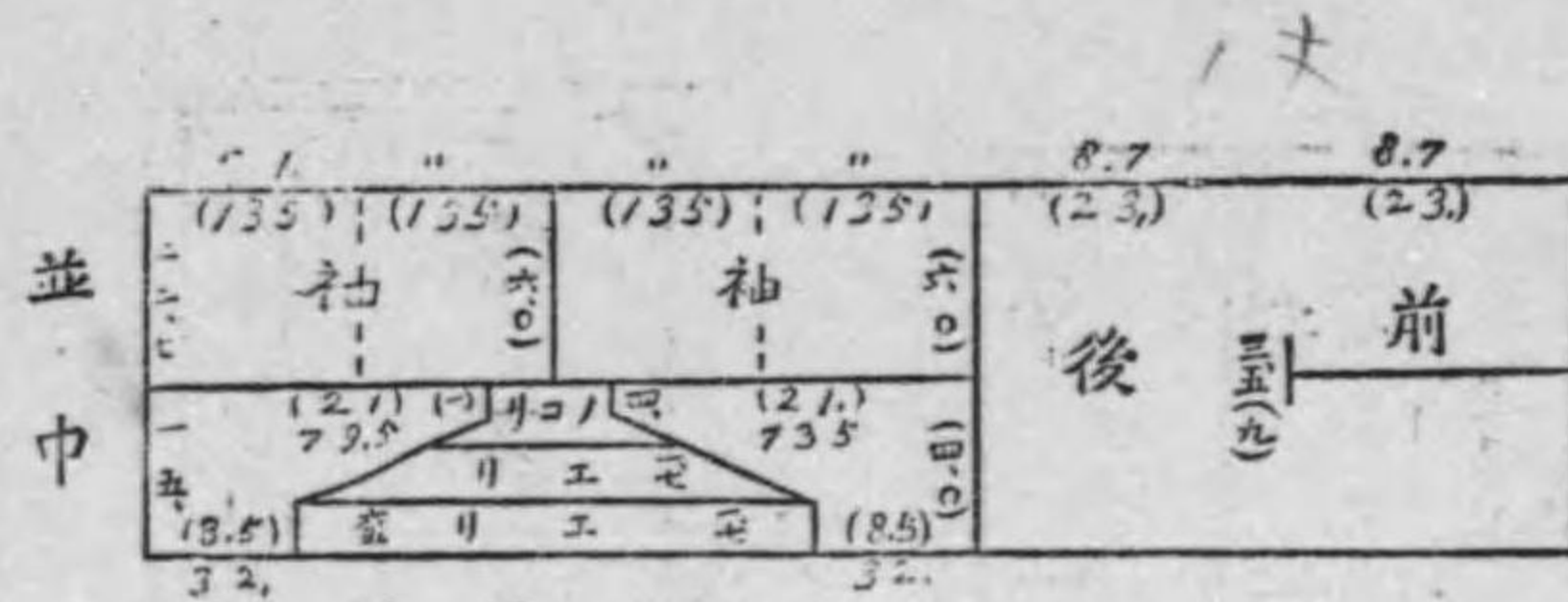
一、初着。官参り等儀式用としては丈長き廣袖仕立に致します。が多くは筒袖にて袖丈と袖口とに大差のない丈の短かい平たい袖を可とします。身頃の二布と袖丈の四倍とにて袖布より巾一三糎三寸五分)を裁ち落とし、衿及び衿に用ひます。
筒袖裁ちは袖布丈にては衿衿地に丈が不足でありますから袖衿地とを續け圖の如く衿を裁ち落しませす。

仕上寸法

袖丈	四九糎(一尺三寸)	身丈	七六糎(二尺三寸)	衿下り	九・五糎(二寸五分)
袖巾	二〇糎(五寸三分)	巾	一ぱい	衿巾	一三糎(三寸五分)
袖附	一三糎(三寸五分)	衿肩	四糎(一寸)	衿巾	三・五糎(九分乃至四糎)
身八ツ口	九・五糎(二寸五分)			衿巾	二一糎(五寸五分)

第四章

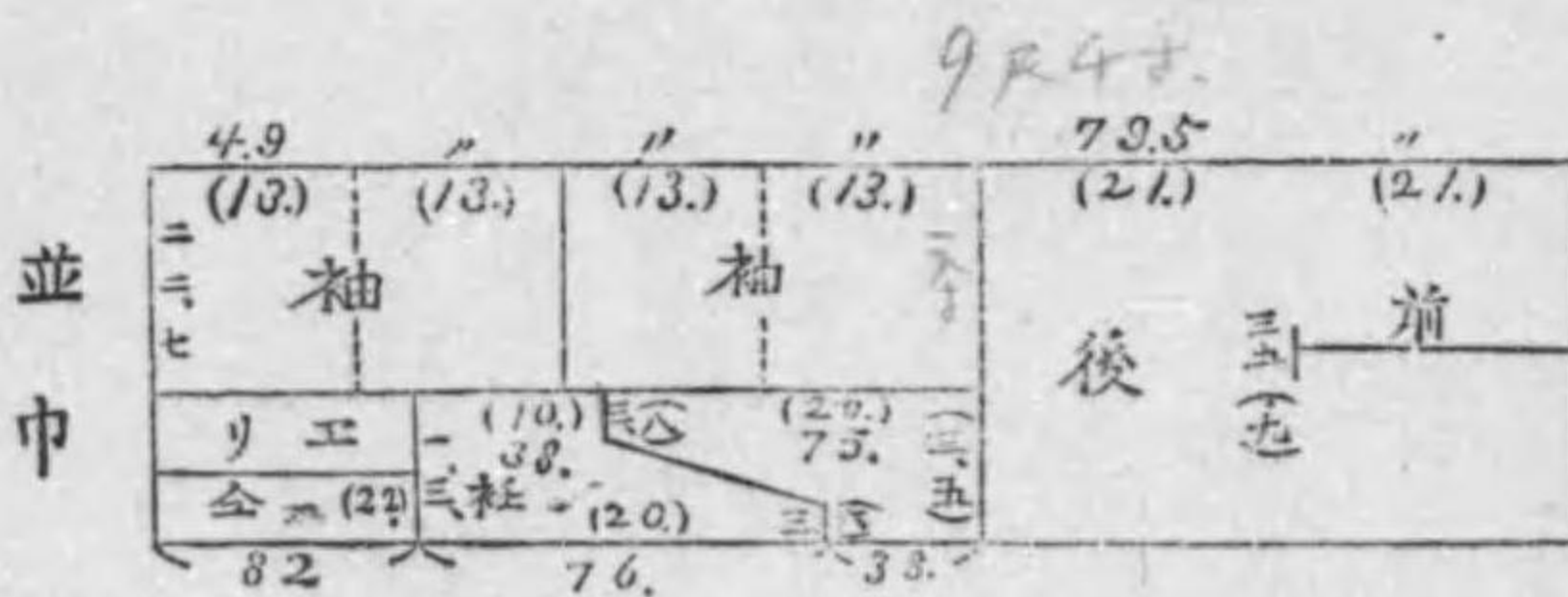
一つ身単衣裁方



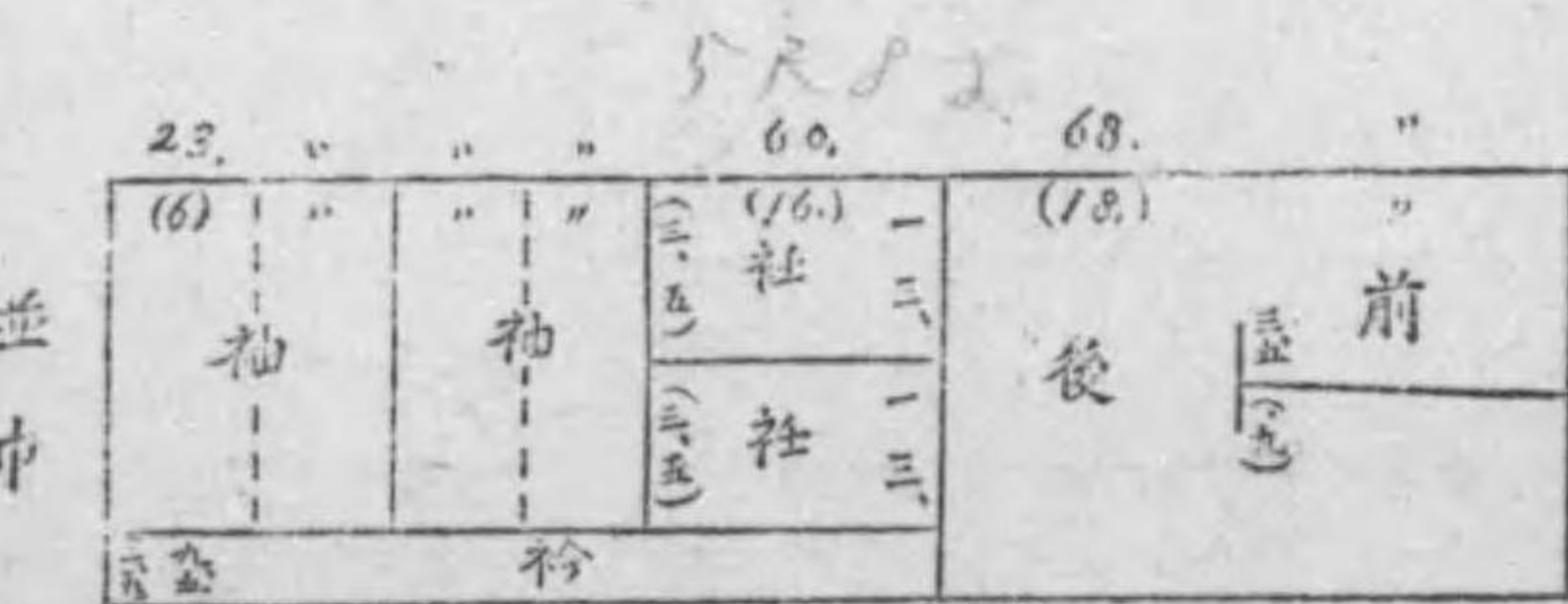
積り方公式

袖丈×4+身丈×2=總用布

總用布-袖丈×4=身丈



積り方同上

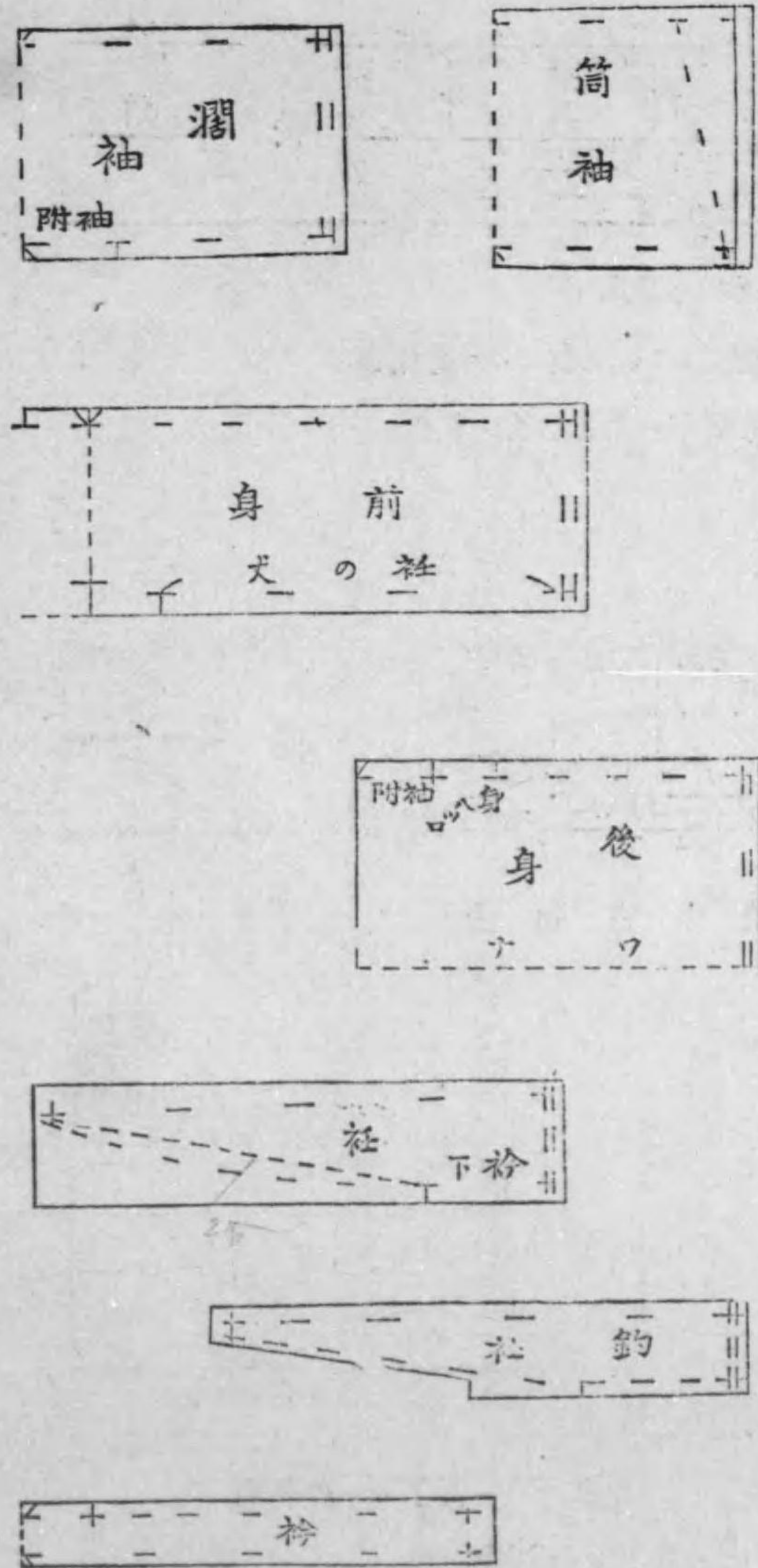


積り方公式

袖丈×4+身丈×3-衿下り=總用布

身丈-衿下り=衿丈

一つ身単衣標付け方



一、袖 一つ身襦袢と同じ。

二、身頃 揃へ方、置き方等本裁單衣と同様で御座います。そして後巾は一ばいに他は仕上寸法により順次標を付けて後身頃を左に取り除けます。前巾は一ばいに裾よりつまでの寸法まで真直に標をつけます。それより上、肩明の $\frac{1}{2}$ の所に絲を引張り衿附の標をいたします。

三、衿置き方は本裁と同様に仕て、堅褌筋代一糎五耗(四分)巾二三糎(三寸五分)相褌巾裾より八耗(二分)詰め衿上部縫代は出来上り衿巾の $\frac{1}{4}$ に、附の縫代を加へた寸法だけ斜に物指を當て、標附をいたします。それから四耗(一分)手前に衿附標をつけ、裾下の標とに絲を引張り劍先まで凡そ一糎(二寸五分)位下にて八耗(二分)ほど丸味をつけます。

四、衿置き方は襦袢と同様であります。衿肩廻しと衿下りとを加へて標し、劍先より裾下までの寸法に衿先標及び巾標をいたします。

縫方順序

一、袖 本裁單衣と同様に致します。但し裁目の方を袖口に致します。

- 二、身頃 背を袋縫ひに仕て、脇縫は本裁と同様であります。
 - 三、衽附 衽を手前に標し通り縫ひ、折りを衽の方に折り、前身の縫代を衽縫代に衿附けます。また衽附を袋縫に仕てもよろしく御座います。
- 注意 何れも袋縫の場合は縫込新代に成る分は淺縫を省きます。
其他裾衿、衿附、袖附等本裁單衣と同様であります。

三つ身單衣

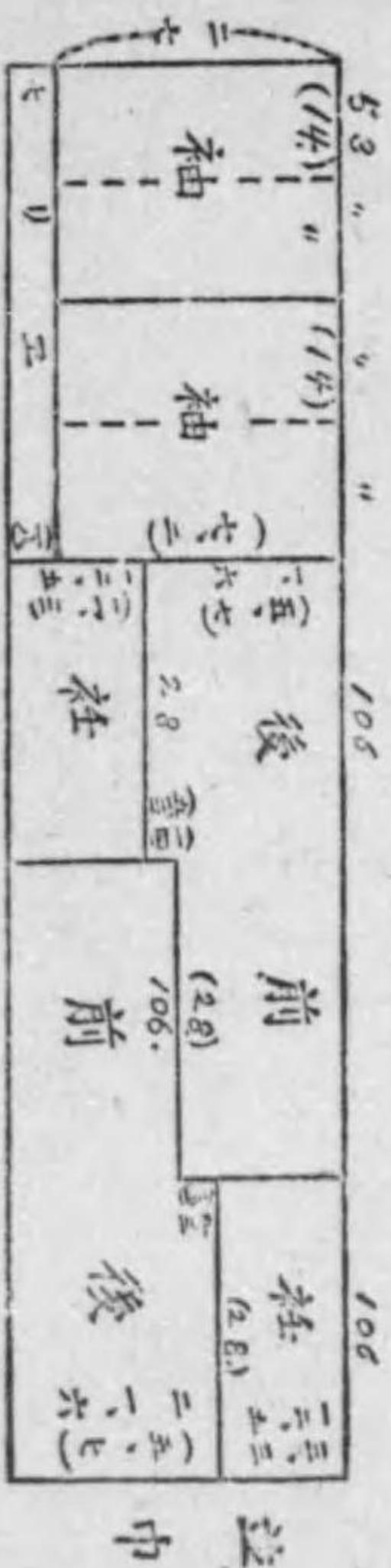
一、袖丈四倍に身丈の三倍を加へたものを總用布とします。身頃 衿肩明布の半巾を兩方の異なる耳より裁切ります。其の中央の布を半巾に裁ち前身と致します。猶兩後身の衿肩を五・七耗(一寸五分)残して衽地をかき取ります。衿は袖巾より取り取ります筒袖裁の時は袖丈だけでは不足しますから、衿足切の分として二三耗(六寸)位餘分の布を見積り、袖に續けて裁ちます。
布の不足の場合は袖、巾より衿を二本取ることも御座います。

仕上寸法

- 一、袖丈 五六耗(一尺五寸) 身丈 一〇二耗(二尺七八寸)

- | | | | |
|----|-------------------|------|------------|
| 袖附 | 一八耗(四寸八分) | 巾 | 一ぱい |
| 袖口 | 同 | 身八つ口 | 九・五耗(二寸五分) |
| 袖巾 | 二七耗(七寸) | 衽下り | 一一耗(三寸) |
| 衿巾 | 四・二耗(一寸一分) | | |
| 衽巾 | 一ぱい但半巾衽は一五耗(三寸又分) | | |
| 衿袂 | 八耗(二分)詰 | 堅襖 | 三〇耗(八寸) |

三つ身裁方



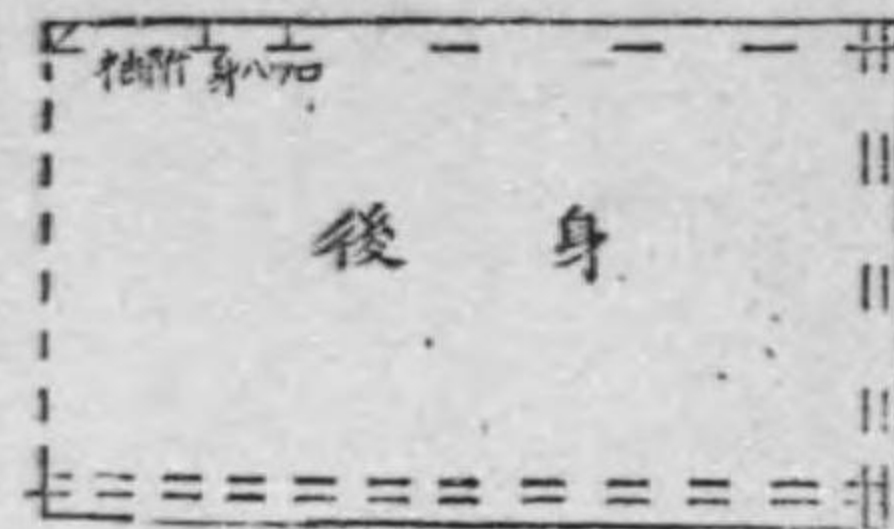
公式

袖丈×4+身丈×3=總用布
(總用布-袖丈×4)÷3=身丈

第四節

四七

第一圖



第二圖



第三圖

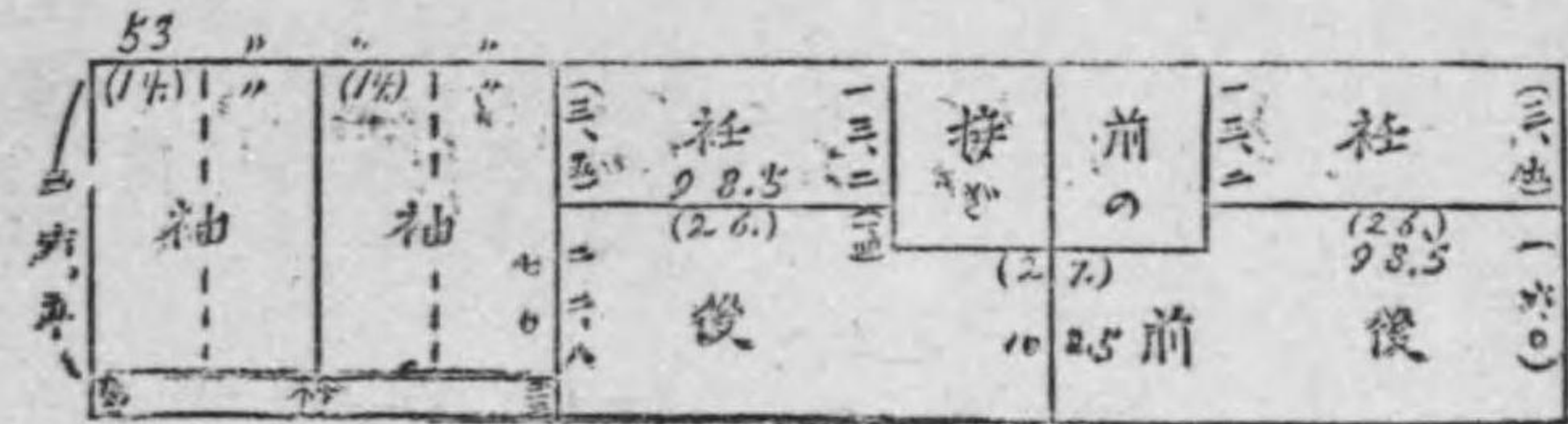


標附け方

- 一、袖 本裁單衣に同じであります。但し裁目の方へ袖口標をいたします。
- 二、身頃 三つ身襦袢に同じであります。身巾標を一ばいにし、後身を左に取り除けます。前巾も一ばいに真直に標します。
- 三、衿 一つ身單衣と同様であります。衿下りが倒斜に成らぬ様に注意すべきであります。

縫方順序

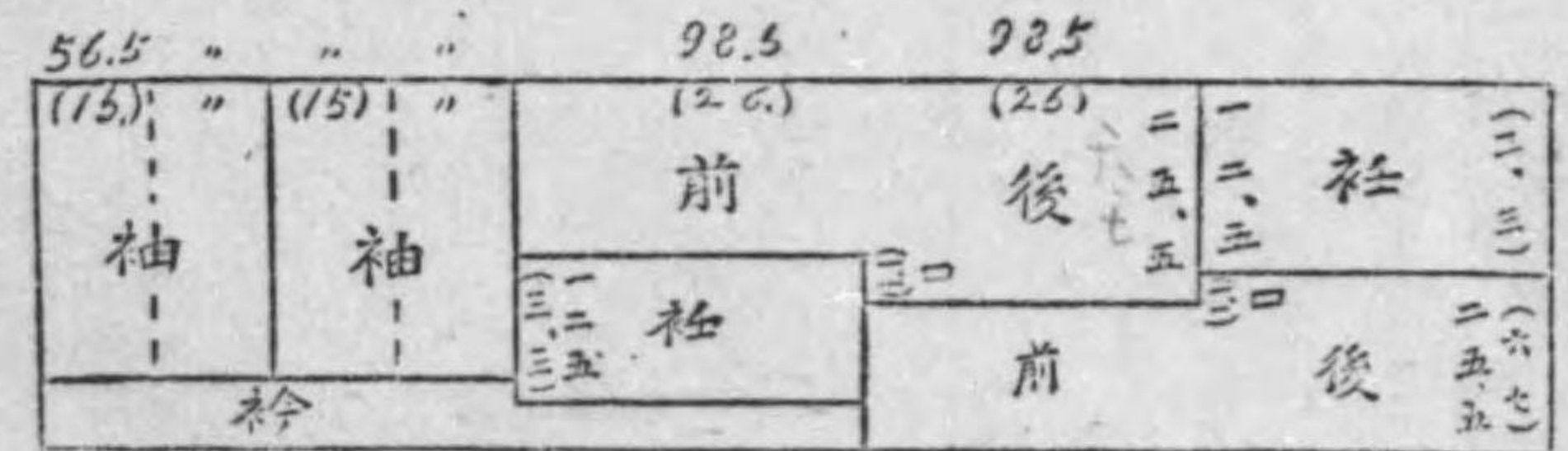
- 一、袖 一つ身單衣と同じであります。



並巾 裁縫教科書

公式

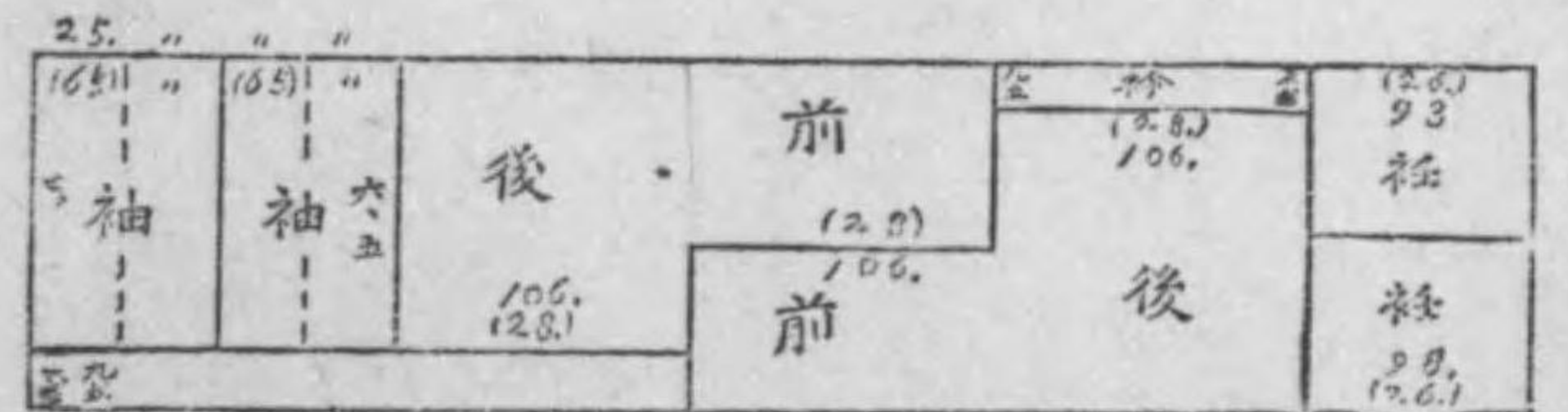
袖丈×4+身丈3+前接代=總用布
前接代……4種(1寸)



並巾

公式

袖丈×4+身丈×3==總用布
(總丈-袖丈×4)÷3=身丈



並巾 四八

公式

袖丈×4+身丈×4-衿下り=總用布
(總丈-袖丈×4+衿下り)÷4=身丈
身丈-衿下り=衿丈

二、身頃 一つ身單衣と同様に、衿附は前身頃の縫込が極く浅い為め袋縫より裁目をまごい縫とし身頃を手前に見て衿を附けます。
衿下りの倒斜に成りません様注意する事が必要であります。他は凡べて本裁と同様であります。

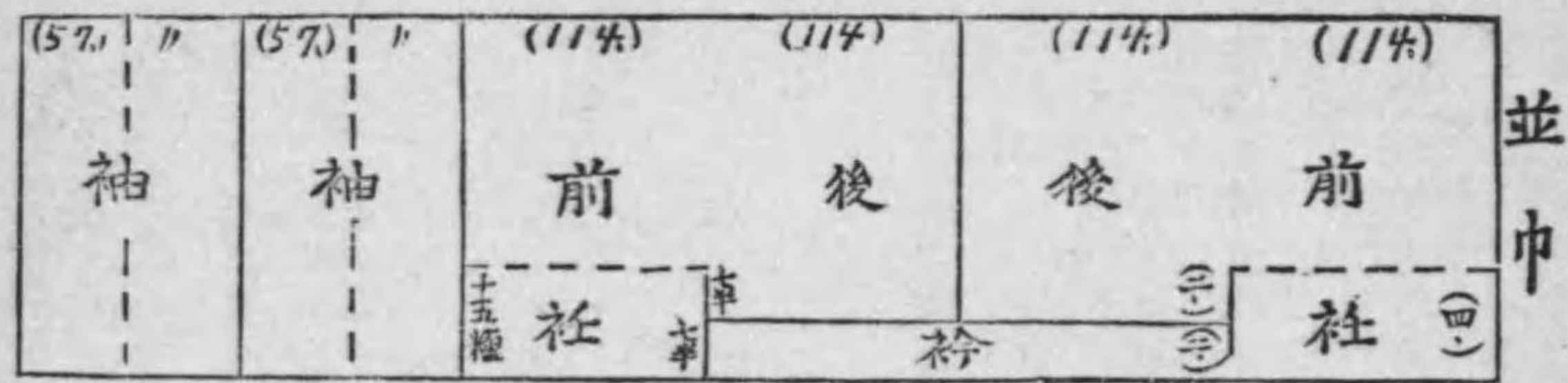
四つ身單衣

一、袖と身丈の四倍を取りて後ち衿肩一五糎(四寸)を裁切りましたら裾の輪の方にて衿を八糎(二寸)かき取り後身となります。

前身衿肩明の眞直から前巾耳の方が衿巾であります。

- | | | | |
|------|------------|----|-----------|
| 一、袖丈 | 五七糎(一尺五六寸) | 袖附 | 一一四糎(三尺)位 |
| 身巾 | 衿巾一ぱい | 袖取 | 一九糎(五寸)内外 |
| 身八つ口 | 九・五糎(二寸五分) | 袖巾 | 一八糎(四寸八分) |
| 襟下 | 四五糎(一尺二寸) | 相袂 | 三〇糎(八寸) |
| 衿巾 | 四六糎(一寸二分) | | 八糎(二分)詰 |
| 衿下り | 一五糎(四寸) | | |

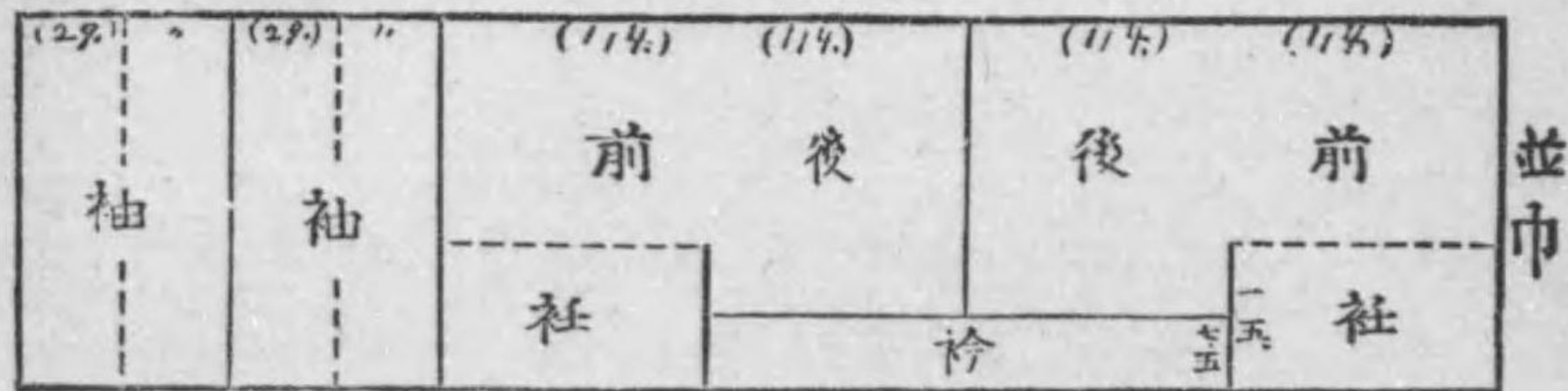
四つ身單衣裁方



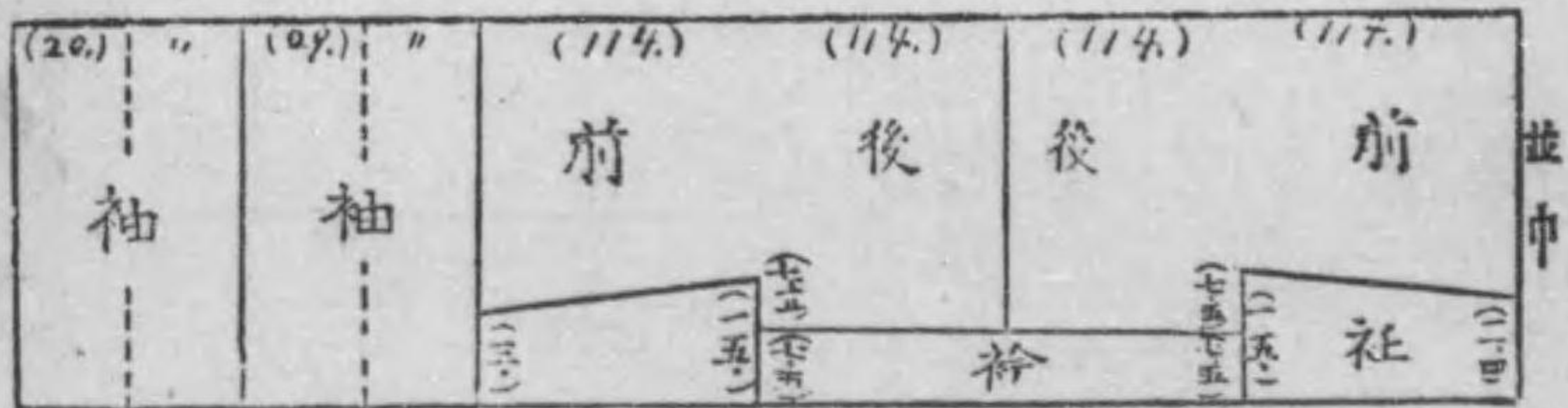
積り方公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 = \text{總用布}$$

$$(\text{總用布} - \text{袖丈} \times 4) = \text{身丈}$$



積り方公式 同上



単衣元祿袖部分縫

用布並巾にて長さ八十糎(二尺)

標附寸法

- 袖口 一八糎(四寸八分)
- 袖附 一九糎(五寸)
- 袖巾 三〇糎(八寸)
- 袖口縫代 一・二糎(三分)

一、標附け方

用布の丈を二つに折り、輪の方を左にして置き、袖口、袖丈、袖附の標をつけ、袖口の標から袖下へ六糎(一寸六分)の所に標を附け、この標と袖丈の標の間の寸法を計り、其寸法に二糎(五分)加へたる寸法を手前へ計つて袖下に標をつけ、此のシルシと袖口下の六糎(一寸六分)のシルシとに物指を當て、中央にて縫込を斜めに計り、その二分の一の所にシルシをつけ、これを標準にして、袖の丸味を作ります。



二、縫ひ方

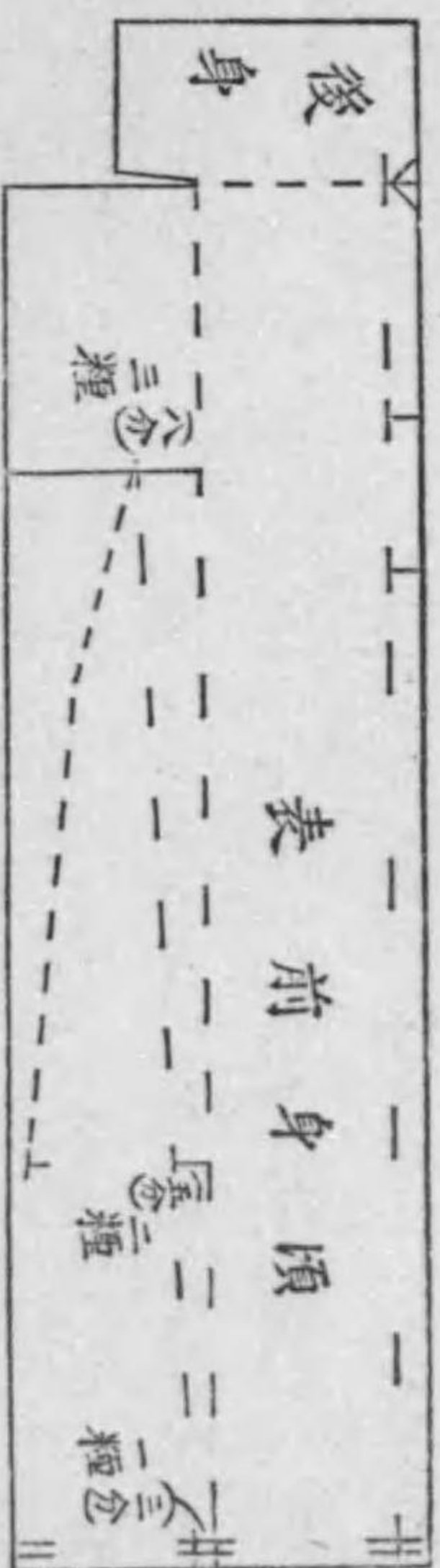
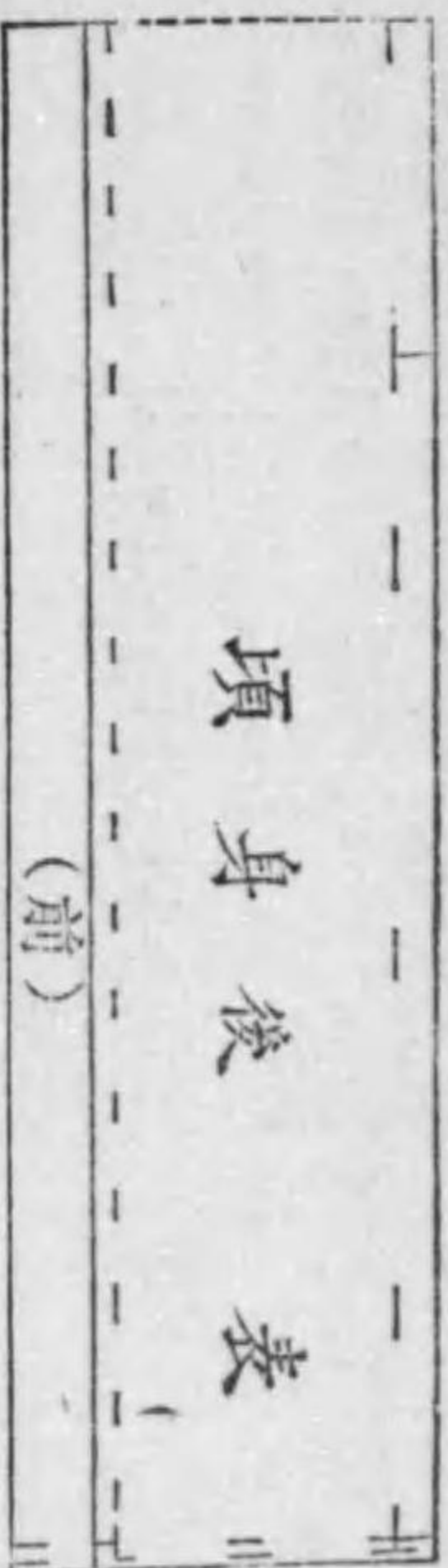
袖下の端より縫始めて、丸味の十字標の所では一針返して、丸味は小針に縫ひ、糸を心持ち鉤らせます。袖口の所で一針返して三糎(八分)ほど縫ひ戻して留めます。そして縫目に二糎(五厘)の被せをかけて折をつけ、丸味の標の間を縫目より各々四糎(一分)の間隔を置いて二通り縫ひ、この縫糸を引き締めて縫込を平にして、尙弛みのある部分を圖の如く襞に折り寄せ、その襞を崩れぬやうに襞山を返し針に縫ひ留めます。次に袖口を三つ折にして縮けます。縮け始めもくけ終りも袖口の標より一針多くくけて置けばよろしいのであります。

縫込の襞取方



四つ身単衣標附け方

- 一、袖 本裁單衣と同様であります。
- 二、身頃 置方其の他本裁單衣と同様で、後巾の標を終りましたらば、左に取り除けます。



前身は衿肩明一ばいに真直に前巾標をします。衿下り堅縫等を寸法通り標しましたら、裾で前巾の標より一・二種(三分)、堅縫の所で二種(五分)衿下りの所で三種(八分)、何れも衿地の方に標し、衿附は斜に物指を渡して標を附けます。

次に上の衿附標より四耗(一分)手前即ち剣先と裾下とに糸を引張り、剣先より八種(二寸)ほど下に

て衿附の丸味を八耗(二分)ほど附けて順次衿へ丸味のある。衿附標をいたします。

三、衿置き方、標附等本裁單衣に同様であります。但裏衿を附けます。

縫方順序

- 一、袖 本裁單衣に同様であります。
- 二、身頃背は袋縫にし、脇縫は一ばいにし、普通縫方であります。
- 三、衿 身頃を手前に見て、身頃標の通り衿を斜の所で摘み縫に致します。他は本裁單衣と同様に仕立てます。但裏衿は表衿巾一ばいに縫込みます。

第五章

薄地物と申しますと先づ、紗絹スキヤ上布などで厚地物はセルネル等で御座います。其仕立方の注意を述べます。

薄物の方は仕立前の地直しは他の絹布と變りは御座いません。

縫方

- 一、袖 袖口は出来るだけ細く燃り拵けにし、袖下は後袖を一分長く標付けて置きまして、其一分を折り込み前袖に拵け附けます。或は普通の袋縫ひにします。
- 二、身頃 肩當敷當を用ひず、脊縫は共布又は同じ色の布を用ひて縫込をくるみ一方に拵けて置きます。

裾の角は額縁にいたしまして、肩明の所に共の斜布を二重に折りまして肩廻しの所に當て、衿附をいたします。(此斜布が二分位出るやうにして)

他は普通の絹布の仕立と變りはありませんが、極細地物の時は拵け糸は羽二重糸を用ひる方が宜しう御座います。

此他紗の如き至極薄いもので、コート等を仕立ます時最も凝つた縫方ではすべての縫込になる部分を一々三分位を残して、あとを切り捨て此縫込を細く燃り拵けにしてすがして見れば何處も縫込が一直線状をなす様に致す事もあります、仕立直しをする場合には適しません。

厚地物

セル、ネル等を縫ひます場合は、先づ地直しを前日にいたすのが、最も理想的です。方法は布地に一度霧を吹きまして巻棒に巻き、一夜其まゝにして置きます。そして仕立ます時、軽くアイロンを掛けまして裁方に取りかゝります。

之は毛織物は濕氣を含みますと、随分縮む性質を有つて居りますから、其まゝ仕立ますと後で寸法に違ひを來す恐れが御座いますからです。

縫方

袖 袖口は千鳥縫又はまつり拵にします。其他細かく縫へば宜しいのです。袖下は薄地物の時の様に前袖に後袖の縫込を拵け込んでも宜しく、又袋縫をいたしても差支ありません。

身頃 すべて線縫の部分、即ち脊縫脇縫衿附等は全部返縫にする事もありますが、一般には極細かく縫ひまして、縫ひ始めと縫ひ終りの所二寸程を返縫にいたして置きます。背縫と衿と衿付の他は何れも開きまして、縫込はまつり拵にいたします。又堅つまど裾は千鳥掛にしてもよろしいのですが糸の切れる事が御座いますから、却つてまつり拵の方が丈夫で御座います。

肩當敷當は普通絹布と同様です。

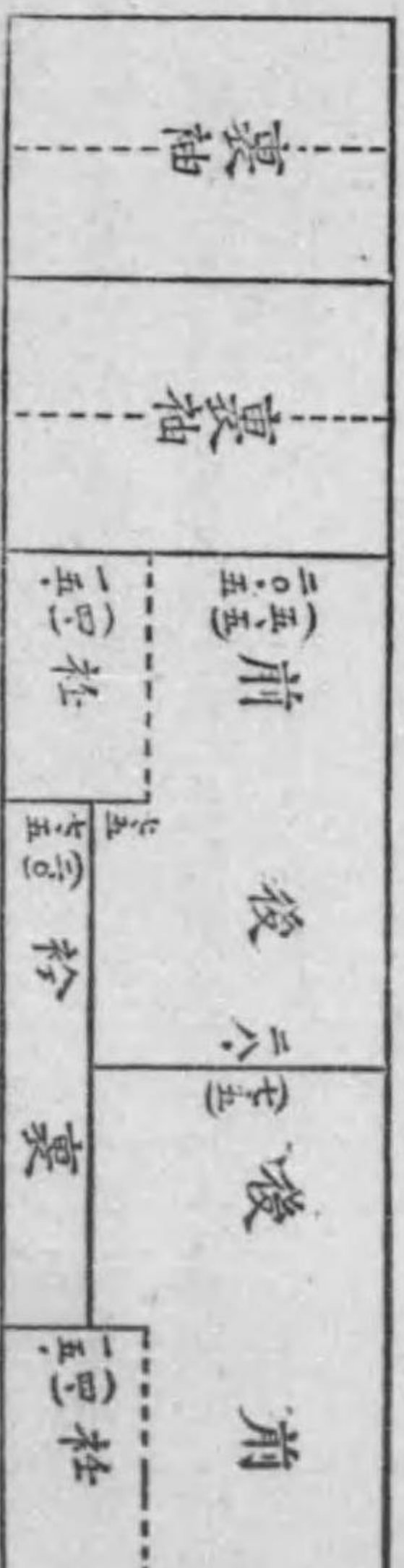
第六章

四ツ身衿

- 一、裁方 表は四ツ身単衣と同様であります。裏の積り方は通し裏の場合は表身丈に出衿の二倍を加へて裁ちます。胸裏に別布を用ひます時は、衿の二倍の外に胸接代を四厘(一寸)以上長く加へます。又裾廻は模様布を用ふる時もあります。(女者にかざり)
- 一、普通仕寸法は単衣と同じであります。

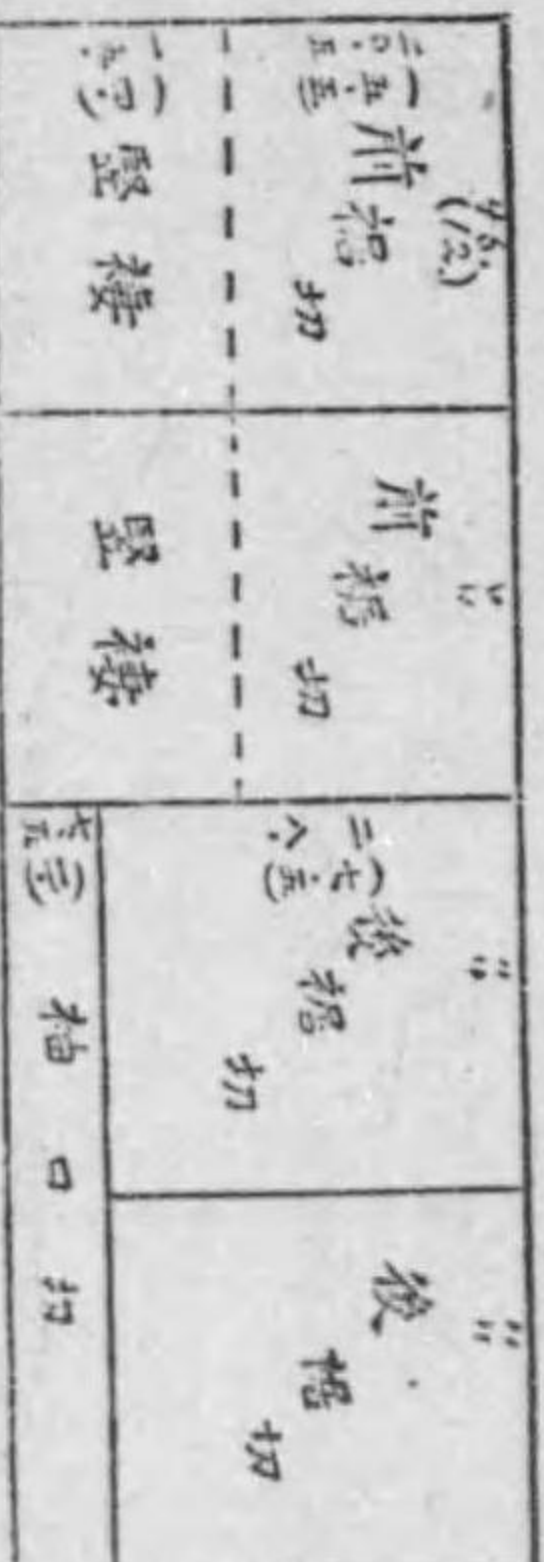
四ツ身衿

胸裏裁方



公式
表身丈 - 裾廻丈 + 衿 × 2 + 胸接代 = 胸裏丈

裾廻



公式
表身丈 - (胸裏丈 + 衿 × 2 + 胸接代) = 裾裏丈
裾裏丈 × 4 = 裾總用布

四ツ身胸裏接標附け方

- 一、袖 表は單と同様であります。裏は袖口下の縫代を口衿の二倍多く標します。袖巾標は、口明の部分は表と同寸法で、振八つの部分は表より二耗(五厘)詰めて標します。
- 二、身頃表は單衣と同じであります。裏は表丈に衿の二倍を加へて取り、標の附け方は表と同じであります。衿裾襟形の標は堅縫縫代標より衿巾の方に、表は出フキに堅縫の縫代を加へて標をつけます。裏は裾フキ裾合縫代より衿下の

方へ向け、出フキの二倍を標し、堅褌、裾合せ線代と十字の標を作ります。此處より褌形標を圖



の如く、出フキだけの寸法に標して、右三ヶ所の標の間で褌形を作ります。外單衣と同様の標附を致します。

縫方順序

- 一、袖 裏袖に袖口切々廻附に付け、口先で袖口切の方を釣り氣味に裏袖布とを躰絲で、縫躰を掛けて置きます。
- 二、袖 裏袖に袖口明標より四耗(一分)を残して、袖口を縫ひます。次に前裏袖の口明標のきわに針を出し、後裏後表を通し、表の前袖の際一二本を豎に抄つて、元の裏袖針際に返して袖口留をいたします。

袖口下より袖下まで表裏四枚揃へて待針を打ち、振八つの方は巾の1/3 ほどは表裏別々に、他は四つ縫に致します。

二、身頃 表裏 單衣の如く縫ひ裾合せを致します。表に折返して飾躰を掛じ、裾フキをこのへ、假躰を掛け、中綴を仕ます。身八つ口は脇縫留際で、裏前身より針を出し、後裏後表を通し、表前身を豎に抄ひ、元の所に返して絲を結び、そして後前の身八つ口を縫ひます。衿は堅褌丈の八耗(二寸)上まで綴ぢればよろしく、次に堅褌を縫ひます。

三、袖附 先づ留をいたします。留方は振八つ折山にて表袖の内側より針を出し、表身頃、裏袖内側に裏身を豎に抄ひ、次に此の順序に元の針目の際に返して絲を結び、兩端を揃つて置きます。

其他縫方は單衣と同様にて、裏袖附は身頃の方に折り返します。

四、衿附 衿附標の二耗(一分)上にて表裏合せて縫躰を荒き針目に掛けて置き、衿を三つ縫ひに附けます。

衿附縮方等は單衣と同様であります。

但共衿は裏衿縫合せの際まで巾一ぱい廻して縮け附けます。

注意 筒袖は身八つ口なく、袖丈一ぱいを袖附にする場合と袖附を定めて女物振八つの様極く短い八つを作る仕方とあります。

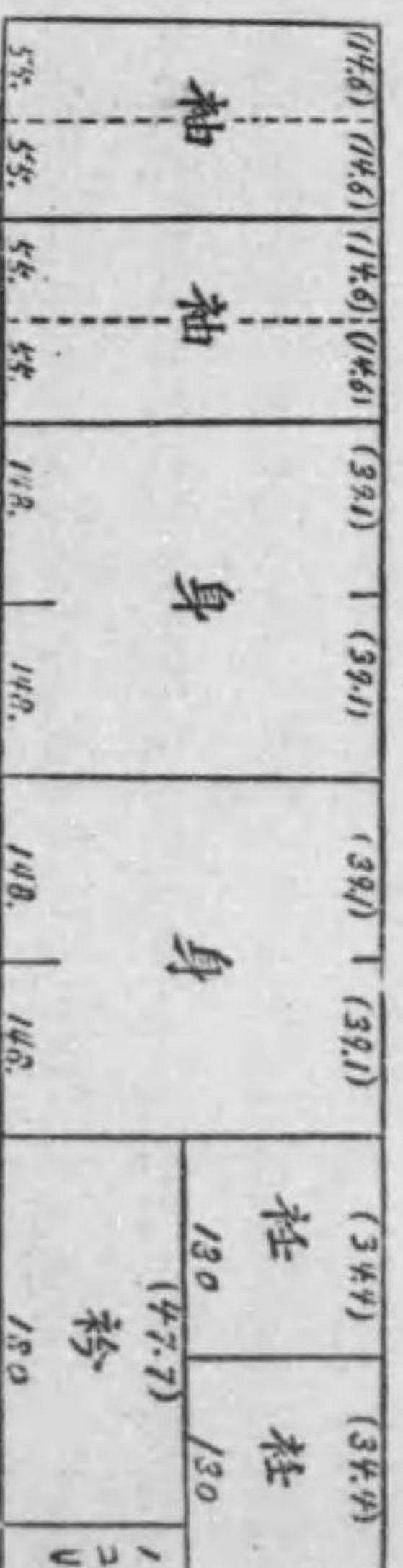
本裁男袴

一、普通仕上寸法、表の裁方積り方等は單衣に同じであります。
裏の積り方は表用布に出フキの九倍と胴接代の五倍を加へて、裏用布の總丈を知ります。然し裏袴より残り切が出ます。

裏の用布が短い場合に衽を棒衽に裁ちますには、袴裏を山接ぎに裁つこともあります。

男物裏裁方

第一圖

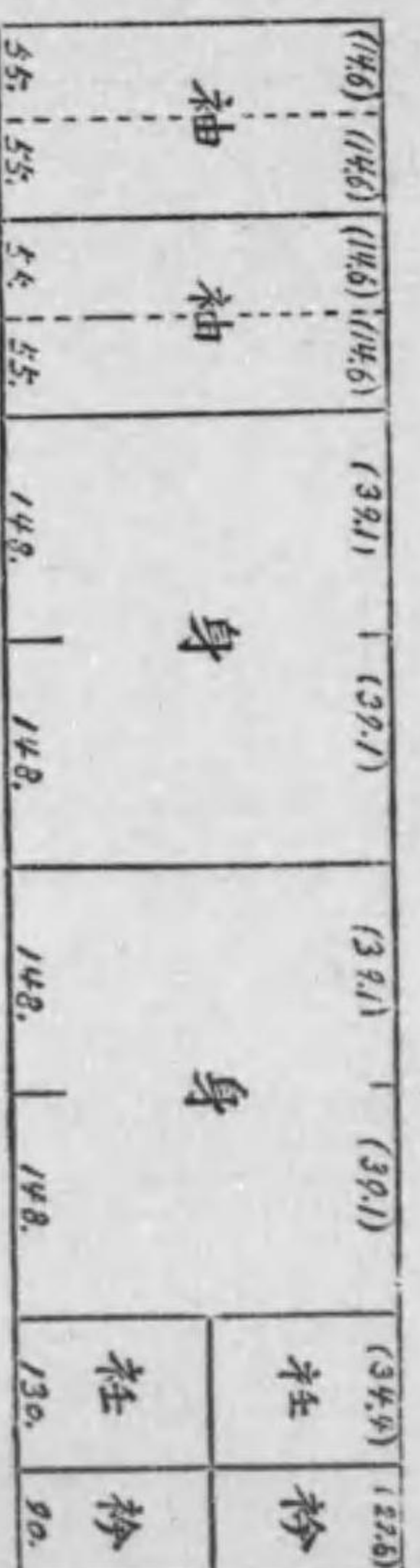


公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 6 - \text{衽下} \times 2 = \text{總尺}$$

(總丈 - 袖丈 $\times 4$ + 衽下 $\times 2$) $\div 6$ = 身丈
(身丈 - 衽下) $\times 2$ = 衽衽地

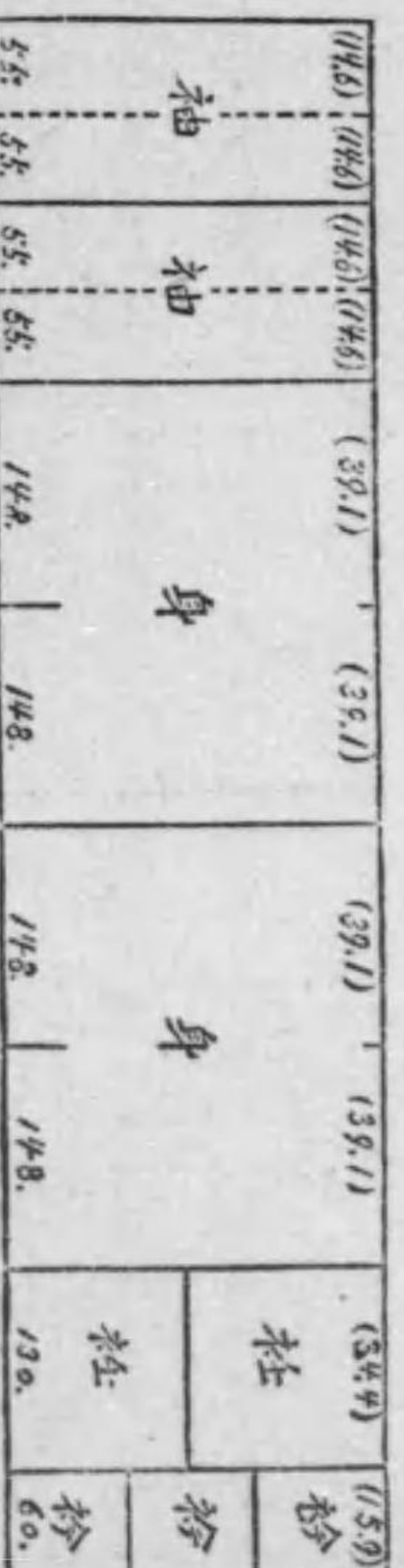
第二圖



公式

$$\text{袖丈} \times 4 + \text{身丈} \times 4 + \text{衽丈} + \text{衽丈} = \text{總丈}$$

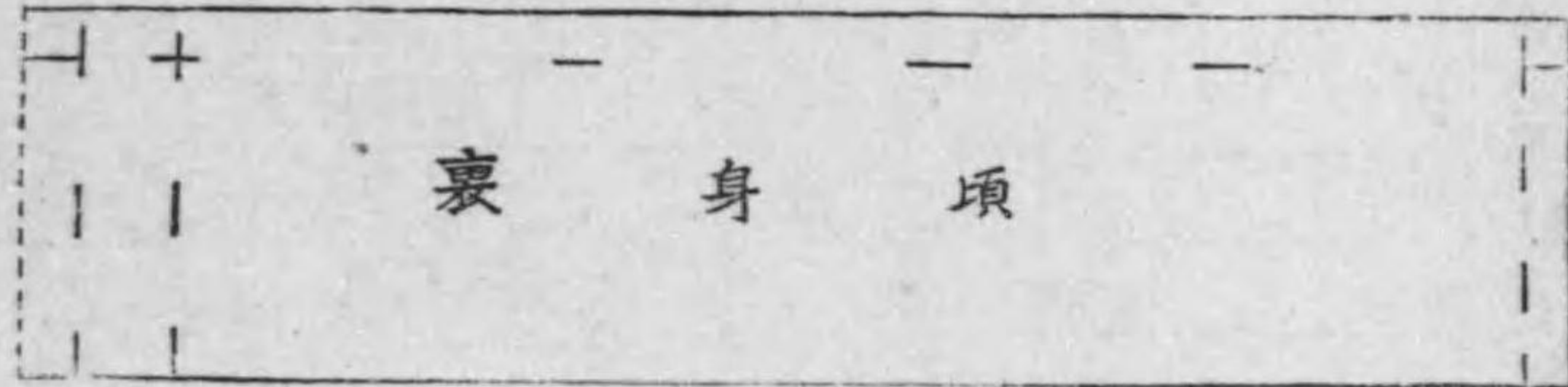
第三圖



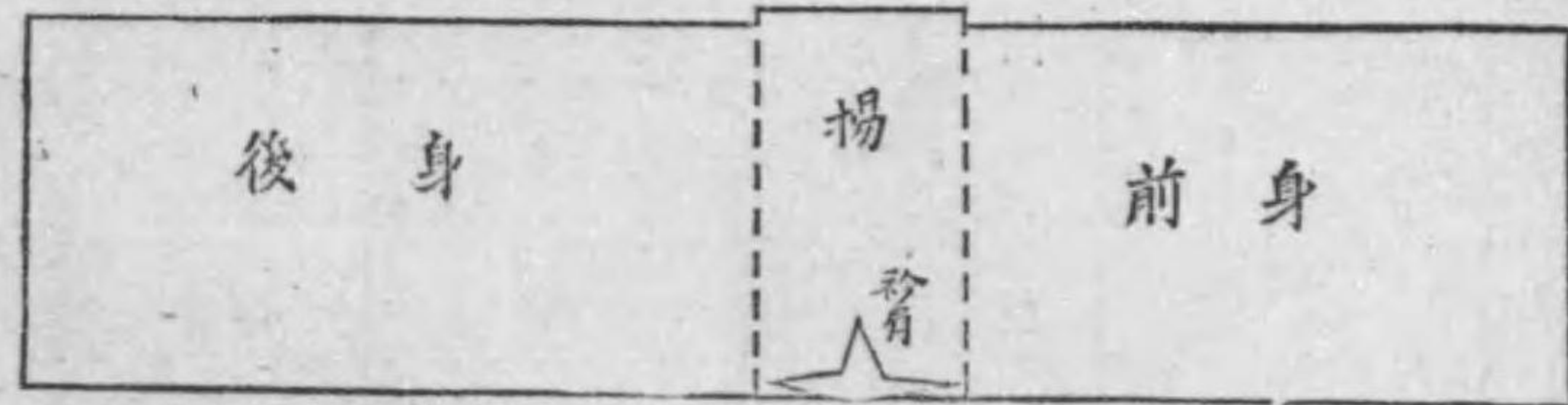
公式 同上

方 附 標

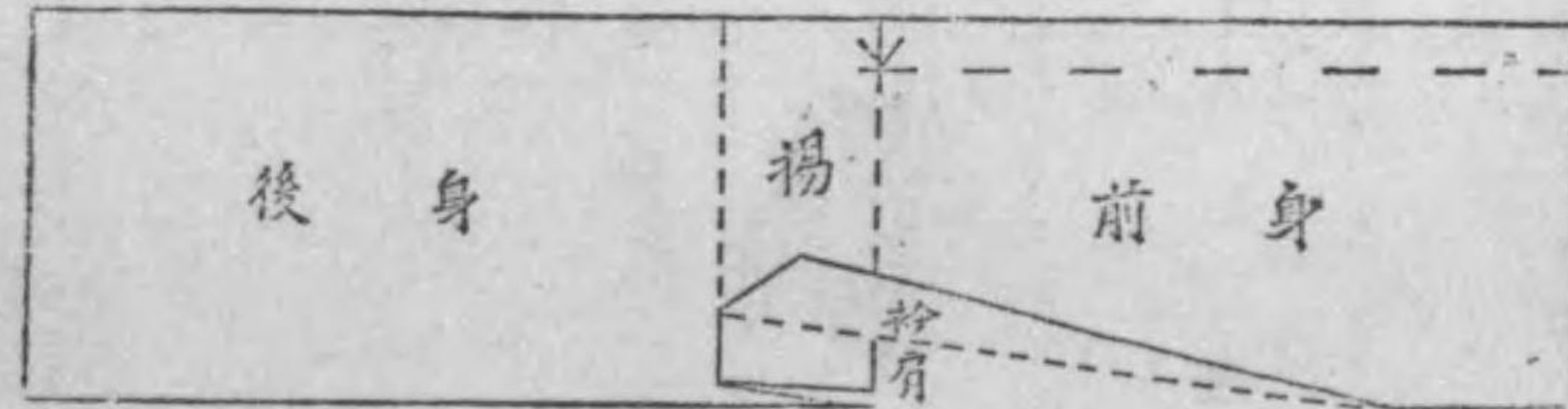
第 一 圖



第 二 圖



第 三 圖



一、袖 單衣と同様であります。裏袖は、袖口下の縫代を表袖の縫代よりも、袷の二倍だけ深く標します。

そして袖口切をのせて、その縫標を附けます。

二、身頃表は單衣と同様に、裏の丈の長い分は標附圖の如く肩山にて揚をいたします。他は表と同様であります。

縫 方 順 序

一、袖 四つ身袷と同様であります。

先づ人形を、表は標通りを縫ひ、裏は標よりも二耗(五厘)深く縫込みます。後、表は内袖の方に折りを附け、裏は縫目を割つてしまいます。そして袖口の留をいたしまして、表裏の人形の角を揃へて待針を打ち、袖口下より人形の所まで四ツ縫にいたします。

二、身頃 裏揚を標通り肩山にて袷肩明の所まで極小針に縫ひ、縫目を両方に割ります。

揚は或は後身頃の方に折返して前身袷附の縫代を袷肩の所より、圖の如く、斜に折り曲げることもあります。

絹布は表裏全部單衣の如く縫ひ、裾を合せます。木綿は袷附を四つ縫にする事もあります。但袷は

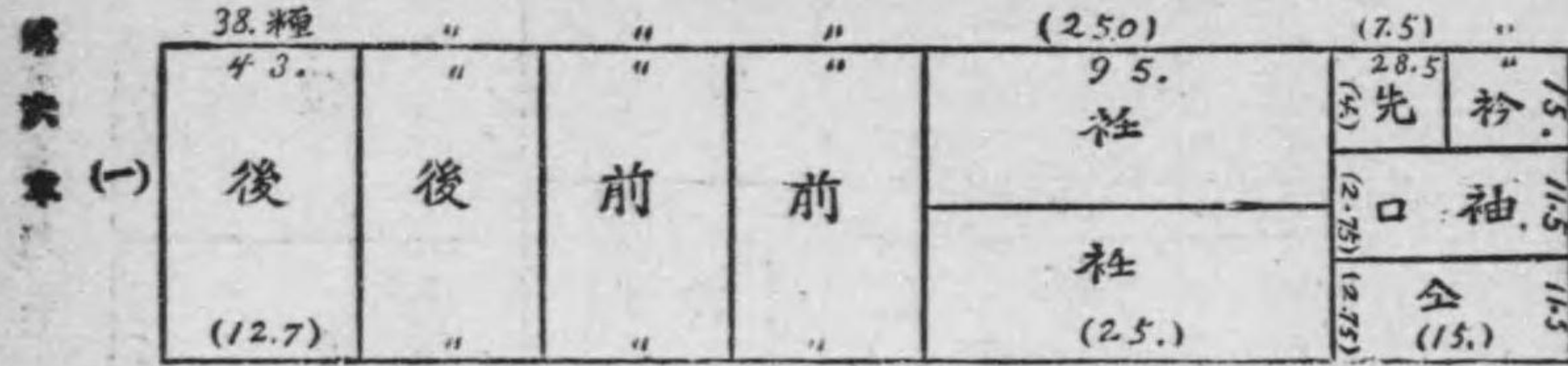
- 三、衿 裏堅縫を中表に合せて裾を右にしておき、衿先の切を左に載せて接ぎの標を附け、其の上に出疵の二倍をすらしめて、表衿を載せ、表も裏も裾を八耗(二分)の縫代に、衿下の縫代は一・二釵(三分)に其他丈、巾、衿附等の標は單衣の衿と同様であります。
- 四、衿 表衿丈に揃へて、衿先切の上に裏衿を載せて、接ぎの標をつけ、表衿をその上に重ねて單衣の時と同様に標をつけます。

縫方

- 一、袖 四つ身の袖と同様であります。
- 二、身頃 四つ身衿と同様であります。裾裾縫は、衿の部分は縫目の折山の際に表裏共一針出し、前身の部分は巾を四等分して脇縫の折山の際まで四針程裏に出し、表には針目の数を裏の二倍出します。後身の裏は五針表はその二倍出します。凡そ裾縫の大きさは表から見て、針目間は二・五釵(七倍)位といたします。

女衿胴裏及裾廻裁方圖

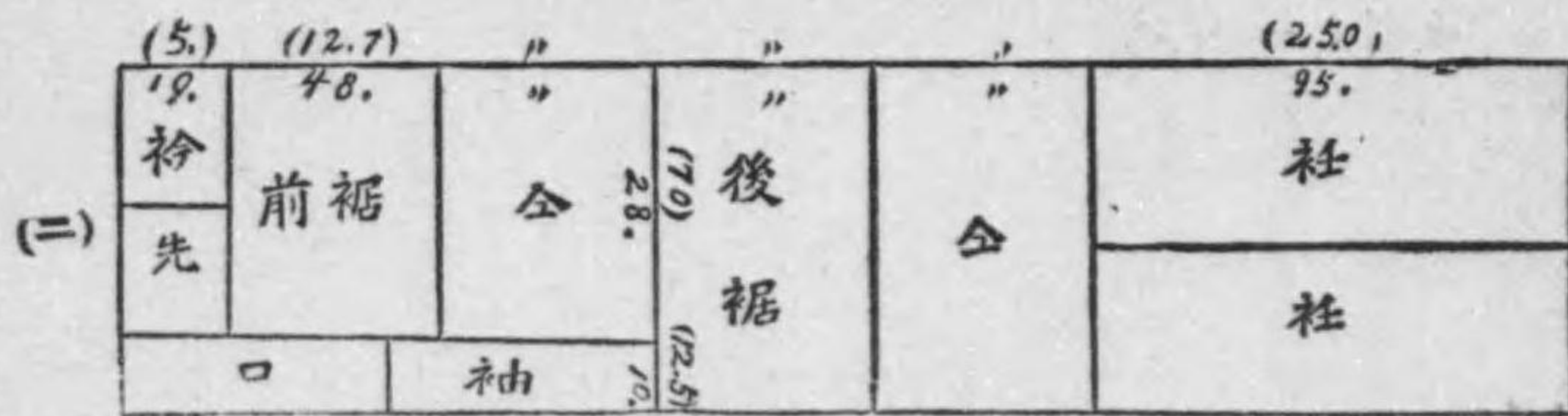
並巾用布3×米44釵にて裾廻し裁方



公式

後裾丈×4+衿丈式+袖口切=用布

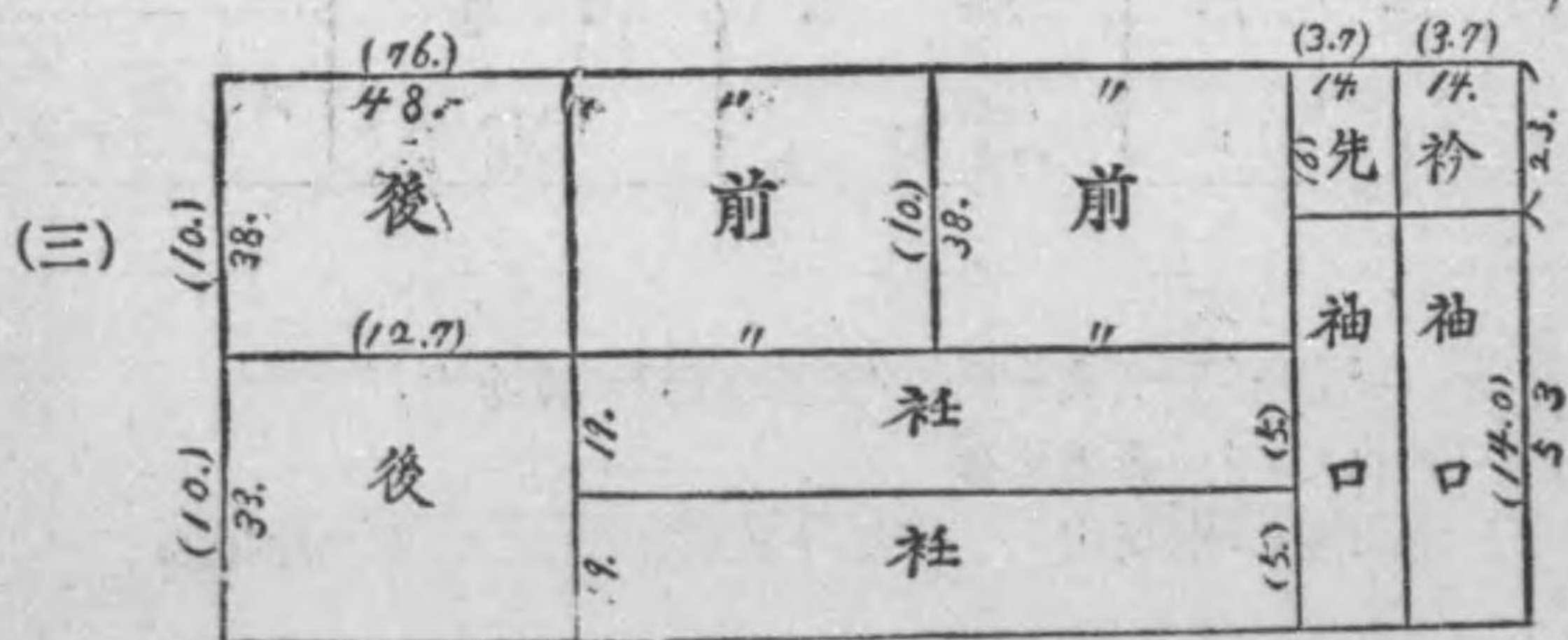
並巾用布3米44釵にて裾廻し裁方



公式

後裾丈×4+衿丈+衿先丈=用布

大中用布3米06釵にて裾廻し裁方

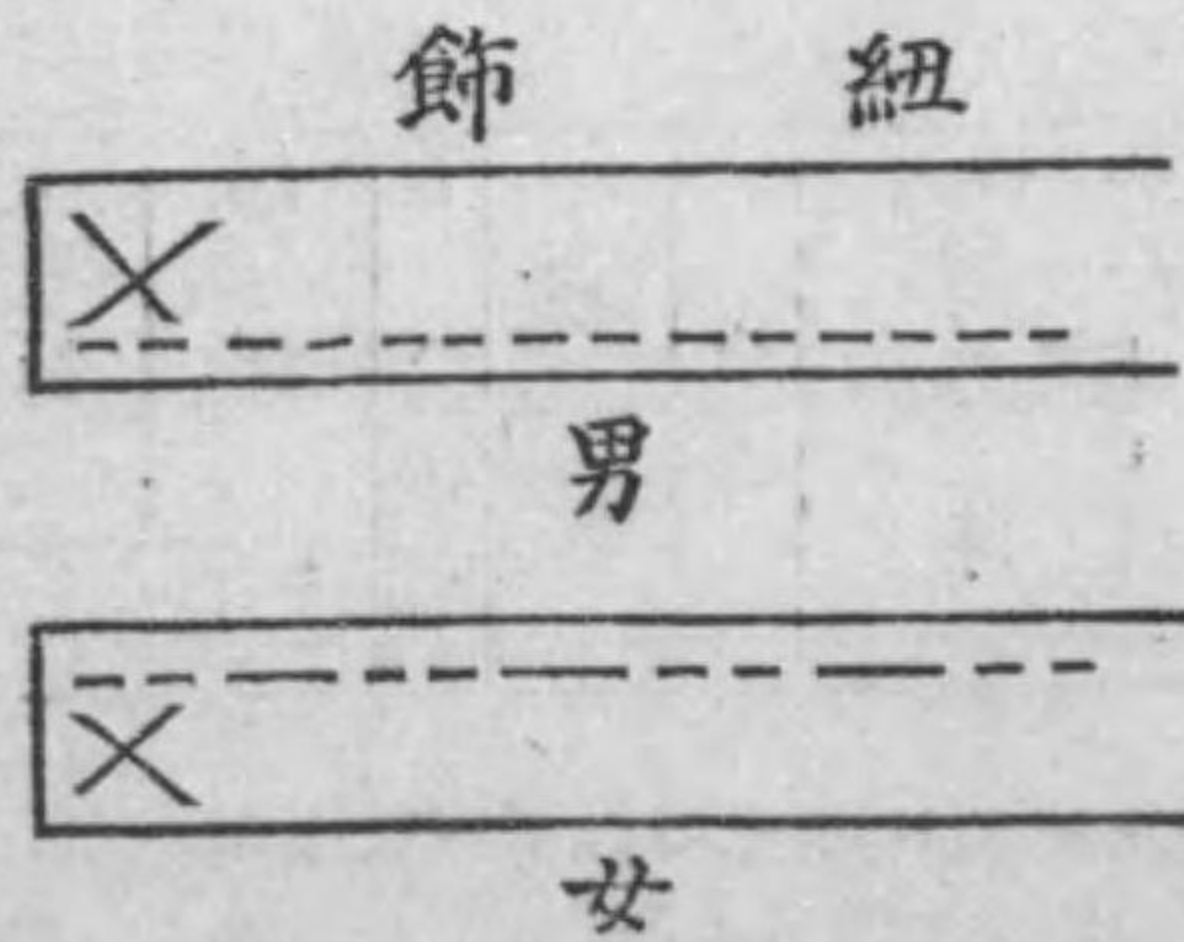
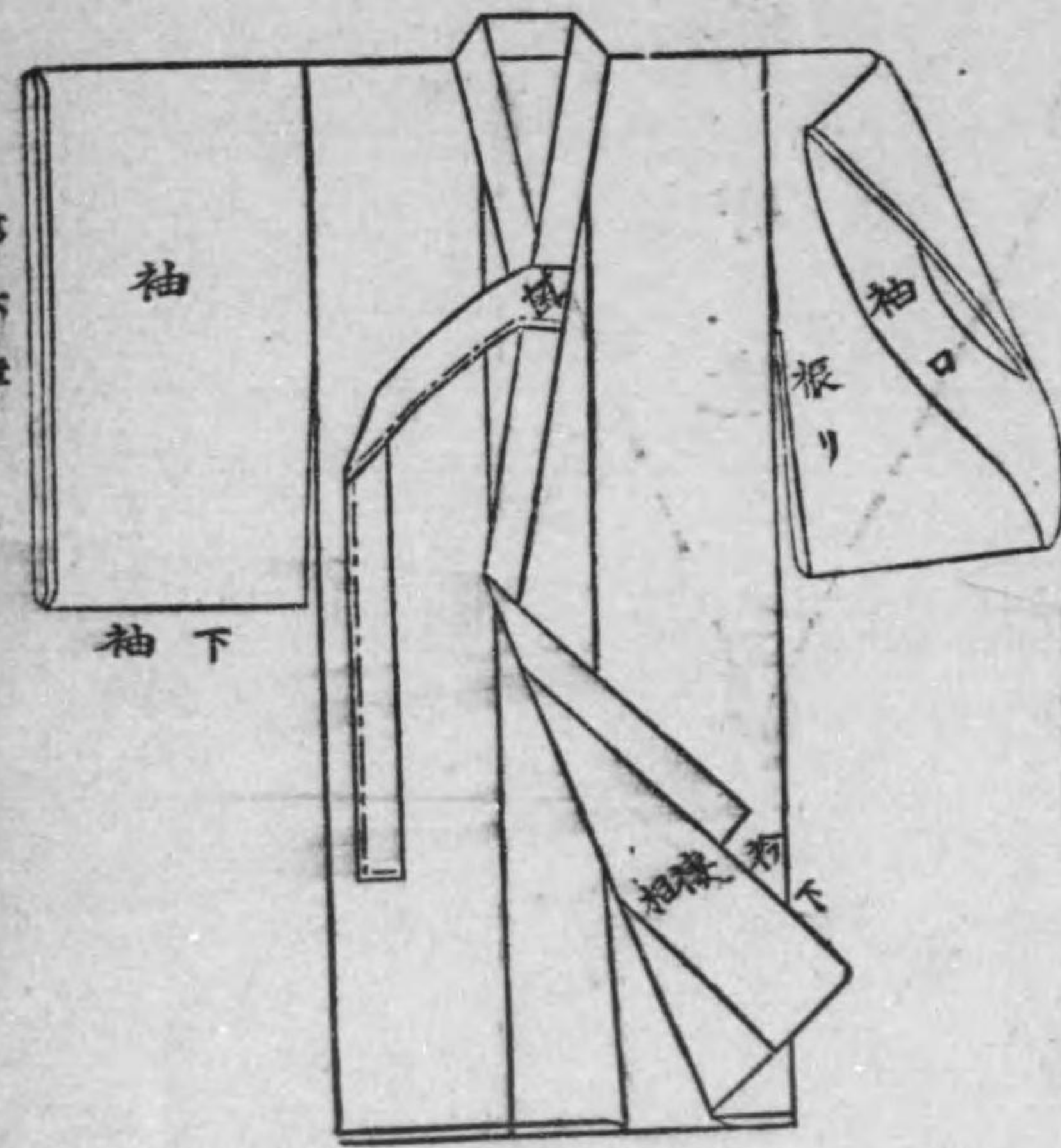


公式

後裾丈×3+衿先×2=用布

裁方圖

六九



表の裁方は一つ身單衣と同様にて、裏裁方は表の身丈より出衤の二倍を長く裁ちます。初着祝着川にて裾裏、袖口切、附紐等は共布にて裏地は胴裏袖裏のみ用ひます。衤先裏は袖裏地より巾を裁落して用ひます。

一つ身綿入(祝ひ着)

巾(150) 総長1米71釐にて裁廻し裁方

	(150)			
	57	"	"	
	前	前	後	(10)
(10)	口 袖	口 袖		38
19	衤 (25.0)	(5) 衤先	後	(10)
19	衤 25	(5) 衤		38

公式
後裾丈+3用布

本裁女物裏裁方(胴裏)

	(16)	"	"	"			(29)
	60	"	"	"	入		114.8
(10)	袖	袖	胴布	胴布		衤	
			(30) 114	32	"	衤 先	残

公式
表身丈-(胴裏丈+衤×2+胴接代)=裾裏丈
裾裏丈×4=裾總用布
表用布-(裾裏丈×4+衤×8+胴接代×8)=胴裏總用布

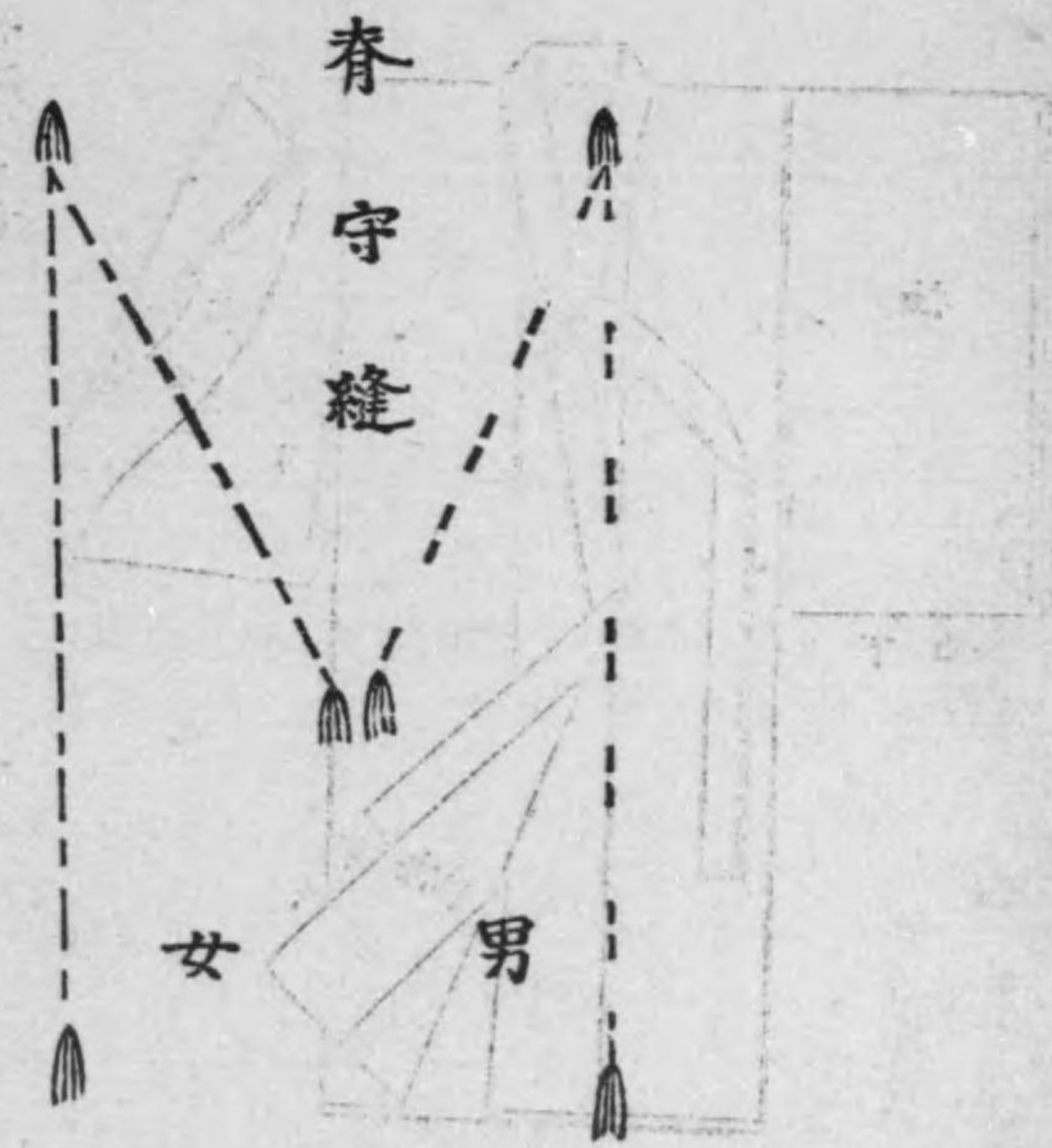


公式

表身丈+衽代+裾縫代+胴接代-八掛丈=胴裏丈
 胴裏丈-衽下リ=衽上裏丈

標 附 け 方

- 一、表袖 置き方重ね方は単衣と同様に、丈、山、附を標します。袖口布の中を凡そ布巾の四分の一に標し、それより縫代の一糎五耗(四分)を標します。尙縫代標より表袖巾を二十一糎(五寸六分)に附けます。
- 二、裏袖 重ね方置き方は表と同じ裏巾は表巾より袖口フキの二倍を長く標します。袖口切巾を計つて袖口附の標をいれます。
- 三、身頃 布を半巾に折り、重ね方置き方等は単衣と同様に、丈、巾、肩山、袖附、身八つ口等を標し、裾裏八掛けの摘み縫ひの標を表丈標より一糎五耗(四分)と標し次に出入キの二倍を箕糸にて標して置きます。八掛丈を計つて胴接標を附け、巾標等は表と同様であります。
- 四、衽 二枚を中表にして重ね、裏衽に衽先き切れを附け、



裁 方



{袖×4+(身丈+八掛)×3+紐丈×2}-奥衽下=表用布
 {表用布-(袖×4+紐丈衽×2)+衽下}÷3=身丈+八掛
 身丈+胴接代×3+衽×6-八掛丈×3=裏用布

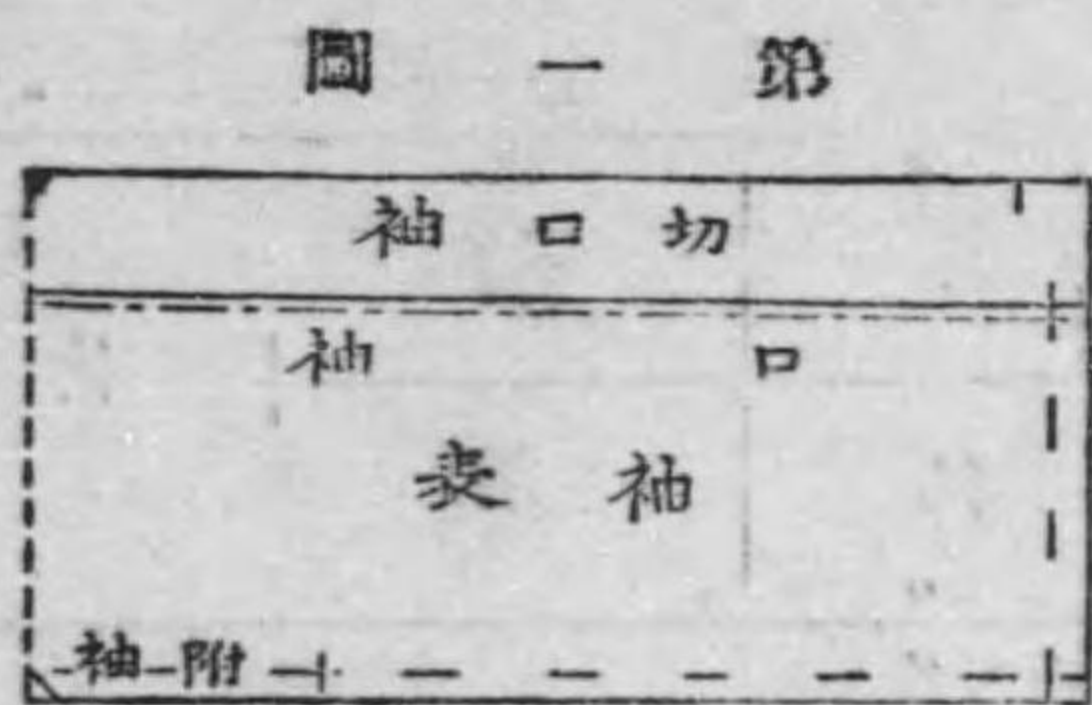
これも中表に二枚重ねて出フキの二倍を長くして其の上に表衿を重ね、堅縫縫代の 裄(二分五厘)を標し、裾、襟下、巾、丈等を標します。襟形は表裾の標より出フキの二倍を標し、幅の方は堅縫の標附より出フキに一種(三分)加へた寸法を標し次に。表を開きます。裏裾は堅縫の標附より出フキの二倍に一種を加へた寸法を幅の方に標し、表裾の隅の標より斜めに出フキの寸法を標し、それを中心に襟形を作ります。

備考 出フキが一種二耗(三分)以上は表、衿にて襟先を出フキの十分の三を繰り下げて襟形の補ひを

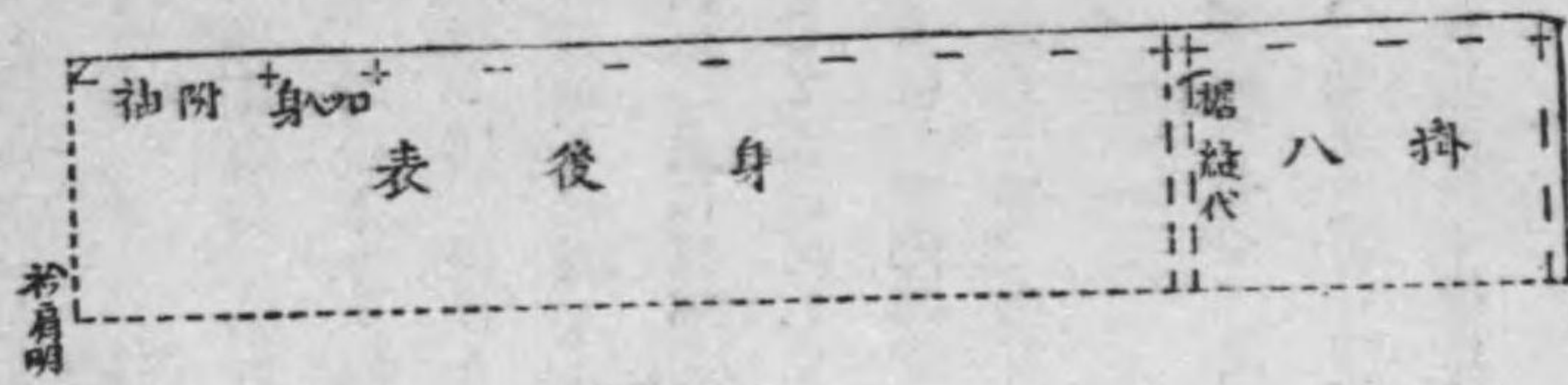
附けます。一種二耗(三分)以下表は真直にて裏のみにて襟形を作ります。

五、衿 衿の標附は單衣と同様であります。

標附方圖

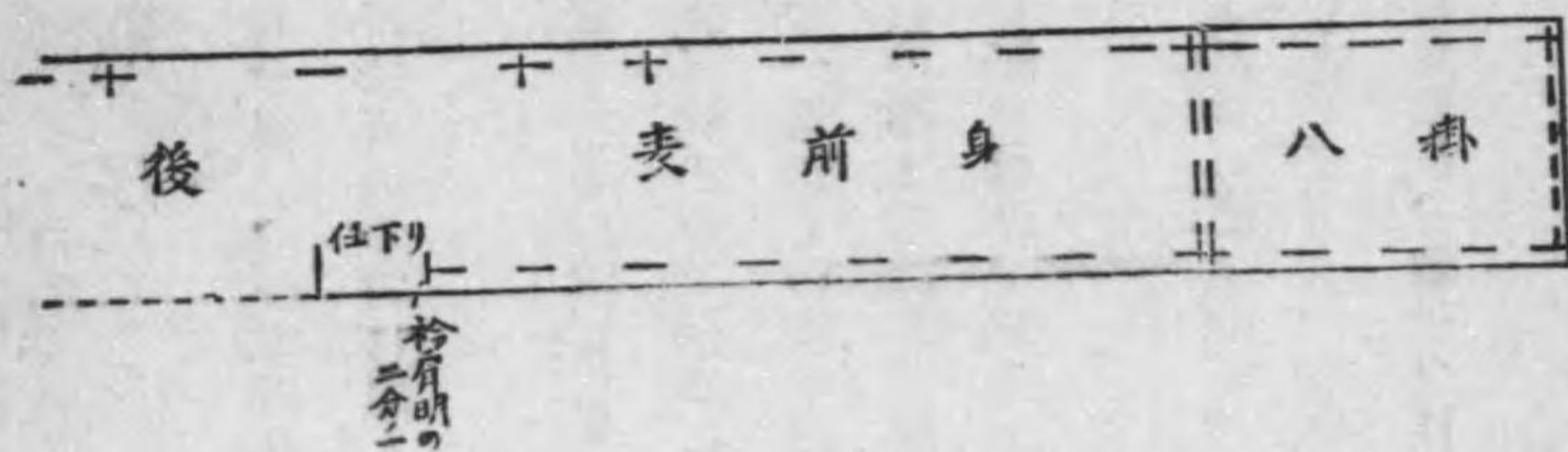


第三圖



第六章

第四圖

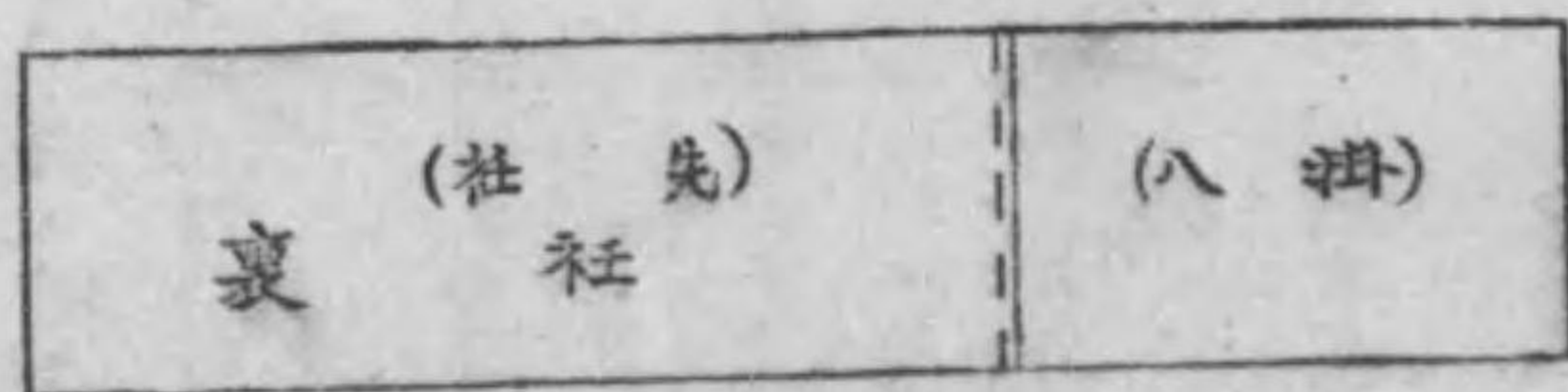


第五圖



七五

第六圖



縫方順序

- 一、袖 表袖と袖口切の標通りを豎に、一方の袖下より他方の袖下まで、表袖の方を見て稍々荒き針目に輪のまゝを摘み縫ひ、折は表袖の方に返し、裏袖布を袖口附標の通りに縫ひ、折は袖口切の方に折り戻しを掛けます。
次に袖下を振り八つより袖振八つ迄開いたまゝ縫ひ、左右の袖に折を付け、袖口の縫目より四耗(二分)上に口綿五種(一寸三分)位の中を麩糸にて大針に綴ちつけます。
そして表に返してフキを定め一目落しの麩を掛け、袖下は裏表合せて綴ち、振八つを縫ひます。
- 二、身頃 背脇共裾八掛の胴接の標まで通して縫ひ、裾合標通りを輪のまゝ摘み縫ひにして表の方に折返します。次ぎに胴裏の背脇を縫ひ、胴接をし、折は胴裏の方に折返して、隠麩を入れて置きます。
- 三、衽裾を合せ、襟を縫ひ、表の方に折り返し、隠麩をして、身頃の裾合せ目に好く合せ、待針を打ち、表裏と續いて衽附を致します。
裾合に飾麩を掛け、身八つ口を縫ひ、袖をつけ、身頃全體に綿を入れ、裾フキを定めの出フキに整

へて假綴を致します。

次に背脇衽と中の綴を仕て、堅襟先等を縫ひ、身八つ口留め、裏前身頃より針を出し裏の後身表の後身、次に表の前身頃を小さく豎に抄ひ、裏前身の元の所に戻して糸を結び、留め其の一本の糸にて身八つ口を前後共に縫ひ、兩身八つ口を縫ひ、袖を附けます。

四、袖附 留め方は振り、八つ留の際にて、表袖折山から針を出し、表身頃、裏袖の内側から裏身頃へ出し、裏身頃を豎に針目を袖附の方に向けて抄ひ、それから、元の順序に裏袖、表身、表袖の元の針目の際に返して糸を結び、此の糸を燃り合せて置きます。

表袖、裏袖を附け、表袖は袖の方に、裏袖は、身頃の方に折ります。

五、衿附 表裏を合せ、衿附標の上を麩糸にて荒く縫ひます。其の他單衣と同様であります。

紐 附

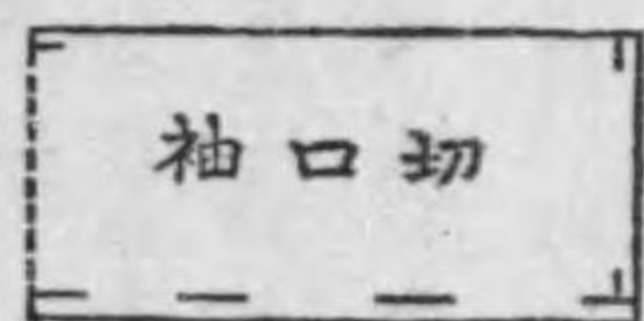
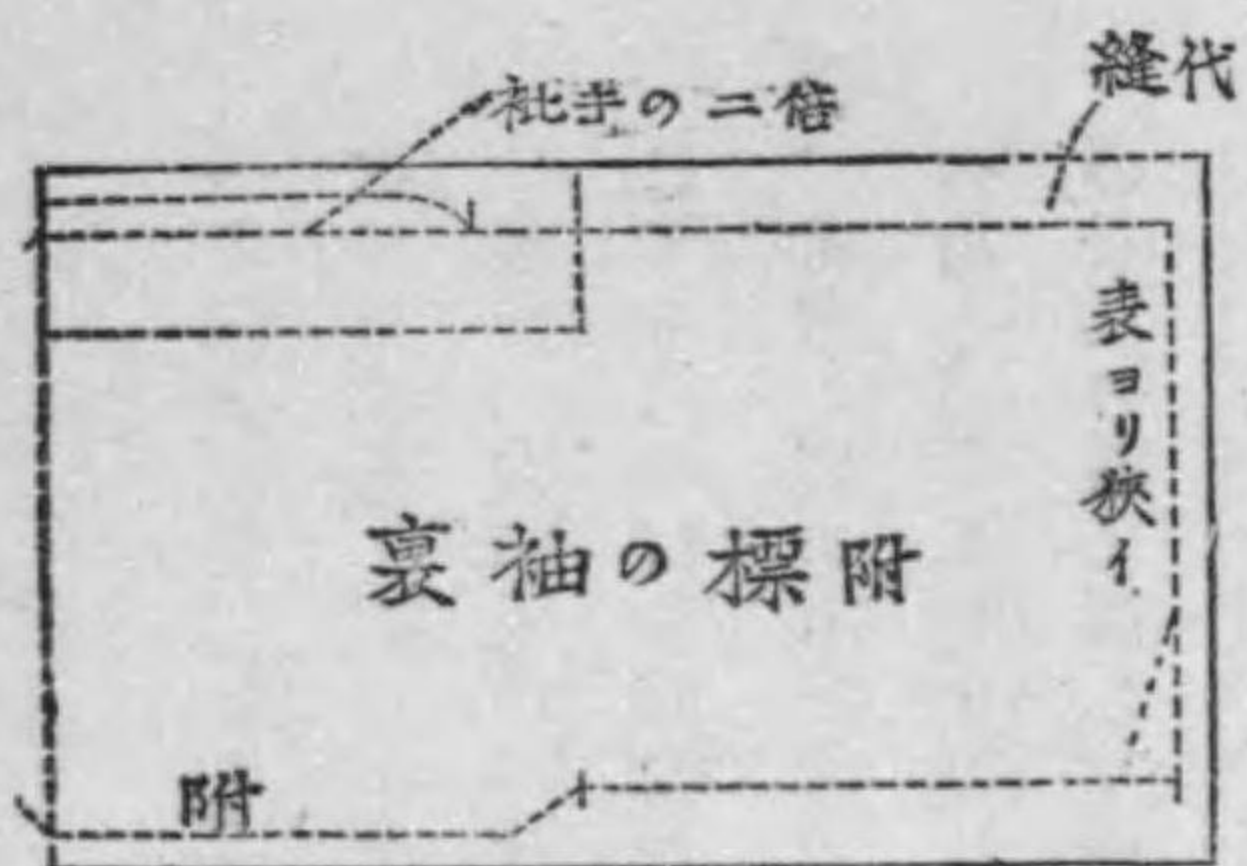
紐は巾を二つに折り、一方の横を残して中縫ひ、表に返して二目落の飾麩を掛けます。そして紐布の中心を身八つ口明の留を通して衿附に當て、男女兒に關らず縫目を下に向けて横は中繼にして縦の上下は小針に縫ひます。

脊守縫

衿肩から二程、(五分)下に紅白若しくは五色の絲、(赤、白、黄、青、黒)を用ひまして男兒は表に雌針のみを出し、女兒は雄針を出して、縦に七針、斜に五針縫ふのであります。そして男兒は左へ斜に縫ひ女兒は右へ斜に縫ひます。

本裁女綿入着物

一、裁方、積方、標附方、は女衿と同様であります。



縫方順序

- 一、袖 表袖裏を別々に縫ひ、左右の袖に折を附けます。品質によりコテ又は袷を掛け、振八つを縫ひ、八つに含み綿をいたします。真綿或は木綿綿を八つの縫目より二程(五厘)上にて二・八程(七分)位の針目に平袷に綴ぢ附けて表に返し、幾分か裏巾の方を引込み加減に仕て、綿の崩れぬ様振八つに袷を掛けて置きます。凡べて含み綿の上より掛ける袷は平袷がよろしいのです。
- 二、身頃 表裏共單衣の如く衿附まで仕て、脇縫の後布は縫込の釣らぬ様後身に折假袷を掛けて置き裾合せを仕て表に折を返して飾袷を掛けます。衿巾のみは隠袷を入れます。即ち衿巾を六等分して兩端にて一針づゝ省き、中央の四針だけ針を出します。
- 次に表裏の衿附を別々に縫ひ、身八つ口を衿同様に留めて、兩方共縫ひましたら振り八つ同様に含綿をいたします。
- 三、袖附 四つ身衿と同様に致しますが、品質に依り全部の縫ひ折目にコテ又は袷を掛けて置きます。

疊方、綿入れ方

一、表裏共に裏返し、脇縫の所で表裏共前身頃の方に返して後身を出し、衿が中にて重なる様にします。表の後身頃の裏が上に裏後身頃が下に其の中間に左右の前身頃が重なつて居るのであります。袖の方も身頃と同様の順序に重なるのであります。

次に綿を入れます。木綿綿を入れますにも、先づ眞綿を引き其の上に綿を延べ更に其上側に眞綿を引き後全體に綿をのべます。肩山より一九糎（五寸）ほど出し、裾の方八糎（二寸）ほど出し、尙兩脇にも綿巾の都合のよろしいだけ長くのべて置き、裾フキを作つて入れ裾を整へ綿の長い分を折り返して、肩山兩脇は表身と裏との間にほどよく折込みます。次に兩手を肩の方より表裏の間に入れ、裾口の兩脇の裾綿及布を同時に摘み、肩の方に引返します。そして前身の裏が上に成る様に置き、後袖の綿を好く整へ、脇縫、袖附、裾口等好く揃へます。後身より續いて居ります綿を順次前身の上のべて綿の繼目を平に重ねて、前身頃に全部のべます。片身頃づゝ斯様に仕て綿を入れましたら、袷先袂の丸味などに引糸を附けて表に引返し、裾に假縫を仕て衿の縫目を中綴じます。裏衿の堅褌に合綿をし、身頃よりの續きのまゝ、堅褌衿の標より四糎（一分）上に襷縁にて平襷に綿

を綴じます。堅褌に襷を掛け、次に衿先留を表裏の衿で裏表の衿を挟む様に持ち衿の中側より針を出して衿先の留をいたします。

二、衿の表裏合せて縫目の際にて衿を綴じます。

三、袖口含み綿は袖の綿を平にのぼし、此れに口綿を足して袖口明の部分に入れ、巾標の山で折つて綿を綴じます。

袖口留より一・二糎（三分）下で一針、口留の際で一針、山の四糎（一分）づゝ兩方に一針を出し、此の間一針置き綿のみ抄ひ、表には四針ほど出して袖口の含み綿とちをいたします。

男綿入の袖口含み綿も同様の仕方で、針数を一針増すのみであります。

袖口の留は裏内袖より外袖に針を出し、表外袖に出し表内袖を堅に抄ひ、此の順序に元の所に針を返して、糸を結び、二本の糸を捻り合せて置きます。次に袖口を衿衿、共衿掛等單衣と同様で、裾フキとちほは裕と同様であります。背脇の堅縫は裏より見て稍あらかき針目に表裏の縫目を締めて置きます。

男綿入着物

一、裁方 標附方 裕と同様であります。

縫方順序

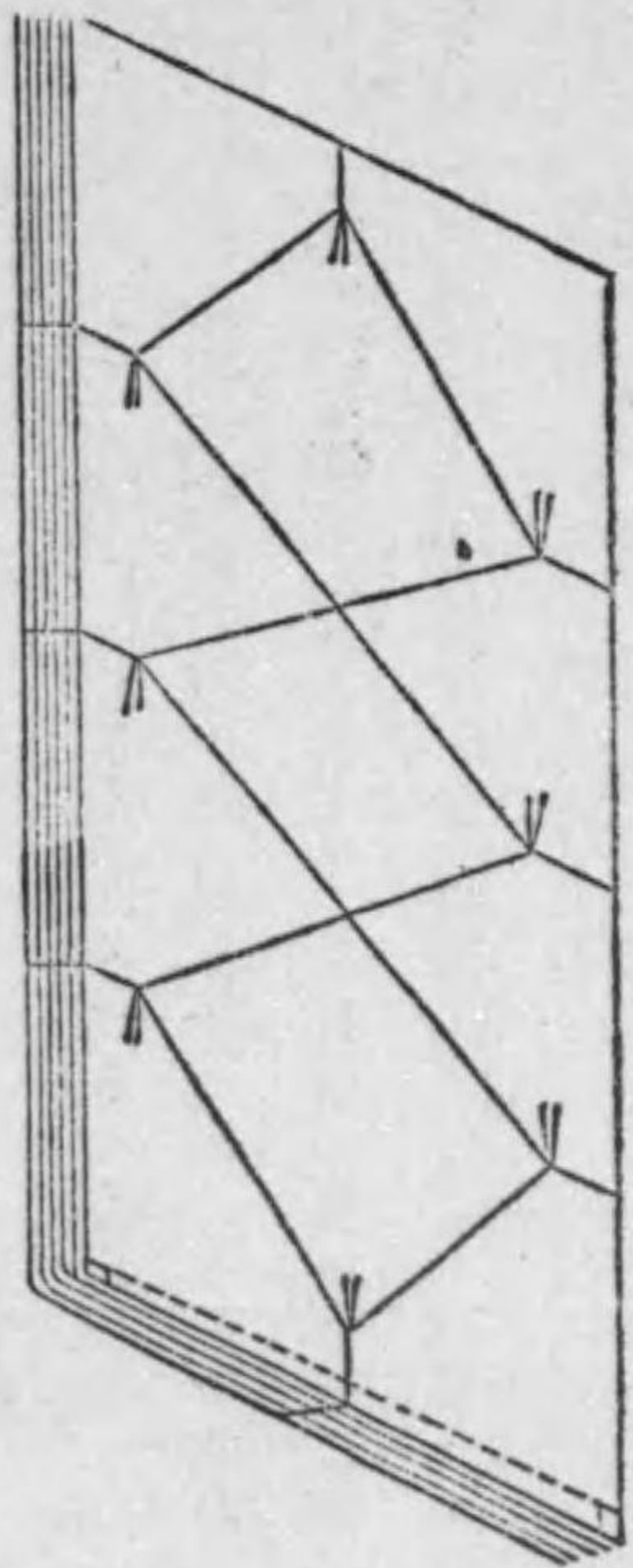
- 一、袖 表裏別々に人形の方より縫始め、袖口明にて返し留をいたします。袖口切附等裕に同じであります。
 - 二、身頃 女物綿入と同様に縫ひます。
 - 三、袖附留め方 表は單衣と同様に裏は裕の裏袖留の様に人形際より脇縫留の際に前後袖、前後身頃と同時に針を四枚通して其のまゝ糸を結びます。
- 袖の附方は裕と同様に、其の他は女物綿入と同様であります。

疊方、綿入れ方

一、前身を上に出して、表裏を長く夜具疊に仕て、表裏とも別々に肩の方より裾の所まで、巻きましたならば、前身を下に向け後身を上にし、表身頃のみ左右の袖を兩方に開きまして綿をのべます綿のべ方は女物綿入に同じで、裾綿を入れ、裾フキの山より裏を綿の上にし裾の方より順次重

ねます。表裏の背脇縫等の縫目を好く揃へて、裏袖を廣げ、次に女物同様前身の裏に綿をのばして、袖口山、肩山、袖丸み等に嫉の引糸を付けて、片身頃づゝ表に引き返します。その他の縫方術方等はすべて女物同様であります。

第七章



腹合せ帯

腹合せ帯は別に晝夜帯とも申しまして別々の帯地を縫ひ合せて拵へたものであります。丈は三米八

十糎（一丈）内外で巾は三十糎（八寸）位が普通でございます。

腹合せ標附け方

まづ火慰斗で地伸を致します。耳が厚くて釣る時は鏡を入れ、また耳の幅が広い時には裁ち落してしまひます。それから両側共垂れの方を布目を整へ、表より見て布目の通りに躰糸で縫ひ標を致し、帯の両側を中表に、今の縫ひ標を合せてとち、次に巾の真中を豎に待針を四十糎（一尺間）に打つて、兩皮の釣合を見て中央及び周圍を假とちて出来上り巾より四糎（一分）廣く標をつけます。

縫方順序

一、先づ垂れの巾標から半返に縫ひ始め角は巾丈共標より二糎（五厘）外より斜に針を出して十五糎（四寸）ほどの間半返に縫ひます他は一針抜或はすくい縫に致します。但し厚地の品は全部一針抜きにいたします丈の中央にて帯巾に七糎（一二寸）を加へたる寸法だけ縫ひ残して置きます。縫ひ終つて平烙鋏をあて先づ兩端を厚地布の方に折り返し巾の折をも附け端の四角を縫代のみにとちつけます。

二、芯の拵へ方 芯は普通三河木綿を用ひます一枚芯は仕立上巾同寸に裁切り、二枚芯を用ひる時は

一枚は前同様に一枚は兩方の縫代の折返るだけをせまく裁切り二枚合せた中綴を釣れの出来ないやう躰糸にて綴ち付けて置きます、斯くして表地の縫込を返した方に載せ芯の方を心持ゆるみ加減に針を打ちまして芯を縫代にとち附 ます、一枚芯の時も同様です。

夏帯の薄地物は多く二枚心にて芯の裁方は二枚共同寸法の中に裁切つ縫代を二枚の芯の間にくるみ綴ちて合せ、綴ち終りましたら兩端より中央に向け巻き重ねます。そして中央の明きの所より引き返し片側の縫代に芯を綴ち附けて後ち拵けます。

三、總體に飾り平躰を掛け兩横且端は一掛けたる躰の落し目をすくひ更に一度躰を掛 ます。注意丈巾共六糎（一分五厘）中に入りたる處に躰をいたします。仕上の後ち丈を六等分して一重づゝ折り重ね仕上圖の如く紅白二本の糸にて飾綴ちを致します。

丸 帶

腹合帯と同様地直しをいたしまして二つ 折り合せ目に躰を掛縫方も仕上も腹合帯と同様で御座い

二枚心の時は縫込を芯の間にくるむ事を忘れてはなりません丸帯に限らず紗又は絹の如き薄ものゝ時は二枚心を用ひます事は前にも述べました。

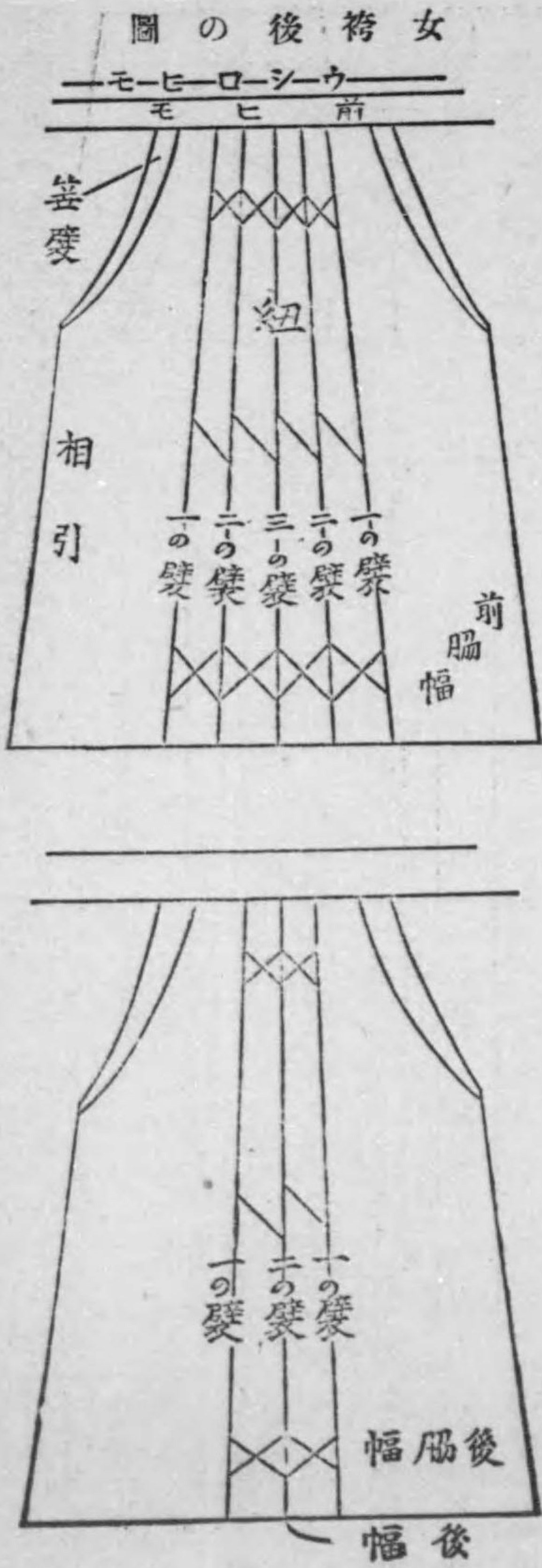
男 帯

丸帯の時と同様地直しをなし中表に二つに折りまして躰をかけ巾いづばいに標をいたします側の縫方は女帯と同様で御座いますが明けを作らないで端から端まで縫つてしまひます。

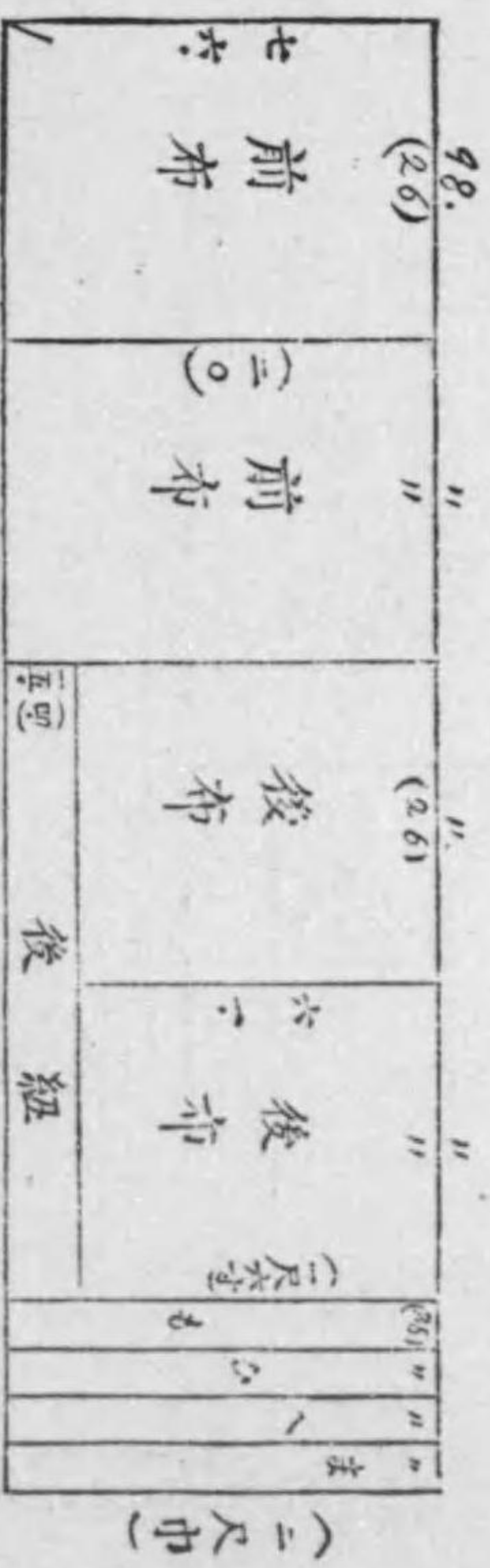
きせの掛からぬ様折り返し之を表に引返し、次に芯を作ります成るべく二枚心にいたしまして一枚は帯巾と同寸法に一枚は縫込だけ狭くつまり出来上り帯巾の二倍より縫込だけ少ない寸法に正確に裁ち切ります、之を縫込だけ違へて二枚に折り中央を綴ち合せて置きます。別に十糎(二寸五六分)位の厚紙を二つに折り兩脇を帯巾と同寸に裁ち切り合せ目の方を以つて帯芯を狭み堅く躰を掛けワナの方は角を裁ち落して巾を狭くして置き輪の方の中央二糎(五六分)位の深さに紐が通る程の穴を明け之に六〇糎(一尺五六寸)の紐を結び紐の一方の端を物さしに結びつけ物指の方から帯の中に引き込みます(厚紙は芯の片寄らぬ爲め)此心と帯表との一端を確かりに綴ちつけ表布がリンと張る程度に表布を引き張り帯丈だけに芯布を裁ち落し兩端は返し紵にいたします。

縫込の際に躰をかけ仕上をいたしたら女帯の様に疊み三ヶ所に二糎位(四五分)の巾の紙を巻いて置きます。

第 八 章

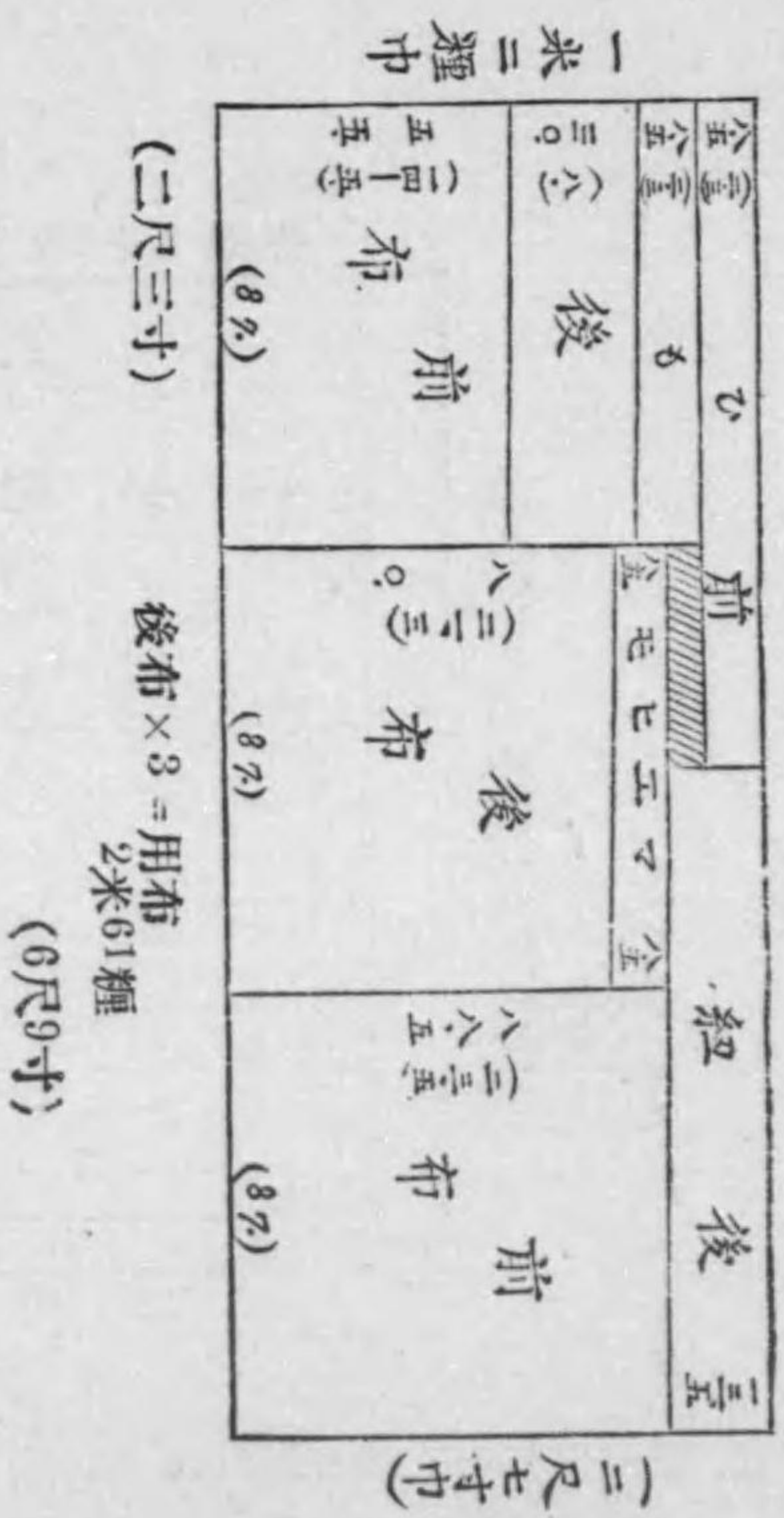


十五、六才或は大八用

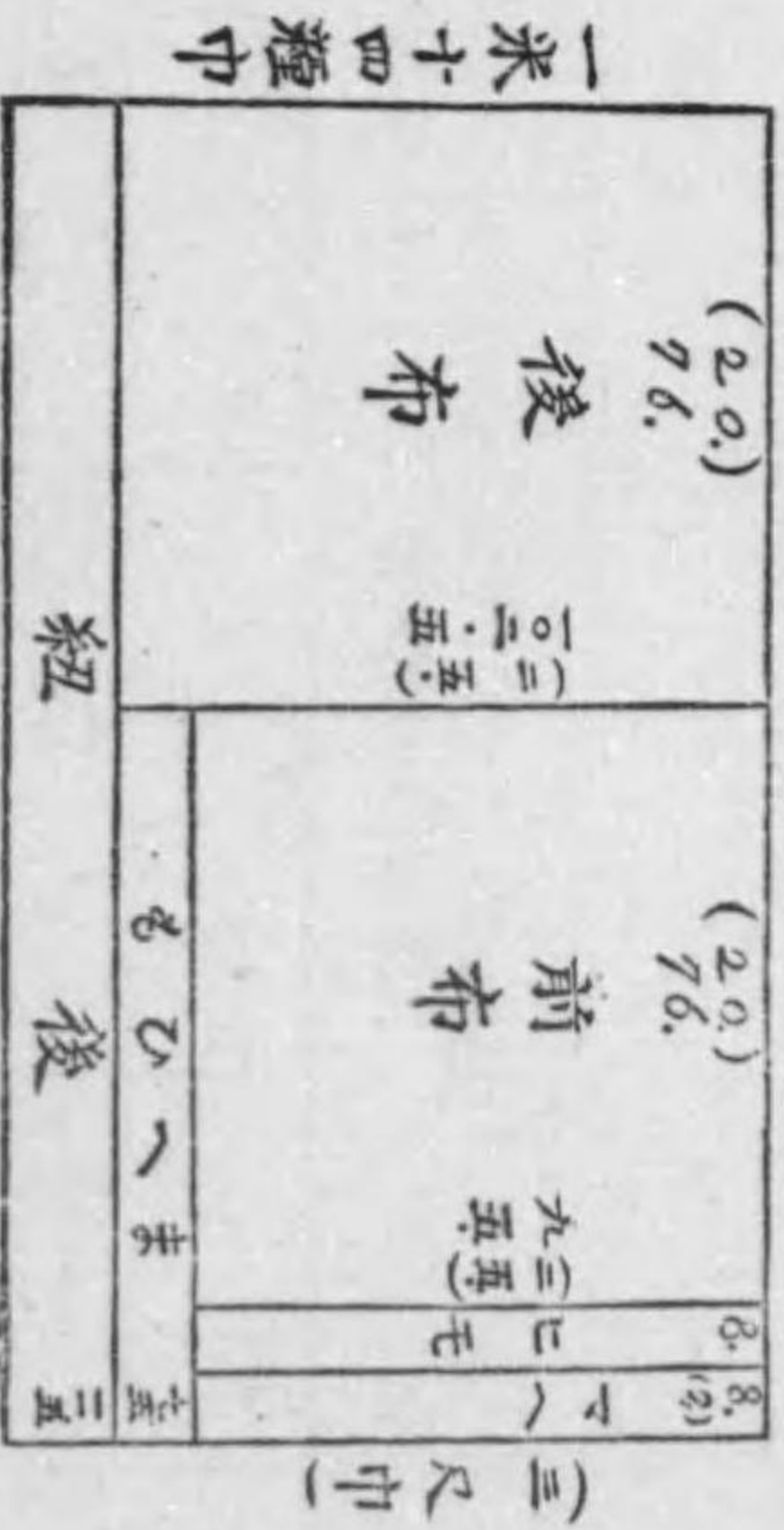


後布×4+前紐×1=用布
 9.5 4米30
 (1丈1尺4寸)

十四、五才用

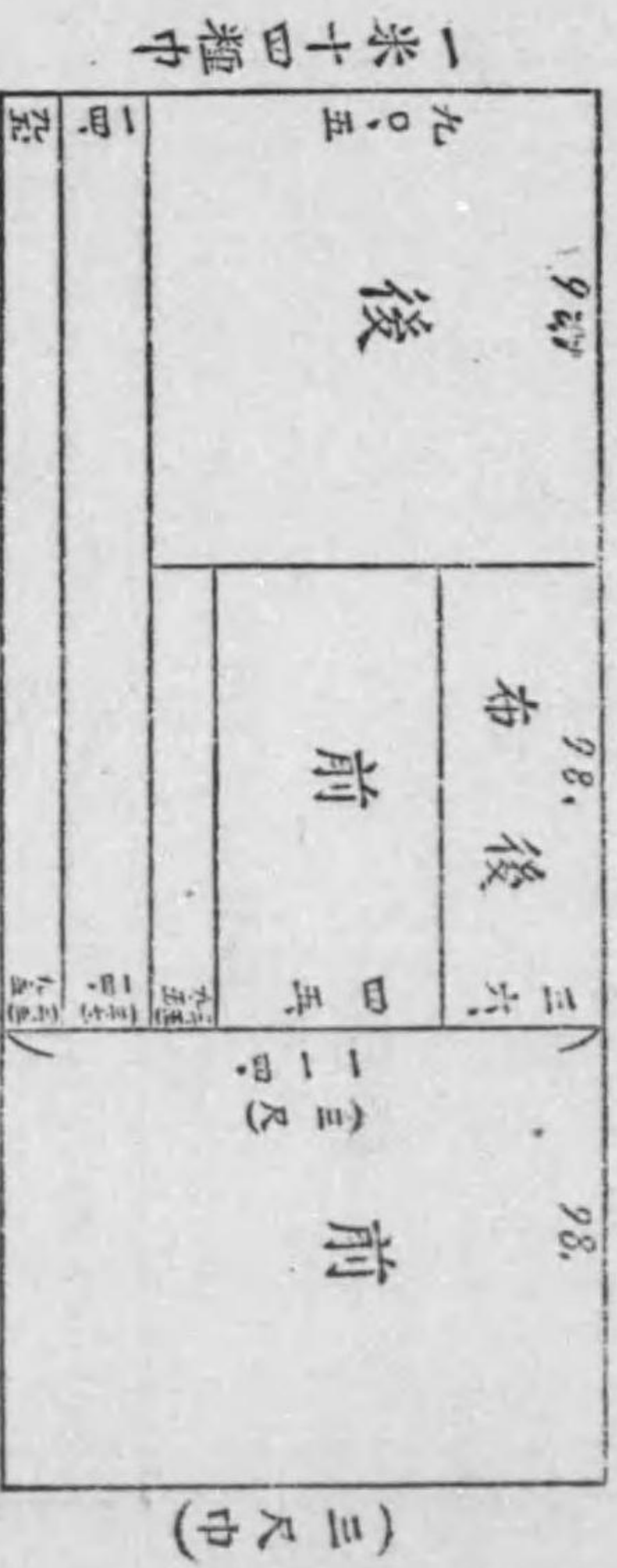


十才前後用



後布丈×2+前紐×2=用布
1米68.8.
(4尺4寸)

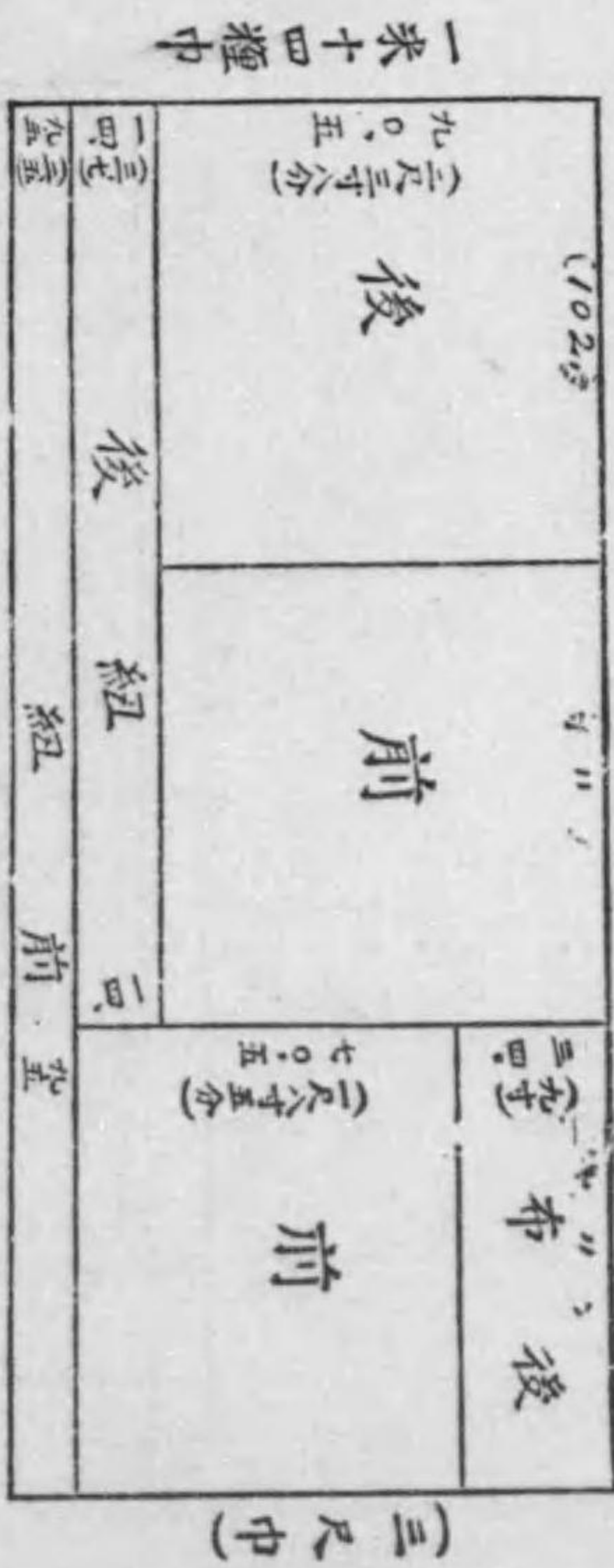
(二尺六寸) 大人用



後布丈×3=用布
78. 2米94.
(7尺8寸)

大人用 (二尺七寸)

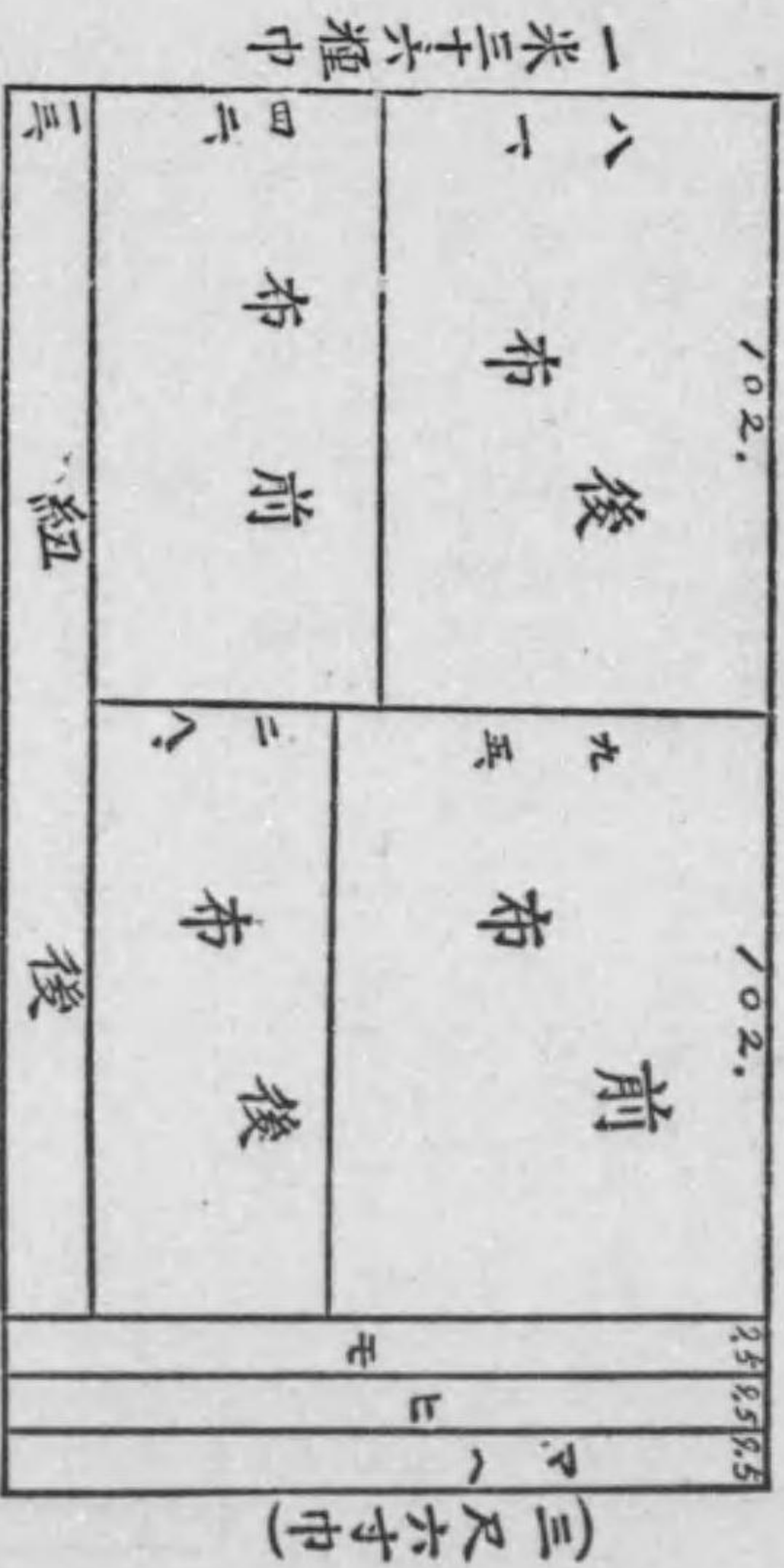
女用



後布丈×3 = 用布
3米06
(8尺1寸)

大人用

(二尺七寸) 巾1米36釐長 2米32釐5耗にて女袴裁方

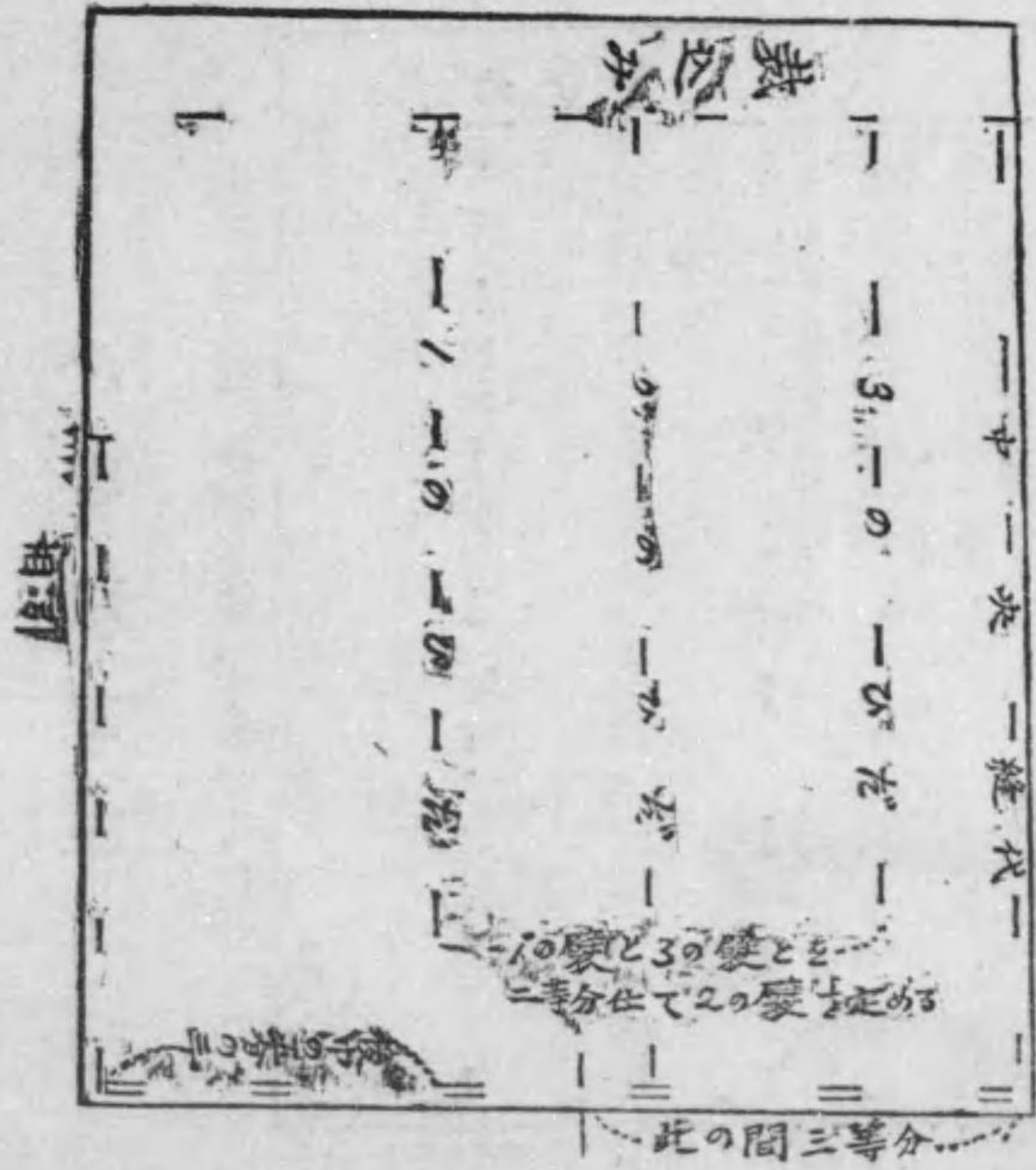


後布丈×2 + 前紐×3 = 用布
9.5 2米33.
(6尺1寸5分)

女袴割出し及び仕上寸法

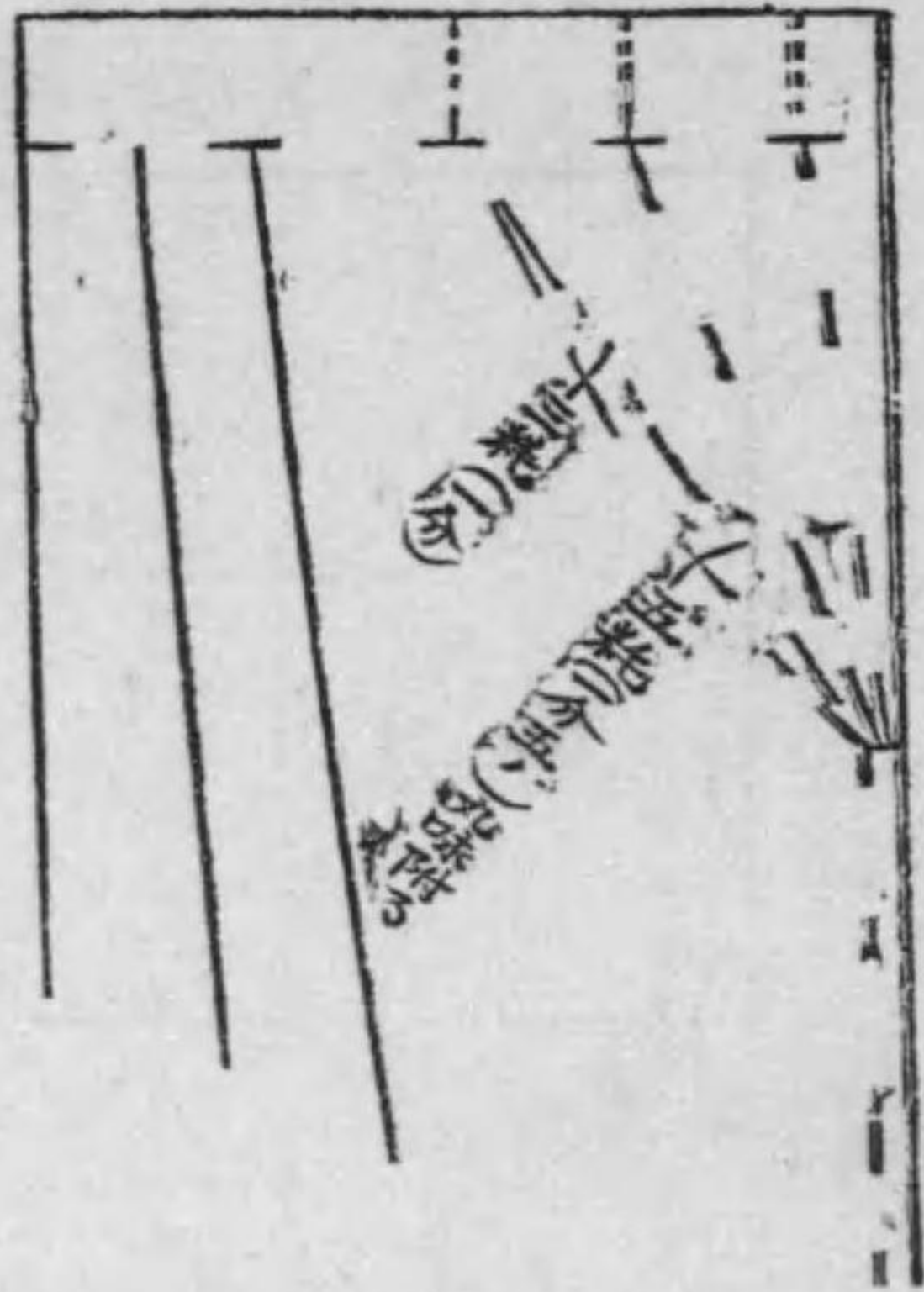
一、紐 下 着物の着丈の 7/10

第二圖 前布標附二枚重ねたる所

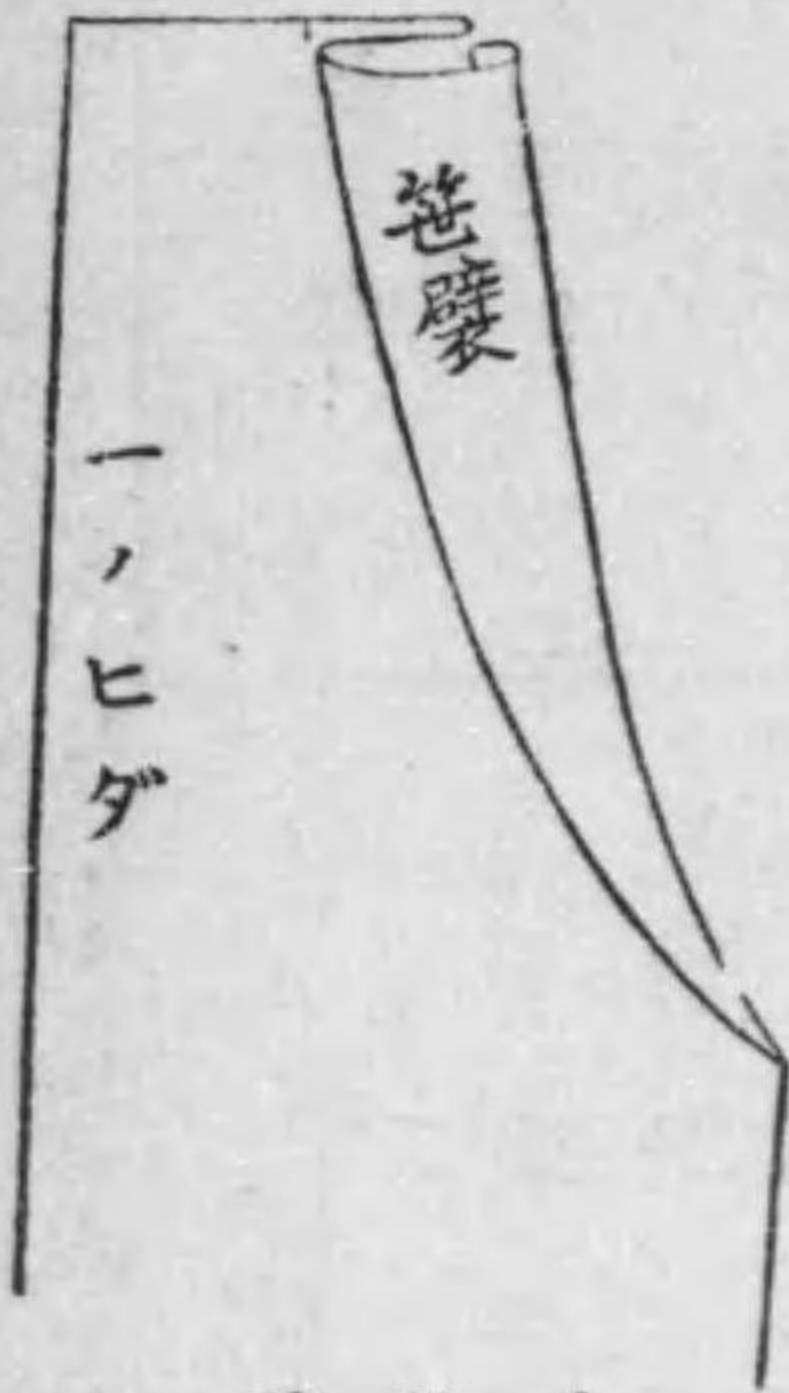


前布標

第一圖 襷

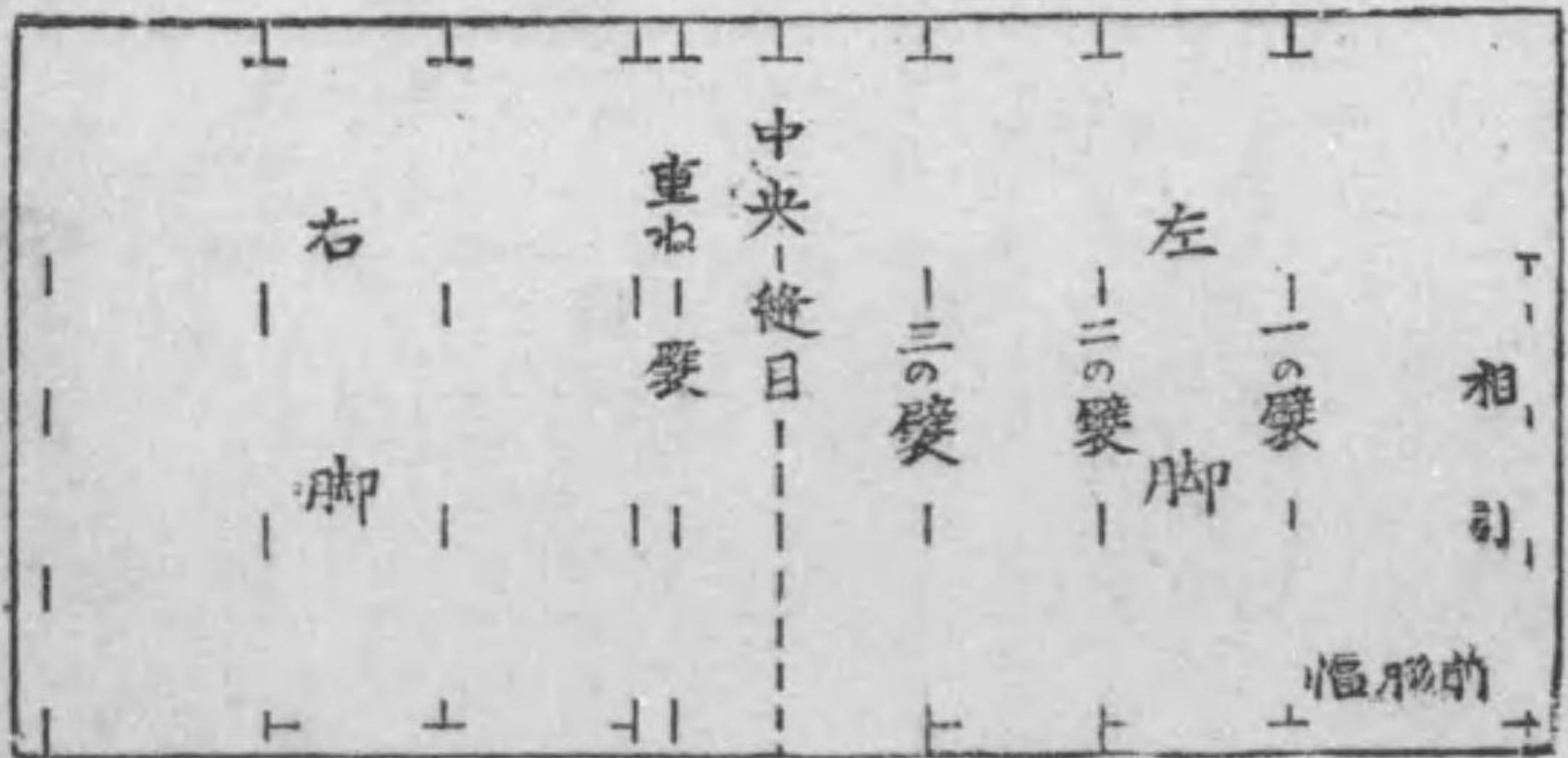


第二圖



第九

第三圖 兩脚開きたる所



九九

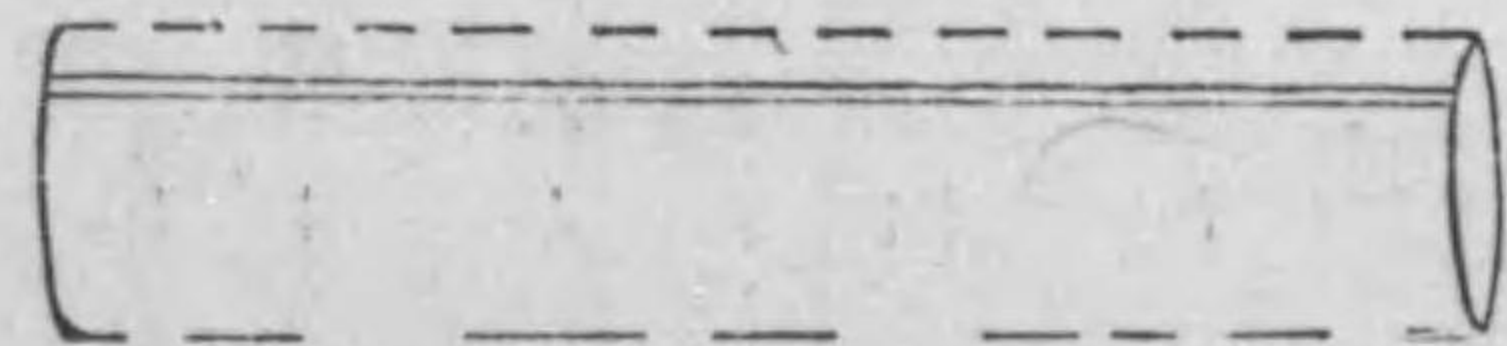
第四圖 兩脚開きたる所



腰紙標附方 第一圖



第二圖



標 附 け 方

一、後布二枚の布を中表に重ね裾を右に相引を手前に置きます。標附第一圖の如く裾紵代二糎(五分)を標し紐下を計つて上に標します。次に相引の縫代を一糎二耗(三分)と標しましたら一の襷を後巾の $\frac{3}{4}$ に標し次に相引標より後巾をかりに標しまして、中央の縫合せ標との間を二等分に標します。之が二の襷となります。上の一枚を取り除けまして二の襷より中に後巾の $\frac{1}{10}$ だけ重ね襷となる標をつけます。

二、前布二枚を後布と同様に重ね裾紵相引等後と同じく標附まして、一の襷を後巾の $\frac{3}{5}$ に標します。後同様相引より後巾をかりに標しまして、中央の縫合せ標との間を三分分致しまして寸法を知りましたら中央から三の襷の標を附けます。次に三の襷と前に標したる一の襷との中央を二の襷に標します上の一枚を取り除けまして後布の $\frac{1}{10}$ だけ重ね襷の標をいたします。

襷 標

襷 標

後は後脇襷巾の $\frac{1}{4}$

前は前脇襷巾の $\frac{1}{4}$

一、後笹襷三の襷の山から後巾の $1\frac{1}{2}$ より八耗(二分)引きたる寸法に標し其標より出来上り笹襷巾より八耗(二分)引きたる寸法を標します。次に出来上り笹襷巾を標します斯く致します。腰巾は後巾と同寸になります。

前の腰巾は後腰巾より二厘(五分)廣くなりますやう中央三の襷の山より後巾の $1\frac{1}{2}$ に標しまして次に出来上り笹襷より八耗(二分)引きたる寸法を標し終りに出来上り笹襷を標します。方法はすべて後と同様で御座います。

縫方順序

一、後布二枚を縫合せ脊縫と反對に折を附け兩端七厘六耗(二寸)程残して九厘(二分五厘)巾に裾縮をいたします。

二、前布も二枚合せ後布と反對にきせをなし、標附をいたしましたら裾縮をいたします。(但し前後共縫合せます時裁目の時は袋縫又は裁目のほつれぬ様かゝり置く、又裾に別布を附けます時には表を裏に五耗(一分五厘)程折り返してカクシを入れます。

襷取り方

一、先づ後布の中央より左右に二の襷の折をつけます(左脚の方は二本の標の内中央に近き方)をして左脚の襷を布の中央即ち縫目の上に重ねるのですが、重ね方は二本の標の内の外の標が中央の縫目に合ひますやういたします。其上に右脚の二の襷を矢張り中央の縫目に合はしてふところ襷を正しく待針を打つて置きます。

二、左右の一の襷を折りまして同じく中に向け裾の方は後巾の四分の一に上は裾の中二分の一に寄襷を定め、之も疊んで置きます。次に上中下と三ヶ所に千鳥に飾襷をなし前襷に取りかゝります。

三、前は後と同様三の襷から順序に疊んで行きます。寄襷、割出の通り上は後巾の $1\frac{1}{10}$ 下は後巾の $1\frac{1}{5}$ 弱にいたします。飾襷の掛方は後と同様です。

四、相引標の處まで縫ひましたら前布の方に折を返し裾の拵け残りを拵け相引の上端に門留をいたします。

五、笹襷

第一圖標附の如く相引留めの際まで布の耳の方から折つ 出来上り笹襷巾の寸法に形をつつ、折

りまして、折山より四耗(一分)中の方にて一と目落しのかくし嫉の様にとちます。次に裏の方は八耗(二分)控へて相引の際までを自然の斜に仕て小針に紬けて置きます。

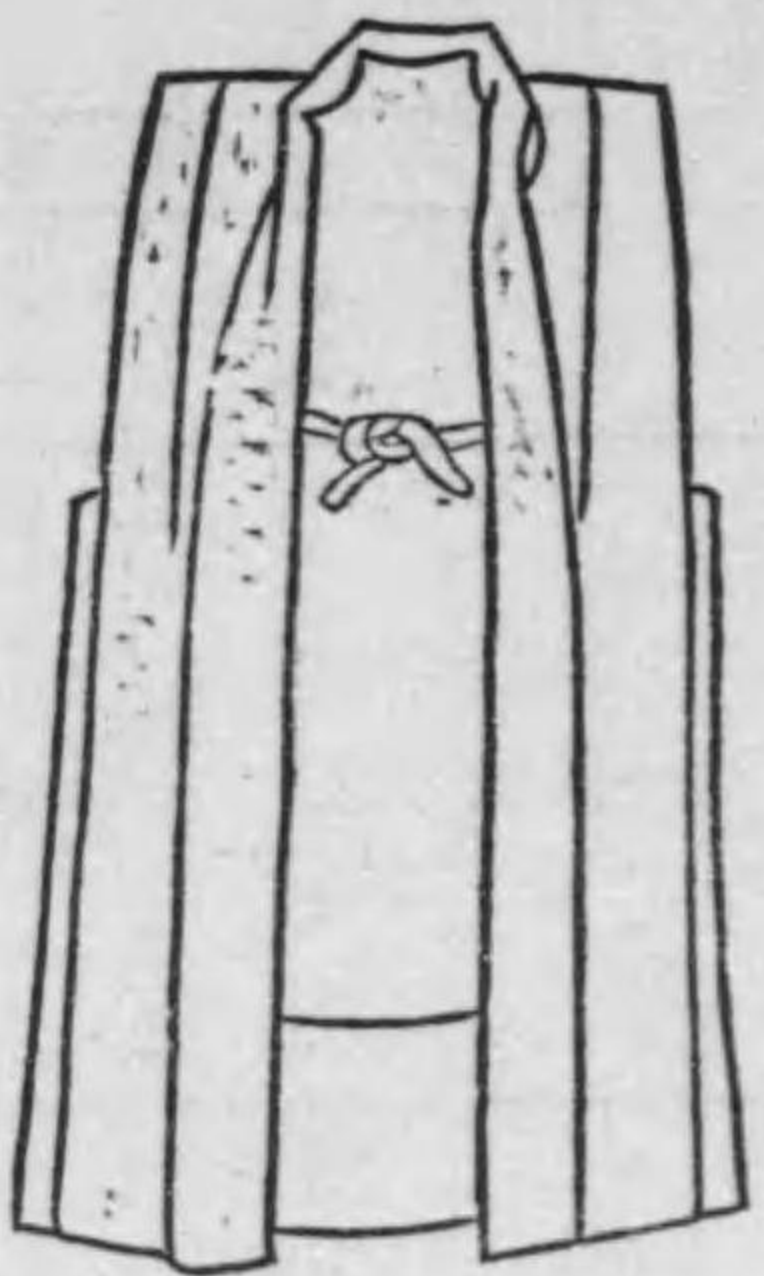
紐 附

一、前後の紐巾を定め中央三十七纏(一尺)程残して紬けます。前紐には半紙三つ折のものを、共に半返しに縫付け裏はまつり、紬ごいたします。紐附の両端は五耗(一分五厘)程上げて斜に縫附ます。後紐は腰紙の一種二耗(三分)の處を紐に綴ぢ附けまして、半返に縫ひ附けます。或は一と針ぬきにいたします。縫込みの分は腰紙の間に入れて、腰紙を以つて狭み上より綴ぢをなし、裏紐をまつり附けます。

仕立上りましたら火熨を掛けまして、三つに折り疊み出來上り圖の如く、紐を重ねて飾綴ぢをいたします。

第九章

一つ身袖無羽織

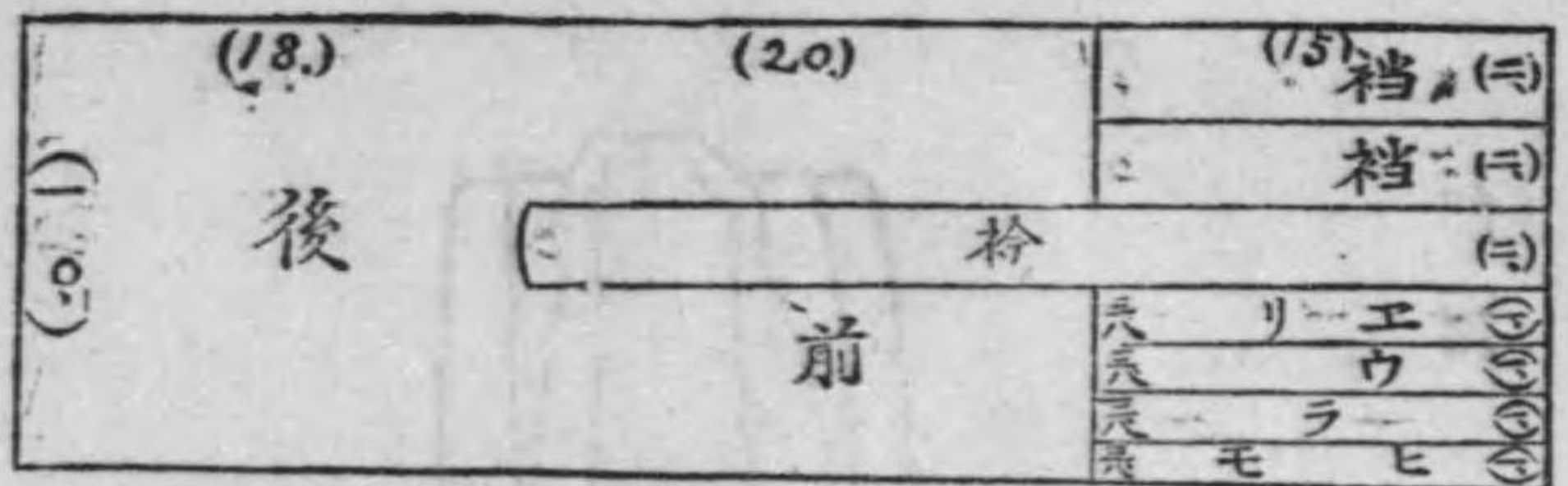


一、表用布普通巾にて凡そ二米八纏(五尺五寸)にて裏地一米一四纏(三尺)にて裁方積方。

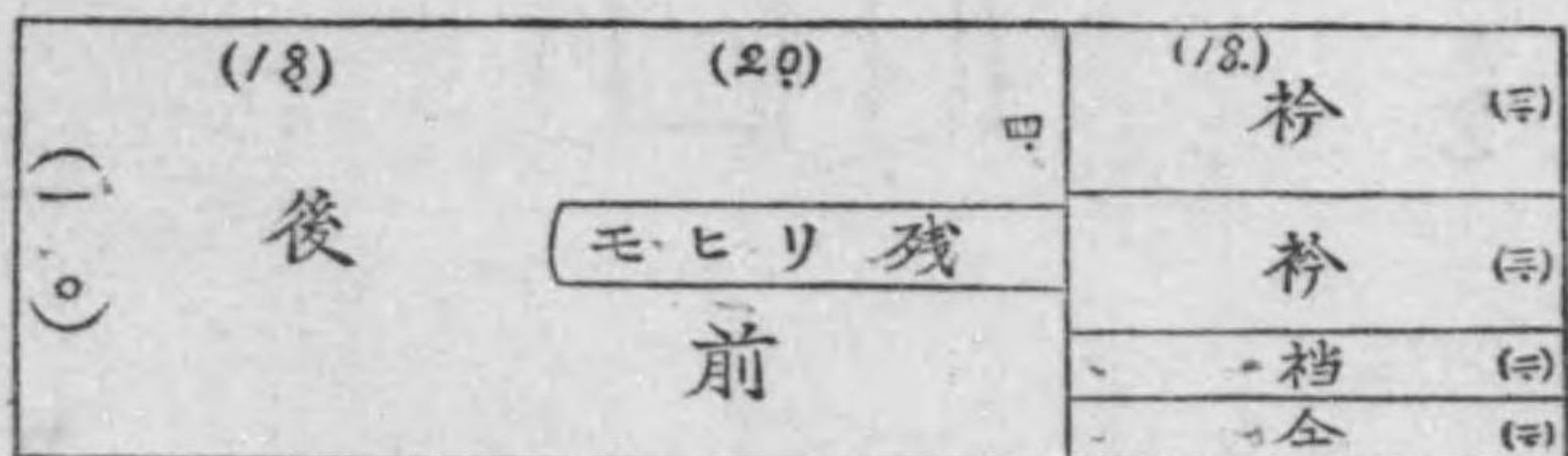
仕上寸法	
身丈	五七纏(一尺五寸)
身巾	一ばい
衿肩明	四纏(一吋一分)
脇明	二三纏(六寸)
襦巾上	四纏(一寸)
同下	五・五纏(二吋四分)
衿巾	四纏(一寸)
紐丈	二三纏(六寸)
紐巾裁切	三纏(七八分)
前下り	一・二纏(三分)

紐附 二二纏(五寸五分)

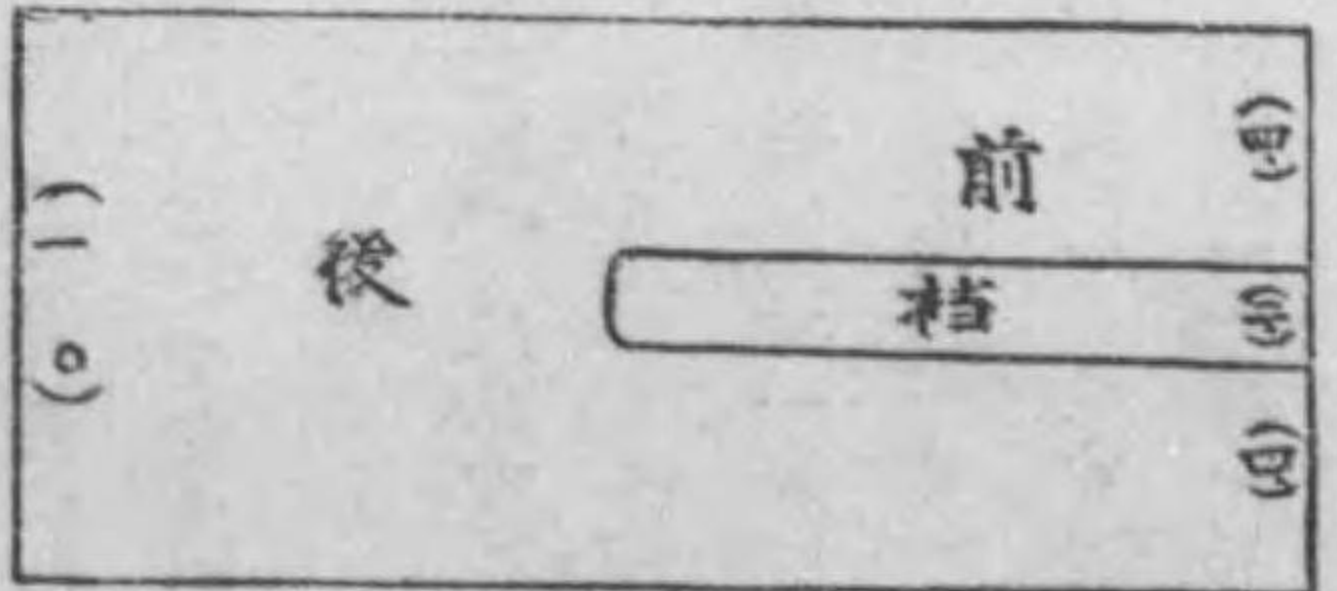
方裁織羽無袖



公式
 $\text{裁切身丈} \times 2 + \text{前後の差} + \text{襟丈} = \text{用布}$
 $(\text{用布} - \text{襟丈} - \text{前後の差}) \div 2 = \text{後身丈}$



公式
 $\text{裁切身丈} \times 2 + \text{前後の差} + \text{襟丈} = \text{用布}$
 $(\text{用布} - \text{襟丈} - \text{前後の差}) \div 2 = \text{後丈}$



公式
 $(\text{出来上り身丈} - \text{折返し} + \text{胸接代}) \times 2 = \text{裏用布}$

標方

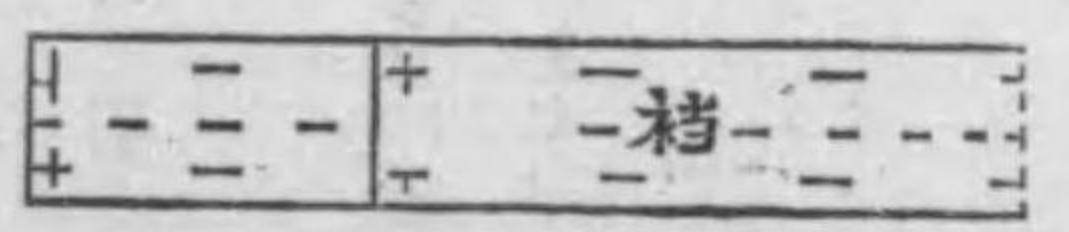
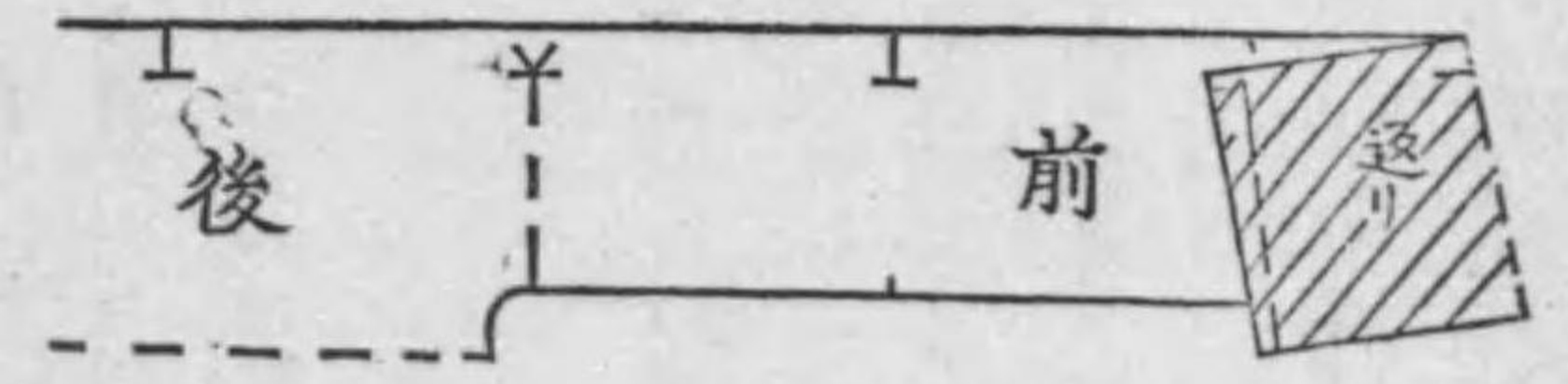
一、身頃 表裏共に中表に巾を二つ折に仕て、脇を向ふに背を手前に、表を下に裏を上重ね、後身頃を仕上丈に三つ山の縫代を加へた寸法に表を裏の上に折返し、前身頃を肩の線越と前下りだけ後身頃より長く表を折返します。但し一つ身の前巾は中狭きこと、表の返りがわずかなこと、で下りを別に縫ひません。脇丈を後脇と同寸に衿附の方にて、一・二糎(三分)長く裾を斜に折り、胸接ぎの所で裏を自然斜に標します。

前後の胸接の所に假袂を掛けて置き、標附圖の如く前身を下に、後身を上重ねて、巾脇明標をいたします。襟丈を計つて、後身を左に取り除けます。前は後の標を寫します。

紐附の標をつけ、衿附の標を縫代一糎二耗(三分)にいたします。

二、襟表裏別々に中表を重ね 寸法通に表を折り返し、身頃胸接の如くに仕て、後は眞直前方のみ斜に標します。

三、衿 二つ折に仕て、衿肩明に身丈と前下り肩の越を加へ更に四耗(一分五厘)の弛みを加へて丈の標を致します。



縫方順序

一、後前の胴接をして、折は裏の方に返し、隠篋を掛け、後前の襷を付け、折は両方共身頃の方に折

ります。次に襷の上部に脇明の留を致します。其の留方は身頃裏より針を出し、裏表の襷に通し、表身頃を豎に抄ひ、元の針目に並べて戻し、糸を結び、両端を燃つて置きます。次に上部の襷巾を折山から四耗(一分)中にて縫ひ、含綿を綴ぢ附けます。

脇明は表は巾標より四耗(一分)外を、裏は四耗(一分)内を縫合せます。此の時襷留際より凡二厘二耗(六分)位の間に襷形ちを作り縫ひ、折は裏の方に返し、隠篋を掛けて置きます。

綿入方疊方

一、両方の襷巾の中央にて裏表共身頃を中に、後身頃を外に仕て、後表身頃の裏を上、裏後身を下に重ねます。

真綿を引延べて其の上に普通の綿をのべ、又真綿を引延べて綿は肩裾共一〇厘位(二三寸)兩脇へは前巾だけ長く出して置きます。襷上部の所にて、綿を切つて脇明の折山の所に程好く綿を整へ、裾山の所にて長い分を折返し、兩脇の長い分を前身の表裏の間に折入れて、肩から両手を表裏の間に入れ、兩脇の裾口を摘み、肩の方に引返し、前身の裏を上仕て、後より續きの綿を順次のべます。肩脇等綿を整へましたらば前表身を引返します。

衿附、身頃は衿附の標通りを表裏合せて、假綴を仕て乳或紐を附け、衿布に衿代だけ狭い衿芯切を附けて、標通に待針を打ち、衿を附けます。衿縮代の折を折つて、衿先を縫ひ、衿を衿付 兩方の前襷を中綴仕て、衿に飾袂を掛けます。

本裁女衿羽織

裁方積方

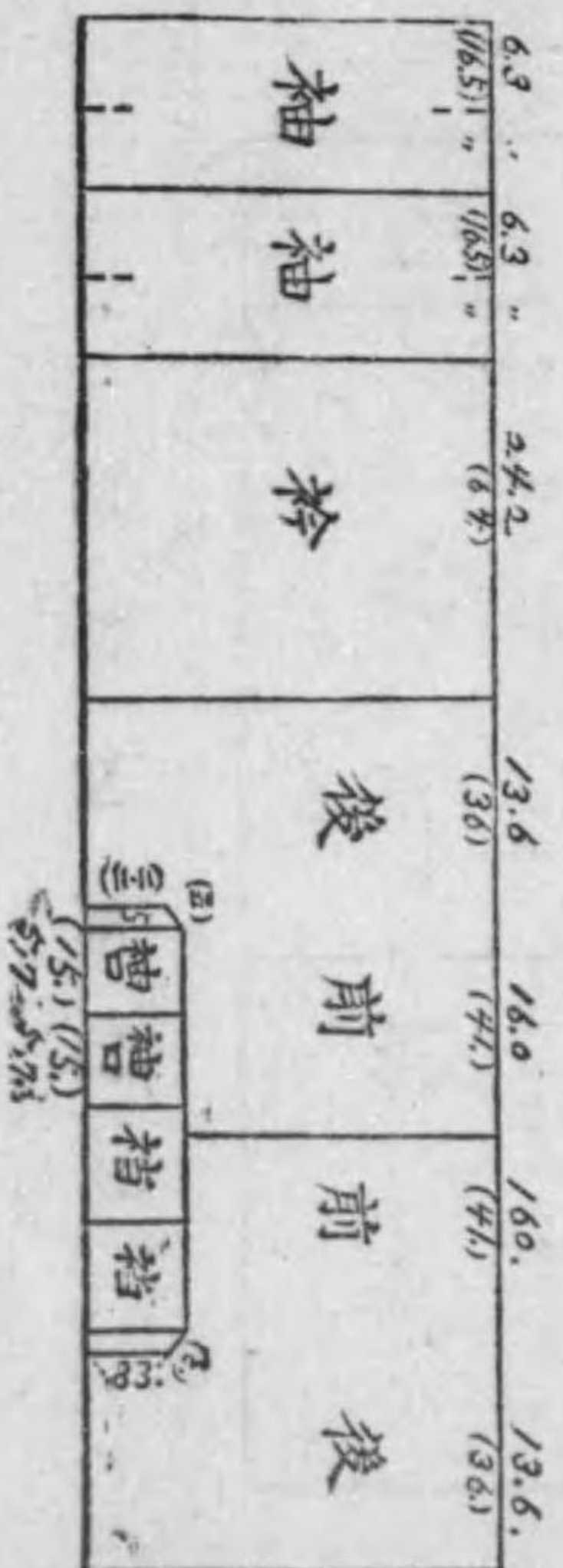
一、表總用布より袖丈の四倍と衿地とを取り、残布を身頃に致します。衿丈は出来上り身丈に肩廻りと前下り衿先縫代肩の繰越とを加へて二倍した物であります。身頃は前後の差を三十二糎(八寸)ほど附けて、前身を長く裁ちます。或は前下り及肩の繰越を長く裁ち、胴接を後前同じに致すのもよろしくあります。

普通仕上寸法

- 袖丈 着物と同丈
- 袖口 着物と同寸
- 袖巾 着物と同寸
- 袖附 着物より一糎(二分強)増
- 身丈 凡そ着物の着丈の $\frac{3}{4}$ に七糎(二寸位)加へたる寸法

- 衿肩明 着物より八糎(二分)廣
- 身八つ口 着物より二糎(五分)減す
- 後巾 着物と同丈
- 衿 着物と同寸
- 前下り 四糎(一寸)
- 乳下り 背縫より四二糎(一尺一寸)位
- 襦巾上 二糎(五分)
- 裾 六・五糎(一寸七分)強
- 衿巾 襦の裾巾と同寸
- 乳巾 一・五糎(四分)
- 乳丈 四糎(一寸一分)裁切

羽織表裁方



公式

{用布一(袖丈×4+衿丈×2+前後の差)}÷4=後丈

出来上り身丈+衿肩明+繰越+前下り+衿先縫代=衿丈
衿丈×2=衿用布

羽織胸裏裁方



公式

袖縫代×8+胸縫代×8+背三つ山縫代×8+前下り×8+肩
繰越×8+(衿先縫代+衿肩明)×2=總縫代 45寸
出来上り袖丈×8+出来上り身丈×10+總縫代=表裏總用布
表裏總用布—表用布=裏用布

女給羽織標方

- 一、袖 本裁女着物と同様であります。
- 二、身頃表裏共中表に衿肩を揃へて重ね、表身を下に、裏身の上に、背縫を手前に後身を左に仕て、長く置き出来上りの身丈に三つ山縫代一・二糎(三分)を加へた所にて、表後身を折返し、前身丈は肩の繰越及び前下りを後身丈より長く折返して、標圖の如く胸裏の上に重ねて躡を掛けます。而して肩の繰越を附けて、前身の上に後身を重ねます。此の時前下りの四糎(一寸一分)が後身の裾より長く出しておきます。

次に背縫、後巾、肩巾、袖附、身八つ口等を標し、裾附丈の寸法を計つて置き、前身に後脇丈より四糎(一分)下に標を附けて、後身頃を左の方に取り除けます。前身の袖附、身八つ口、脇縫代等後のまゝ寫し、次に前下りは衿附の方へ裁切より二糎(五分)入りし所と四糎(一分)の縫代に、脇の標との間に斜に標をいたします。衿附の標は裾より一九糎(五寸)ほど上にて一糎二糎(三分)の縫代にして、裾より斜に標をつけ、これより上は縫代を真直に標し、乳下りの標を附けます。

- 三、裾 表裏共中表に重ねて、表を下に裏を上、前裾の方を手前に裾を右に置き、裾上縫代を一糎二糎(三分)に標し、裾丈の寸法通りに表を裏の上に折重ねて針を挿して置きます。

次に裾口にて前裾縫代を二糎(三分)と標し、巾の標を附けて、假に裾裾巾より上裾巾を引き残り

の中を三等分して、其れに後襟の縫代を加へた寸法を後襟の上の縫代と定め、其の標より手前に上襟巾を標し、後前其此の標に物指をあて、斜の襟附標をいたします。

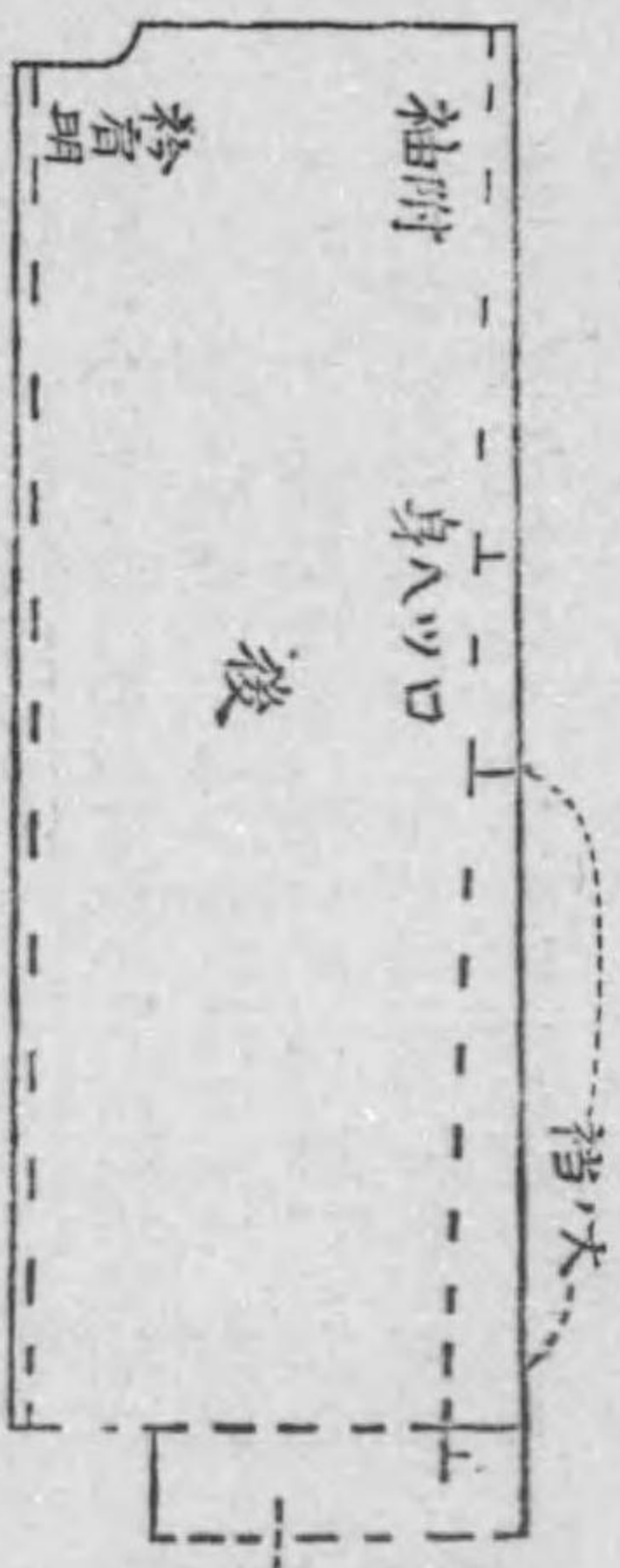
四、衿折り方 衿表を外に出して、出来上り衿巾の二倍に、縫代一糎(二分五厘)の二倍を加へたものを外衿巾として折をつけ、次にこの折山より残れる方を外衿の耳に倣ひ、先、外衿巾 加へた縫代の二倍(二糎五分)を減じて内衿の折を附けます。つまりわなの方から計つて出来上り衿巾 二倍の所で折り返すことになり、次に外衿のわなより二糎(五分)ひかへたところへ、内衿のわなを折つてまいります。この二糎(五分強)を二つ折に致しまして、コテを掛けます。この一糎(三分弱)が衿附の縫被代となります。衿附の時は縫被代折山より二糎(一厘)内を縫ひます。即ち二糎(五厘)は被せ代であります。

次に外衿は折返して来て、縫被代折山より二糎(五厘)ひかせて、耳を内側に折ります。之れが衿の衿代となるのであります。

次に芯の中、出来上り衿巾より四糎(一分)を狭く裁ち切り、縫代折り山の所にきつかり入れて、荒い針目にて内衿にのみ綴ぢつけます。芯が入りましたらば、衿を上り衿巾に疊み衿丈を二つ折にして衿山の標をつけ、山より一五糎(四寸)の所に標をつけ、その標から後身丈の標附寸法を衿の裾へ

標します。此の標は丁度衿先を縫ひはじめる標になります。尙この標と標の間へ所々標を入れ、附と附との合標を附けて置きます。

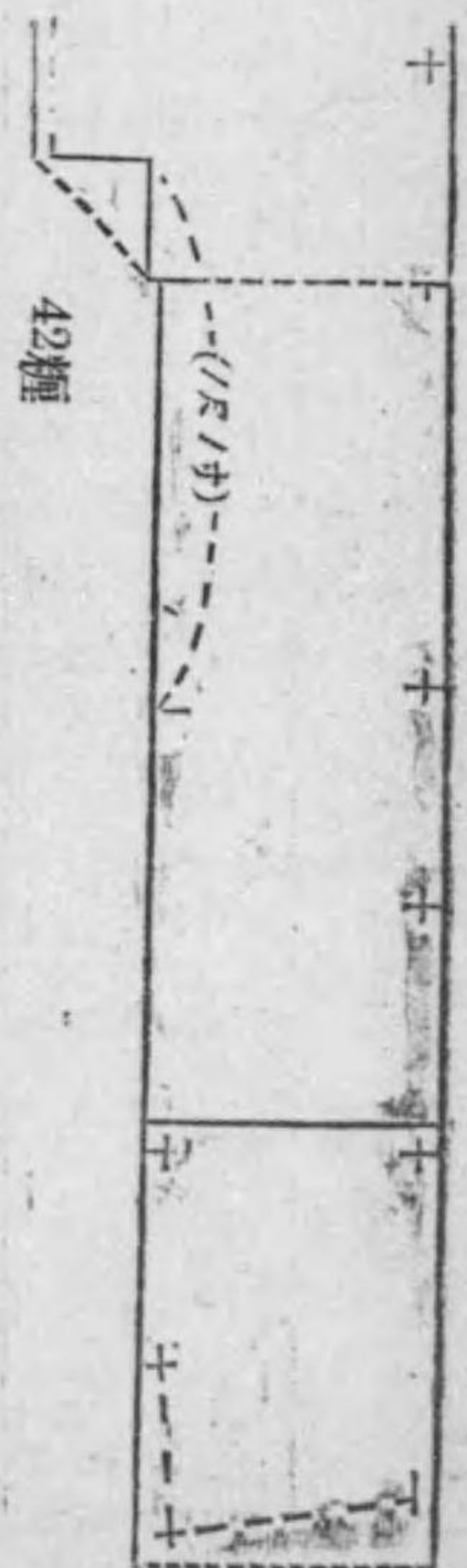
但、肩の繰越が一糎(三分)以上の場合には繰越の増しただけ衿裾の標丈が足りなくなることを知らねばなりません。



仕立上り寸法に三分を加へる



後次に繰越前下り及び縫代を加へる

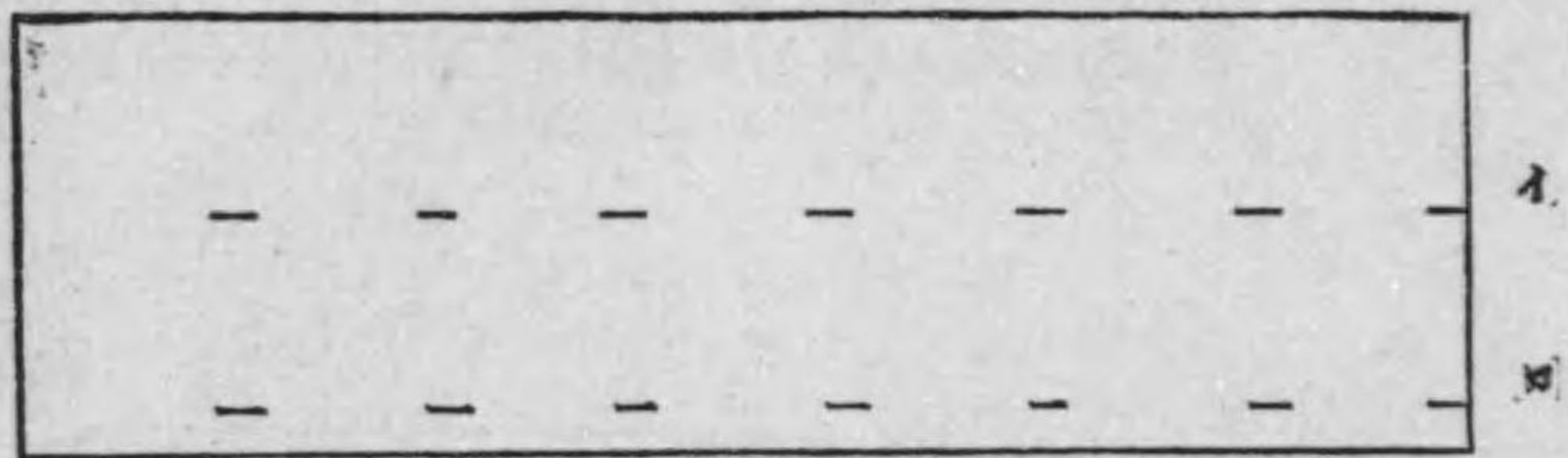


襟幅を手前から三分に標します。三分の標から向ふへ襟の裾巾を一寸八分に標します。襟幅巾より上の襟巾を減じ残りを三分にして其の $\frac{1}{3}$ に後襟縫代寸を加へたる寸法を上部後襟の縫代を標し此の標より上の襟巾を標し上下の標に物指をあて、襟の前後に斜め標を圖の如くつけます。

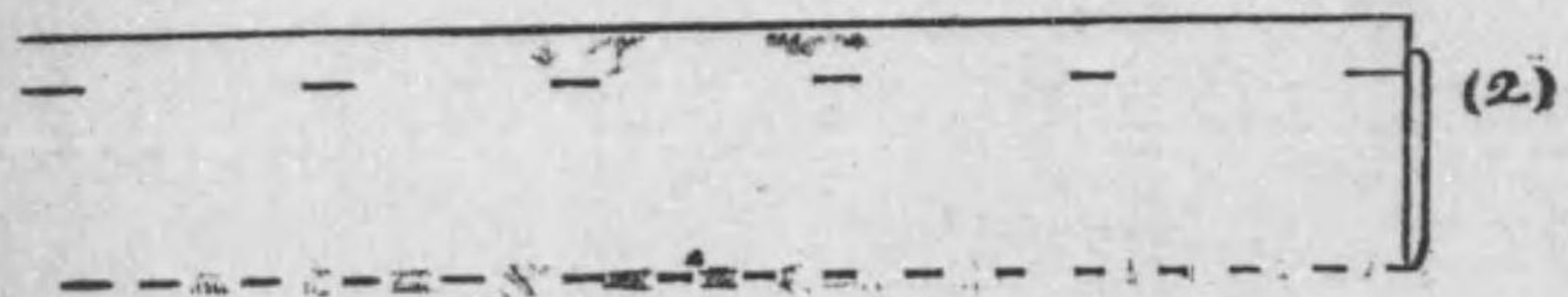


衿の折り方標附圖

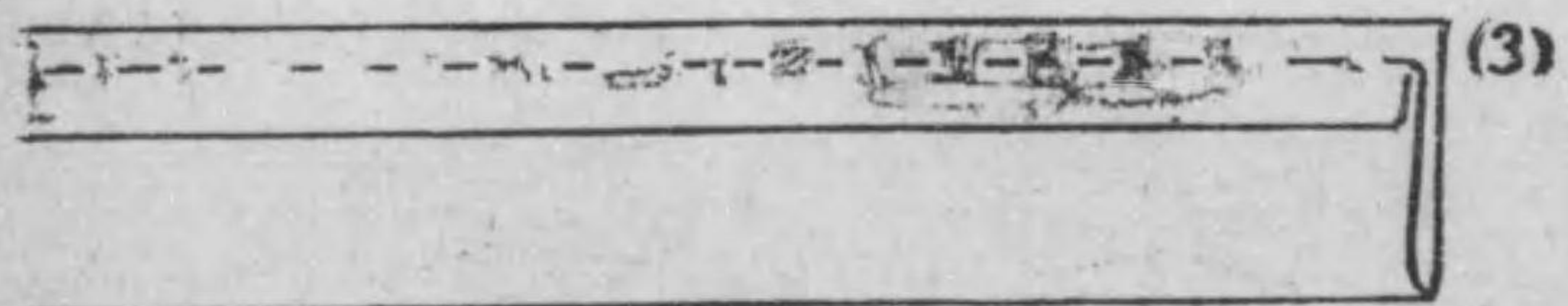
衿の折方 (1)



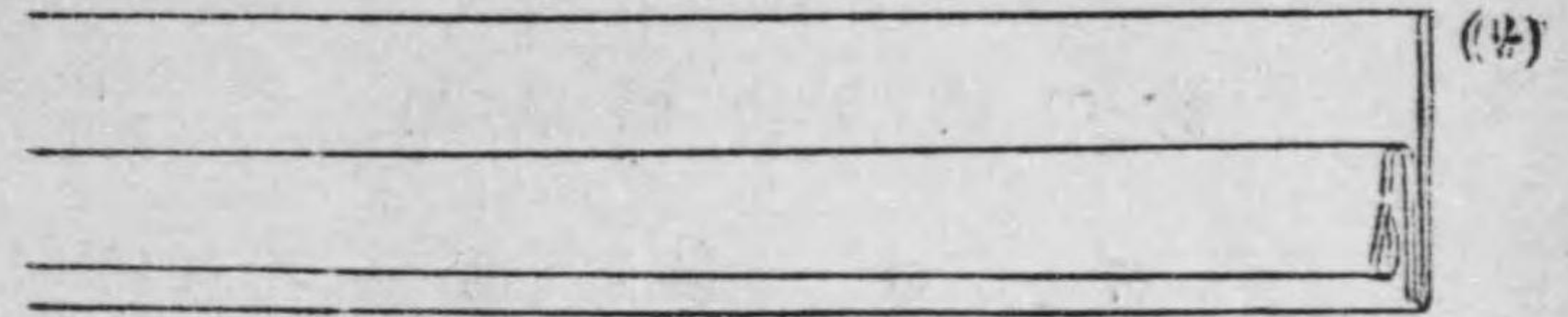
耳の端から衿巾の二倍に縫代の1.2寸(3分)と衿代の1寸(2分⁵厘)とを加へて標(イ)をつけ次に衿幅の二倍を何れも裏へ標す



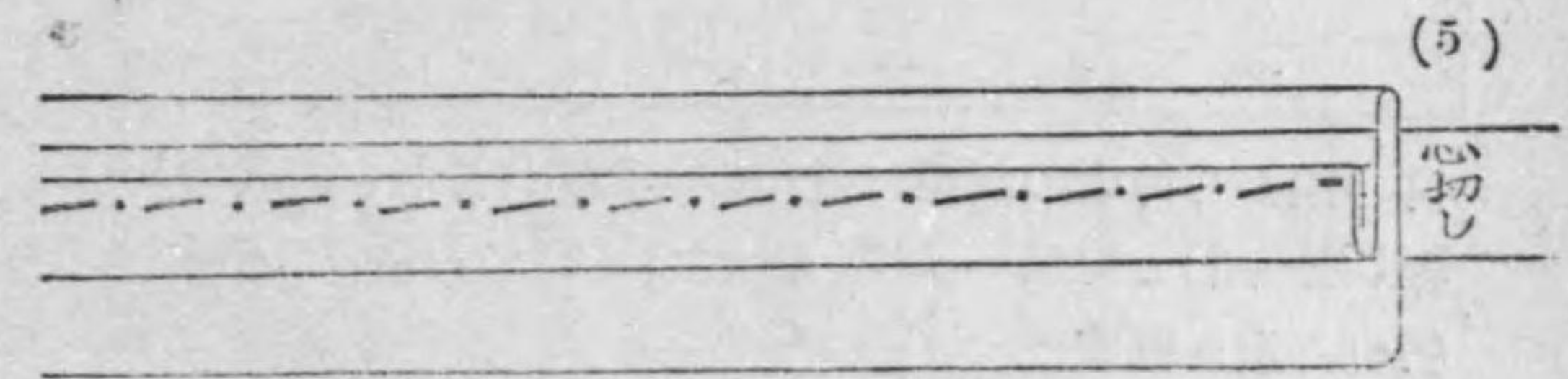
表を外にして(イ)の標を折る



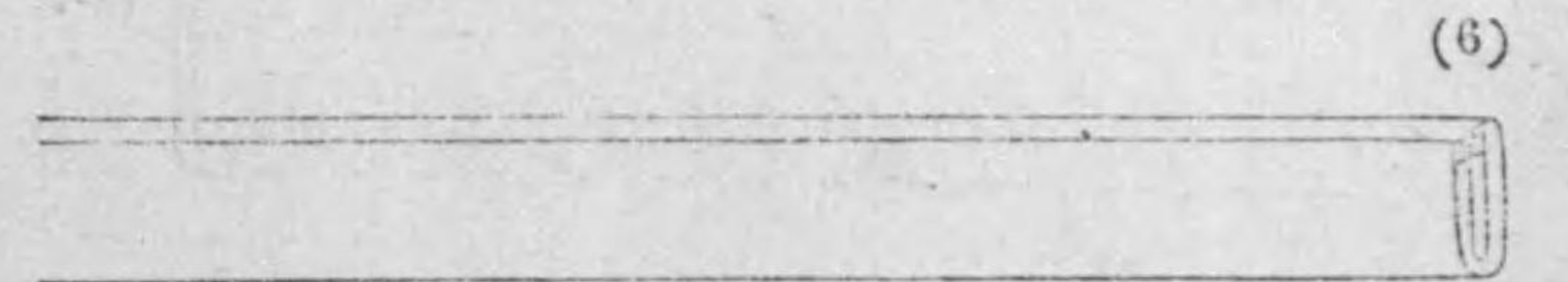
次に(ロ)の標を折る



次に(ロ)の折山を最初の(イ)の折山から五分五厘手前を据えて折る



心切れを衿幅より4耗(一分)せまく裁ち切り引きつらぬ程度に挟み襷をかけておく



(ロ)の折山へ(イ)の折山を突き合せて折り2耗(五厘)引いて衿裏を据えて衿代は内へ折る

乳の折り方 (7)



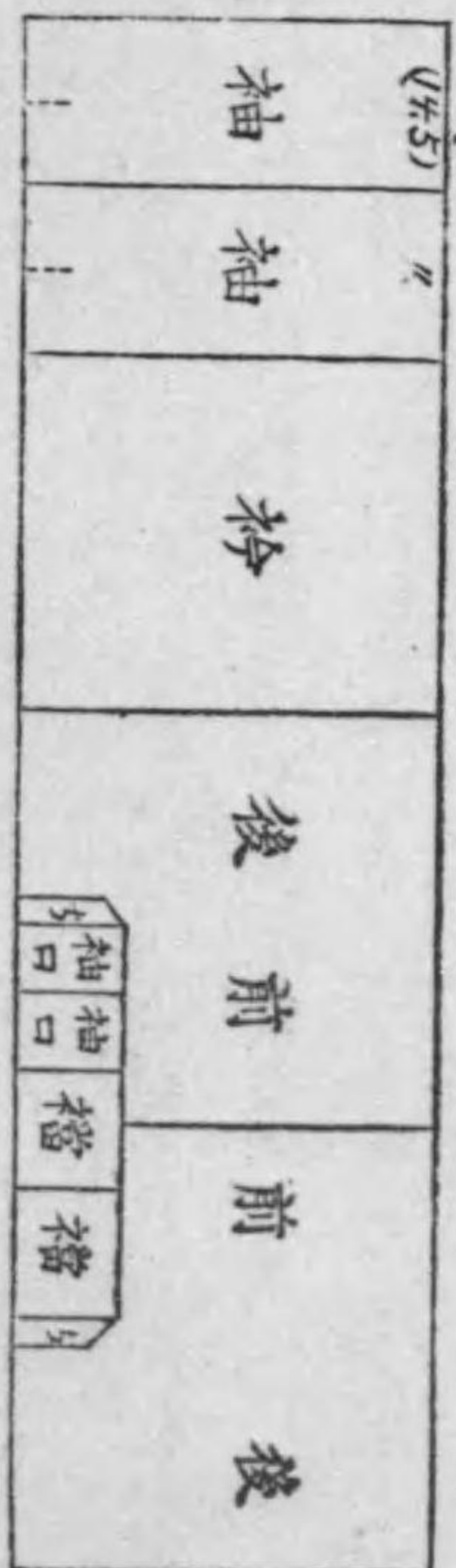
縫方順序

- 一、袖 着物衿と同様であります。
- 二、身頃 後前の胸接を仕、縫代 裏の方に折返し、隠襷を二纏七耗(七分)位の針目に掛けます。次に背縫は衿肩を右に、表を手前 見て裏表四枚を四つ縫にいたします。後襷の附け、襷の上部を留めて、身八つ口を縫ひます。前下りは表は標の通り、裏は標より四耗(一分)縫ひます。此の時裏布をゆるみ加減に縫ふことが必要であります。前身、衿附は表裏揃へて、襷系にて荒く假縫をし、乳を附けます。
- 三、衿附 衿山を背縫に合せて待針を打ち、衿肩廻りにて衿の方を稍ゆるく、其の他は衿、身頃を平に標の通りに待針を打ち、身頃を衿巾の内へ巻きたゝみ、衿縮の方との相標を合せて、待針を打ち、左の衿先から抜き針、或は抄ひ針にして衿を四つ縫ひに附けます。但衿肩廻り脊より裏方へ三〇纏(八寸)ほどの間は、衿の裏側(衿附の方)は放して、衿の表のみ(衿附の方)身頃に附けます。次に衿先を縫ひ、衿の表の方に縫代を折返し、衿附縫目の針目に一針抜に綴ぎて、衿肩より静かに衿を表に引き返します。

前襟を附けて、襟上部の留を仕て、身八つ口を縫ひます。
袖附、留方及び袖の附方は着物袖と同様にて、裏袖は附の両方より縫はれる限り縫ひ、残は極く小針に拵けて置き、衿肩廻り縫残しも極く小針に拵けます。

本裁男衿羽織

裁方積り方



裁方積方は、物と異なりません。が只袖丈が短かいのと衿丈を積ります時、衿肩の繰越が女物より男物の方を少なくいたしますから、従つて衿丈の取り方も割合に少なく積ります。

普通仕立上寸法

普通仕立上寸法は女物と大差がありませんから、異なる所だけ左に記します。

袖口二拾八厘四耗(七寸五分) 袖附袖丈いつばいに付けます。襟巾上四耗(一分)同七厘二耗(一寸九分)衿巾襟裾巾と同寸

標附方

標付方は仕立上寸法に依りまして、方法は女物と同様で御座ります。只繰越の寸法が前に記した通り、女物より少なくて一厘(二分五厘)にいたしますから都合二厘(五分)入れて標付をいたします。

縫方順序

- 一、袖 女物同様の仕方にいたしまして、袖底の所を巾の中央まで縫ひましたら残りの半分は縫ひ残して置きます。
- 二、衿の折り方 女物同様。

三、身頃 胴接ぎをなし前下を縫ひまして、後襟を付け次に衿附をいたします。此處まで女物同様で御座います。

四、袖附 先づ表袖を付けます。附始めと附終り、即ち襟の際の處を前袖附後袖附共四耗(一分)づゝ縫ひ残します。裏袖附は折返表と反對になるやう注意して、身頃の方に折り返しを付けます。前袖附の方は附始めから八種二寸だけ縫ひましたら、二十三種(六寸)程明けて置きまして、其處から一寸づゝ後袖附の終りまで縫つて參ります。(但し袖附の始めと終りとを四耗(一分)づゝ縫ひ残す事を忘れてはなりません)。

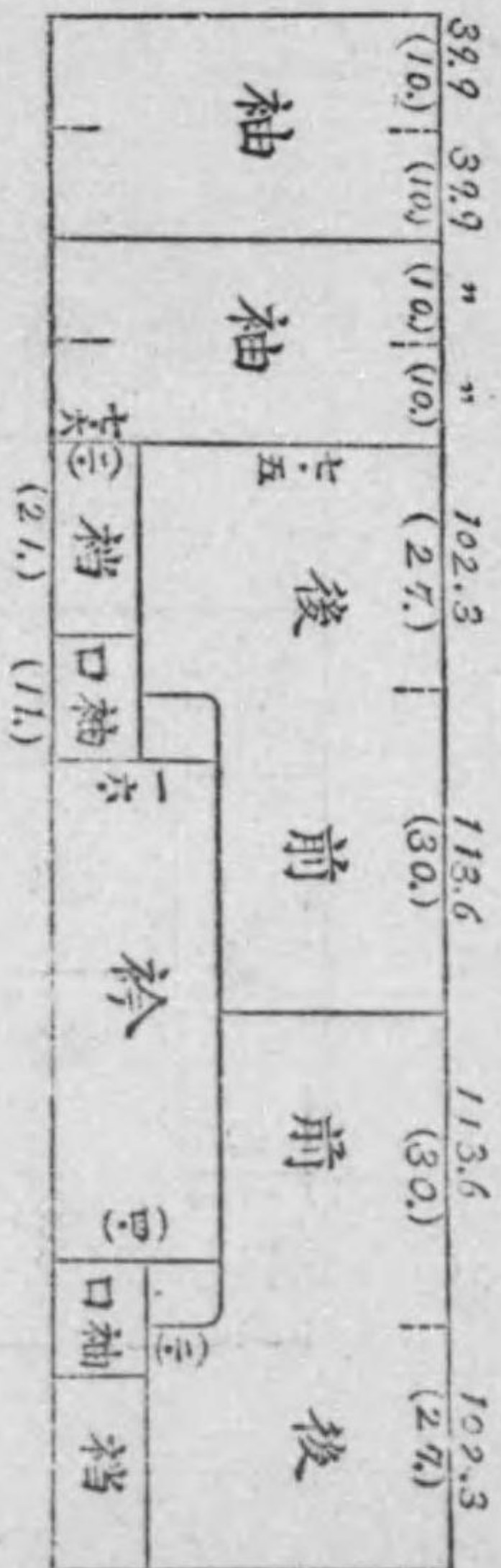
袖附の留め方 兩方共袖が附きましたら留めをいたします。先づ袖附の襟際を持ちまして、表の後袖附の處へ表の前袖附を中表にして重ね、次に裏の後袖附の處に裏の前袖附を中表に重ね合せますと表前袖附表。後袖附。裏後袖附。裏前袖附と云ふ順序に重なります。之を二重の糸を持つて留めるので御座いますが、留め方は今重なつた順序の通り、表前袖附の處を手前に見て次の行き方で針を通します『表身頃。表袖。表袖。表身頃。裏袖。裏身頃。裏袖。』此順にいたしまして、身頃は襟の極際を袖は二耗(五厘)のゆるみを取りまして、折の際を留めるので御座います。斯様にしまして堅く結びましたら、針についた一本の糸を残、残り三本の糸を捻り合せます。

残した一本の糸を持つて袖底の残りを縫つてしまひます。此時裏袖縫込を三角に折りまして、折合の能くなるやうにいたします。

右終りましたら前襟を付け裏袖附の残りを衿付け仕上をいたします。

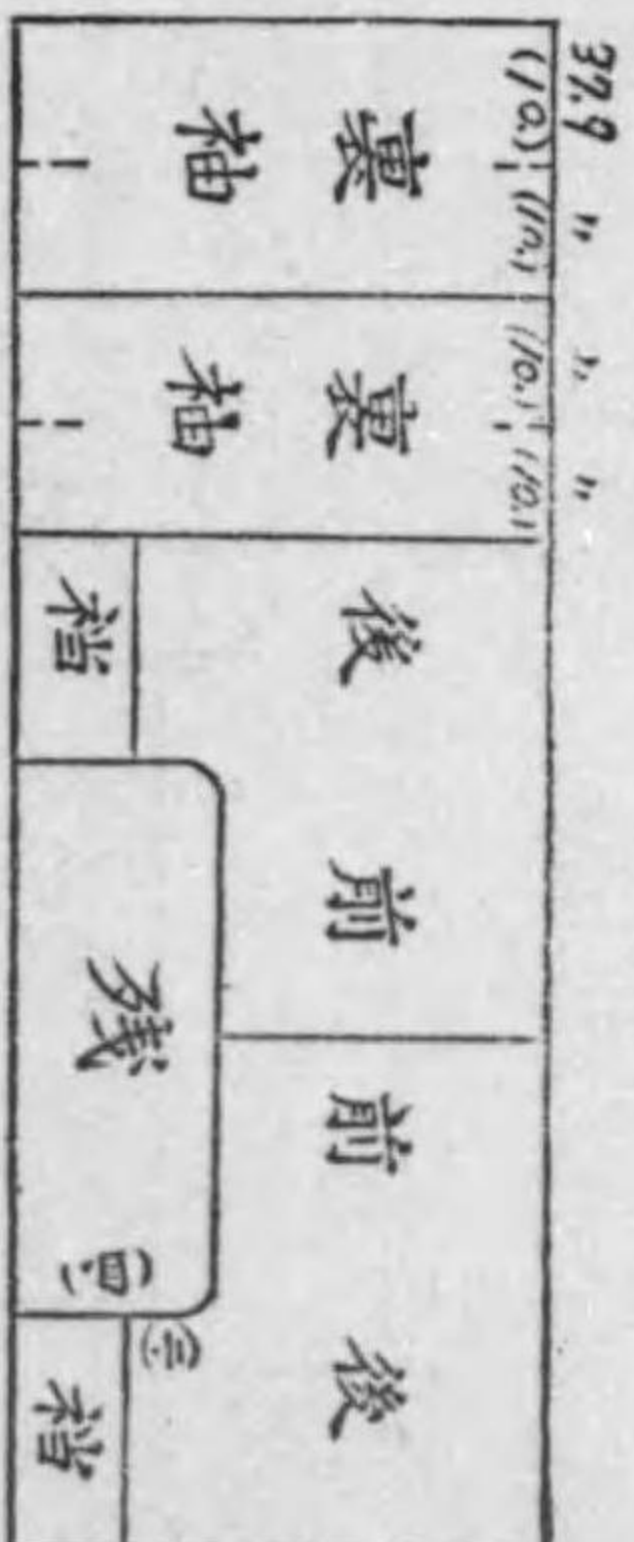
四ツ身衿羽織裁ち方積り方

普通15種(米15種)の用布にて四ツ身衿羽織裁ち方(袖元縁にて)



{用布の總尺一(袖丈×4+前後の差×2)}÷4=後丈
 {5米15種一(38種×4+12種×2)}÷4=1米2種
 135寸 10寸 3寸 27寸

同裏布の裁ち方



四ツ身袷羽織ノ標附方

- 一、袖 兩表袖を二ツ折として重ねまして丈口中と標をいたします。裏袖には袖口布を載せ本裁の時の様に袖口布を附ける標をいたします。次に表と同様標附をいたしますが、袖口の縫代は表より袖口衤の二倍だけ四耗(一分)多く取つて置きます。尙袖口は表より四耗(一分)つめて置きます。
- 二、身頃 本裁袷羽織と置き方は同様です。先づ正しく置きましたら、出来上り後身丈を一糎二耗(三分)を加へて後丈と定め折り返して、胴裏を重ねて接ぎ標をいたします。他は本裁の時と同様にして

前身を後身丈より前下になる三糎五耗(一寸)程と繰越しの二倍二糎(五分)と三ツ袷縫代一糎二耗(三分)と後身丈と合せた寸法に取りまして、胴接の標をなし肩繰越しを九耗(二分五厘)附けまして、前身の上に後身を折り重ねます。

三、身頃標付 脊縫代、袖付、身八ッ口、後巾と標し山標を肩と裾とに致しまして裾丈の寸法を計つて置きます。前身の布に前下三糎一耗(八分)を標し脇の處で後より、一分出しまして後身を取り除け合附けました。前下と脇の四耗(一分)出た處とに斜に下りの標をいたします。

乳下を定めて其處を八耗(二分五厘)の縫代にして裾の處は一糎五耗(四分)位の縫込にして斜に標を附けます。

裾は大人物同様で只巾をいつばいに取ります。

袷の折り方

表袷と裏袷との裁目の處を合せて表の方がゆるまぬ様四耗(一分)の縫代に縫袷を掛けます。次に裁目の端から一糎二耗(三分)の深さに折をつけます。其折の處から袷巾を定めまして裏の方に向けて折ります。それから今折返した裏の布を最初に折つてある裁目の所と突き合せにして残りの布を内に向け

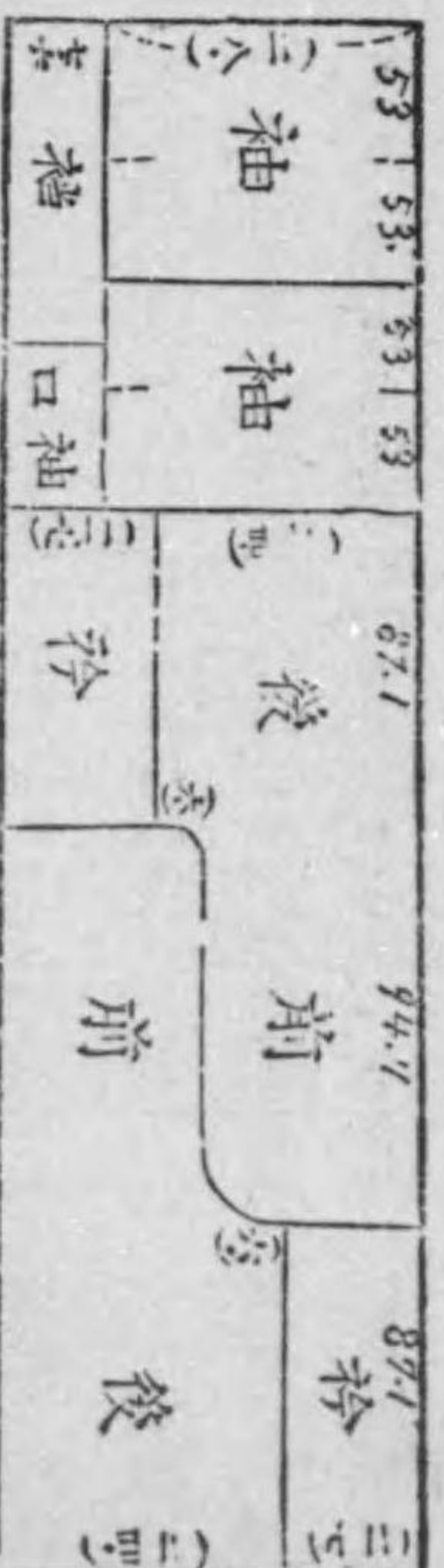
て折り込みます。終りに表布一枚の處を最初の裁目の處の折より三耗(二分弱)引かへて折り込みます。

縫方順序

- 一、袖 四つ身衿の袖と同じ縫方で御座います。
- 二、身頃 襦の入れ方・胴接前下等いづれも大人物衿羽織と異なる處は御座いません。衿附の際裏衿を締める様に仕立ます。時には前襦も後襦も先に付けて置きまして衿附をいたします。(衿先の仕方ば表衿の裏に裏衿を返し表衿の附の處で、裏衿の方を四厘(一分引かへて附より六耗か八耗(一分五厘か二分)出た處を縫ひまして、縫込の一方の側を表衿付に縦ち附けて引き返します)。仕上の仕方は本裁と同様です。

三つ身衿羽織裁ち方

幅4米 釦の用布にて三つ身羽織の裁ち方



{用布の總尺-(袖×4)}+3=後大
 {4米²釦-(53×4)}+3=87釦1耗
 127寸 14寸 23寸

同裏布裁ち方



三つ身衿羽織

標附も縫方順序も四ツ身と同様で只仕立上寸法が異なるのみで御座います。

三ツ身綿入羽織

標附方は四ツ身裕羽織と其他は異なる處は御座いません。只袖口のきを四耗(一分)位ひになる様に標を附ます。

縫方順序

- 一、袖 表袖、裏袖の袖下を別々に縫ひまして、裏袖口には含み綿をいたします。含み綿は裏に當てて、くるみ一握(三分)程入りて六分つゝの針目にかくしを入れます。此針目は一目置きに表に出し一目は綿のみを抄ひます。表袖口の縫目は内側に折り込み躰を掛けて置きます。
- 二、身頃 胴接をいたしまして脊縫は四ツ縫でなく別々に二枚づゝ縫ひます。前下り裕羽織の時は表は裏に二耗(五厘)返る様に縫ひましたが、綿入は四耗(一分)折り返るやうに縫ひます。つまり表を標の通りに縫ひまして、裏は四耗(一分)縫ひ込みます。襟前後共いたします。裕と同様襟上を留め身八ツ口を縫ひまして(身八ツ口は明ない時もあります)(身八ツ口を明けます時は襟上を木裁女

裕のやうに明け身八ツ口を作らない時は、大人男物の時と同じにいたします)袖附をいたします。次に裏返して後身から、前身と綿を入れます事は、本裁男女綿入と同様で御座います。脊縫と襟の縫目に上から假綴ちをいたしまして裕附にかゝります。裕附、身頃の裕附標の表と裏を合せまして、乳下りより下は表は標の通りに裏は四耗(一分)標より外を合せて裕附綴ちをいたします。裕附は四ツ身裕羽織同様、裕裏を新ける方の仕方と同じで御座います。(裕折方は四ツ身裕羽織と同様)

本裁女綿入羽織

- 一、普通仕立寸法は本裁女裕羽織と同様にいたします。
- 一、裁方積り方標附方も同様に致します。

- 一、袖 本裁女綿入袖に同じであります。

二、身頃 前後の胴接ぎをし、前下りの標から、表は標の通りに、裏は六耗(一分五厘)深く待針を打つて縫ひ折は裏身の方へ返して隠躰をかけます。
脊縫は表身頃から裏身頃へと續けて縫ひ、折は左身頃に返へし、躰をかけます。そして襦の表裏を接ぎ合せ、折を裏の方に返し、身頃を手前に見て、襦を附け、折は前後共身頃の方へ返して前後共躰を掛けます。

次に表を外にして裏身頃表身頃の身八つを一旦揃へて襦の上を二耗(五厘)の被を残して中縫ひし、裏側の方に含み綿を當て、表に引返して躰をかけ、身八つ口の留をいただきます。その留方は裏身頃の襦山に針を出し、襦の折山を二枚一度に通し、表身頃の折山を縦に針先を袖附の方に向けて抄ひ裏身の折山へ初めの針目に並べて入れ裏にて結びます。後、留め糸を一重にして身八つ明を標通り袖附まで縫ひ、綿は表につけ、裏に含み綿をして表に返へし躰をかけて、綿を押へます。

三、袖附 留方は本裁女綿入の着物と同様にして表裏の袖を縫ひます。裏袖は開き縫にし、折は身頃の方に折ります。

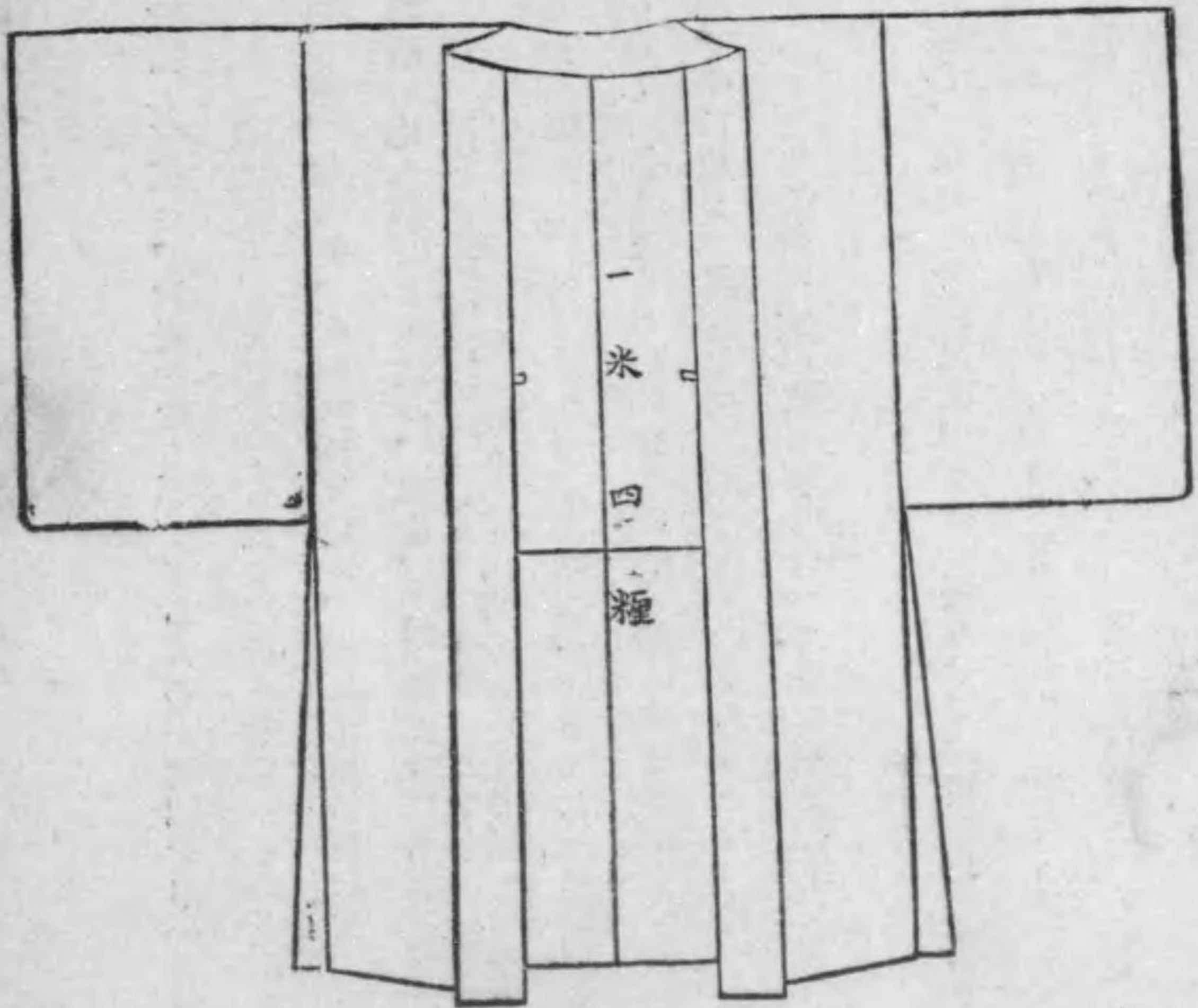
四、綿入方 表身頃を裏返にして、表身頃を上にして、襦は巾の中央にて折り、後身頃の表と裏との間に入れておき、袖を平に延べて、先づ真綿を薄く敷き、小袖綿を裾口一五厘(四寸)餘して、肩の方

は二五厘(六寸)位出して延べ、尙裾を少し厚くするための衽綿を巾一二厘(三寸)の内半分は表巾より出して置き、裾綿を身丈より二厘(五分)位出して折り返し、その上にまた真綿を引き、身八つ口の通りで、脇の綿を斜に切り襦、の中に折り込み、袖にも綿を延べて、袖山の餘りは表裏の袖の間へ折り込み、身頃肩の山も同じく折込み、肩山、袖口、袖丸味に引絲をつけて置き表身頃と裏身頃との肩間から、兩手を差入れて左右の脇の裾を持ち、肩の方へ引き出して後裾を元の方向に廻します。斯く致しますと裏前身頃が上に出ますから、身頃及袖を平にして真綿を敷き脇綿を引延ばして來ます。そして先に引返して置きました肩の綿と同時に袖の綿も延ばし、尙綿の不足の部分に補ひ綿を當て、全體に綿を平に敷き、真綿を引き表に返すのであります。先づ表身頃の裏から手を差入れて袖口、袖丸、振八つ下等要所々指の間に浜み持つて表に引き返して置き、次に襦の裾を持つて身頃を表に返します。

五、紵方 裾を假綴ちし、前身の衽附は表巾を少し張らせて、綴をして乳を附けます。

六、衽附 本裁女衽羽織と同様にして衽を折り、裏身頃の方に當て、待針を打ち、衽先一五厘(四寸)位は半返しにし、衽肩明も小針に返して置きます。背は平に縫ひ、衽先を縫ひ、表に返して、仕上げの飾躰を掛けます。

織羽綿入男裁本



一、裁方 積り方、標附方等すべて袷羽織と同様であります。

縫方順序

- 一、袖 裏袖に袖口切をつけて、表袖、裏袖を別々に縫ひ、袖丸を整へ、裏袖口に含綿を致します。
(口綿綴の仕方は綿入着物の袖に同じであります。)
- 二、身頃 女綿入羽織と同様 あります。
- 三、袖附 表袖は袖下の折山に裏から針を出して襷の際で身頃の前後の折山を突き合せて、布を横に抄ひ(襷の布は必ず抄はぬ事)最初の針に並べて、表袖の折山の際に表から針を入れて留糸を結び、その糸にて袖附を縫ひます。裏袖の留方もこれと同様であります。
- 四、綿入れ方 身頃の疊方、置方、綿入方等凡そ男綿入着物と同様であります。
- 五、衿附 女綿入羽織に同じであります。

23
27
50
29

紋の位置

米 寸 法			名 稱	年 令
前	背	袖	一	ツ 身
十 糎 六 耗	三 糎 七 耗	四 糎 五 耗	三	ツ 身
十 二 糎	四 糎 八 耗	五 糎 六 耗	四	ツ 身
十 三 糎 二 耗	五 糎 六 耗	六 糎 四 耗	大	身
十 五 糎 一 耗	六 糎 八 耗	七 糎 六 耗	大	人

鯨 寸 法			名 稱	年 令
前	背	袖	一	ツ 身
二 寸 八 分	一 寸 一 分	一 寸 二 分	三	ツ 身
三 寸 二 分	一 寸 三 分	一 寸 五 分	四	ツ 身
三 寸 五 分	一 寸 五 分	一 寸 七 分	大	身
四 寸	一 寸 八 分	二 寸	大	人

裁縫教科書(後編)

山内千代著

第十章

単衣羽織

セル又は他の地質でも厚地物の場合には甲斐絹羽二重等を肩當に肩の滑べりよいため用ひます。薄地物の時は肩當切を用ひませんが、只肩廻りの痛みを避けるために、斜切を極く狭く肩廻りだけに、薄地物仕立の説明に有る通りの用ひ方を致します。

裁ち方、積り方説明

短かき用布を以て仕立なければならぬ時には襦を鈎裁に致すこともありますが普通棒襦に裁つことが出来る。程の要尺が充分でございます。

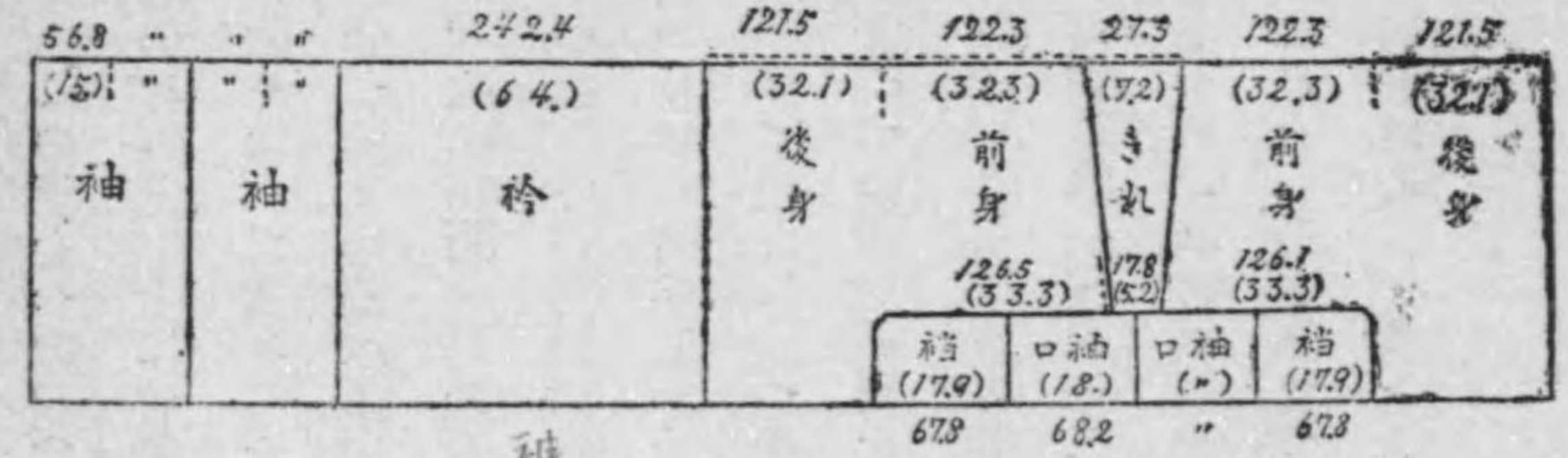
単衣羽織は袷綿入等の羽織と異り、裾の折り返りを三つ折に縮めますので折返り寸法は二十糎(六寸)以上ございませんと見苦しいでございます。普通三つ折の出来上りを十二糎(三寸)位に致します。

本裁男単衣羽織裁ち方、積り方

並巾九米八十四糎(二丈六尺)にて男単衣羽織棒襠裁ち方

出来上り寸法 袖丈 54.糎 (14尺4寸) 身丈 10.糎 (27尺)

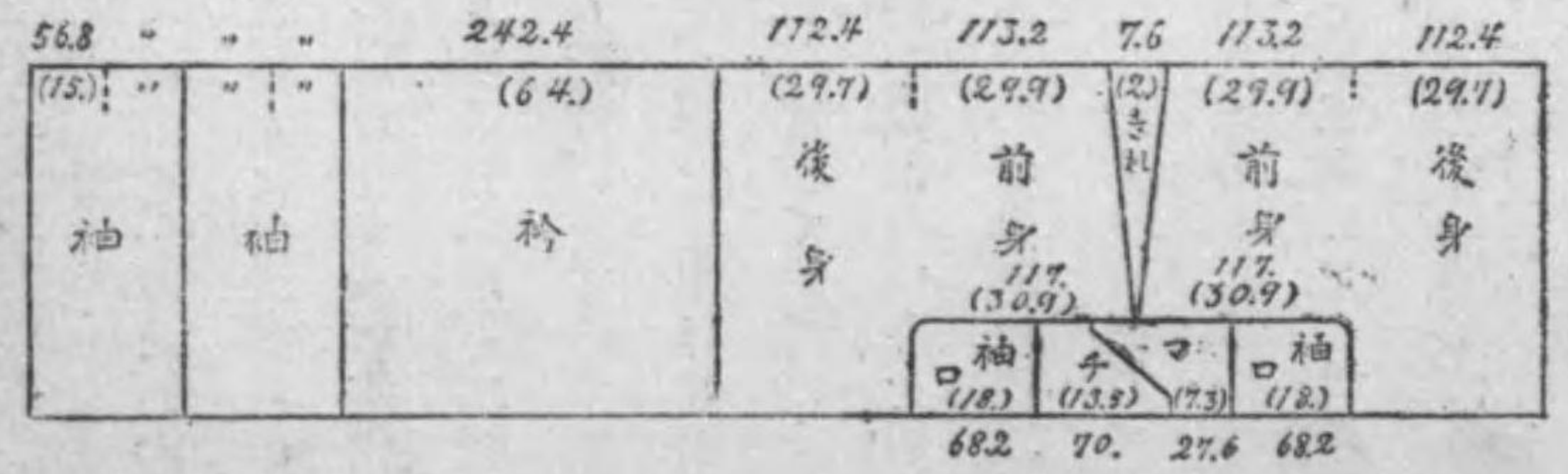
第十章



〔用布の總丈-(袖丈×4+衿丈+襠の補ひ寸法)〕÷4=後丈
 米 {984.5 - (56.8 × 4 + 242.4 + 27.3)} ÷ 4 = 121.5
 鯨尺 (260.) (15.) (64.) (7.3) 32.1
 後丈+肩の繰り越し=脇丈 脇丈+前下り=前丈
 米 121.5 + 0.8 = 122.3 122.3 + 3.8 = 126.1
 鯨尺 32.1 0.2 32.3 32.3 1. 33.3

女物……〔裁切袖口布-(袖附の寸法+肩の繰り越し分+身八つ口)〕×2=襠の補ひ寸法
 男物……〔裁切袖口布-(袖附の寸法+肩の繰り越し分)〕×2=襠の補ひ寸法
 {68.2 - (53.85 + 0.8)} × 2 = 27.3
 (18.) (14.4) (0.2) (7.0)

並幅九米二十八糎六毫(二丈四尺五寸二分)にて男単衣羽織裁ち方



〔用布の總丈-(袖丈×4)+衿丈+前下り+繰り越し×2〕÷4=後丈
 {928.6 - (56.8 × 4) + 242.4 + 3.8 + 0.4 × 2} ÷ 4 = 112.5
 245.2 1.5 64. 1. 0.1 29.7
 後丈+肩の繰り越し分=脇丈 脇丈+前下り=前丈
 112.4 + 0.8 = 113.2 113.2 + 3.8 = 117.
 29.7 0.2 29.9 29.9 1. 30.9

用布の充分の時は十六糎(四寸)位迄はあつてもよろしいのであります。積り方は袖丈の四倍に加へる衿用布及び襠の丈の補ひ分とを計算して總用布の内より引きまして其の残りを四等分致します。それが後身丈の裁切寸法であります。後身丈へ先きに引きたる襠補ひ寸法だけ加へたる物は假の前身丈となります。前身丈用布は後身丈に四糎(一寸)の前下りと、肩の繰り越し分だけが長くあればよろしいのであります。前身丈がこれだけでは襠と袖口布との用布に足りませんので前身頃の先きへむだ切れと稱して襠の補ひ寸法を入るのであります。補ひ寸法を知りませぬには袖口切丈の二倍つまり片袖口分から出来上りの袖丈即ち袖附だけ(女羽織は身八つ口の明まで)を引きますと残りの寸法は補ひ分の寸法となり、この寸法だけを後裁切身丈に加へますと前身頃の裁ち切り寸法となり、襠と袖口布とを丁度よく裁ち取ることが出来ます。裾折りの返りを三つ折に幅を廣くするわけは、着ました時に裾に幾分の落着が出来ますのと仕立の美も伴ひますのを兼ねるのであります。或る時は紗、すきや等の女羽織には美術的な好みの形を絞り込みになる方の中切に鉄を入れて作ることもございます。

男単衣羽織標附け方

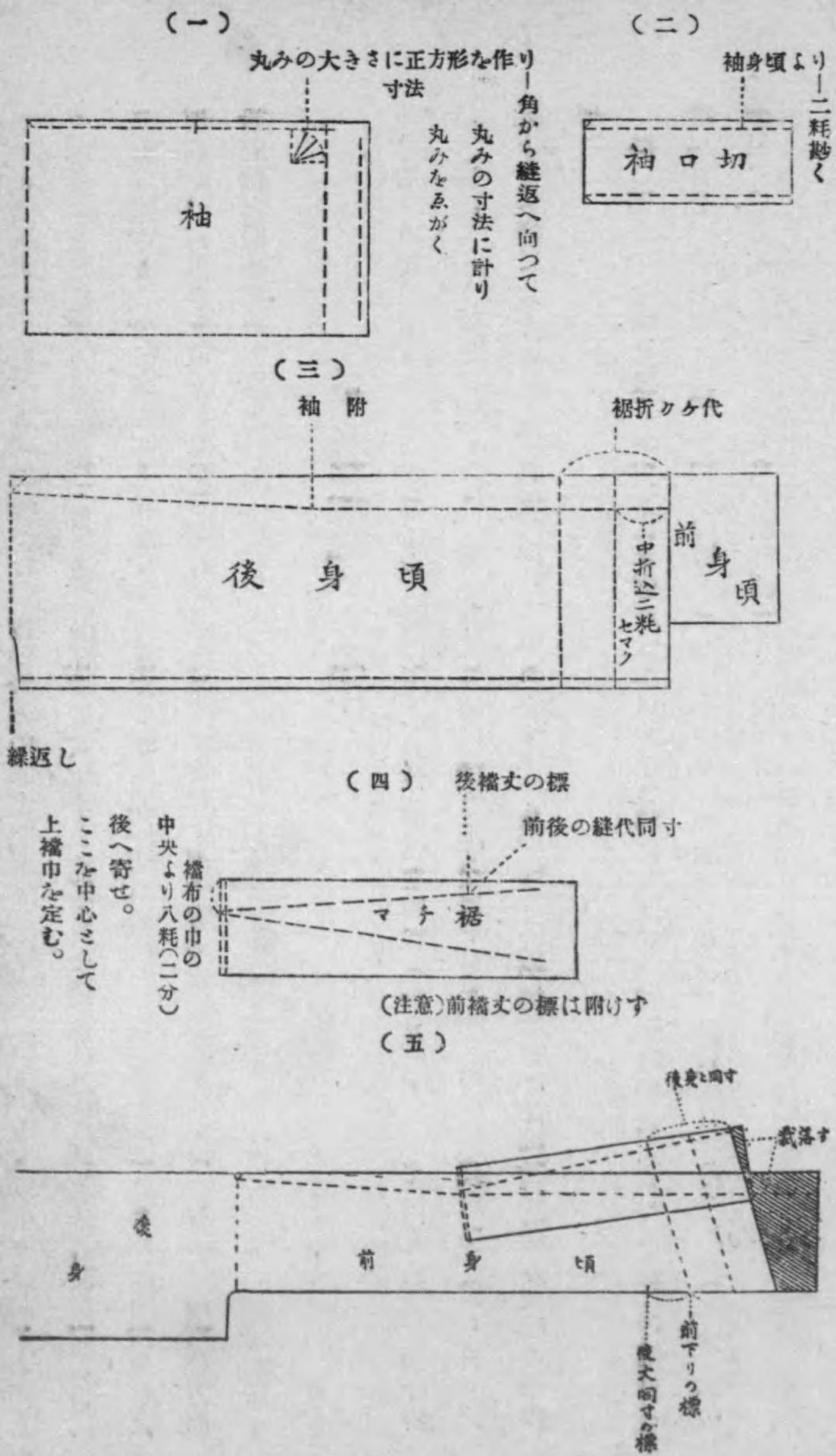
一、袖 中表に兩袖を別々に丈を二つ折にしてわなを左に袖口を向ふに二枚の袖を重ね置き、山、丈、

袖、口、巾、袖丸みの標をつけ、次に袖口切の標をつけます。

二、身頃 左右の身頃を中表に脊縫ひの所をよく合せて衿肩明を揃へ布の動かぬための假縫を肩巾に掛け(袷羽織の如くに)て前身頃を下に後身頃を上(に)に脊縫を手前に肩を左に此の時肩の繰越しも付けて置きまして、先づ身丈の出来上りに三つ衿の縫代を加へて丈の標をつけます。脊縫代、袖附、肩巾後巾の標を付け、次に裾縮代を計り、その寸法の二分の一より中折となる方の巾を二耗(五厘)短く標を付けます。つまりこの裾縮代も普通単衣物の裾縮の様に三つ折り縮けに致すのでありまして只その縮代の中が広いだけの相違でございます。後裾附の丈を計り置き、裾の標附けに掛ります。先づ裾の上を四耗(二分)の巾に三つ折縮けに致しまして左右の裾を中表に重ねて、裾の上を左にして置き、裾の上より計つて後裾丈の標を向ふ側にのみ附けます。裾巾の標を裾巾の中央に定めて附け、裾の上は、裾布の中央より八耗(二分)向ふへ寄せて、其處を中心として男羽織は二耗(五厘)づゝ、両方へ出し、女羽織は一耗(約三分)づゝ(即ち上裾巾の1/2)を(両方へ)出して、裾の標とこの標とに指を當て、斜に幅の標を附けます。尙丈標より下の中、縮代に成る分は上の巾の斜線を引き延ばして廣くなるがまゝに定めます、斯うして標附けを終りたる裾を第五圖に見る様に前身頃脇の標附けの上に裾の前身附の方の標とよく合せて載せ待針にて留め置き、後身丈の標を前身の手前に寫し、

単衣羽織標附方順序

第十章



五

この標より計つて前下りの標をつけ、襜の後丈の標と前下りの標とに指を當て、前下りの斜めの標をつけます。次に裾縮代の中折の標を後身同様に定めますと前布及び襜布に斜めのむだ切れが出来ます。これは圖の如く切り落してしまひます。裁方の際に襜の補ひ切れとして入れて置きました前先きむだ切れで、前下りを取りし餘分の切れであります。此れで裾の方の標は附きました。衿附けの標し方は、衿羽織と同様であります。

単衣羽織縫ひ方順序

一、袖 地質の厚薄に拘らず袖下の縫込の多い時は縫込を四耗(一分)ずらして内袖の方に縮け附け、或はちどり附けに致します。縫込少ない時は硬き地質の場合を除くの外は袋縫ひに致します。袖下を袋縫ひに致す時は先づ浅縫ひして置きます。(この仕方は厚地物並に薄地物の縫方説明の章参照)

袖口切の下の端を浅く折つて伏せ縫或は小さく千鳥縫に又は三つ折縮けに致しまして表袖の袖口と縫ひ合せ、衿羽織と同様に袖口の留めをしてその糸にて袖下を縫ひ、袖口切れの奥を二耗(五分)位の針目に成るべく針目の目立たぬ様に注意して縮けます。

二、身頃 脊縫を耳に鉄を入れたる場合或は耳の色の異つて居ります場合は袋縫に致します。普通は二重縫にして置きます。脊紋のある場合は先に紋だけを、よく合せて紋と共色の糸にて縫ひ置き、袋縫の必要ある時は紋の箇所はあとで耳を中へ折つて縮け、紋の部分を除いて他は普通の仕方で袋縫に致します。次に、縫方順序は衿羽織と異ひ前襜を先に附けるのであります。前脇の袖附標と襜の山の前標とを合せて待針を打ち、裾は出来上りの折標を合せて待針を打ち、襜布を向ふにして身頃を手前に見て縫ひますが、裾から縫ひます時は出来上り裾折の標から縫始めまして此の時縫糸は裾折込を縫へるだけ長く残して置きます。袖附から縫始めました時は出来上り裾折の標まで縫ひまして一針返し留めをなし、縫糸を裾折込を縫へるだけ長く餘して切ります。斯くて襜の出来上り丈だけを縫ひ終りましたならば裾折を一旦身頃へ折り返して平に置き、前下りを(襜も同時に)折縮代の標の通りに折りを附けて三つ折に疊み、襜の縫代を出来るだけ浅めて前身脇縫の折をその上に定め、襜の方に縫標をつけて裾折を開き、裏内側から待針を打ち、襜附の時残し置きし縫糸にて裾中折の標まで縫ひ、被せをかけて表に引返して元の通り三つ折に疊み込み裾縮けの折り山を假の躰で押へて置きました、衿附けにかゝります。衿折り方心の入れ方、衿附け方等衿羽織と同様でありまして、唯絹等の仕立の場合には心を綴ぢ附ける糸を共色の糸にていたします。肩當はセル等の厚地物の仕立には肩すべりを、

絹などの薄地物の仕立には衿肩廻りに斜布を當てるのでありましてその仕方は薄地物縫方説明の章を御覽下さい。次に身頃を手前にして後襟と後身頃とを丈の標を合せて待針を打ち、身頃は眞直に襟は篋標の通りに裾縮代の中折の標まで一度に縫ひ被せをかけて表に返し、裾縮代を前身頃に倣つて折り、假袂をかけて一糎五耗(四分)の針目に表の布は織糸二筋程を抄ふ心得で縮けます。次に袖を附けます、袖附けの留め方は男羽織は男綿入羽織と同様に、女羽織は女單衣物に同様であります。袖を縫ひ了りまして襟の縫代を脇縫込に縮け附け、更に脇縫込を絹布單衣の如く耳を折つて身頃に折縮けの仕方に縮けつきます。身頃の縫込時時は襟の縫代を身頃に縮けつきます。

第十一章

本裁單衣合羽

普通仕立上げ寸法

袖丈……………着物より八耗(二分)長く
袖附……………着物より八耗(二分)多く

袖口……………着物と同寸法
袖巾……………着物より四耗(一分)長く
身丈……………着物より四耗(一分)短く
後巾……………身八つ口の處で着物と同寸法
裾は着物より二糎(五分)長く
行き……………着物より四耗(一分)長く
肩巾……………着物と同寸法
堅衿下り……………衿下りより二糎(五分)多く
堅衿巾……………裾は十五糎(四寸)
上は十四糎三耗(三寸八分)
小衿巾……………二糎(五分)
衿肩明……………着物より八耗(二分)多く
繰越し……………二糎(五分)

本裁單衣合羽裁ち方

並巾十米四十五糎(2丈7尺4寸)にて本裁單衣合羽裁ち方

62.5	140.	144.	144.	140.	113.5
(165)	(37)	(37)	(30)	(30)	
袖	袖	身	頃	堅衿	堅衿
		ヒモ	衿	袖口	袖口
			(18)	(18)	

九

{ 總丈 - (袖丈 × 4 + 堅衿丈 × 2 + 繰越し × 2) } ÷ 4 = 後丈

1045.	625	113.5	4.	140
(274.)	(165)	(30.)	(1.)	(37.)

本裁單衣合羽標附け方

- 一、袖 表を中に兩袖別々に山を左に裾を右に置き、山、丈、巾、袖口、袖附の標を附けます。袖下は袋縫ひ或は折り筋に致します。折り筋に致します場合には袖下を四耗(一分)ずらして兩袖向ひ合せに重ねて置きまして袖全部に互り標附け致します。袖口切の標附け方は單衣羽織と同様であります。
- 二、身頃 中表に脊、衿肩明等をよく揃へて前身を下に後身頃を上を前に肩を左に置きまして身丈、脊縫、袖附、身八つ口、後巾、肩巾、裾巾の順序に標を附けます。裾縮の巾は着物の裾縮よりも出来上りを廣く普通三種(八分)位に致します。身八つ口から裾へは糸を引張つて斜めに身巾の標を付けます。後の標が濟みましたらば後身頃を左の方へ取り除けて前身脇縫の標を後の標通りに寫します、裾縮の標は脇縫代標しよりも堅衿附前幅の所で裾を一種二耗(三分)揚げて脇から斜めに裾縮の標をつけ、それから堅衿下りの標ポケットの位置の標(堅衿下りの標より凡そ十二耗(三寸)下げる)ポケット口幅の標を附け、堅衿付き縫代を一種(二分五厘)に標し、堅衿付きの丈の寸法を計り置き、次に堅衿標附け方に移ります。
- 三、堅衿 中表に巾を二つ折にしてわなを手前に上を左に裾を右にして二枚を重ね置き、上の縫代は

小衿巾より四耗(一分)せまく標し、丈の標をつけ、上の巾、裾の巾を定め上から裾へ糸を引張つて斜めに堅衿巾の標をつけ、上からポケット位置の標ポケット口幅の標を付けます。(但し下前にのみ)それから裾の手前を八耗(二分)揚げて附の方から斜めに裾縫代の標を付けます。斯くて合羽の裾は、前身裾で一種二耗(三分)堅衿裾で八耗(二分)都合二種(五分)程が羽織及び半コートとは反對に前が上りますので。そして上りの分の布を切り落しませんで其のまま縮けますから裾縮が前は後よりも幅が廣くなりますがそれでよろしいのであります。堅衿下りは着物の衤下りより二種(五分)多く致しますのが普通であります。堅衿附縫代は肩から裾まで真直に致します。

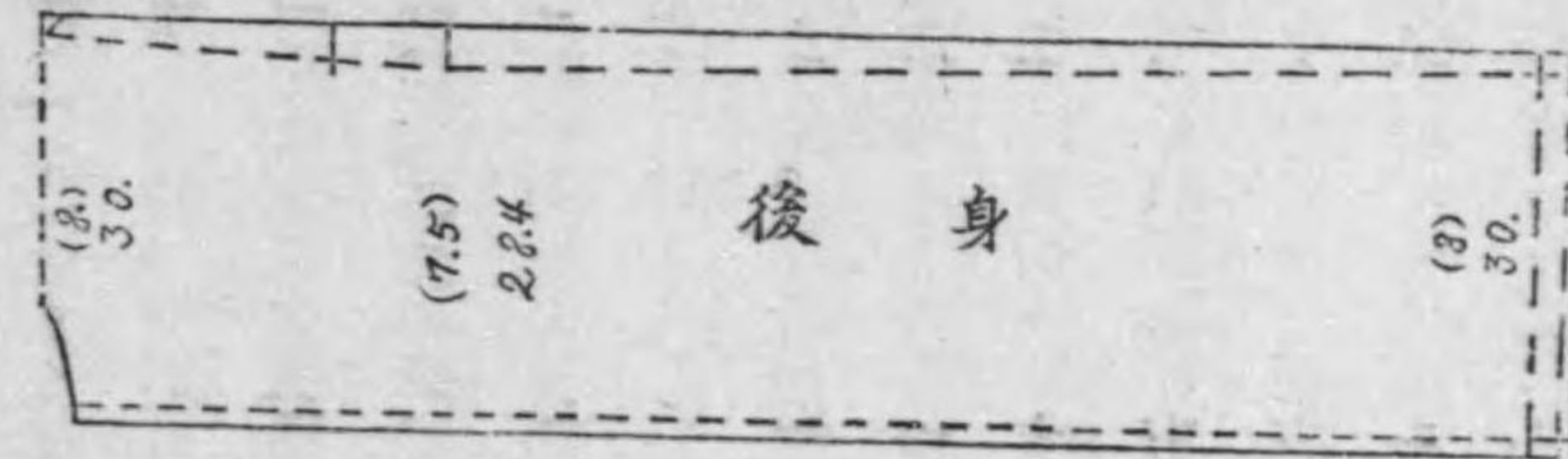
四、小衿 巾を出来上り衿巾の四倍に裁切り。長さは堅衿巾に堅衿下り、衿肩廻りと尙衿先縫代を加へて二倍したる丈に裁切ります。

五、小衿折り方、及び標附け方 一方を附の縫代として一種(二分五厘)に折り、此の折山より出来上り幅の二倍に折りを附け、兩方の折に裏より釧を掛け、此れを尙巾を眞二つに折り小衿出来上りの巾にして今度は衿丈の中央に標を附けて身頃脊縫の山に合せ衿を附ける様になり合せて參りますが肩の丸味の所では羽織と反對に小衿を釣らせませすそれから堅衿下りの角の所までは平に合せて見て小衿の角となる堅衿下りの角の所に縫標を附し。この縫ひ標から堅衿の幅を標を附けますこの標は小衿先

本裁單衣合羽標付け方

合羽標付け方

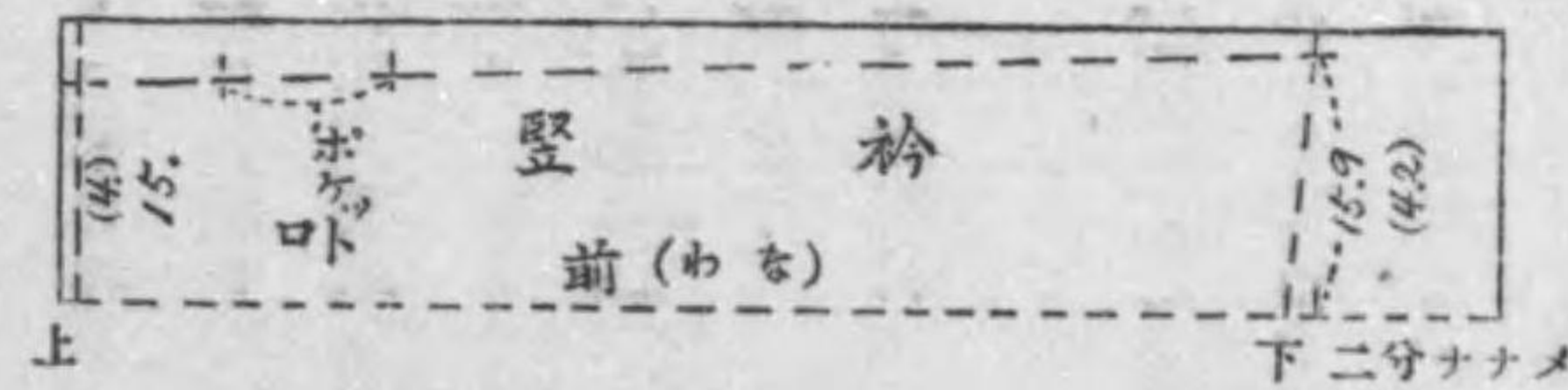
(1)



袖附身ハコ (2)



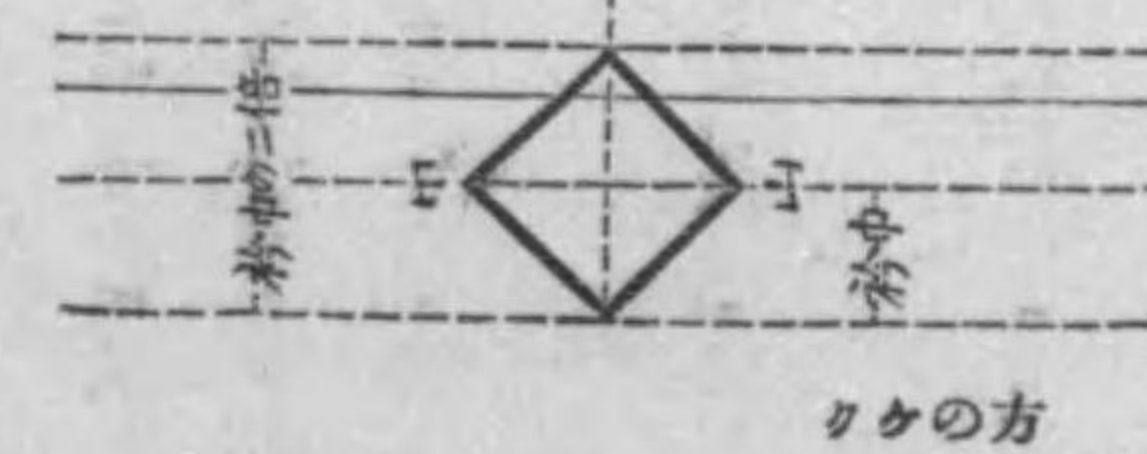
附 (3)



(4)

小衿額縁標付け方

額縁 角 附の方



きの縫ひ標に成りますのであります、丈の標がすみましたので第四圖の如く角の縫標の所を額縁を作る標を致します。額縁の縫代の深さは小衿巾と同寸法にいたします。(幅の中央に出来上り幅だけ正
方形の標しが出来ますわけであります)

六、ポケット 長さ三十糎(八寸)幅は堅衿幅に縫代を加へたる裁切りにしてわなを手前に上部を左に置き上部から一糎六耗(四分)に標し其の標から計つてポケット口明き標をつけ、幅は堅衿幅出来上りより二耗(五厘)せまく標し下の方袋幅を尙四耗(一分)結め口より斜に標を附けて上下の縫代は八耗(二分)に致します。

單衣合羽 縫ひ方順序

- 一、袖 單衣羽織と同様であります。
- 二、身頃 脊縫を致しますに衿肩を右に持ち肩當布を向ふに附けて二重縫ひに致し、折被せをかけて肩當を開き、表身頃と平に合せ衿胸廻りを表に揃へて縫躰をかけ、脇は袖縫の標より二糎(五分)位離れたる所を假躰にて押へて置きまして脇縫ひを致しませぬうちに堅衿を附けますから前身の裾縮代を三つ折にして假に躰をかけて置き、堅衿にて前身をくるみ、地質により一針抜き或は抄ひ針の仕方

三つ縫に致します。斯様にして上前は上から裾まで縫ひますが下前は裾からポケットの口までを三つ縫に致しましてポケットの口明は縫ひ残し、口より上部は堅衿の表と身頃と二枚丈けを縫ひ堅衿の裏はそのまゝにして置きポケットの口明にポケットの布を縫ひ合せます。その仕方は先づ身頃にポケット布の表を合せて縫ひ付け折はポケットの方に返し、ポケット布の片方は堅衿の方の口明の標に縫ひ付け、折はけぬき合せ若しくは幾分ポケット布の方が内側に引込み加減に躰を掛けてポケットの下部を袋に縫ひ。上前下前の裾を標より四耗(一分)先きを縫ひ、折は裏の方へ返し縫目を衿附に綴ぢつて堅衿を表に引き返します、そして下前はポケットの上部を裏堅衿に隠躰或は千鳥縫にて付け、先きに縫ひはなして置きました處の裏堅衿を身頃縫目に縮けつづけます、次に脇縫を單衣物同様に致し裾縮代を折り、單衣同様に裾縮けを致します。

三、小衿 第四圖の「山」の字と山の字の角を裏を出して合せて待針を打ち、斜めの標通を針の向きを正しく半返し或は極く細かく抜き針に縫ひまして縫込をわなのまゝ縫目を割り裏から釧をかけて出来上り衿幅に疊みますと第六圖の如く小衿出来上りの形になります。

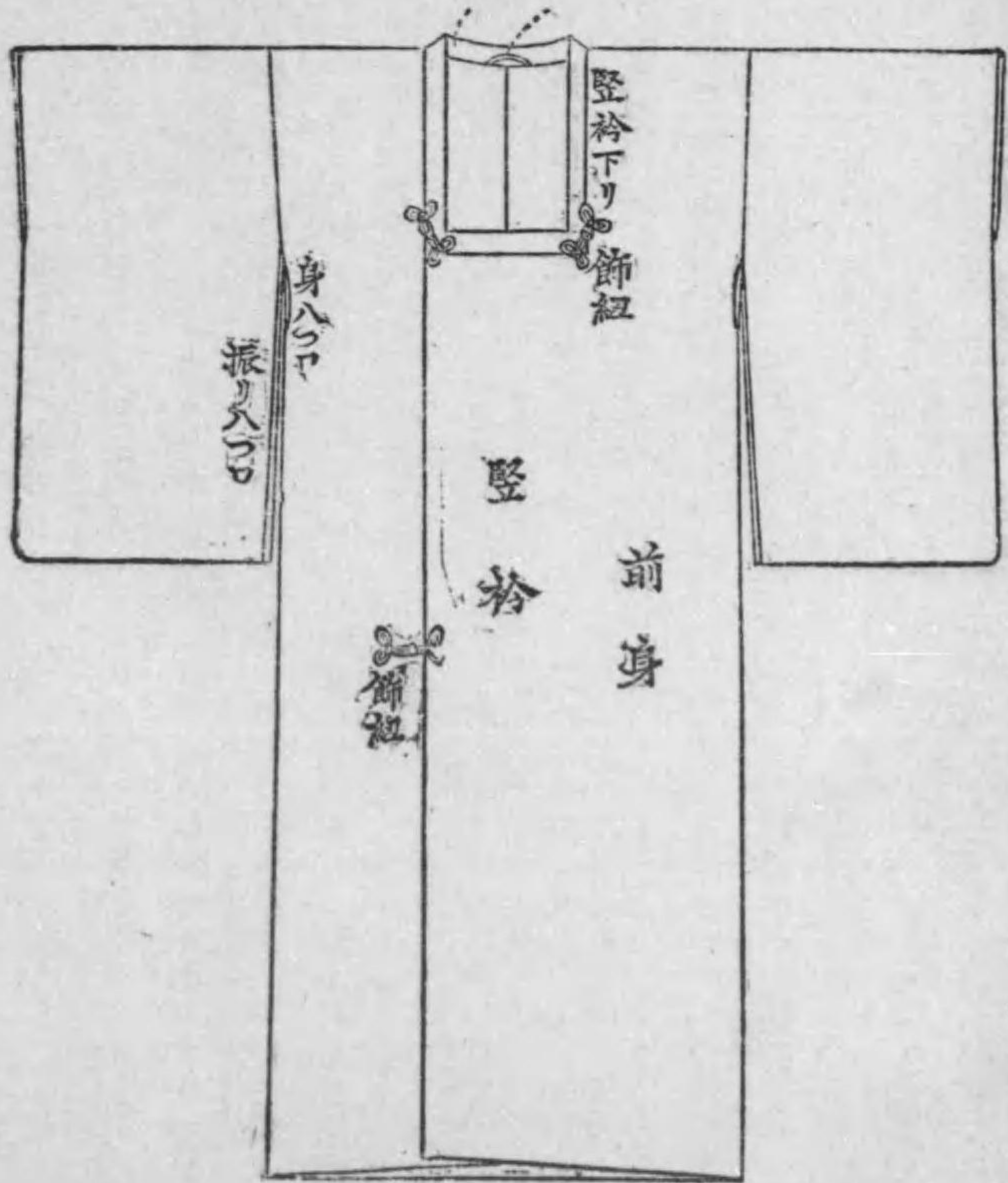
四、小衿附け方 縫代一耗(二分五厘)の方を表衿附として額縁の角と身頃堅衿下りの角に合せて、身頃の裏堅衿下りの角より針を出して小衿額縁のかどを裏の方より極めて小さく布織糸を一二本とも思

はれる程を横に抄ひ針を裏に抜きまして結び二本をよつて切ります、斯うして小衿と身頃の角をよく留めて置きました衿肩丸味のところは羽織衿附と反對に小衿の方を釣らせて全體に待針を打ち小衿を縫ひ付けるのでありますが、額縁の際まで中から縫ひますことは困難でありますから、角の上下二耗(五分)位の間は身頃の裏より割り接ぎ縫ひに致します、他は下前堅衿先より縫ひ始めて地質により普通縫ひ半返し縫ひ、抜き針縫ひの仕立方で肩の丸味の處は待針を打つ時小衿を釣らせてありますから、べて立ち衿は衿肩廻りで衿の方を張り加減に縫ひつづけます。

其他 袖附け留め方縫ひ方肩當脇の縮け附け方等は絹布單衣物と同様に致します。

五、飾紐附け方 胸へ附ける飾紐は玉の結んである方を下に額縁を中心にして小衿の上に附けます、尙下前堅衿の小衿先きの裏に玉のみを結びし紐の端は小布にて包みて、縮け付け、上前にこの玉を引き掛ける輪の紐を作り端を小布に包みて下前の玉に丁度よき高さに小衿の脇につけます、腰の飾紐は堅衿丈の二分の一より四耗(一寸)上つた所に玉の附きたる方の飾紐を堅衿の方につけ、これと對等の高さに下前の飾紐は堅衿附際より四耗(一寸)前身頃の方に寄せて附けます。尙出来上り幅二耗(五分)長さ三十耗(八寸)の縮け紐を肩裏布のきれにて二本作り下前堅衿の裏(高さは上前の飾紐と同じ所)につけ、他の一本は上前身頃の裏(位置は下前身頃の飾紐と同じ所)につけま

コートが出来上り圖



す。

単衣長コート

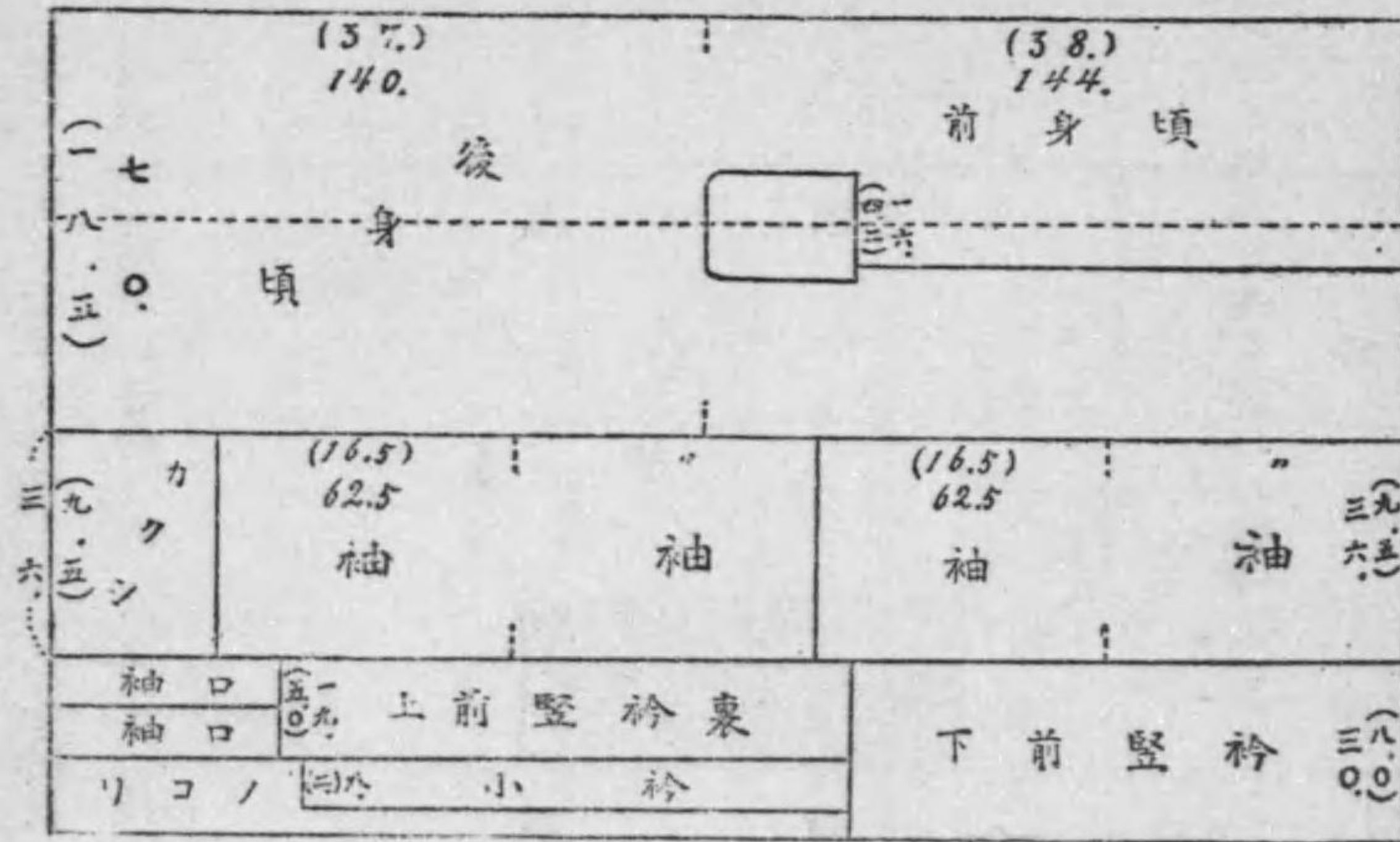
一、裁ち方 並巾裁大巾裁の別があります。並巾裁は單合羽と異なる所がありません。左に大巾にて單衣長コートの裁ち方を申します。

大巾物は、裁ち切り後丈に裁ち切り前丈を加へたる寸法を總丈から裁ち放ち残りの大巾から裁ち切り袖巾を割きとりましてこれを袖用布となしこの丈を四つ折にして兩袖に裁ち切り袖と致します。用布のあまる時は豫め裁ち切り袖丈を定めその四倍に裁ち切り残り布を出します。袖用布を割きたる方の布にて上前身返し下前堅衿、小衿、袖口布等を裁ちます。

堅衿下りの裁練り方

身頃用布の巾を中表に二つ折にして、わなを手前に、次に丈を二つ折りにして肩を左に、肩の繰越し寸法の二倍を前後の差として前を長く、前身頃を下にして折り重ね、折山に糸標しを附けて後を取り除け、裁ち練りの標を入れます。以下第一圖參照、先づ肩折山に衿肩明の寸法「九種一耗(二寸四分)」を

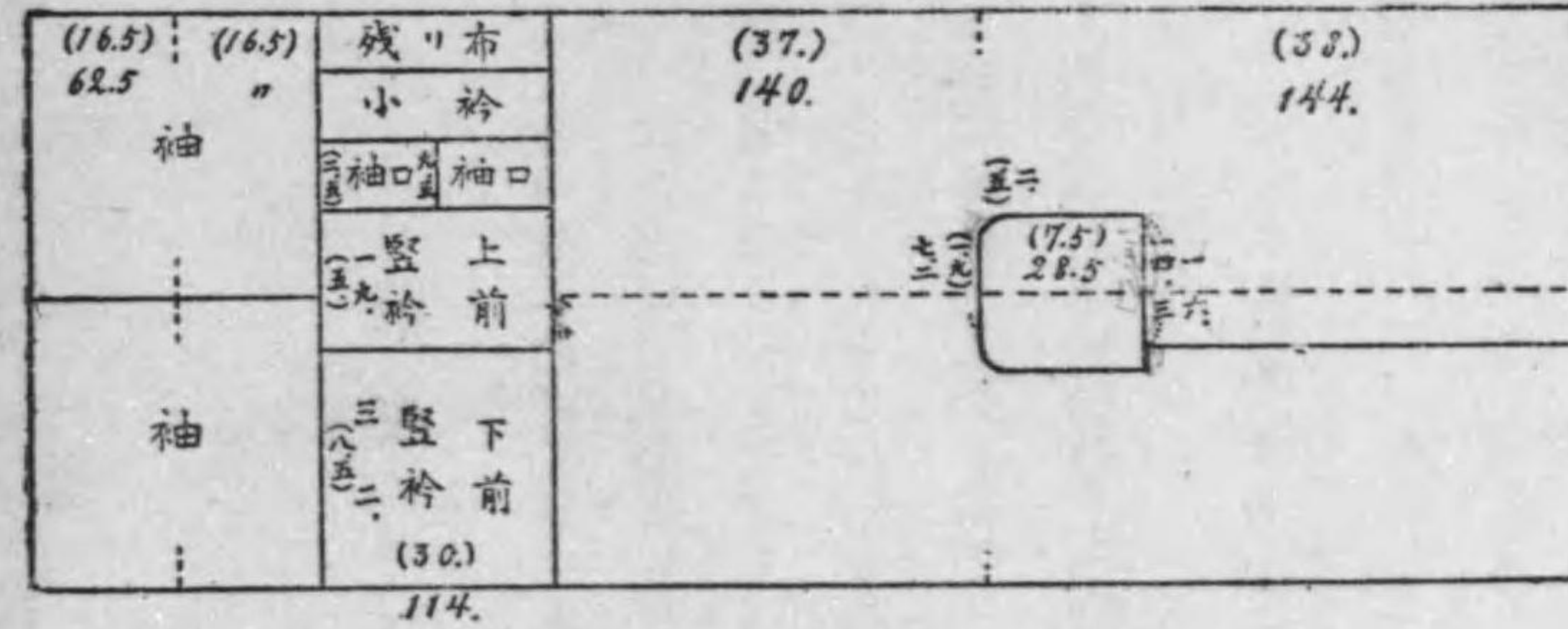
一米三十六釐(3尺6寸)巾長さ二米八十四釐(7尺5寸)にて長コート裁方



$(\text{總丈} - \text{繰越} \times 2) + 3 = \text{後丈}$
 $\text{後丈} + \text{繰越} \times 2 = \text{前丈}$
 $\text{後丈} \times 2 + \text{繰越} \times 2 = \text{總丈}$

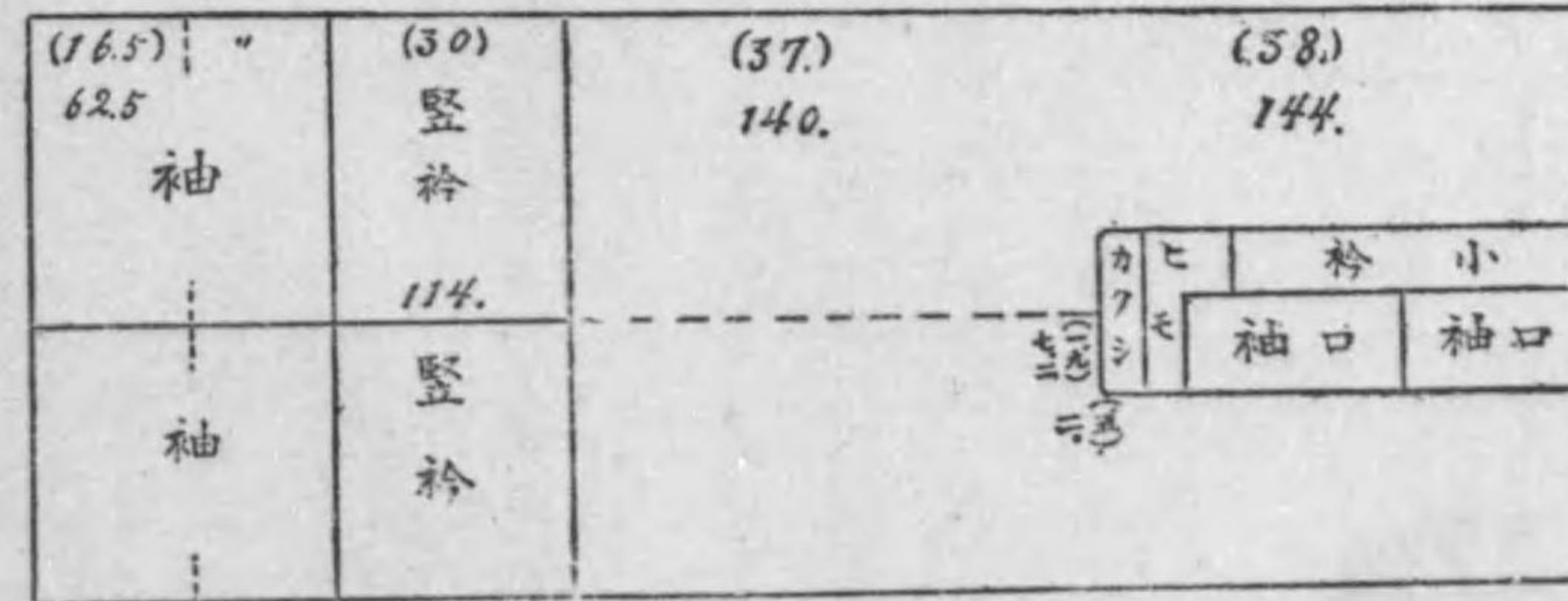
長コート裁方

76 釐巾(2尺)5米23釐(1丈3尺8寸)にて長コート裁方

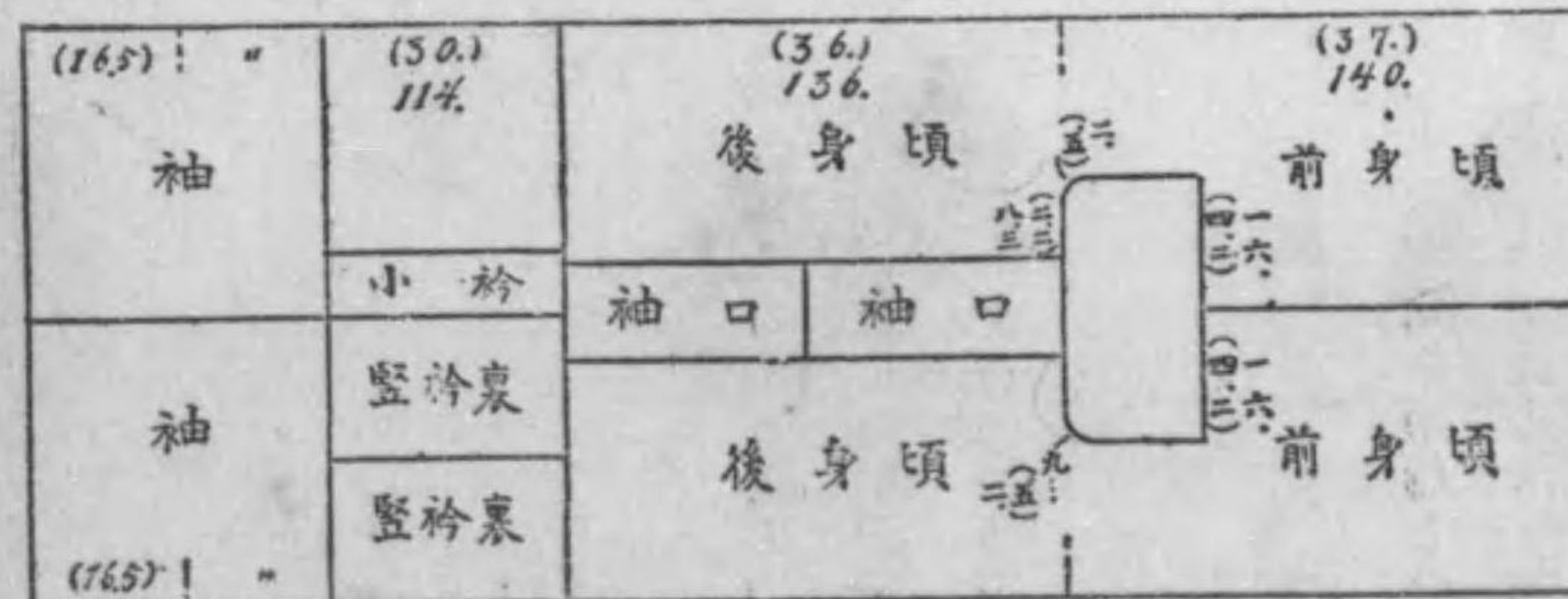


裁縫教科書 其ノ一

$\{\text{總丈} - (\text{袖丈} \times 2) + \text{整衿下り} + (\text{繰越し} \times 2)\} + 3 = \text{後丈}$
 $\text{丈袖} \times 2 + \text{後丈} \times 3 + \text{繰越} \times 2 - \text{整衿下} = \text{總丈}$
 $\text{後丈} + \text{繰越} \times 2 = \text{前丈}$

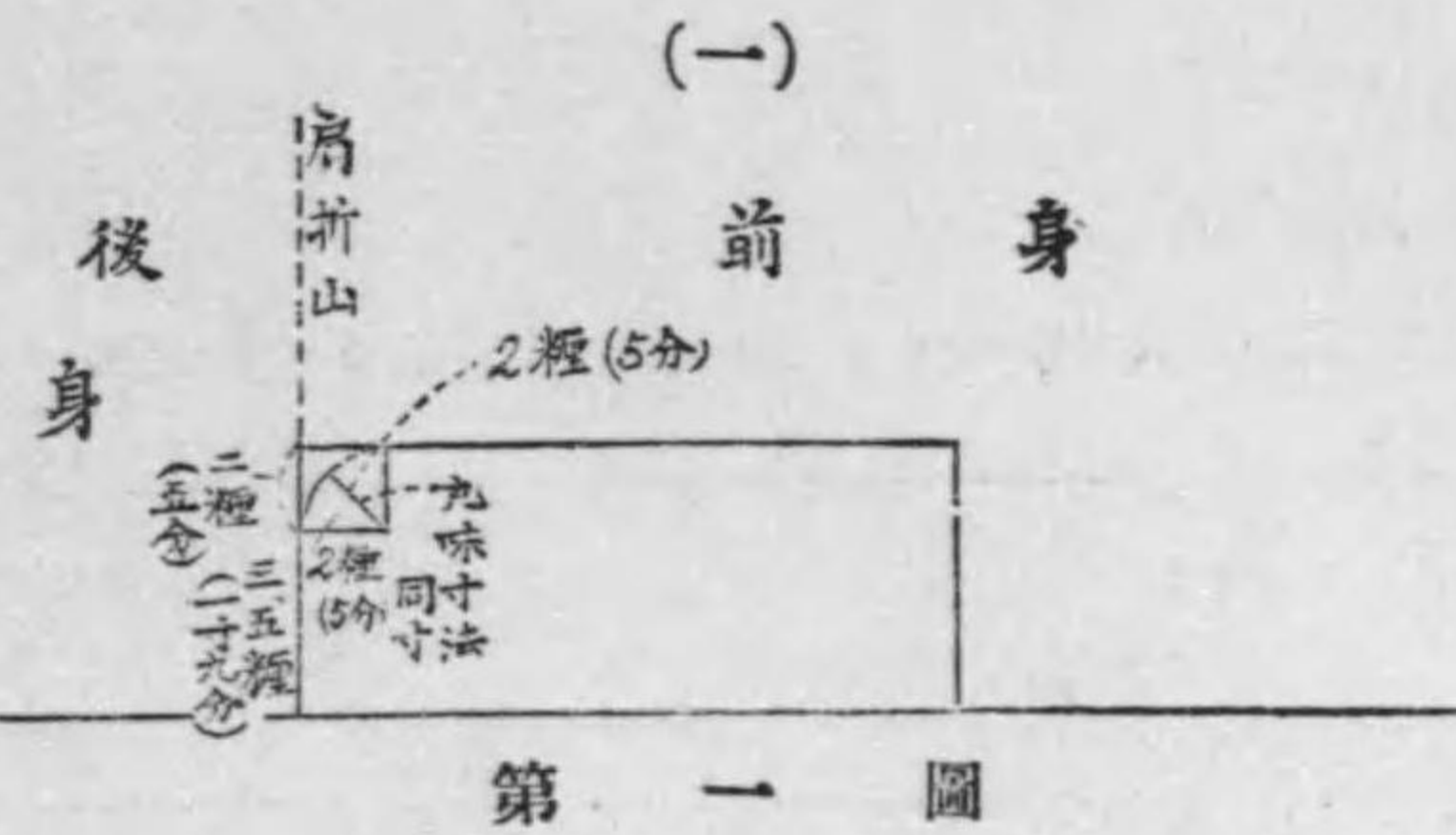


其ノ二

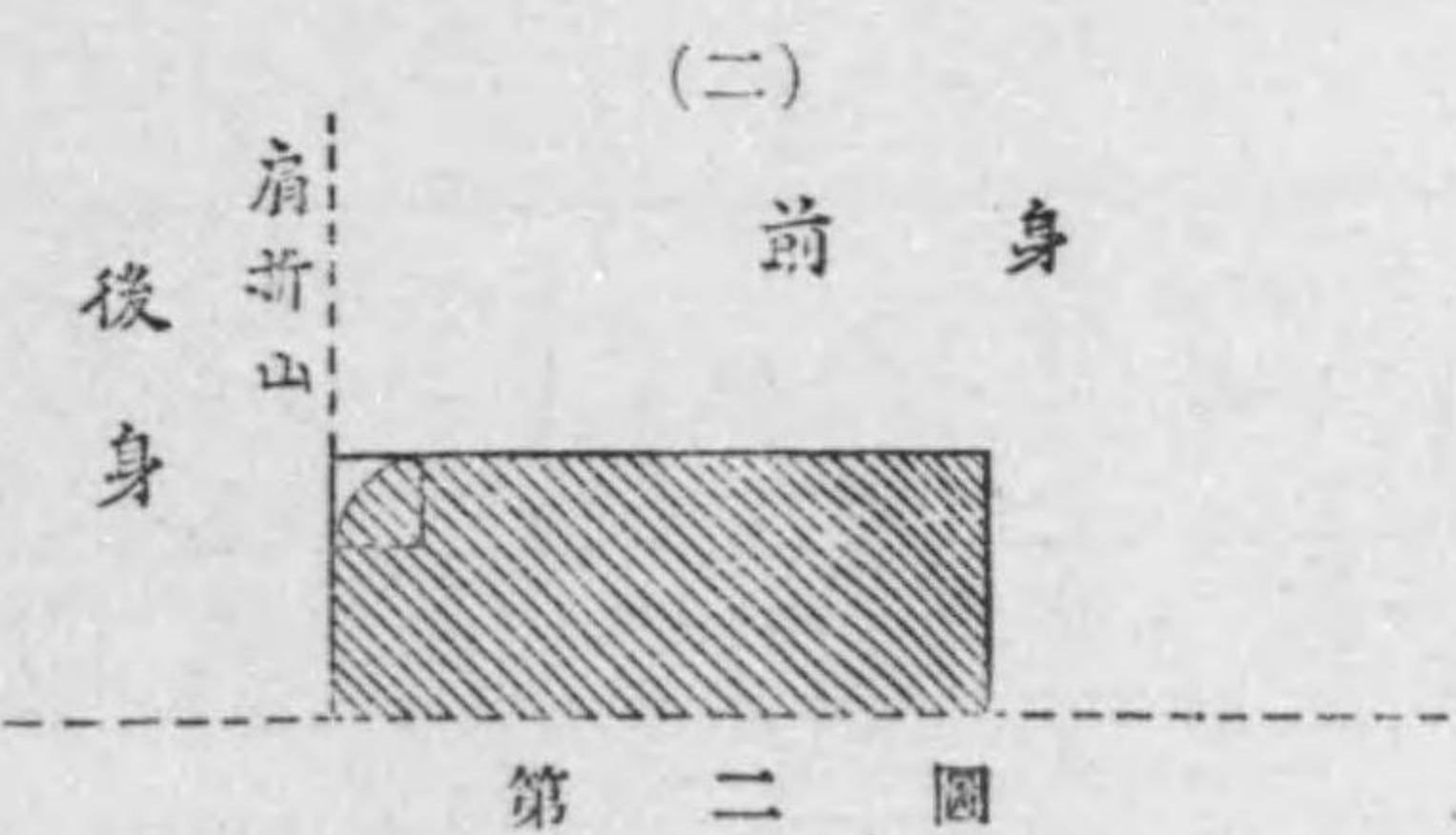


其ノ三

手前から向ふへ計つて標します。脊縫を付けます時はこの寸法に脊縫代「一種(三分)」を加へて直線を引きます。次に直線の起點から前裾の方へ向つて堅衿下りの寸法に肩線越し寸法の二倍を加へて標を



第一圖



第二圖

切ります。第二圖の斜線を裁ち落しの部分を示したのであります。

付け、この標を起點にして衿肩明と同寸法の直線を巾へ向けて衿肩明の線と平向に引き、この線の先端と衿肩明の線の先端とに線を引きます。そして衿肩廻りに丸味の寸法「二種(五分)」の正方形の線を作り、正方形の中の角から衿肩折山の角に向つて斜めに丸味の寸法を計り、他の角から角へと丸味の標をつけさせて(以下第二圖参照)堅衿下りの直線に缺を入れ、衿肩に向つて其の角を正確に缺を入れ、衿肩にては丸味の標の通り、缺を廻して衿肩明の直線を裁ち

而して前身頃を擴げて表を出し第三圖の様に上前の角から堅の巾を十六糎(四寸二分)に裾まで真直に裁切ります。この裁ち切り巾に衿肩廻りの縫代が八糎(二分)加はつて堅衿縦の縫代が一糎二糎(三分)でありますから堅衿巾は出來上り十五糎(四寸)になります。

単衣コート標附け方

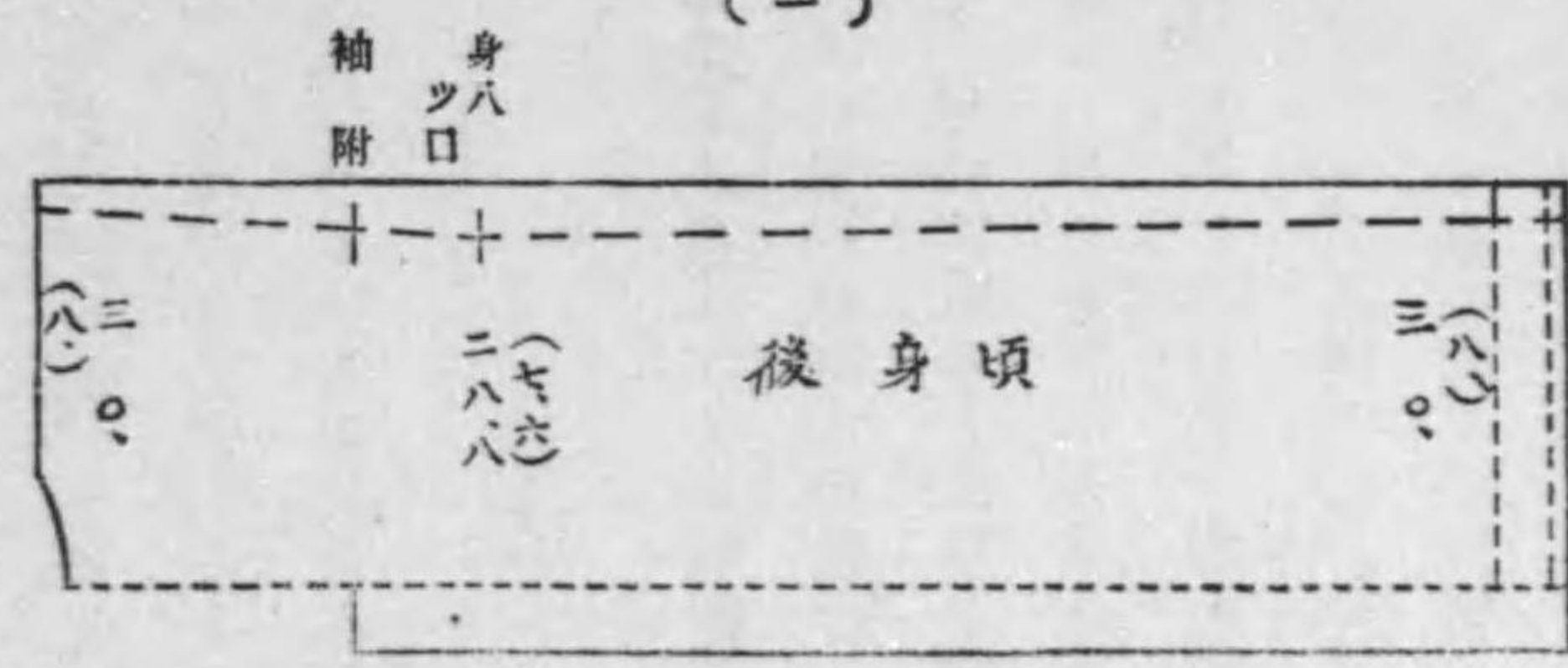
並巾裁單衣長コートの標附け方は合羽と異なる所がありません。

左に大中裁の身頃の標附け方を致します。

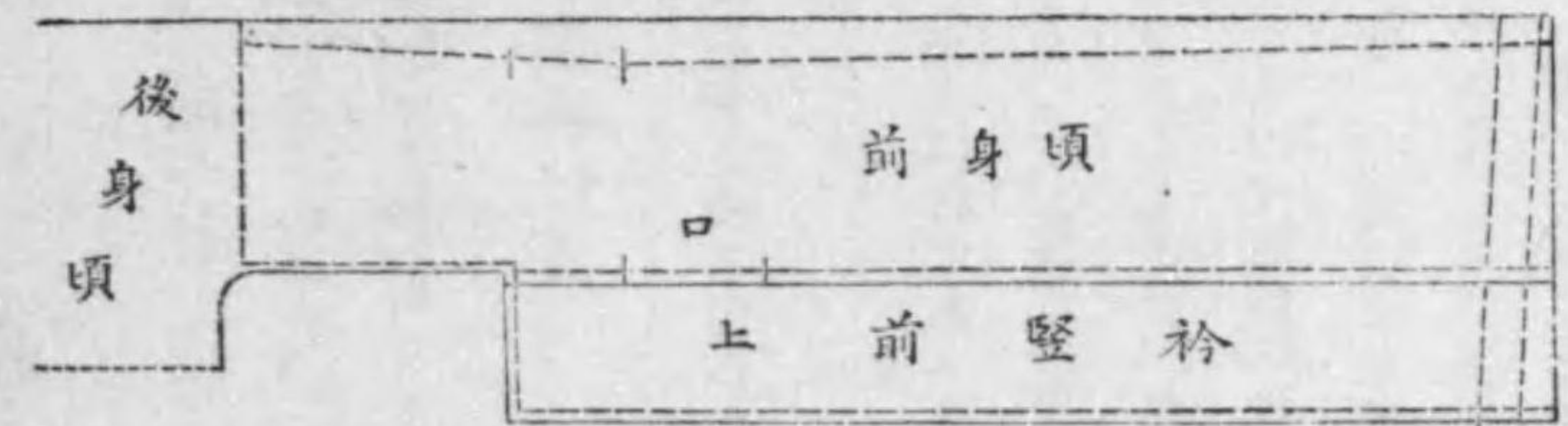
- 一、袖 袖の標附け方は單衣羽織の袖と同様でありますから省きます。
- 二、身頃 折り方疊み方重ね方置き方、方向堅衿肩明裁線り方等合羽の標附けの時と同様に致します。即ち身頃標附け方は第一圖の様に置きまして身丈、後巾、肩巾、山標、袖附、身八ッ口、裾巾の標を附け身八ッ口から裾巾の間は糸を引き張つて脇縫の標をつけ、尙裾縮の端の折代を八糎(二分)に標します。篋にて標の附ない地質(セル等)の場合には縫標に致します。縫標といふのは、初めチョークにて普通篋の時と同様に標を致して置きましてその上を白の躰糸を二重にして一針抜きに糸を充分に指二三本入る程にゆるめて四五針づゝ縫つて置きまして布が幾枚重ねてありましても布の一枚一枚の

長コート標付け方

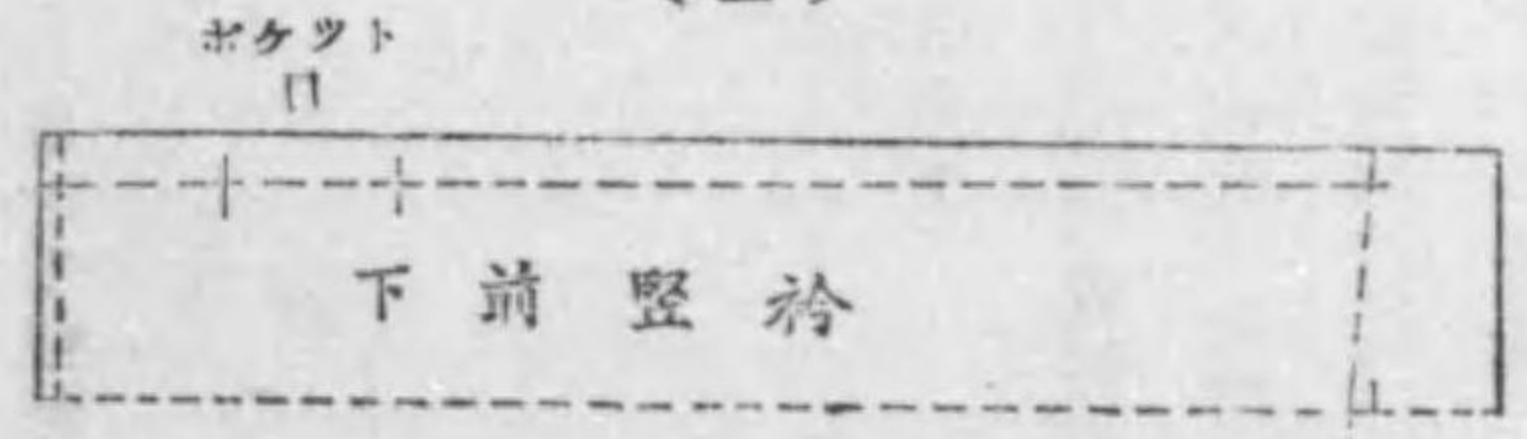
(一)



(二)

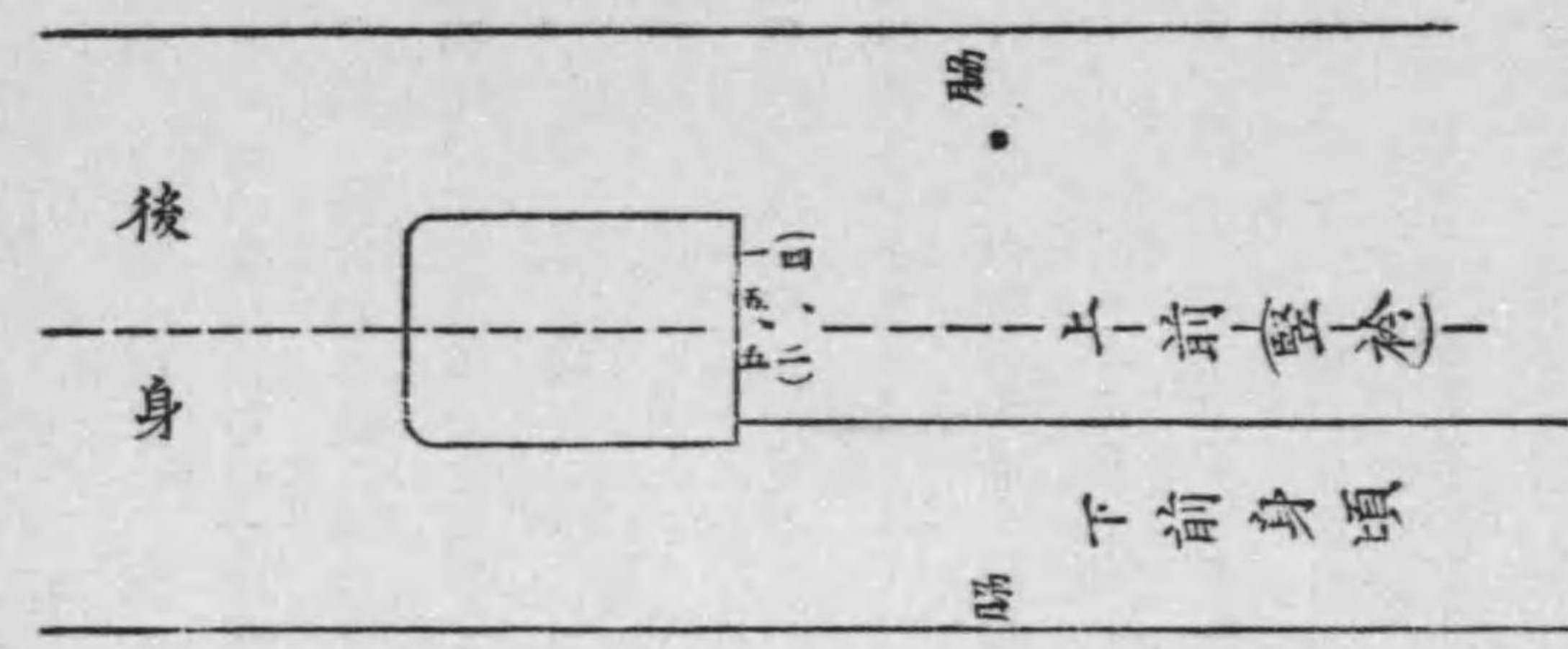
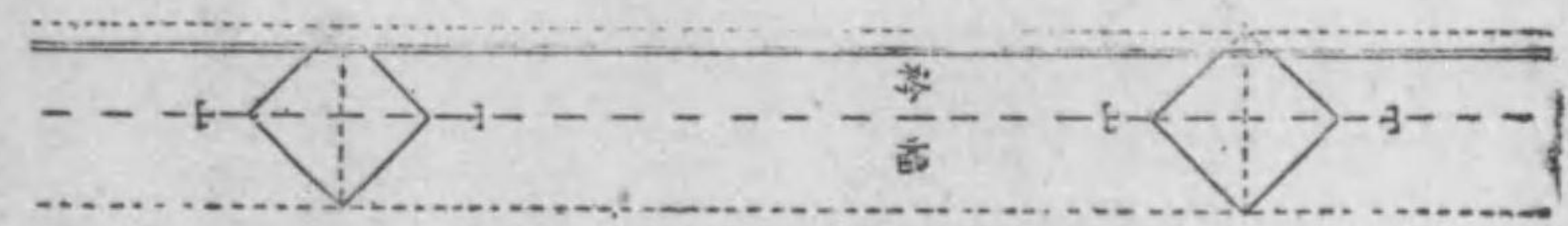


(三)



裾二種の斜め (五分)

前襟斜縫にのふめ 合羽と同じ 角 縫製の標附：作り方



第三圖

間にてその標糸をゆるめて糸の中央を切りまして後で布を離れ、にさせる仕方でありす。脇縫などの如く布敷の多い所に致す縫標の糸はその積りで充分にゆるめて置きます。斯の様な方法にして標が済みましたならば後布を巻き左に除けて前身の標を致します。縫標の場合には脇及び裾の標は後身と同時にいたします。(但し裾の縫標は巾の両端は前後四枚共にして前布の両端の標を済ませて置き、中程は後布二枚のみに致します。次に衿廻りに縫代八耗(二分)の標をなし、下前及び上前縫の縫代を一種二耗(三分)に標し、裾縫の標を上前の端にて脇丈の標よりも二種(五分)上げて裾折の標を斜になし裾縮巾の出来上りは後裾縮巾と同寸に端の標を附けます。これにて下前裾折の標も同時に済みます。

単衣長コート縫方

合羽の仕立方と略々同様であります。殊に並巾裁ちは殆んど同様の縫ひ方でありますから爰では大中裁のセル地の縫ひ方を申します。

セル地の縫ひ方心得は厚地物説明の所に詳しく述べました通りであります。

一、袖 袖口切の縫ひ付け方 袖口の留め方 袖下の袋縫ひ方、又は、ずらして折り縮になす等、單衣羽織の袖と同様でありますから省きます。

二、身頃 脇を縫ひ、縫ひ目は割り、縫込の耳を折つて裾縮を三つ折にして假駢を掛け、上前に見返し布(即ち裏裏)を縫合せ、折は、毛抜合せになし、裾折の標を折り見返し。一方は表よりも一種(三分)程自然の斜に控へ、見返しの巾を十五糎(四寸)に折り定めて裾巾の端から堅衿下りの方へ向つて假駢をかけて置きます。

下前に下前堅衿の布を縫合せ、縫目は割ります。(但しポケット口の標の間は縫ひ明けて置きますして、ポケットの口を一方を前身一方を堅衿に合せて縫ひつけ、縫目を堅衿の方は毛抜合せに身頃の方は割り口の上部下部を内側から、縫目の通り縦に一針抄つて結び留をなし袋の巾を堅衿に合せて縫ひ袋の下の縫目を堅衿の縫代に綴じます。ポケットの口を表から千鳥掛けに閉ぢて置きます。そして出来上り堅衿巾の十五糎(四寸)は堅衿の附けの縫代の標から計つて定めまして裏堅衿巾はこ

れに倣つて小衿の附けの縫代の通りを眞直に折り、裾を前の如く裏を一種(三分)自然に斜に控へて折り、裾巾から堅衿下りへ假駢をかけて置きまして上前堅衿、裾、下前堅衿の奥を表にマツリ付けます。

此の時上前も下前も堅衿の上部を十糎(二、三寸)残して置きまして小衿を縫ひ付けてからマツリつ

けます。

下前堅衿の裏は堅衿、附の身頃の縫代より二糎(五厘)程出して巾を折り定め、前身を手前にして縫代に千鳥縫ひに綴ちつけてもよろしゅうございます。次に堅衿の上部から手を入れてポケットの上の縫代を裏堅衿に千鳥縫ひ又はマツリ縫ひにてとぢ附けます。

三、小衿付け方 小衿の折り方は合羽の方に詳しく申してありますから爰では省きます小衿と身頃との待針の打ち方も合羽の様に衿肩廻りの丸味の所は小衿を釣らせて待針を打ちます。縫方も合羽と同様でありまして先づ身頃の裏の方から堅衿附際に針を出して小衿の額縁の角を布の織糸一本とも思はれる程に小さく横に抄つて針を身頃の裏に戻して糸を結んで燃り糸にして切ります。然うして角を留めて置きまして堅衿下りの縫代も堅衿巾の縫代も布目を通して折り、折山を作つて小衿との折山と突合せて二糎(五分)位の間上下に亘つて割接縫ひに致します。他は普通に極く細かく縫ひます。小衿の

縫ひ付けは一と針抜きに致しますより却つて細かき針目に縫つた方が出来上りが能くなりませす。付け終りましたら縫目を割りて駢をかけ衿先を縫つて表に引返し小衿の裏の折山を小衿の縫目の際に荒く綴ちつけて置きます。そして吊り紐を脊山の小衿の裏に附けます。

四、吊り紐作り方 肩の裏布にても表布にてもよろしく、巾二糎(五分)長さ六糎(一寸五分)に斜に裁ち切り、巾を四つ折にして地色と變り色系にて際り縫ひ穴かゝりの致し方にて折目をかゝりつゝ折目を外側に輪の如く曲ますその附け方は小衿巾より上に出ない様に兩端を脊縫から二糎(五分)位離して半月形に身頃の縫目に綴ち附けます。

五、肩當附け方 肩當の脊を縫ひ、縫目は割るか或は折つて置きます裾は細い三つ折縮にして表に合せ、脊の通りを假駢にて押へて置き、袖附の標よりも八糎(二寸)程離れたる所も亦假駢にて押へて置き、小衿の上に二糎(五厘)被せて肩當をマツリませす。

六、袖附 單衣物と同様に袖を附けて縫目を割り、平鑊をかけまして、肩當を附けの二糎(五厘)手前に折り縮けます。身八つ口の所は四糎(一分)程控へ。そして脊の下は六糎(二寸)堅衿下、身八つ口下はマツリ際から四糎(一寸)位の間肩當の裾を千鳥縫にて表に綴ち附けます。

飾紐の附け方は合羽の所で述べましたから省きます。

給半コート

半コート

普通仕立上げ寸法

- 袖 丈……………六〇糎(一尺六寸)
- 袖 幅……………三二糎二釐(八寸五分)
- 袖 附……………二四糎五釐(六寸五分)
- 後 幅……………二八糎五釐(七寸五分)
- 裾……………三〇糎三釐(八寸)
- 前下り……………二糎七釐(七分)
- 堅衿下り……………二四糎五釐(六寸五分)
- 身丈羽織より八糎(二寸)長く

並幅 6 米 86 糎(二丈八尺六寸)にて半コート裁ち方

95.	95.	(41)	(44)	(44)	(41)
(16.5)	(16.5)	(25)	(25)	55	67
63	63	堅衿	堅衿	後	前
袖	袖				袖口
					袖口
					小衿
					カクシ

$$\{ \text{用布の總丈} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{堅衿丈} \times 2 + \text{前後の差} \times 2) \} \div 4 = \text{後丈}$$

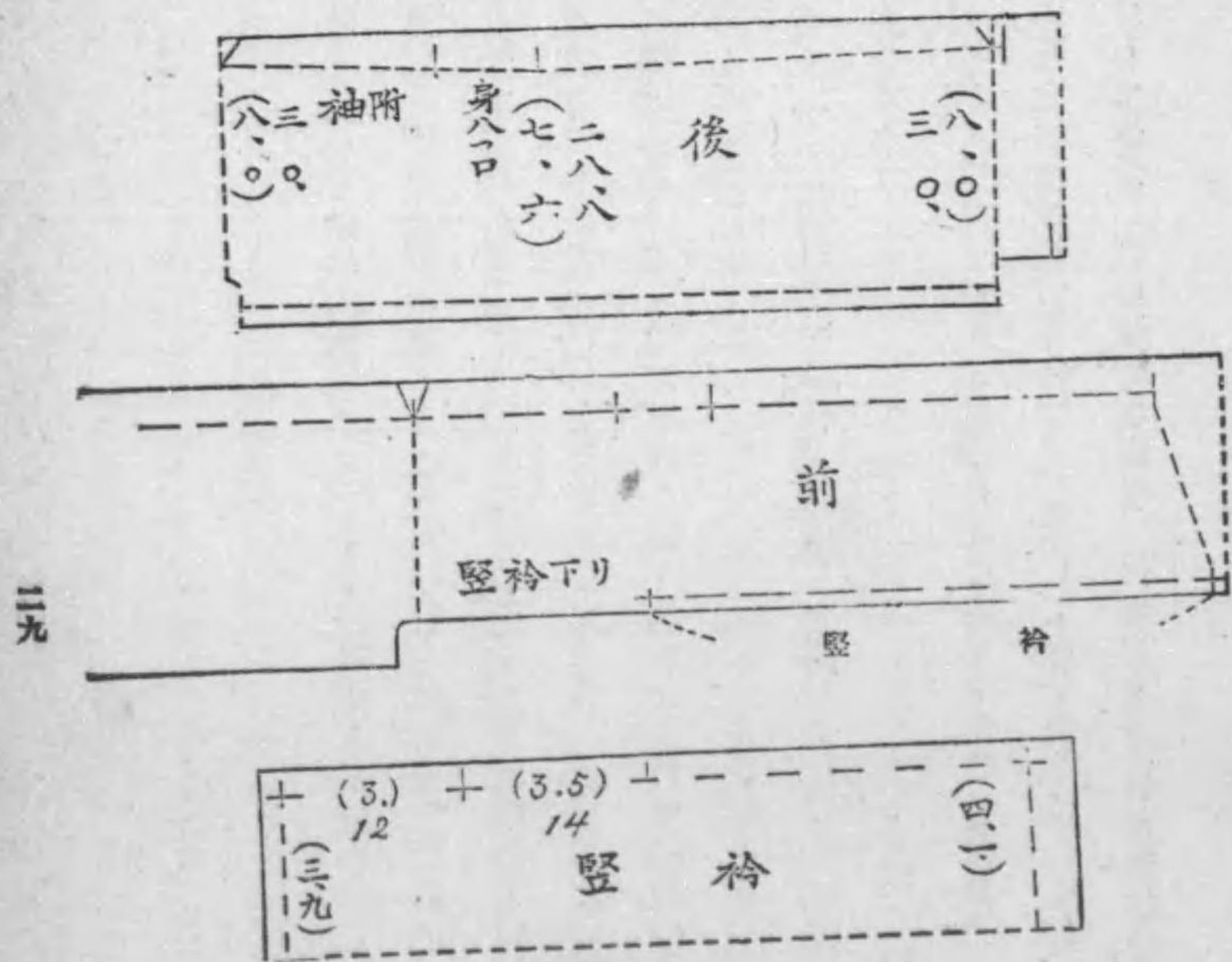
$$\left\{ \begin{matrix} (181) \\ 68. \end{matrix} \right. - \left(\begin{matrix} (16.5) \\ 63. \end{matrix} \times 4 + \begin{matrix} (25) \\ 95. \end{matrix} \times 2 + \begin{matrix} (3) \\ 1. \end{matrix} \times 2 \right) \div 4 = \begin{matrix} (41) \\ 55. \end{matrix}$$

- 一、袖 女衿羽織と同じにいたします。
- 二、身頃 女衿羽織の様に二枚の表布を中表にして後身を左に前身を右に脊を手前にして置き、裏布も中表にして表身頃の上に重ねまして後身を仕立上り身丈に三つ山の縫代の一糎(三分)を加へた寸法を標附け身丈として折ります。前身は後の標附身丈に、肩の繰越しの二倍と前下を加へて折り、前後の胴接の處に假躰をかけ、前身の上に後身を折り重ね繰越しを附けて置き、肩幅、袖附、身八つ口を標し、身八つ口の處で後幅を標し、裾巾は二糎(五分) 廣く標を致します。前身は後の脇丈より四糎(一分) 長く標し前下りの標を終つて後身頃を開きまして、前身頃に堅衿下りを標し、堅衿附の標は一糎(二分五厘)の縫代として堅衿丈を計つて置きます。
- 三、堅衿 幅を二つに折りまして、わなを手前にして二枚重ねて置き、右を裾と定め、左を上となし、上の縫代を小衿幅出来上りより四糎(一分) 尠なく標を附けます。その標附けより裾に向けて丈を計ります。そして丈が餘りある場合は裾で縫込みます。上下の幅を標し、下前の方は上から十二糎(三寸) 次に十四糎(三寸五分) の標を衿附の方にいたします。これはポケットをつくる處になります。
- 四、小衿 出来上り幅の四倍に裁切つてあります小衿を初め一糎(二分五厘) に縫代を折り次に出来上り小衿幅の二倍に(表を外にして) 折りますと丁度縫代と折返りとは突合せになります。小衿の丈

を二つに折り、丈の中央から兩端に向つて身頃の脊縫から衿肩廻り堅衿下りの標までの寸法から四糎(一分) 減じたる寸法を標します。この減じました寸法だけは肩の丸味の處で小衿を釣らせます分でございます。堅衿の角の標し附け方、額縁の作り方等合羽(参照)と同様であります。

五、ポケット 並巾三十糎(八寸) 許りを用意して、成るべく共切れを用ひまして不足の場合には見える部分だけ共切れを用ひ、中は裏切れを接ぎます。丈の上より二糎(五分) を標し、ポケット口の十四糎を標し幅は堅衿巾より八糎(二分) 狭く標します。

衿半コート標附け方



袷半コート縫ひ方順序

- 一、袖 女袷羽織の袖と同様の仕方でありませう。
 - 二、身頃 胴接ぎ、脊縫、前下りを縫ひます。脇は細かく縫ひ八糎(二寸)毎で一針返して縫ひまして身八つ口を縫ひます。堅衿は、裾の標を表は圖通、裏は幾分か控へる心持に待針を打ちまして縫ひ折りは裏に伏せ表に引返して身頃に細かく縫ひ合せます。八糎(二寸)毎に一針返すことは脇縫と同様でありまして縫ひ目は割ります。脇の縫ひ目も割りました方が格好よくなります。
 - 三、袖附 女袷羽織の如く山を合せて表袖、表身頃、裏袖、裏身頃の順序に針を真直に入れて被せのかからぬ様に縦に抄ひまして四つ留をして縫ひ割ります。
 - 四、小衿附 額縁(四角の)の標を中表にして折り(丈に向けて)縫代、折返しを開かずに戻し針に極く小針に縫ひ、縫ひ目に烙鋏をかけて平に割ります。
- 小衿の山と身頃の脊とを合せて、待針を打ち、衿肩の丸味の處にては小衿をつらせて待針を打ち、堅衿下の角の處で身頃から針を出して小衿額縁の角を抄ひまして裏身に針を返して堅く結び留をなして、堅衿巾の方と堅衿下りの方とに待針を打ちまして細かさ針目に縫ひ行き、衿肩廻りは返し針に致

します。衿を附け終つて縫目を割り烙鋏をかけ、衿先を縫ひまして小衿の裏を衿附の縫ひ目に粗くまつり縮けいたして置きまして、吊り紐を作り幅「一糎五耗(四分)」長さ「六糎(一寸四分)」の斜布巾を四つ折にして、合せ目を穴かがりの仕方に糸かがりを致します。脊縫を中心にして、小衿の裏に(巾より上に見えないやうに)吊り紐の端を衿附の縫目に綴ぢつけて、裏身頃を小衿の巾へ二耗(五厘)程被せてマツリ附けます。

上前堅衿の方の小衿、衿先は直角に縫ひます、或は三角に折りまして下前の額縁の縫ひ目に合はざるやうに致してもよろしうございます。それから飾紐をつけます。下の飾紐は堅衿の丈の二分の一分の二糎(五分)許り上で玉のついてゐる方を上前に、玉をすこし出して綴ぢつけ、下前の方は前巾の三分の一ほど堅衿より離れたる所につけます。尚同じ高さで下前堅衿に長さ三十糎(八寸)巾一糎五耗(四分)の縮け紐をつけ、他の一本の(同寸法)縮紐は上前脇の縫目に、この高さ合せて附けます。堅衿下の飾紐を小衿の巾の上に(玉のある方を下に)斜めに向ひ合せてつけます。尚下前堅衿の小衿の先にし、やか結びの玉を布にて包みてまつりつけ、これに合せて上前堅衿下り的小衿の際に、下前の玉結びを引懸けるために紐を輪にして端を布で包んでまつりつけます。此等はすべて長コート、合羽被布の飾紐附け方と同様であります。

第十一章

綿入被布標附け方

- 一、袖 身頃、襟等の標附方は女物綿入羽織と異なる所が有りません。後身頃の標が済みましたなら前身の衿附の標を羽織の様に裾で深く致しません。堅衿下りの標より縫代を裾まで真直に致します。
 - 二、堅衿標附け方 並幅裁のコート及び合羽の堅衿と同様に中表に縦に二つ折に致しまして二枚揃へて、わなを手前に裾を右に置きまして上部の縫代を一種(三分)に標しを致します。次に丈の標をして裾幅を十六糎(四寸二分)に上の幅を十五糎二耗(四寸)に標を附け上と裾とに物指を當て、或は糸を引張つて斜に衿附の標を致します。次に小衿の標附けを致します。
 - 三、小衿 先づ芯切を二枚用意致しまして圖の様な標附を致します。
- 二枚の芯切を中央に假躰をかけ丈を二つに折り、わなを左にして、わなから衿肩明の寸法を計つて標をつけその標から衿先の方へ向けて衿附の標を一種(三分)上げて斜に標をつけます。(手前の方

本裁綿入被布

本裁綿入被布

普通仕立上げ寸法

- 堅衿下り…衿下りと同寸
- 堅衿幅…上(三寸五分、三寸八分)
- 一三種 一四種
- 堅衿巾…下(三寸八分、四寸)
- 一四種 一五種
- 小衿丈…(一尺二寸) 四五種
- 小衿幅…(三寸)内外、小衿丈の凡そ四分の一、一一種

並幅10米75糎(二丈八尺三寸)にて
本裁綿入被布裁ち方

(16.5) " 63. "	(16.5) " 63. "	(13.) 49.	(23.) 87.	(23.)	(37.) 140.	(42.) 160.	(42.) 160.	(37.) 140.
袖	袖	小衿	堅衿	堅衿	後	前	前	後
					口	袖	口	

27. 15. 15. 25.寸
102. 57. 57. 102.糎

(用布の總丈-袖丈×4-小衿丈-堅衿丈×2+前後の差×2)÷4=後丈
(283. - 15.5×4 - 13. - 23. ×2 + 5. ×2)÷4=37,
10米75糎 63糎 49糎 87糎 20糎 1米40糎

同裏布の裁ち方と裁ち切り寸法

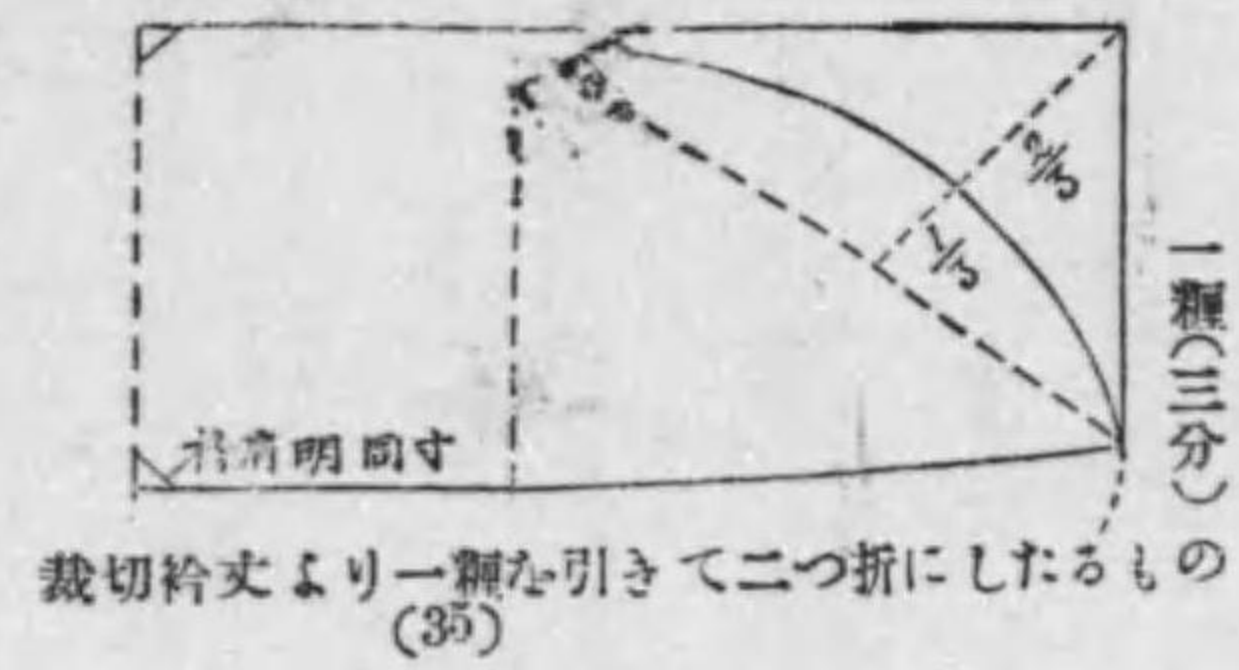
(16.5) " 63. "	(16.5) " 63. "				
裏袖	裏袖	後	前	前	後
		五三	一七	裏	口

被布小衿心裁ち方及縫ひ方

第一圖

小衿心裁ち方

衿肩明同寸



第二圖

二枚の心を假綴ちす

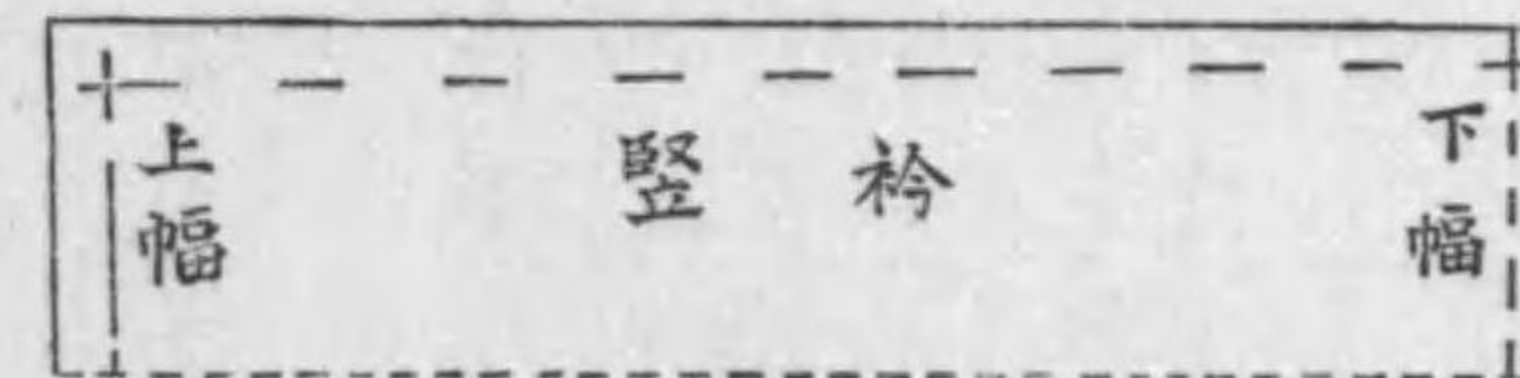
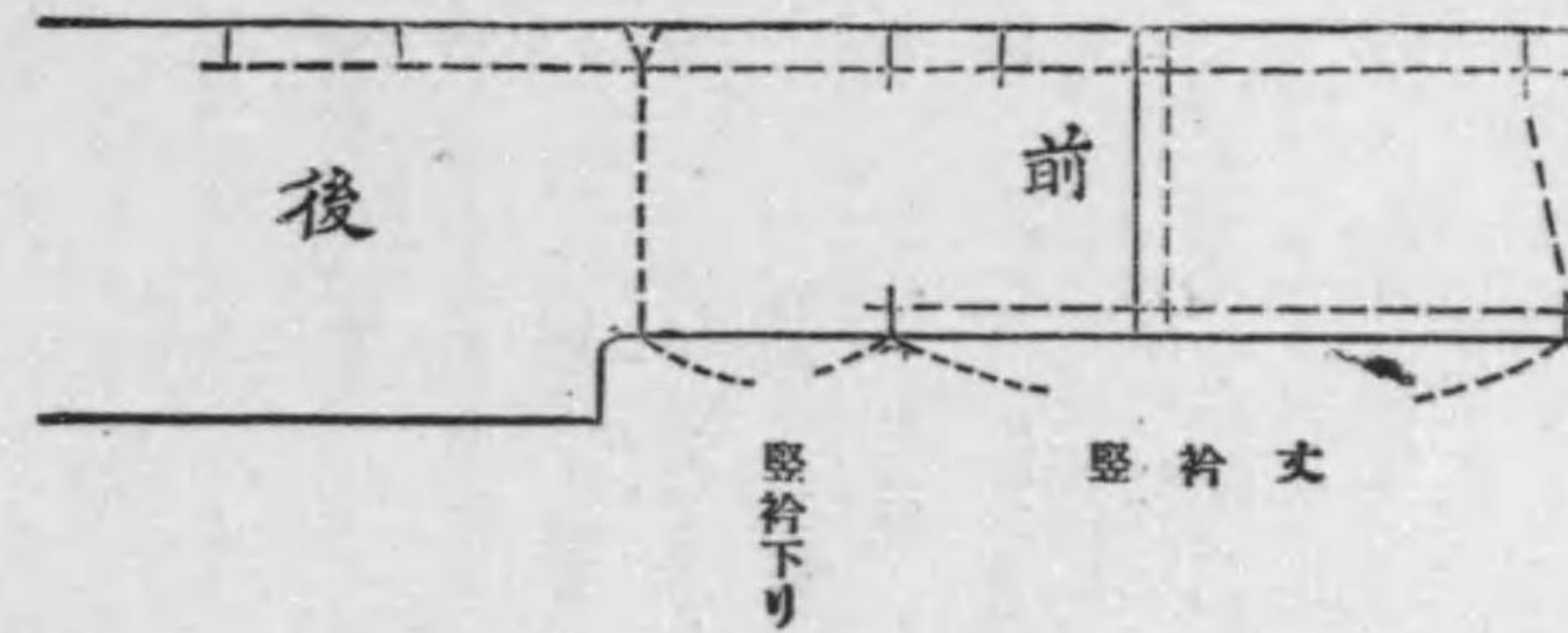
大心



第三圖

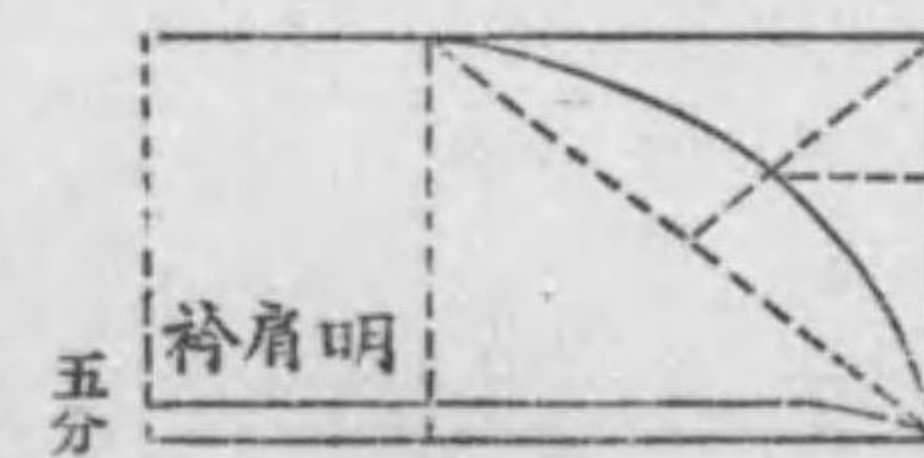
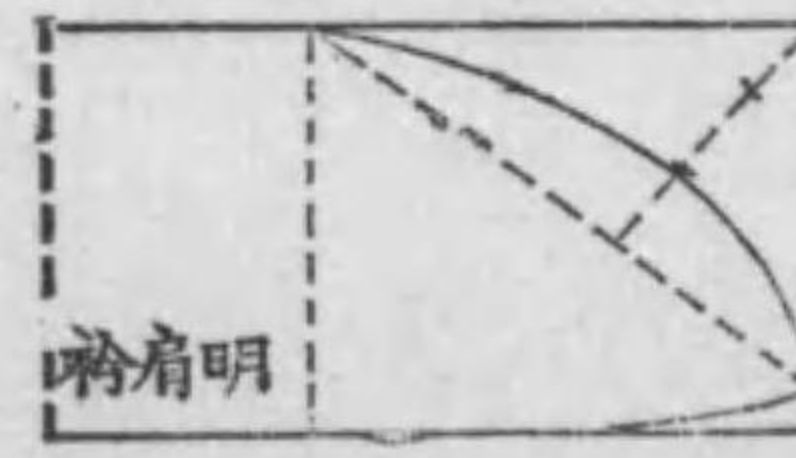


本裁綿入被布標附け方



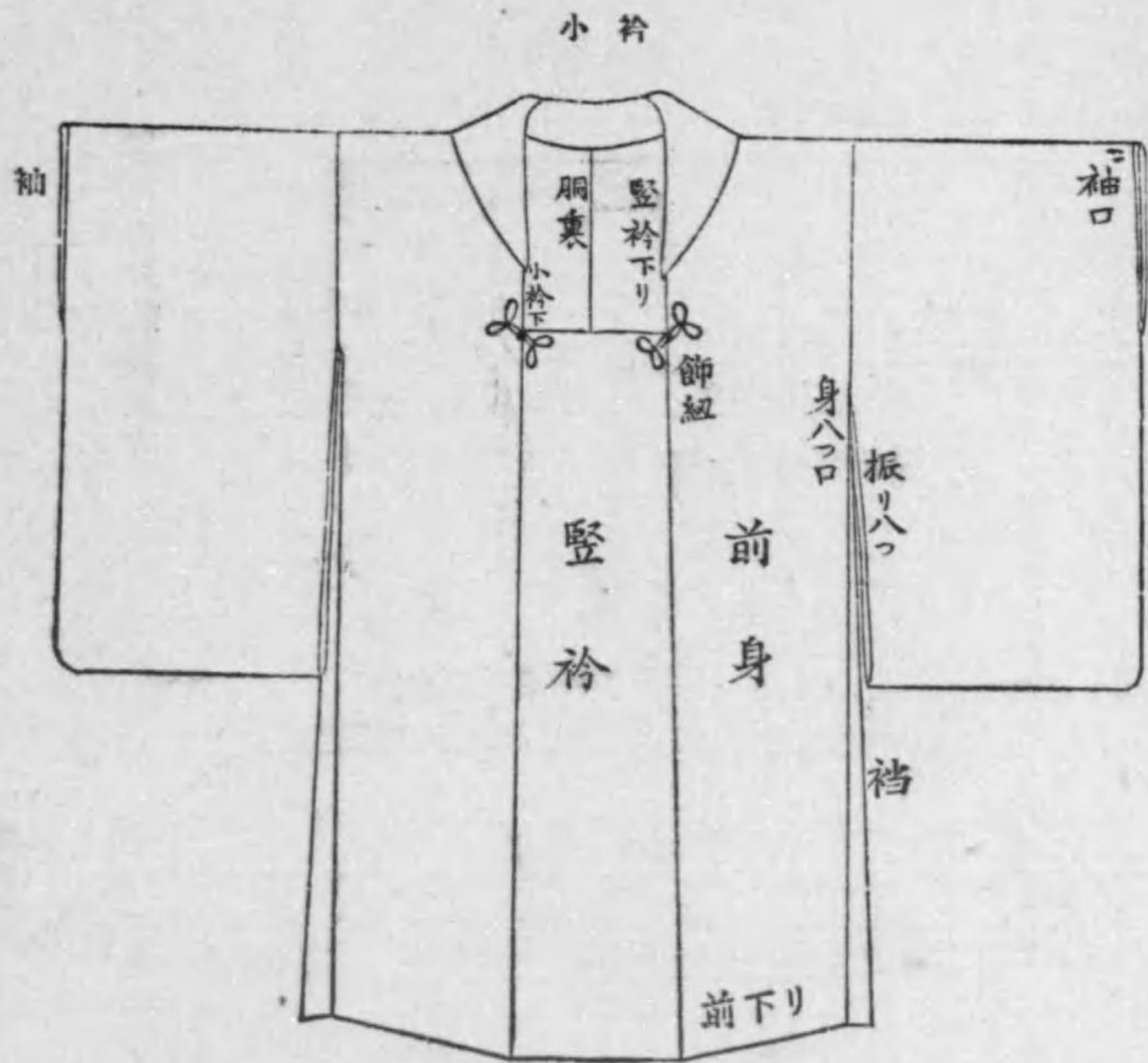
身頃ニテ小衿ヲ挟ムコト

小衿ニテ身頃ヲ挟ムコト



三分の一

被布出来上り圖



を衿附となし向ふを衿山となす) 次ぎに此の標と衿山の方の標とに物輪を當て、第一圖の斜線を引きます。此の線より縫込を角に向つて計つた寸法を三等分致し、三分の一を丸味を作る標準と致しませす。丸味の標が、出来ましたら一枚は標通りに裁切り、他の一枚は標よりも一程(三分)せまく廻り全體を詰めて裁ち切ります。

本裁綿入被布縫ひ方順序

- 一、袖 女物綿入羽織の袖と同様の仕方であります。
- 二、身頃 胴接ぎ、前下りの縫方、襦の附け方等皆女綿入羽織と同様であります。
- 三、堅衿 堅衿の裾を表は標通り裏は四耗(一分)内を縫ひます。折は裏へ返して隠し袂を掛けて置きます。前身頃に合せて待針を打ちまして身頃の方を手前に堅衿の方を向ふにして縫ひますので片方は上から片方は裾から縫始める様になります。が兩方共先づ前下りの所に堅衿先きの縫目を合せて待針を打ちまして表から裏の裾へ八厘(二寸)程縫ひ廻して置きます。縫残りは綿を入れましてから堅衿を上口にして裏に縮け附けるのであります。堅衿には綿を入れませんで芯布を入れます。着物の三つ山に衿芯切を入れます様にとぢ附けるのであります。芯巾は堅衿出来上り幅より二耗(五厘)せまく

裁切ります。

襦の上を縫ひ綿を含ませて留めて身八つ口を縫ひ、綿を含ませて袖附を綿入羽織の袖と同様の留めをして縫ひます。

綿入れ方も女綿入羽織と同様に入れまして、裾に假綴ぢを致しましたら堅衿附の縫目を中からとちます。

四、小衿 小衿の裏を出して一枚に擴げて置きまして、芯布を二枚綴ぢてあるまゝ、表布の耳の方一ぱいにのせて芯と表布とを平に假綴ぢして置きまして表布の巾を中表に二つに折つて耳を揃へ、表幅が広い場合縫込は衿の山の方に入れます。附の方は心布と揃へて一ぱいに致します。一種(三分)廣く裁切つてあります方の芯布を四耗(一分)の縫代に(衿附を除く外はぐる／＼と)標を小衿表布にもうつる様に附けます。

衿の中央及び兩端の標しとその間々に待針を打ち、裏衿になる方は八耗(二分)標より控へて縫込の方に入れて待針を打ち直します。斯う致しますと表布と芯布とは標通りで裏の方のみ八耗(二分)づつ布がせまくなつてつられませんが、其のまま縫ひます、縫込の丸味の間を丁度袖丸味の處の様に縫縮めまして縫込のゆるみを襷に取つて置きます。縫ひをはりまして裏の方に折を附けて表に引き返しま

して衿附の方を揃へて躰をかけ、衿山の廻りは裏衿を八耗(二分)控へて縫ひ合せましたのでその二分の一の四耗(一分)だけ表衿が裏衿の方に折り返ります。小衿は廻りと巾の中央とに躰をかけ置きます。

五、小衿の附け方 裏身頃の脊縫ひに小衿の表の中央を合せて待針を打ちまして衿肩廻り丸味の處にて小衿をゆるく、他は平に一針抜きに細かく縫ひつけます。附きましたなら、綿を平にのばして堅衿下と小衿の間を裏身頃の方に含み綿を致します、堅衿の上の角を着物の衿先の留めと同様に致しまして縫ひます。堅衿の裏を前に申しました様に裏身頃の縫代の上に縮けつきます。そして小衿の縫ひ目に身頃を被せて堅衿下りの角から角の間を縮けます。

次に脊、前襟の縫目を裏から綴ぢまして仕上げの火熨斗をかけ、飾紐を半コートと同様に附けのす。

四ツ身 三ツ身 一ツ身 被 布

標附け方及び縫ひ方順序

凡べて本裁被布と同様であります。但し堅衿のみ異つて居ります。

一、堅衿標附け方 表布を中表に二枚揃へて、附けを向うに置き裏布を中表に二枚重ねて表布の上に左の方を揃へてのせまして左から上の縫代を一種(三分)に標します。その標より計つて堅衿丈を定めます。裾に縫代を附けませんのでそのまゝ表布の長さ分を折返し表布の方の縫代を一つばいに身頃胴接ぎの如く假躰を致しまして接合せの標を附けます。次に上の幅標は裾巾より一種(二分五厘)程せましく附けます。本裁の堅衿は幅を附の方にて斜に致しますが小供物は附の方は眞直に身頃と同じくつばいの縫代に致して堅衿縮の方を斜に致します。此の點が本裁と異なるのであります。縫ひ方は、附の方を前身頃に合せて表堅衿下りから裏堅衿下りの標まで通して縫ひ、折は堅衿に伏せ、全體の綿入れが済みましてから、堅衿下りを綿入れの衿先と同様に留めて表布を出来上り巾の標通り裏へ折返します。裏布は表布いつばいに巾を控へて折り、堅衿の上を裏巾の折りまで留め糸にて中縫ひをして表に引き返し、裾の方では裏を控へただけが裏布にて自然の襟形をつくります。丁度女物本裁の廣衿の先きの様に出来上るのであります此の外は皆本裁の被布と同様であります。

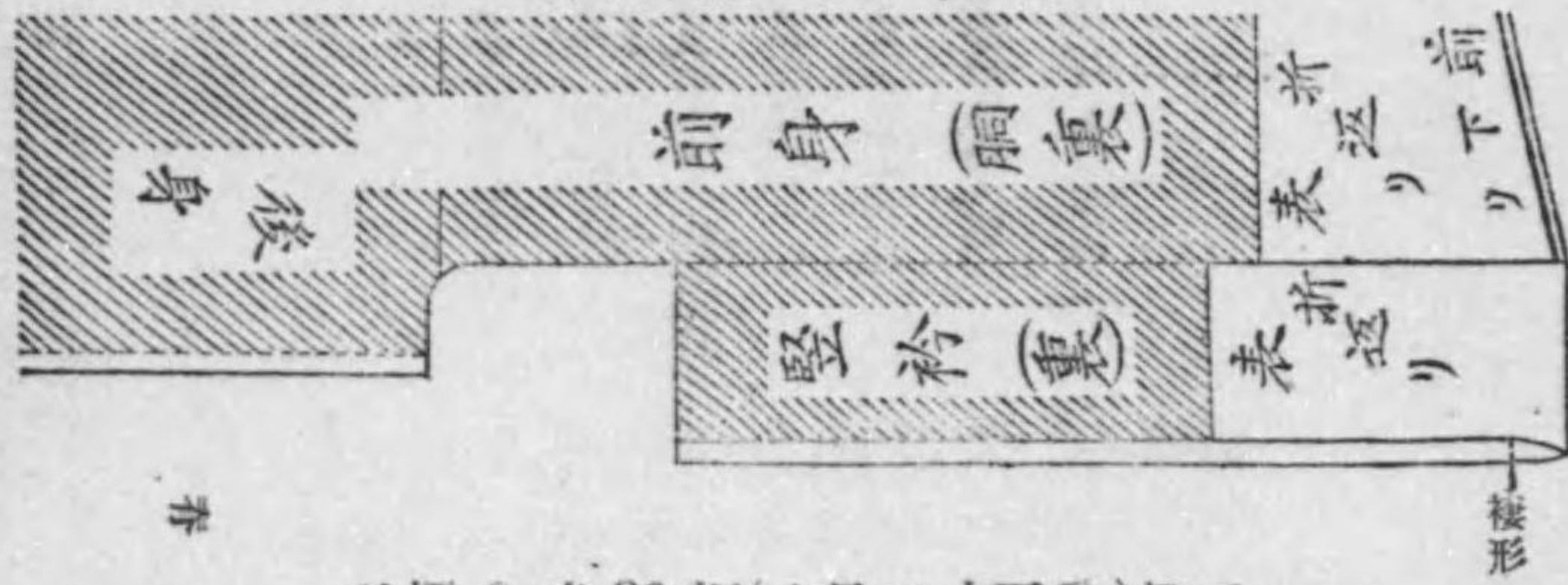
小供物被布堅衿標附方

附 縫代眞直



前巾の標斜め八釐(三分)

堅衿縮けの仕方



並幅 2 米 38 釐(六尺二寸五分)にて 一つ身袖無被布裁ち方

(20.) 76. 三九 六五	(22.) 84. 前	(17.) 37. 三八 小衿	(13.5) 51 八. 四五 四五
後	衿	衿	衿
(二)八	(二)八	小衿 一三八	衿 一八. 四五

{用布總丈-(小衿丈+堅衿丈+前後の差)}÷2=後
米 238. 27. 51. 8. 76.
釐 (62.8) (7) (135) (2) (20)

同裏布裁ち方

(11.4) 43.5 後	(11.) 42. 前	(13.5) 裏堅衿 八. 四五
後	前	裏堅衿
	衿	衿

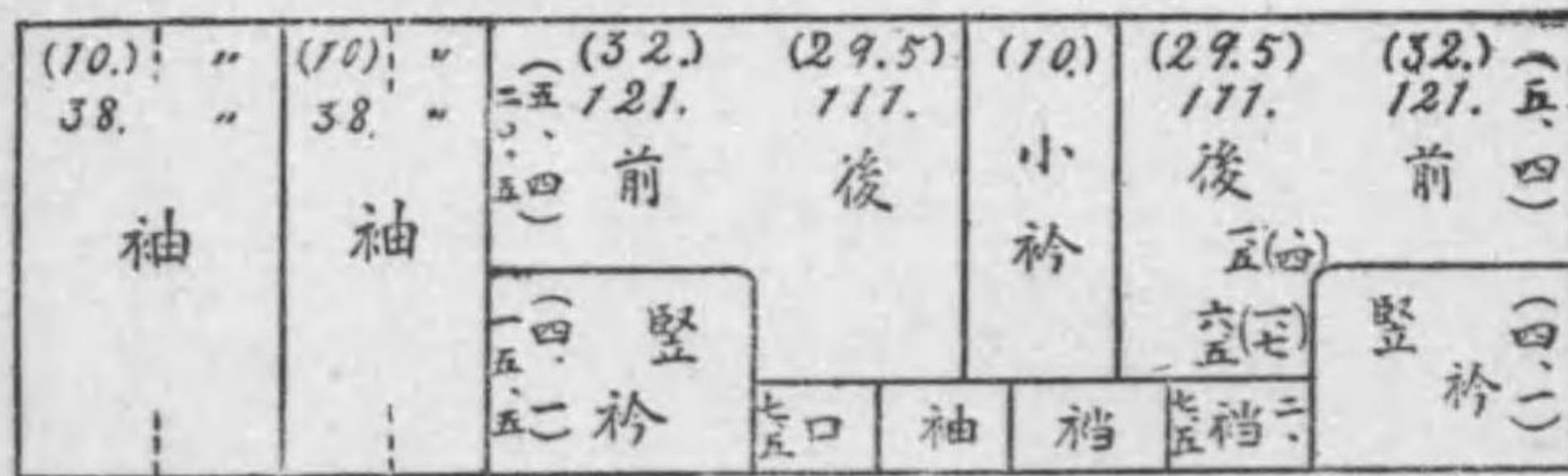
四つ身被布

四つ身被布

普通仕立上げ寸法

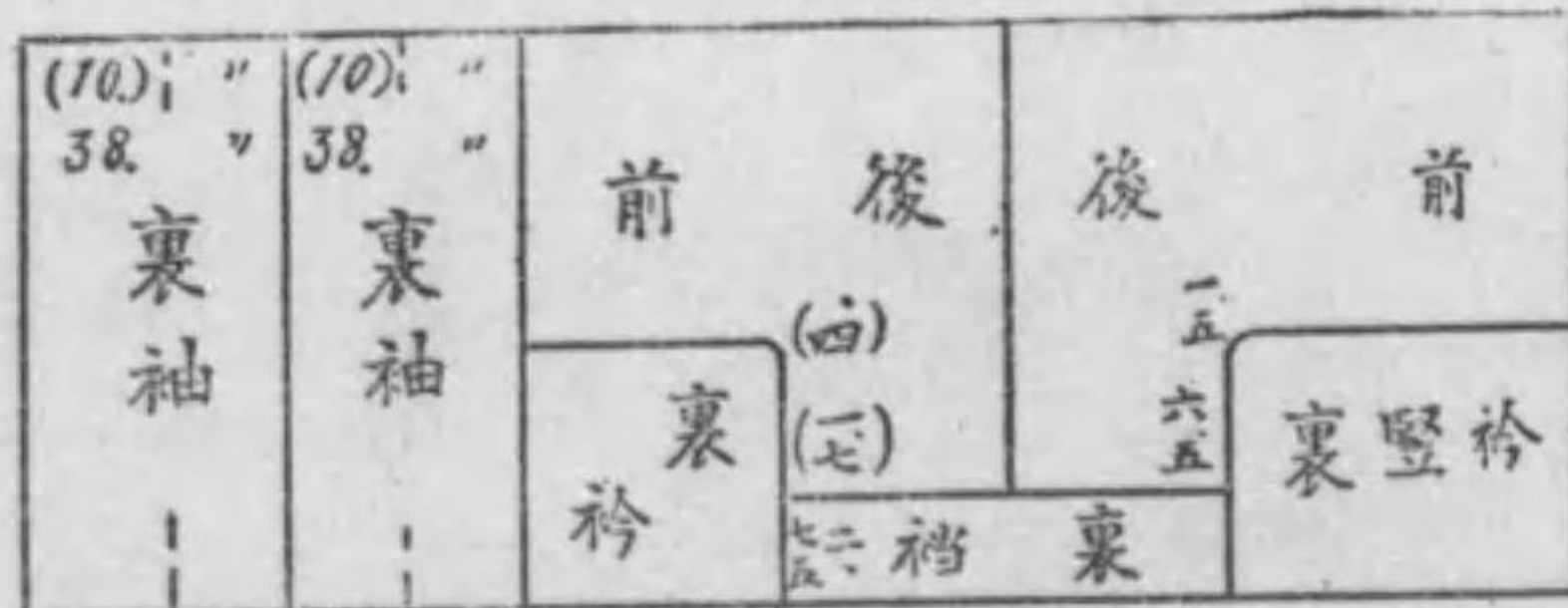
- 小衿幅…三寸(一糶四耗)
- 小衿丈の凡そ三分の一
- 小衿丈…九寸(三四糶)
- 小衿丈の凡そ二倍
- 上三寸三分(一二糶五耗)
- 堅衿幅…下三寸五分(一三糶三耗)
- 堅衿下り…四寸五分(一七糶)

並幅 6 米 54 糶(一丈七尺三寸)にて
四つ身被布裁ち方



$$\left\{ \begin{array}{l} \text{正布の總尺} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{小衿} + \text{前後の差} \times 2) \\ 173. - (10. \times 4 + 10 + 2.5 \times 2) \\ 654. \quad 38. \quad 38. \quad 10. \quad 111. \end{array} \right\} \div 4 = \text{後丈}$$

間裏布の裁ち方と裁ち切り寸法



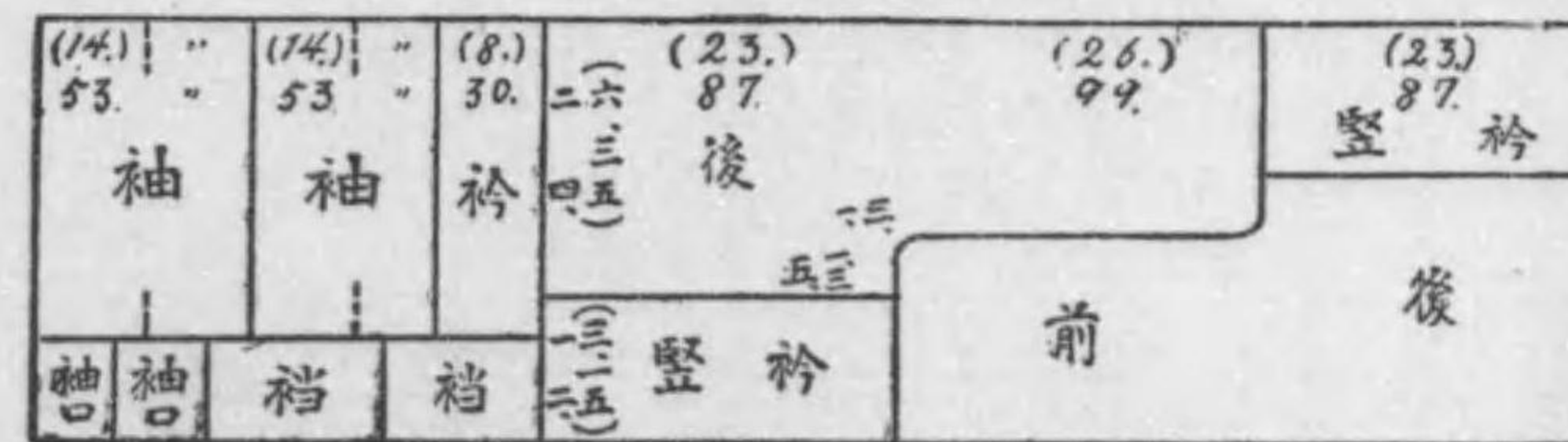
三つ身被布

三つ身被布

普通仕立上げ寸法

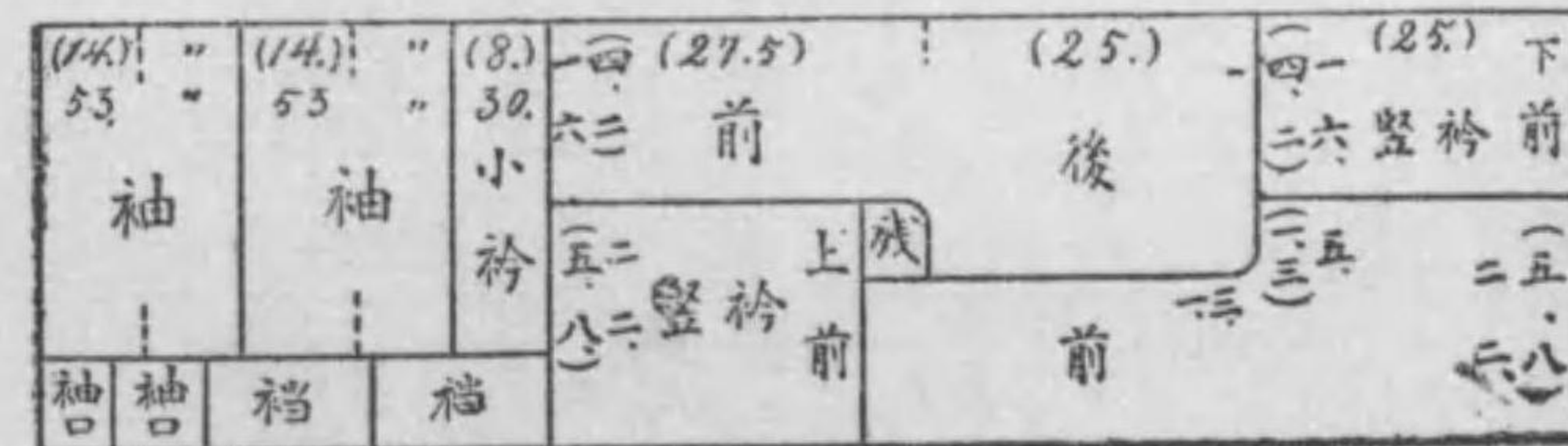
- 小衿幅…二寸五分(九糶五耗)
- 小衿丈の凡そ三分の一
- 小衿丈…七寸(二七糶)
- 堅衿下りの凡そ二倍
- 上二寸八分(一〇糶六耗)
- 堅衿幅…下三寸(一一糶四耗)
- 堅衿下り…三寸五分(一三糶三耗)

並幅 5 米 15 糶(一丈三尺六寸)にて
三つ身被布裁ち方



$$\left\{ \begin{array}{l} (10) (10) (22) (22) \\ 38. 38. 83. 83. \end{array} \right.$$

片面物 38 糶(一尺)幅 5 米 37 糶(一丈四尺一寸五分)
にて三つ身被布裁ち方



$$\left\{ \text{用布の總尺} - (\text{袖丈} \times 4 + \text{小衿} + \text{前後の差}) \right\} \div 3 = \text{後丈}$$

本裁單衣重ね

並幅 11 米 67 糎(三丈八寸)にて
單衣重ねの上着の裁ち方

(16.5) 63.	(16.5) 63.	(40.) 151	(40.) 151	(40.) 151	(40.) 151	(48.) 182.	(20.) 76.	5.3. 袖口 キレ
袖	袖	身頃		身頃		衿	衿	残り
		九五 (三五)		九五 (三五)		(35.5)	(35.5)	(15)

$$\left. \begin{aligned} \text{用布の總尺} &= (\text{袖丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{共衿} + \text{袖口キレ}) \div 4 = \text{身丈} \\ 308. & - (165 \times 4 + 48. + 20. + 14.) \div 4 = 40. \\ 1176. & \quad 68. \quad 182. \quad 76. \quad 53. \quad 151. \end{aligned} \right\}$$

$$\left. \begin{aligned} \text{用布の總尺} &= (\text{身丈} \times 4 + \text{衿丈} + \text{共衿} + \text{袖口キレ}) \div 4 = \text{袖丈} \\ 308. & - (40. \times 4 + 48. + 20. + 14.) \div 4 = 16.5 \\ 1176. & \quad 151. \quad 182. \quad 76. \quad 53. \quad 63. \end{aligned} \right\}$$

本裁單衣重ね裁ち方は普通單衣物と同様でありまして上着下着共に同寸法に裁ち切りませす。

本裁單衣重ね標附け方

- 一、袖 上着下着共普通單衣物と同様に標を附け袖口切れは單衣羽織と同様に標をつけませす、下着袖丈は上着と同寸法にて袖口のみ二耗(五厘)詰めませす。
- 二、身頃 上着は普通の單衣と同様に標して下着の寸法は裾口まで二耗(五厘)許り詰めませす。
- 三、衿 上着下着の四枚を重ねて四枚共同寸法に標をいたませす。
- 四、衿 表裏四枚を別々に折りませして普通に重ねて標をいたませす。

本裁單衣重ね縫方順序

- 一、袖 上着の袖に袖口切れを合せ毛抜き合せに躰をかけませして袖口を四つ留にいたませして袖口切れから四糎(一寸)許り下まで縫つて置き、口切れの奥を耳縮にして置ませす。下着の口切れの下を伏せ縫にして上着と同じ様に四糎(一寸)許り下まで縫つて置いて耳縮をいたませす。上着の裏へ下着の表を合せて袖口下から袖下まで女衿と同じに縫ひ幅標をして置ませして、振りを女物衿と同じ縫ひ方にいたませす。但し幅の標上り一糎(三分)程中を縫つて、被せは幅の標を折り表に引返して躰をかけて置ませす。
- 二、身頃 上着の脊脇を縫ひませして普通に折りをつけて裾縮をいたませす。下着の前後四裾を裏の方へ折つて三つ折縮を致ませす。布の表を外にして合せて脊縫脇縫をいたませす。裾口の所で縫込を三角に折り込んで縫目の際に縮けつけて置ませす。上着下着の脊脇を女衿のやうに綴ぢ合せませして身八つ口を縫つて袖を附けませすこと等も女衿と同様でありませす。上着下着の前身頃の衿附の標を合せて躰糸で假綴ぢを致ませす。
- 三、衿附 上着と下着の衿で身頃を挟んで四縫に致すのでありませすが其の前に先づ上着下着の袷先を